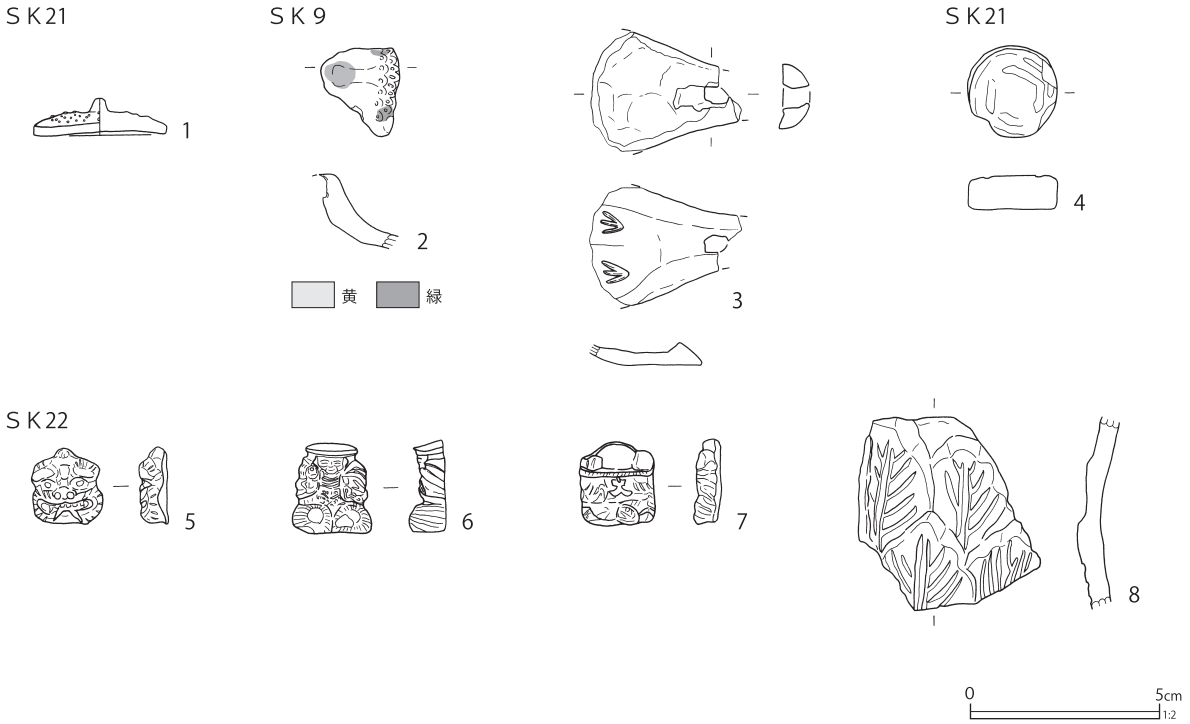


第 82 図　区画 AB 土壙出土遺物（11）

第 19 表　区画 AB 土壙出土遺物観察表（２）（第 82 図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	土製品	ミニチュア	器高 1.0 底径 3.5			8.2	ACIK	普通	橙	SK21	江戸在地系 蓋 型成形 上面施釉	117-8
2	土製品	鳩笛	[1.9]	[2.1]	0.7	2.6	AK	良好	灰白	SK9	京都系 二枚型成形 施釉（透明・緑・黄）SK9-3 と同一個体	117-6
3	土製品	鳩笛	[1.2]	[4.0]	0.6	4.9	AK	良好	灰白	SK9	京都系 二枚型成形 施釉（透明）SK9-2 と同一個体	117-7
4	土製品	泥面子	径 2.4		0.9	5.6	AHIK	良好	にぶい橙	SK21	江戸在地系 一枚型成形 摩耗 雲母付着	122-11
5	土製品	芥子面	2.0	1.9	0.7	2.6	AHIK	良好	橙	SK22	江戸在地系 一枚型成形	122-13
6	土製品	人形	2.4	2.1	1.0	3.4	AK	良好	橙	SK22	江戸在地系 大黒 一枚型成形 中実 雲母付着	117-9
7	土製品	人形	2.2	2.0	0.8	3.1	AK	良好	橙	SK22	江戸在地系 一枚型成形 中実	117-10
8	土製品	人形ヵ	[5.1]	[4.8]	0.7	14.4	AHIK	良好	橙	SK22	江戸在地系 二枚型成形 中空	

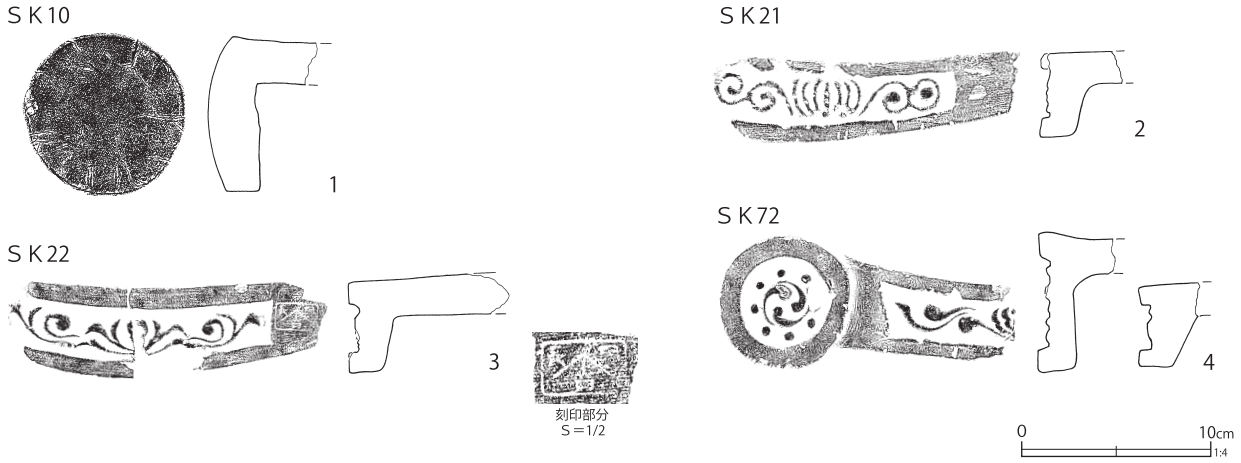
第 74 図 36 ～ 38 は肥前系磁器である。37・38 は高台が高い蛇ノ目凹形高台の皿で、輪花に成形される。37 の内底面に松竹梅環状文の染付がみられる。焼継痕がみられ、高台内に朱書きで焼継印が３箇所認められる。38 は内面に型紙摺絵染付が施される。第 22 号土壙由来の混入であるか判断することが困難である。焼継痕がみられ、高台内に朱書きで焼継印が認められる。

39 は瀬戸美濃系磁器の木型打ち込み成形のそり皿である。内面に陰刻文がみられる。40 は瀬戸美濃系磁器の型皿である。内面に型押陰刻文が施文されるが釉が厚くかかるためはっきりしない。

第 75 図 43 は肥前系磁器の鉢である。内側に段を有する輪高台状の台が付き、所謂盃洗に酷似する。栗橋宿での出土は稀である。三田系青磁等に認められる器形である。

第 76 図 52 は筒形の色絵水注である。外面に染付、赤と緑で上絵付が施される。

59 は瀬戸美濃系陶器の備前写しの徳利である。体部に凹みを有する所謂ぺこかん徳利である。外面に柿釉が施釉され、底部は釉の拭き取りを行っ



第 83 図　区画 AB 土壙出土遺物（12）

第 20 表　区画 AB 土壙出土遺物観察表（３）（第 83 図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	高さ	径	胎土	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	瓦	軒桟瓦	5.2	[10.5]	2.6	[8.1]	7.8	AK	良好	灰白	SK10	饅頭瓦 銀化 燻す	
2	瓦	軒桟瓦	[4.4]	[16.3]	1.7	[5.6]	―	AK	良好	灰白	SK21	江戸式 瓦当面浅い 燻す	
3	瓦	軒桟瓦	[8.5]	[16.8]	2.1	[6.8]	―	ACHK	良好	灰白	SK22	大阪式 銀化 燻す 刻印「長門」「舎」	123-16 124-14
4	瓦	軒桟瓦	[5.1]	[16.4]	2.3	[7.6]	7.1	AIK	良好	灰白	SK72	江戸式 右巻八連珠三巴文 燻す 雲母付着	

ている。

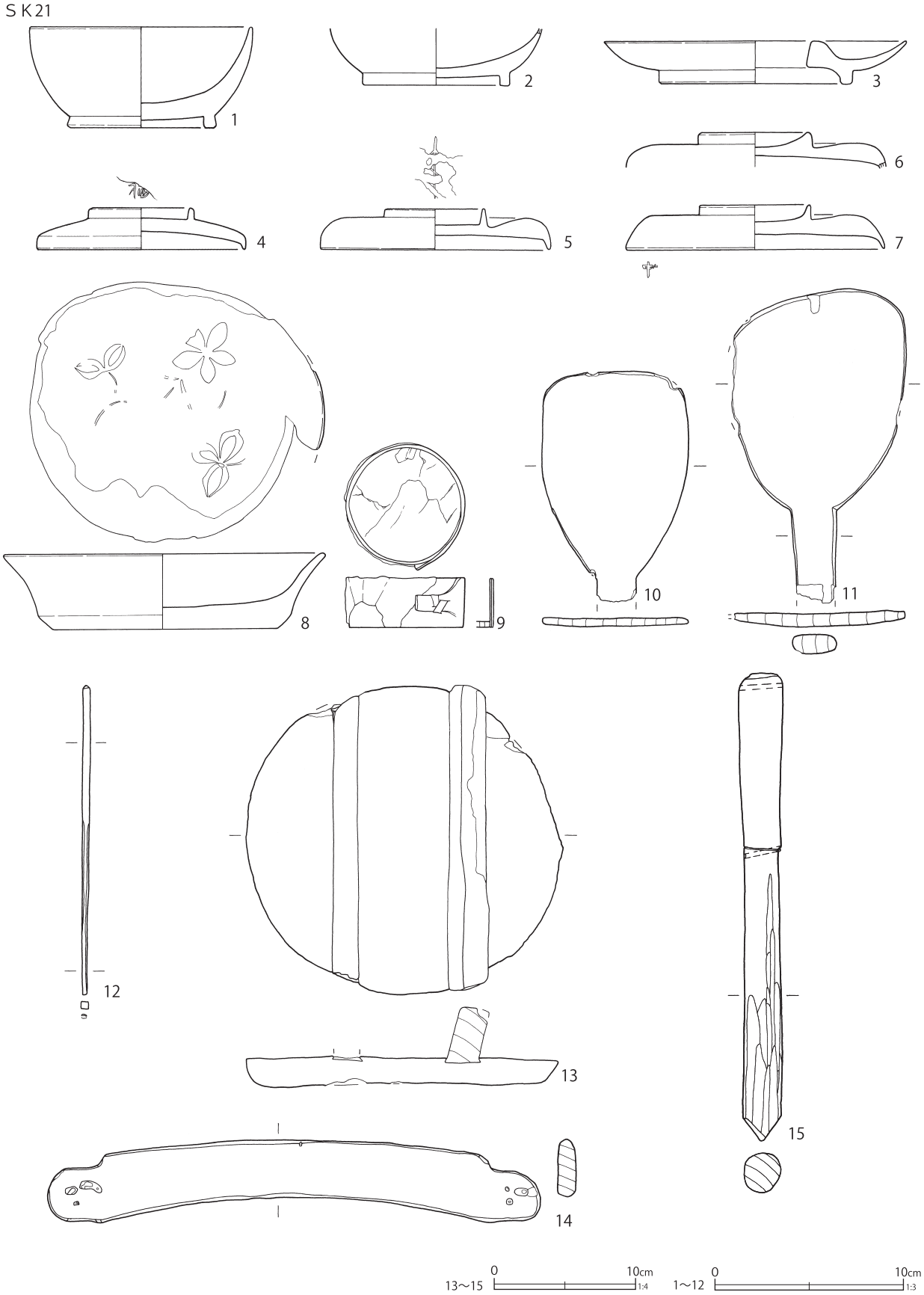
63 は陶器の土瓶である。外面に糠白釉が施釉されていることから大堀相馬系陶器の可能性がある。弱く被熱する。

64 は松岡系陶器の土瓶である。黒色粒子を多量に含むザラメ状の粗粒な胎土で、外面に鉄釉を施釉し、黒釉を流し掛けている。体部上位に段が付く。挿図は接点のない７片から図上復元した。

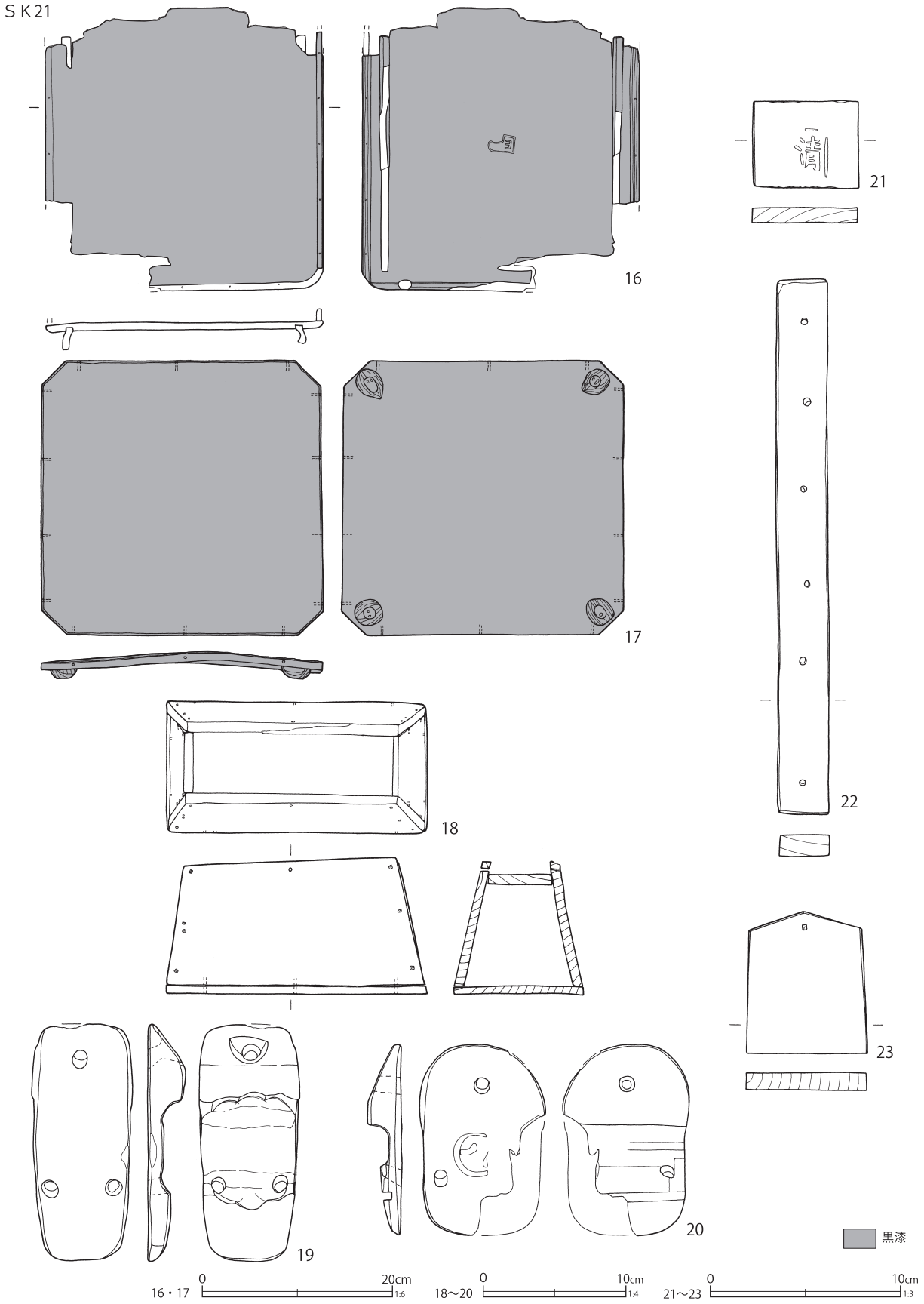
第 77 図 65 は陶器の青土瓶で、大堀相馬系陶器の可能性がある。外面に青緑釉が施釉される。頸部は緩やかに立ち上がり、注口部は「Ｓ」字である。弱く被熱し、外面露胎部に煤が付着する。66 は萬古系陶器の急須である。胎土炻器質で口唇部に施釉・金彩を施し、外面に漢詩文が陰刻される。72 は益子系陶器の擂鉢である。柿釉を施釉し、内底面は放射状に密な擂目がみられる。73 は産地不詳陶器の香炉である。六角形で、内面上位と外面に白化粧、鉄絵を施し施釉する。口唇部は敲打による釉の剥落がみられる。74 は瓦質土器の把手付き焙烙である。弱く燻し、外面に煤が付着する。把手に焼成前穿孔がみられる。75 は土師質土器の目皿である。鉢状で栗橋宿では稀な器形である。底部に焼成前穿孔が２箇所遺存し、底部はヘラナデ調整、内面は被熱により白色化している。

第 78 図 76 は瓦質土器の十能である。内面に刻印「㊀」、「岩﨑」がみえる。竈鍔にも認められる刻印である。胎土に角閃石が含まれるものにみられることから栗橋宿周辺の在地産と推定される。77 は瓦質土器の丸火鉢である。底部はヘラナデ、口縁部にミガキ調整が施される。体部にはトビガンナ状文が施文され、表面は燻されている。78 は瓦質土器の火鉢である。輪高台状の台が付く火鉢と考えられる。口縁部は折鍔状で、ミガキ調整が行われており、体部はスタンプ文をナデ消している。型成形の獅子頭が付く。内面下位には火箸による引っ掻き傷が無数にみえる。燻しにより表面は黒色である。

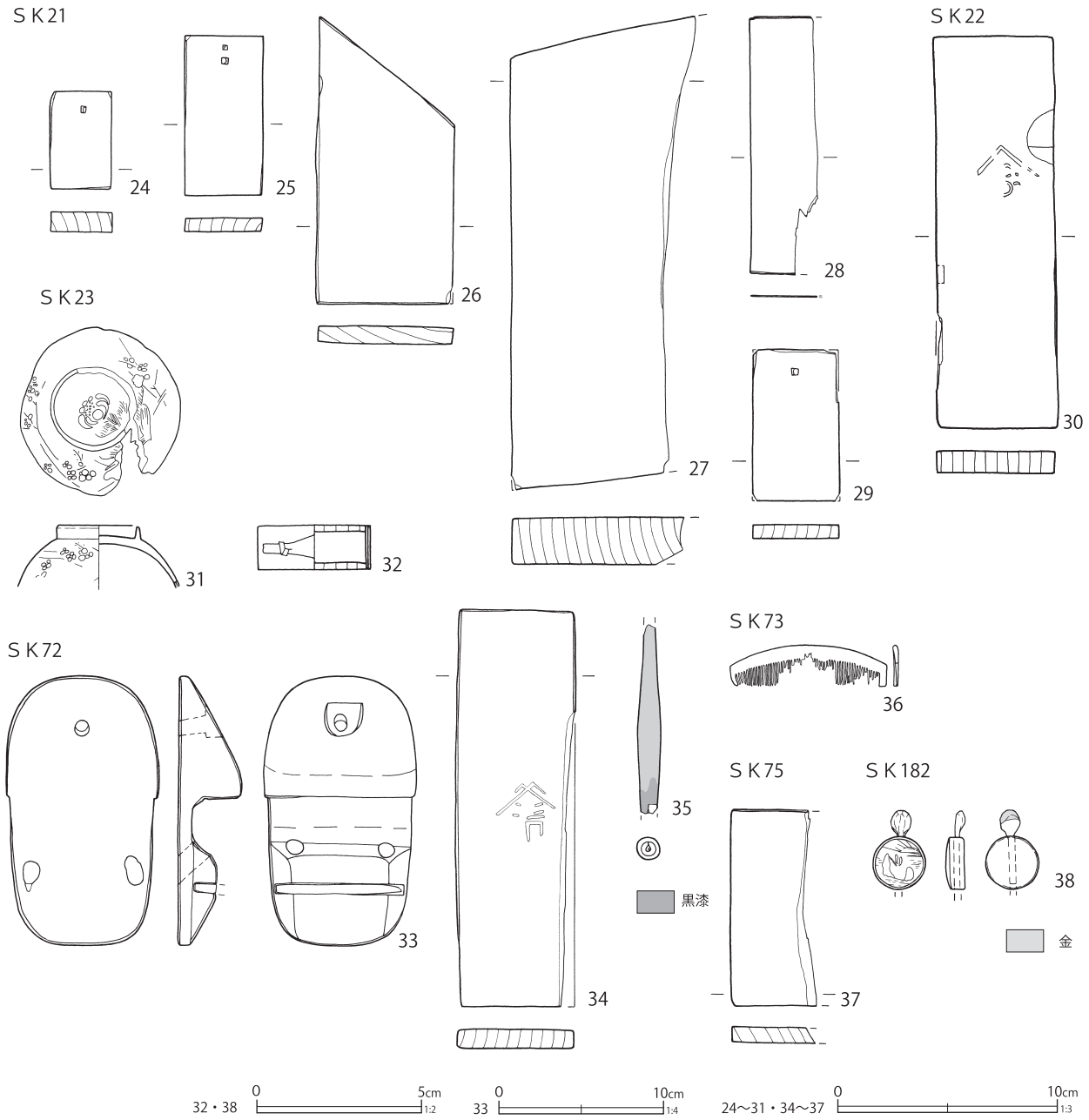
第 79 図 79 は瓦質土器の角火鉢である。底部、外面にシワ状痕がみられ、外面のシワ状痕を一部ナデ消している。80・81 は土師質土器の丸底焙烙である。いずれも底部無調整でシワ状痕が残る。



第 84 図　区画 AB 土壙出土遺物（13）



第 85 図　区画 AB 土壙出土遺物（14）



第 86 図　区画 AB 土壙出土遺物（15）

80 は体部に強いナデがみられ、口縁部が内傾し、底部の丸みは弱い。81 は体部が開き、口縁部が肥厚する。底部の丸みは 80 より強い。破損部を接合補修した補修孔が３対あり、１対は銅線が巻きついて留めてある。82 は瓦質土器の竈鍔である。底部断面は角形で、鍔下端部は丸みを帯びる。煤が付着する。83 は焜炉等の付属品である所謂器台と推定される大型の瓦質土器である。表面はやや酸化焔焼成気味である。84 は瓦質土器の焜炉である。底部無調整の砂目底で、外面はスタンプ状施文後にミガキ調整を行っている。挿図では僅かに遺存していた窓部を推定復元した。五徳部と中筒は欠失しており、外筒との接続部が遺存している。85 は瓦質土器で、火消壺の蓋である。上面は無調整で砂目が残る。

86 ～ 90 は土師質土器で、86 ～ 88 は焼塩壺、89・90 は焼塩壺の蓋である。焼塩壺は栗橋宿では典型的な無印の左回転ロクロ成形で、上部がや

第 21 表　区画 AB 土壙出土遺物観察表（４）（第 84 ～ 86 図）

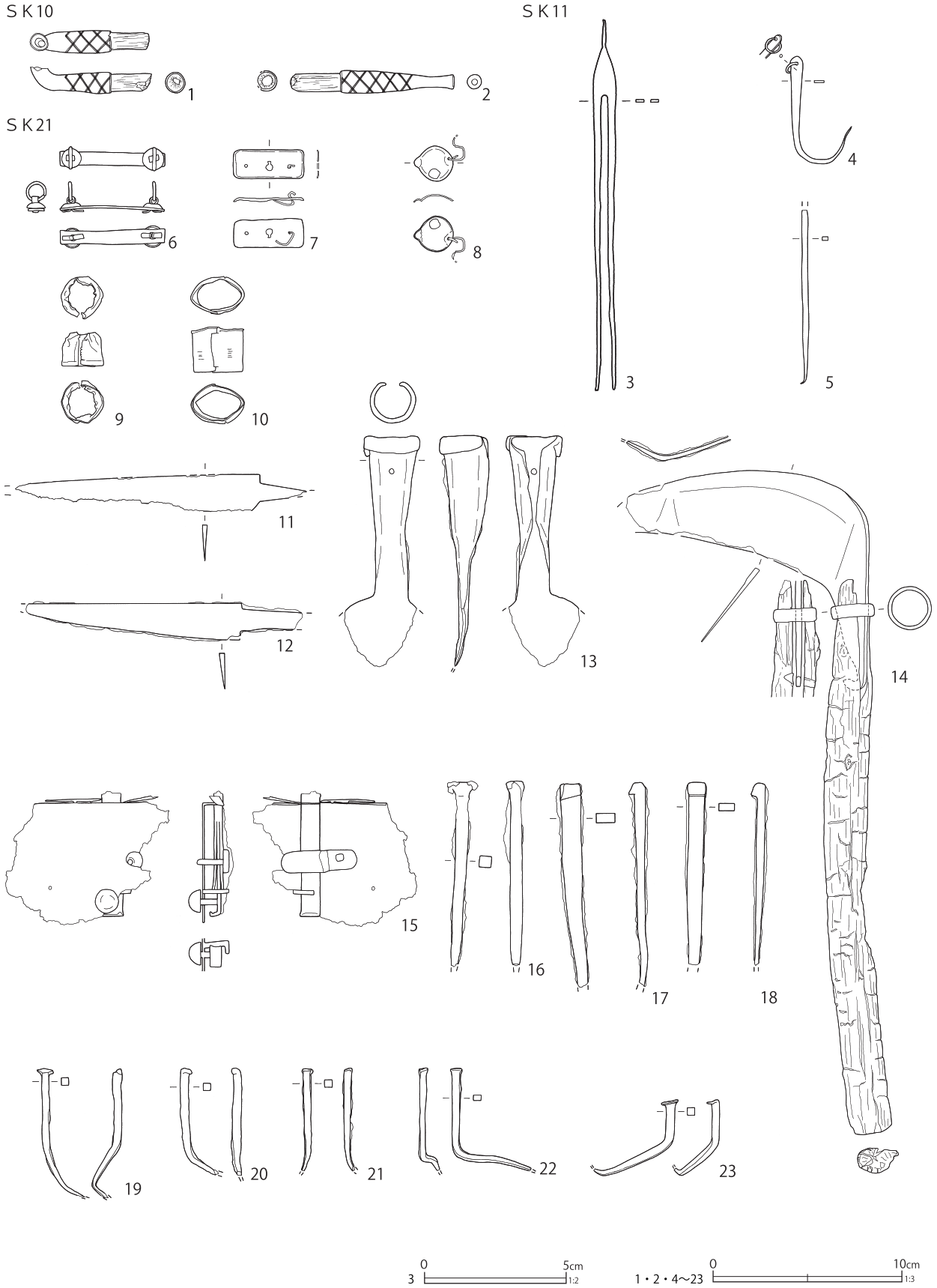
番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	口径 / 径	高さ	底径	木取り	遺構	備考	図版
1	木製品	漆椀	－	－	－	11.8	5.3	7.9	横木取り	SK21	内面赤漆 外面黒漆	127-1
2	木製品	漆椀	－	－	－	－	(3.0)	7.8	横木取り	SK21	内面赤漆 外面緑漆	
3	木製品	天目台	－	－	－	15.8	2.2	10.2	横木取り	SK21	内外面黒漆	127-2
4	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径 5.1		10.8	12.2	－	横木取り	SK21	内外面赤漆 口縁とつまみ縁黒漆 つまみ内黒で「福」	127-3
5	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径 5.7		13.5	2.4	－	横木取り	SK21	内外面赤漆 高台内黒で文様	127-4
6	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径 5.6		－	1.8	－	横木取り	SK21	内外面黒漆	
7	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径 5.8		13.6	2.3	－	横木取り	SK21	内外面黒漆 つまみ縁と口縁金 内面赤で「中」	127-5
8	木製品	漆鉢	－	－	－	(16.8)	4.0	11.8	横木取り	SK21	内外面黒漆 内面赤で文様 口縁炭化	
9	木製品	曲物	－	－	－	6.2	2.7	6.0	柾目	SK21	内面から外面に硬化した紙付着	127-6
10	木製品	杓子	[12.1]	7.7	0.4	－	－	－	柾目	SK21		
11	木製品	杓子	[16.5]	[9.0]	0.6	－	－	－	柾目	SK21	裏面一部炭化	127-7
12	木製品	箸	16.2	0.4	0.4	－	－	－	削出し	SK21	全面赤漆 上部突出 下半面取り	
13	木製品	蓋	32.5	33.0	－	－	5.5	－	板目	SK21	裏面炭化	
14	木製品	把手	4.0	34.7	1.4	－	－	－	板目	SK21	左右端に釘穴	
15	木製品	不明品	33.1	2.6	2.8	－	－	－	削出し	SK21	木釘穴２	
16	木製品	膳	[30.0]	29.4	－	－	4.1	－	板目	SK21	裏面焼印 全面黒漆	127-8
17	木製品	膳	29.1	29.9	－	－	2.9	－	板目	SK21	黒漆 歪み有	127-8
18	木製品	箱枕	9.3	18.3	－	－	9.3	－	板目	SK21	一部炭化	
19	木製品	下駄	16.5	6.5	－	－	2.6	－	板目	SK21	刳り下駄	
20	木製品	下駄	13.3	8.4	－	－	2.4	－	板目	SK21	刳り下駄 表面焼印「㊝」	
21	木製品	木札	4.4	5.5	0.8	－	－	－	板目	SK21	焼印「清」	
22	木製品	木札	28.0	2.7	1.2	－	－	－	板目	SK21	表面墨書	
23	木製品	木札	7.3	6.3	0.9	－	－	－	板目	SK21	表裏面墨書 孔１ 将棋駒形	143-1
24	木製品	木札	4.4	2.8	0.9	－	－	－	板目	SK21	表裏墨書 孔１	143-2
25	木製品	木札	7.2	3.5	0.6	－	－	－	板目	SK21	表裏墨書 孔１	143-3
26	木製品	木札	12.9	6.3	0.8	－	－	－	板目	SK21	表面墨書 側板転用	143-5
27	木製品	木札	21.4	[8.4]	2.1	－	－	－	板目	SK21	樽の蓋の転用	143-6
28	木製品	経木	11.5	[3.1]	0.05	－	－	－	柾目	SK21	表裏面墨書	143-7
29	木製品	木札	6.8	3.9	0.6	－	－	－	板目	SK21	表面墨書 孔１	143-9
30	木製品	木札	17.8	5.4	1.0	－	－	－	柾目	SK22	焼印「へ」に「□」	
31	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径 3.7		－	(2.9)	－	横木取り	SK23	内外面赤漆 金で文様 つまみ縁金	127-9
32	木製品	曲物	－	－	－	3.4	1.3	3.4	柾目	SK23		
33	木製品	下駄	16.3	9.3	－	－	[3.9]	－	板目	SK72	刳り下駄	
34	木製品	木札	18.0	5.4	0.9	－	－	－	板目	SK72	焼印「清」	
35	木製品	浮子	[8.5]	1.0	1.0	－	－	－	柾目	SK72	赤漆 黒漆 下部の孔に銅金属	
36	べっ甲製品	櫛	7.1	1.8	0.2	－	－	－	－	SK73	剥離激しい	
37	木製品	木札	8.8	[3.9]	0.7	－	－	－	板目	SK75	表面墨書	144-6
38	木製品	簪	[2.4]	1.6	0.6	－	－	－	板目	SK182	茶漆で絵 耳かき部裏面金	128-16

や反るように開口する筒形である。蓋は断面形が逆台形を呈し、これも栗橋宿出土製品の大きな特徴である。

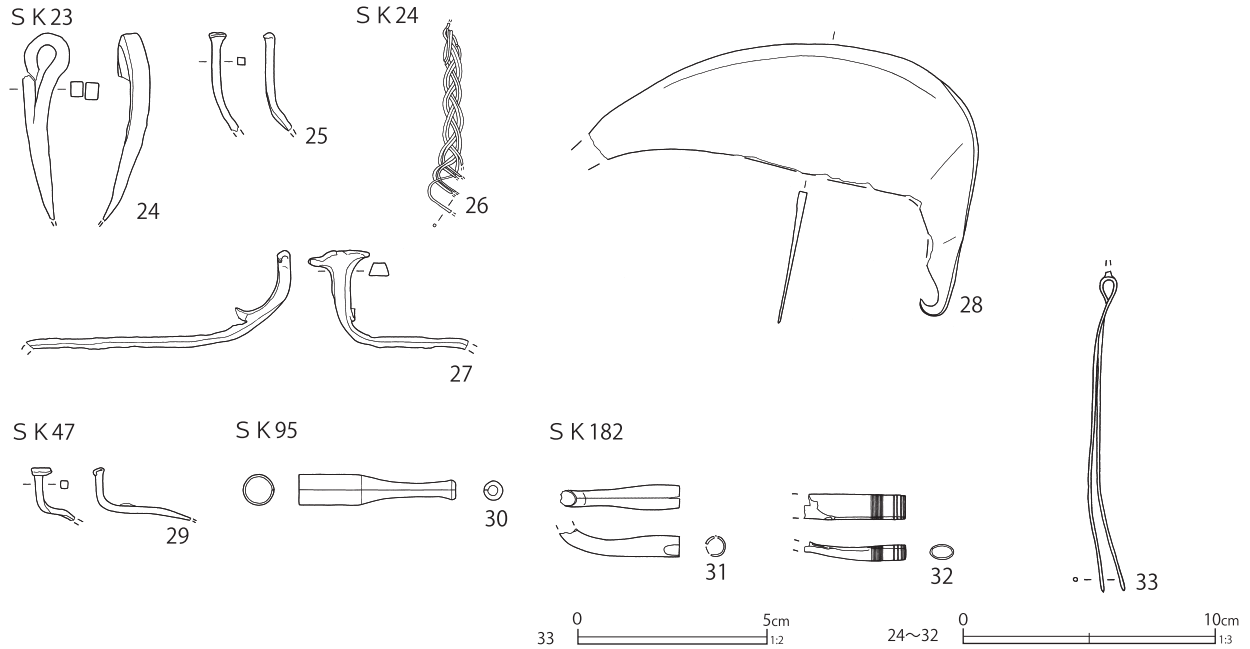
88 を除き、いずれも類似した胎土であるが 89・90 には白色針状物質が含まれる。雲母を含む粉質胎土であるため、所謂江戸在地系土器に類似するが混入物が多く、典型的な江戸在地系土器とは異なる。

第 82 図１はミニチュアの蓋である。胎土に細粒な雲母を含む江戸在地系で、型造りである。４は江戸在地系の泥面子である。摩耗しており、文様は不明瞭である。

第 83 図２は、江戸式に類似する軒桟瓦である。瓦当文様は中心弁七枚に渦巻唐草文で、瓦当面は



第 87 図　区画 AB 土壙出土遺物（16）



第88図　区画AB土壙出土遺物（17）

極めて浅い。

第84図１は漆椀で、２と同形である。４は漆椀蓋である。全面赤漆で口縁部とつまみ縁が黒である。つまみ内に「福」の文字が書かれる。５～７は漆椀蓋で、肩部が盛り上がる器形である。６・７はつまみ中央が擂鉢状に窪み、５と異なる。７は内面に赤で「中」の文字が書かれている。８は漆鉢である。底面と体部境の角が明瞭である。口縁部が炭化している。内外面は黒漆塗りで、赤色で花の文様が描かれる。９は曲物である。内面から外面にかけて硬化した黒色の紙が付着している。漆による硬化と考えられる。10・11は杓子で、いずれも柄部が欠損している。11は柄の軸がやや左に寄る。12は赤漆塗りの箸である。上部が突出する。断面形は方形で、下半は面取りがされている。13は蓋で、鍋蓋と考えられる。裏面全体が炭化している。把手は上部に向かって開くように取り付けられている。第85図16は膳で、全面黒漆塗りである。側板の一辺が残存し、木釘と漆で固定されている。脚部は二列である。底板の角は丸く作られ、裏面に記号状の焼印が押されている。17は胡桃足膳である。側板は残存せず、底板側面に木釘と漆で固定した痕跡が残る。底板は四隅が落とされる。胡桃の脚は４箇所で、接地面は平坦に加工される。18は箱枕である。漆の痕跡は確認できない。高さ9.3㎝で小型である。19・20は刳り下駄である。19の前歯・後歯には半円形の工具で加工された痕跡が残る。20は後歯のみ差し込む形になっている。台の平面形は角の丸い長方形である。表面に「㊅」の焼印が押される。21は木札である。「清」の焼印が押される。22は板状の製品で、穴が６箇所穿たれる。表面に「□蔵国[　]」の墨書が残る。23の木札には「雲龍水」の墨書が残る。第86図24には「余」の墨書が残る。

第87図６・７は銅製の煙草入れ金具である。６は袋の提げ受けにつく金具で、７は袋の前金具の裏金である。11・12は鉄製の刀子である。11は著しく刃こぼれしている。13は鉄製十能である。本来は木柄が付く。栗橋宿では瓦質土器の十能が多く、金属製は稀である。15は鉄製錠前である。引き出しの錠前で、施錠した状態である。16～23は鉄製の釘で、16・19～23は頭巻釘、17・18はさっぱ釘である。

第22表　区画 AB 土壙出土遺物観察表（５）（第87・88図）

番号	種別	器種	法量	遺構名	備考	図版
1	銅製品	煙管	長さ［4.3］小口径1.1 重さ5.5	SK10	雁首 火皿欠失 羅宇残存	
2	銅製品	煙管	長さ6.0 小口径1.1 口付径0.8 重さ6.0	SK10	吸口 羅宇残存 1と同一具	
3	銅製品	簪	長さ13.0 幅0.8 厚さ0.1 重さ4.1	SK11	玉欠失	
4	銅製品	鉤金具	長さ5.6 幅0.5 厚さ0.1 重さ2.6	SK11	径9㎜の提環付	
5	銅製品	ケガキ針	長さ［9.1］幅0.3 厚さ0.2 重さ5.0	SK11	先端の形状から推定	
6	銅製品	煙草入れ金具	縦1.2 横5.6 高さ1.7 重さ5.1	SK21	袋の提げ受け金具	
7	銅製品	煙草入れ金具	縦1.5 横3.7 厚さ0.03 重さ1.2	SK21	袋の前金具の裏金	
8	銅製品	不明	縦［2.3］横2.7 厚さ0.05 重さ1.0	SK21		
9	銅製品	不明	縦［2.2］横2.2 高さ［1.8］厚さ0.03 重さ2.1	SK21	薄い銅板を筒状に回し、一方の先端はややすぼまる	
10	銅製品	不明	縦2.0 横2.8 高さ2.4 厚さ0.03 重さ3.0	SK21	銅板を筒状に回し、先端を差し込んで合わせる	
11	鉄製品	刀子	長さ［15.4］刃長［12.5］刃幅1.9 背幅0.2 重さ20.8	SK21	刃こぼれ著しく茎先欠損	
12	鉄製品	刀子	長さ［14.6］刃長［11.3］刃幅1.9 背幅0.3 重さ24.3	SK21	刃先・茎先欠損	
13	鉄製品	十能	長さ［12.2］幅［3.8］厚さ0.2 重さ57.7	SK21	木柄十能 柄差込部のみ残り本体は大半欠失	
14	鉄製品	鎌	長さ35.2 刃長［12.9］刃幅4.9 背幅0.2 重さ109.9	SK21	木柄付 刃先端曲がり欠損 口金径2.3cm 目釘欠失	
15	鉄製品	錠前	縦［7.0］横［8.6］厚さ最大2.1 重さ43.6	SK21	引出しの錠前 施錠状態	
16	鉄製品	釘	長さ［9.8］幅0.6 厚さ0.6 重さ20.3	SK21		
17	鉄製品	釘	長さ［10.8］幅1.0 厚さ0.5 重さ26.7	SK21		
18	鉄製品	釘	長さ［9.7］幅0.8 厚さ0.4 重さ19.3	SK21		
19	鉄製品	釘	長さ［6.8］幅0.4 厚さ0.4 重さ4.9	SK21		
20	鉄製品	釘	長さ［5.6］幅0.4 厚さ0.4 重さ3.8	SK21		
21	鉄製品	釘	長さ［5.4］幅0.4 厚さ0.4 重さ2.2	SK21		
22	鉄製品	釘	長さ［5.4］幅0.4 厚さ0.3 重さ5.2	SK21		
23	鉄製品	釘	長さ4.0 幅0.4 厚さ0.4 重さ5.0	SK21		
24	鉄製品	環釘	長さ［7.4］幅0.5 厚さ0.7 重さ19.3	SK23		
25	鉄製品	釘	長さ［3.9］幅0.3 厚さ0.3 重さ1.9	SK23		
26	銅製品	不明	縦［7.5］横1.4 厚さ0.1 重さ3.1	SK24	2本1組の銅線3条を編み込む	
27	鉄製品	釘	長さ［10.5］幅0.8 厚さ0.5 重さ14.7	SK24		
28	鉄製品	鎌	刃長［15.4］刃幅5.2 背幅0.3 重さ84.1	SK24	刃先欠損	
29	鉄製品	釘	長さ［3.9］幅0.3 厚さ0.3 重さ2.5	SK47		
30	銅製品	煙管	長さ6.2 小口径1.2 口付径0.8 重さ12.5	SK95	吸口	
31	銅製品	煙管	長さ［4.7］小口径0.8 重さ3.7	SK182	雁首 火皿欠失	
32	銅製品	煙管	長さ［4.0］小口径0.9×0.6 重さ2.9	SK182	雁首 火皿側欠失	
33	銅製品	簪	長さ［8.4］厚さ0.1 重さ1.1	SK182		

第90図５は軽石製の磨石で、表面は自然面、裏面は磨りによる平坦面である。６は緑色を呈する流紋岩製砥石である。下端面に櫛歯状の工具痕が残り、側・裏面に刃幅の広い工具痕による削り痕がみられる。７は白色の流紋岩製砥石である。使用によるすり減りでサイコロ状を呈する。８は粗粒凝灰岩製の切石材である。両面にツルハシ状工具痕がみられ、表面は工具痕周囲が粗割状を呈する。裏面は摩耗している。

第22号土壙（第69・80・82・83・86図）

Ｆ７－Ｂ・Ｃ６グリッドに位置する。第19号土壙より古く、第21号土壙より新しい。平面形は重複により不詳である。検出長軸2.25ｍ、短軸0.75ｍ、深さ0.22ｍを測り、長軸方位はＮ－68°－Ｅを指す。

覆土には植物質と炭化物が含まれ、第７層には炭化材がみられる。第10層には薄く炭化物が堆積する。推定廃絶期は19世紀後葉である。

第80図92～95に陶磁器、第82図５～８に土製品、第83図３に瓦、第86図30に木製品を

図示した。

第80図93は瀬戸美濃系磁器の端反形坏である。外面に酸化コバルト染付を施す。体部の立ち上がり部は丸みを帯びる。95は産地不詳陶器の行平鍋である。柿釉を施釉し、体部中位は拭き取りを行っている。外面は単刃状のトビガンナ施文である。

第82図５は江戸在地系の芥子面である。一枚型成形で、獅子の意匠である。６は大黒を模した人形で、江戸在地系である。中実の一枚型成形で、離剤の雲母が付着する。７は江戸在地系の人形で、一枚型成形で意匠は不詳である。８は江戸在地系の人形と推定され、中空の二枚型成形の可能性がある。葉脈状の陰刻文がみられる。

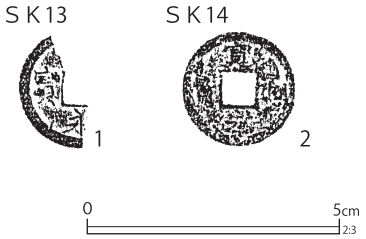
第83図３は大阪式に類似する軒桟瓦で、唐草文は一部江戸式である。銀化がみられ、胎土には角閃石が含まれる。刻印「長門」、「舎」がみられる。

第86図30は木札である。屋号の焼き印がみられるが、「へ」の下は判読できない。

第23号土壙（第69・80・86・88・90図）

Ｆ７－Ｂ６グリッドに位置する。第24号土壙より古く、第１号杭列と重複する。平面形は隅丸方形で、長軸1.9ｍ、短軸1.85ｍ、深さ0.6ｍを測る。長軸方位はＮ－25°－Ｗを指す。

粘質土と砂・砂質土が互層になった斜め堆積であり、日光道中側からの廃棄が推定される。推定廃絶期は19世紀後葉である。



第89図　区画AB土壙出土遺物（18）

第80図96・97に陶磁器、第86図31・32に木製品、第88図24・25に金属製品、第90図９に石製品を図示した。

第80図96は肥前系磁器の粗製碗で、外面に染付文字「板」がみえる。「板」とは『絵図』にみえる「年寄／庄兵衛」の屋号「板屋」を指す。栗橋宿跡の各地点で同様の染付銘の碗や皿が出土している。

第86図31は漆椀の蓋である。内外面に赤漆を塗布し、金で文様を描く。輪高台状のつまみ縁に金で彩色する。

第88図25は鉄製の頭巻釘である。

第90図９は軟質な角閃石安山岩製の砥石で、石質は砥石に利用される流紋岩や凝灰岩に似る。右側面に段を有するノコギリ状工具痕がみられ、段上には刃幅の広い工具痕と推定される削り痕がみられる。裏面にはチョウナ状工具と推定される刃幅の広い工具痕が残る。

第24号土壙（第69・80・88・90図）

Ｆ７－Ｂ６グリッドに位置する。第23号土壙より新しく、第１号杭列と重複する。平面形は楕円形で、検出長軸2.55ｍ、短軸2.15ｍ、深さ0.45ｍを測る。長軸方位はＮ－74°－Ｅを指す。

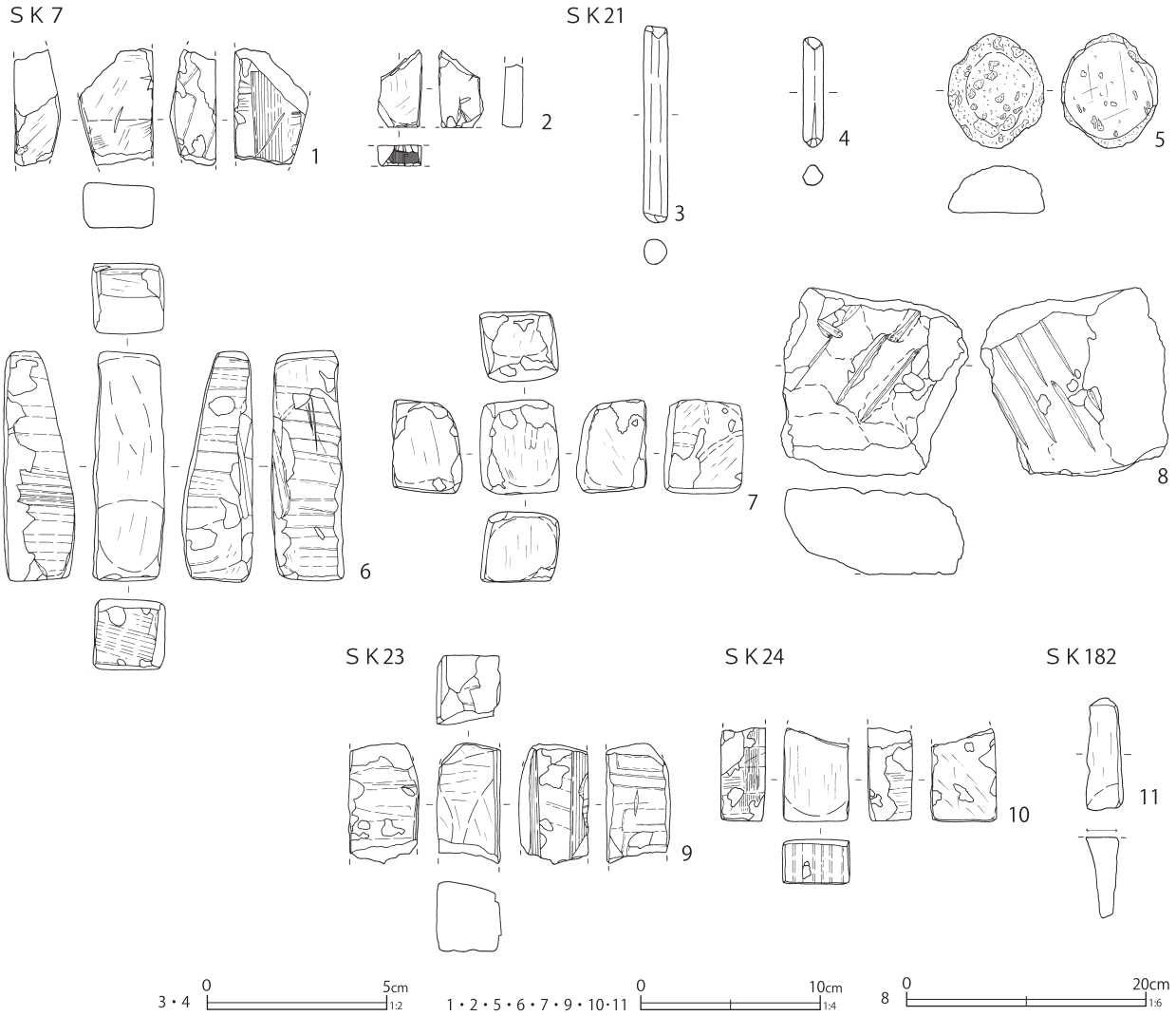
覆土は砂質土と砂を主体としており、砂質土と砂もしくは砂を多量に含む土が互層になっている。第９層には多量の植物質が含まれる。網籠状製品が出土しており、遺構図に記載しているが遺存状態が悪く、現地調査で回収することができなかった。推定廃絶期は第23号土壙とほぼ時期差がないが、19世紀後葉である。

第80図98～104に陶磁器類、第88図26～28に金属製品、第90図10に石製品を図示した。

第80図101は瀬戸美濃系磁器の急須で、外面は酸化コバルト染付である。焼継痕がみられ、底

第23表　区画AB土壙出土遺物観察表（６）（第89図）

番号	種別	器種	法量	遺構名	備考	図版
1	銅製品	銭貨	径23.3 厚さ1.0 重さ[0.9]	SK13	寛永通寶（新）2/3欠	
2	銅製品	銭貨	径23.0 厚さ1.4 重さ2.6	SK14	寛永通寶（古）	



第 90 図　区画 AB 土壙出土遺物（19）

第 24 表　区画 AB 土壙出土遺物観察表（７）（第 90 図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	遺構	備考	図版
1	石製品	砥石	[6.5]	[4.1]	[2.6]	90.8	流紋岩	SK7	側面幅広工具痕 裏面ノコギリ痕 砥面２ 表・裏面刃物痕あり 被熱（剥落）	
2	石製品	砥石	[4.3]	[2.5]	1.2	19.0	ホルンフェルス	SK7	側面ノコギリ痕 砥面２ 裏面刃物痕あり	
3	石製品	石筆	5.5	0.6	0.6	5.0	滑石（灰）	SK21	両端使用	
4	石製品	石筆	3.1	0.5	0.6	1.8	滑石（灰白）	SK21	両端使用	
5	石製品	磨石	6.4	5.4	3.0	33.7	軽石	SK21	自然面遺存 使用面１	140-3
6	石製品	砥石	12.8	4.0	3.9	358.4	流紋岩（緑色）	SK21	側・裏面幅広工具痕 下端部櫛歯状工具痕 砥面４（摩耗２）裏面刃物痕あり	139-13
7	石製品	砥石	5.2	4.4	3.9	151.1	流紋岩	SK21	砥面６	
8	石製品	切石材	[15.8]	[15.9]	[7.1]	2181.8	凝灰岩（粗粒）	SK21	両面ツルハシ状工具痕（表面粗割状 裏面摩耗）	138-3
9	石製品	砥石	[6.7]	3.6	3.9	152.4	角閃石安山岩	SK23	裏面幅広工具痕 右側面ノコギリ痕 側面削痕 砥面２	
10	石製品	砥石	[5.2]	[3.7]	2.5	94.3	流紋岩	SK24	側面丸ノミ痕ヵ（刃こぼれ状）・削痕・刃物痕多数 砥面３	
11	石製品	砥石	[6.3]	[2.0]	[4.9]	64.7	砂岩（細粒）	SK182	砥面１	

部に朱書きで焼継印がみられる。102 は産地不詳陶器の坏である。型成形で外面は陽刻文である。外面に白土を塗り、施釉している。所謂地方窯系陶器と考えられる。

第 90 図 10 は流紋岩製砥石である。側面に櫛歯状工具に類似する削り痕がみられ、刃こぼれした丸ノミ状工具で成形した可能性がある。

第 25 号土壙（第 69 図）

Ｆ７－Ｃ６グリッドに位置する。平面形は隅丸方形で、長軸 0.6 m、短軸 0.5 m、深さ 0.05 m である。長軸方位はN－ 14°－Wを指す。

出土遺物は極めて少なく、図示し得るものがなかった。推定廃絶期は 19 世紀後半である。

第 26 号土壙（第 68 図）

Ｆ７－Ｂ・Ｃ６グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長軸 0.7 m、単軸 0.45 m、深さ 0.1 mを測る。長軸方位はN－ 30°－Wを指す。

上層は砂質土で、下層は粗粒な土に多量の炭化物が含まれる。出土遺物は少量で、図示し得るものがなかった。推定廃絶期は 19 世紀後葉である。

第 45 号土壙（第 69 図）

Ｆ７－Ｂ６グリッドに位置する。第 46 号土壙より新しい。平面形は隅丸長方形で、検出長軸 0.9 m、短軸 0.5 m、深さ 0.1 mを測る。長軸方位N－ 20°－Wを指す。

しまりの強い砂質土の単層で、出土遺物は極めて少なく、図示し得るものがなかった。推定廃絶期は 19 世紀後葉である。

第 46 号土壙（第 69 図）

Ｆ７－Ｂ６グリッドに位置する。第 45 号土壙より古く、第 47 号土壙より新しい。平面形は隅丸長方形で、長軸 1.15 m、短軸 0.85 m、深さ 0.1 mを測る。長軸方位はN－ 19°－Wを指す。

しまりの強い砂質土の単層で、出土遺物は極めて少なく、図示し得るものがなかった。推定廃絶期は 19 世紀後葉である。

第 47 号土壙（第 69・88 図）

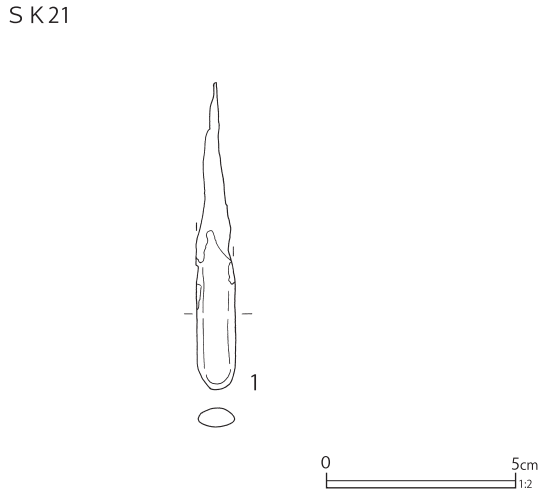
Ｆ７－Ｂ６グリッドに位置する。第 46 号土壙より古い。平面形は隅丸方形で、検出長軸 0.65 m、短軸 0.55 m、深さ 0.2 mを測る。長軸方位はN－ 41°－Wを指す。

砂質土主体で、中層に貝類が多量に含まれるが、遺存状態が悪い。出土した貝はオオタニシ１点と種別不明の貝１点である。出土遺物は極めて少なく、第 88 図 29 に鉄製の頭巻釘を図示した。最新期の陶磁器は、瀬戸美濃系磁器陽刻文型皿と陶器のトビガンナ施文行平鍋である。推定廃絶年代は 19 世紀後半である。

第 72 号土壙（第 70・81・83・86 図）

Ｆ７－Ｂ６グリッドに位置する。第 73・75 号土壙と重複する。平面形は不整形で、長軸 2.3 m、短軸 1.0 m、深さ 0.35 mを測る。長軸方位はN－ 23°－Wを指す。

覆土は炭化物を含むシルト質土と炭化物層からなり、炭化物層はパイプたばこ状の木片で構成されている。推定廃絶年代は 19 世紀後葉である。



第 91 図　区画 AB 土壙出土遺物（20）

第 25 表　区画 AB 土壙出土遺物観察表（８）（第 91 図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	遺構	備考	図版
1	骨製品	ブラシ	[8.1]	1.0	0.5	3.9	SK21		142-13

第81図105～107に陶磁器、第83図４に瓦、第86図33～35に木製品を図示した。

第81図105は瀬戸美濃系磁器の坏である。高台内側に段が付き、内面は江戸絵付けで「㊥」と書かれる。外面は酸化コバルト染付である。107は大堀相馬系陶器の碗である。手捻り成形の所謂雅物碗で、胎土に鉄分と考えられる粒径の大きい黒色粒子が多量に含まれる。焼成により釉越しに黒色粒子の斑状模様が浮かぶ。

第83図４は江戸式の軒桟瓦である。第86図33は刳り下駄で、後歯は差し込む形になっている。裏面の前壺周辺にくぼみが作られる。34は木札で、「㑹」の焼印が押されている。

第73号土壙（第70・81・86図）

Ｆ７－Ｂ６・７グリッドに位置する。第75号土壙より古く、第12号土壙より新しい。さらに、第72号土壙と重複する。平面形は隅丸長方形で、検出長軸3.65ｍ、短軸2.3ｍ、深さ0.3ｍを測る。長軸方位Ｎ－72°－Ｅを指す。

シルト質土主体で、炭化物と木質を含む。第11層の最上部に砂粒が薄く堆積する。出土している常滑系陶器の大甕は第二面第337号土壙出土の本体と接合する。推定廃絶期は19世紀後葉である。

第81図108に瀬戸美濃系磁器の燗徳利、第86図36に木製品の櫛を図示した。

第75号土壙（第70・86図）

Ｆ７－Ｂ６・７グリッドに位置する。第73号土壙より新しく、第72号土壙と重複する。平面形は不整形で、長軸1.7ｍ、短軸1.5ｍ、深さ0.4ｍを測る。長軸方位はＮ－86°－Ｅを指す。

覆土は炭化物と木片を含む細粒な砂を主体とする。小礫を含む最下層には多量の木片が廃棄されている。出土遺物は少量だが陶磁器の個体資料が豊富である。第86図37に木製品の木札を図示した。

第95号土壙（第70・81・88図）

Ｆ７－Ｂ６・７グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、長軸1.3ｍ、短軸1.1ｍ、深さ0.6ｍを測る。長軸方位はＮ－71°－Ｅを指す。

覆土はシルト質土主体で、上層に屑・チップ状木片が多量に廃棄されている。木片以外の出土遺物は極めて少ない。推定廃絶期は19世紀後半以降である。第81図109に陶器、第88図30に銅製煙管の吸口を図示した。

第81図109は産地不詳陶器で、内面露胎であることから香炉と推定される。褐灰色の極めて硬質な胎土で、外面に鉄釉がかかり、志都呂系陶器に類似する。内面には布目圧痕がみられる。

第180号土壙（第71・81図）

Ｆ７－Ｂ７グリッドに位置する。第100号土壙より新しく、第９・181号土壙と重複する。平面形は不整形で、検出長軸2.0ｍ、短軸1.8ｍ、深さ0.5ｍを測る。長軸方位はＮ－70°－Ｅを指す。

最上層に炭化物が多量に含まれ、最下層に炭化物と灰の混合層が堆積する。北側にテラス状に段が付き、「Ｔ」字形を呈する。多くの土壙と重複することから、２基の土壙との重複も考えられるが、一括出土遺物に明確な時期差を示唆するようなまとまりはみられなかった。推定廃絶期は19世紀後半以降である。

第81図110・111に陶磁器を図示した。110はヨーロッパ系軟質磁器の坏である。本国ではティーボウル（Tea Bowl）と呼称されるもので、受け皿であるソーサーとセットで喫茶に使用される器種である。

内外面に銅版転写染付で草花文が絵付けられる所謂プリントウェアである。焼成時に酸化コバルトを意図的に釉に流れ込ませ、絵付けを滲ませるフロウ・ブルー（滲み手）と呼ばれる技法がみられる。

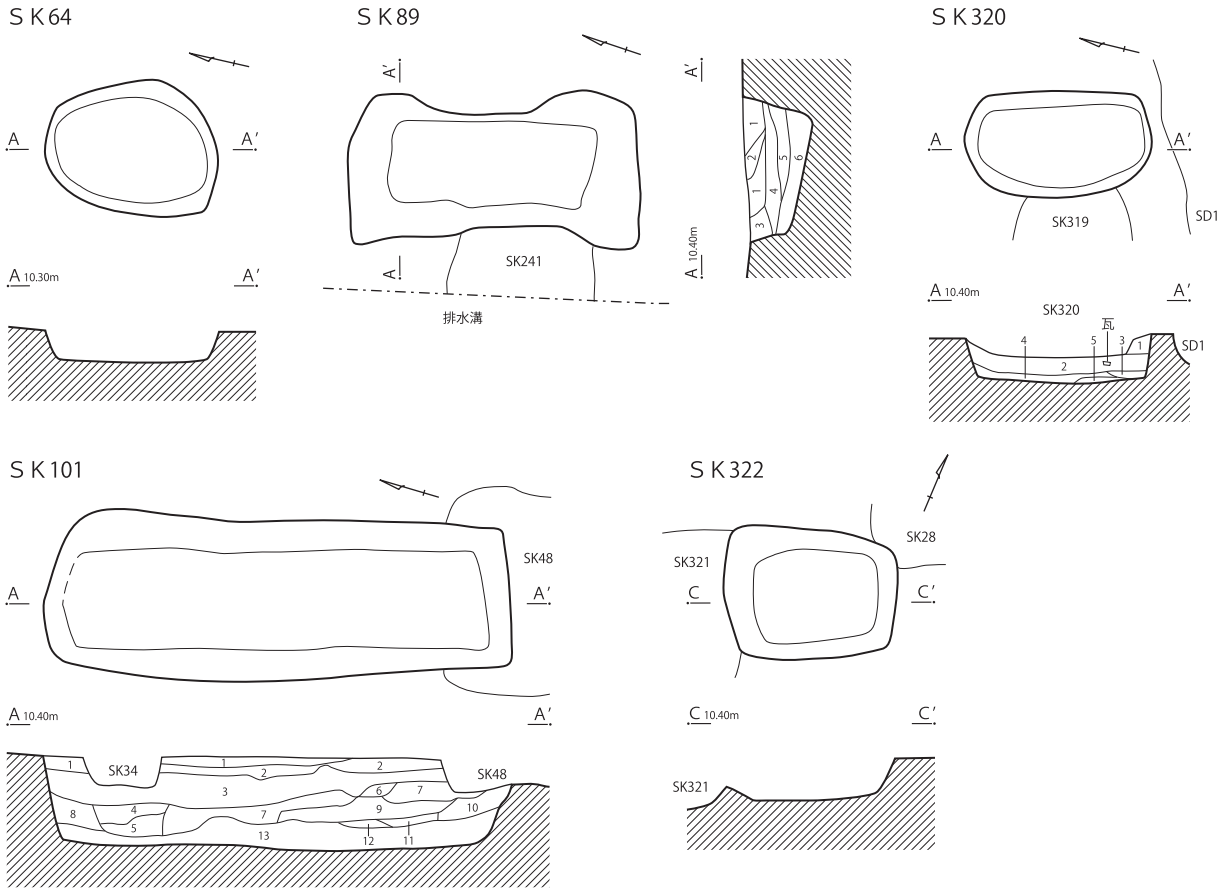
高台畳付には極小の窯道具痕（スパー痕）が３箇所みられ、高台中央には円形の隆線が１条巡る。

また、滲みにより不明瞭だが、高台内に文字状の絵付けがみられる。

ヨーロッパ製のプリントウェアは銅版転写の原盤である銅版画の売買を複数ヵ国、複数企業間で行われるため、生産企業を示す銘鑑や刻印がなければ生産地は判断しがたい。しかし、オランダ・マーストリヒトのペトルス・レグー社では日本向けに既存の器種をアレンジし、小坏、徳利、蓋付き碗・鉢等を生産・輸出していることが指摘されている（長久 2011）。そのため、ある程度生産地を特定できるケースもある。本製品も口径が小さいことから坏の範疇に含まれるため、オランダ産の可能性も指摘できる。なお、長崎市出島阿蘭陀商館跡では、マーストリヒト産と推定される盃が

第 26 表　第一面区画 AC 土壙一覧表　　単位：m

番号	グリッド	形態	長軸	短軸	深さ	方位	備考	挿図
1	F7-C6	隅丸長方形	1.40	1.15	0.50	N-74°-E	SK91 より新	104
2	F7-C6	楕円形	0.95	0.55	0.10	N-74°-E	SK91 より新	104
3	F7-C6	円形	0.60	0.55	0.10	N-43°-E	SK78・91 より新	104
4	F7-C6	隅丸長方形	0.75	0.50	0.10	N-65°-E	SK78 より新	104
5	F7-C6	不整隅丸長方形	1.05	0.60	0.25	N-70°-E	SK6・65 より新	104
6	F7-C6	隅丸長方形	1.00	0.85	0.25	N-20°-W	SK5 より古　SK65 より新	104
28	F7-C6	隅丸長方形	1.40	0.85	0.30	N-87°-E	SK29 より新　SK322 と重複	104
29	F7-C6	隅丸長方形	(1.30)	1.10	0.30	N-25°-W	SK28 より古	104
30	F7-C6・7	隅丸長方形	1.65	0.80	0.30	N-17°-W		104
31	F7-C6・7	不明	(0.35)	0.65	0.25	N-14°-W		104
32	F7-C6・7	隅丸長方形	1.10	0.85	0.45	N-74°-E	SD1 と重複	104
34	F7-C7	隅丸長方形	0.85	0.60	0.25	N-88°-E	SK101 より新	104
35	F7-C7	楕円形	0.80	0.70	0.20	N-79°-W		104
36	F7-C7	楕円形	1.35	0.95	0.50	N-2°-W	SK42 より古　SK43 と重複	105
42	F7-C7	不整隅丸方形	1.50	1.45	0.35	N-19°-W	SK36 より新　SK43 と重複	105
43a	F7-C7	不整形	2.45	1.65	0.30	N-12°-W	SK43b より新　SK36・42 と重複	105
43b	F7-C7	不整形	(1.55)	0.70	0.30	N-12°-W	SK43a より古　SK36・42 と重複	105
44	F7-C6	隅丸長方形	1.40	1.10	0.60	N-84°-E	SK65 と重複	106
48	F7-C7	隅丸長方形	1.65	1.10	0.20	N-73°-E	SK49・101 より新	105
49	F7-C7	隅丸長方形	0.85	0.65	0.20	N-75°-E	SK48 より古　SD1 と重複	105
62	F7-C7・8	隅丸長方形	(1.65)	1.15	0.20	N-70°-E	SK63 と重複	105
63	F7-C7	円形	1.05	1.00	0.50	N-70°-E	SK62 と重複	105
64	F7-C7	楕円形	1.40	1.10	0.25	N-10°-E		92
65	F7-C6	不整隅丸長方形	4.35	1.50	0.60	N-18°-W	SD32・焼土遺構 4・SK5・6 より古　焼土遺構 2a・SK44・78 と重複	106
78a	F7-C5・6	不整形	(4.20)	2.15	0.95	N-74°-E	SK3・4 より古　SK91 より新　SD32・SK65・90 と重複	106
78b	F7-C5・6	不整形	(2.20)	(0.60)	0.40	N-74°-E	SK78a より新　SK65 と重複	106
89	F7-C6	不整隅丸長方形	2.30	1.20	0.55	N-18°-W	SK241 と重複	92
90	F7-C6	不整形	(3.10)	1.00	0.30	N-12°-W	SK78・SD1 と重複	106
91	F7-C6	不整形	(2.55)	1.35	0.45	N-18°-W	SK1・2・3・78 より古	106
101	F7-C7	隅丸長方形	3.70	1.25	0.75	N-16°-W	SK34・48 より古	92
214	F7-B・C・8	不明	2.15	(0.80)	0.25	N-23°-W		105
241	F7-C5・6	不明	(0.65)	1.15	0.55	N-73°-E	SK89 と重複	106
260	F7-C6	楕円形	0.80	0.70	0.35	N-41°-E		105
319	F7-C6	楕円形か	(0.90)	1.00	0.15	N-76°-E	1 号埋桶より古　SK320・323 と重複	105
320	F7-C6	隅丸長方形	1.50	0.85	0.40	N-14°-W	SK319 と重複	92
321	F7-C6	隅丸長方形	1.40	(1.15)	0.45	N-28°-W	SK322・323 と重複	105
322	F7-C6	隅丸長方形	1.40	1.05	0.35	N-70°-E	SK28・321 と重複	92
323	F7-C6	隅丸長方形	1.45	0.90	0.60	N-17°-W	SK319・321 と重複	105



SK89
1　暗黄褐色土　砂質
2　黒褐色土　木片多量
3　黒褐色土　橙色土粒子多量
4　黒褐色土　粘質土　炭化物含む
5　暗灰褐色土　粘質土　木片多量
6　暗灰褐色土　粘質土

SK101
1　黒褐色土　砂質　炭化物・黄色粘土少量
2　灰褐色土　シルト質　黄色粘土少量
　　砂粒含む (3 層より混入)
3　黄褐色土　砂質　細粒
4　灰色土　粘土質　粘性極強
　　細かい木質片含む
5　黄褐色土　粘土質　粘性極強　細かい木質片含む
6　黄色土　粘土質
7　褐色土　粘土質　細かい木質片 (φ5 ～ 20 ㎜) 含む
8　暗灰色土　粘土質　木質少量
9　灰褐色土　粘土質　木質少量
10　明灰褐色土　粘土質　粘性極強
　　木質 (木皮 φ10 ～ 20 ㎜の木片) 多量
11　暗灰色土　シルト質　粘性強
12　黒褐色土　シルト質　粘性強
　　木片・木皮 (φ5 ～ 10 ㎜程) 多量
13　黄褐色土　シルト質　粘性強　樹皮・木材・木片
　　(φ50 ㎜以上) 多量

SK320
1　暗灰褐色土　粘土質　炭化物少量
2　灰褐色土　粘土質　木質・酸化鉄多量
3　木質層　木質で構成される　鉄分少量
4　黄褐色土　砂層　木質を含む
5　灰色土　粘土質　木質多量

0　2m
1:60

第 92 図　区画 AC 土壙（1）

出土している（長崎市 2002)。

111 は産地不詳陶器で、土瓶の可能性がある袋物製品である。外面に青緑釉を施釉し、不明瞭な陽刻文がみえる。内面には櫛歯状工具ナデがみられる。

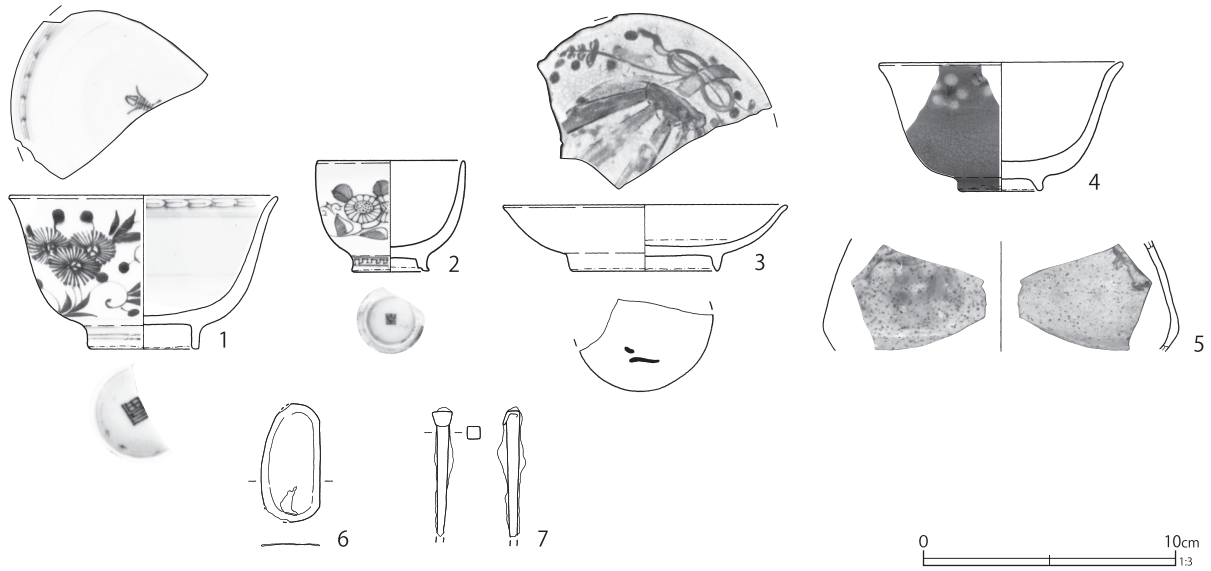
③区画 AC の土壙（第 92 ～ 136 図）

区画 AC は第 32 号溝跡より南、第 3 号杭列・第 1 号溝跡より北に位置し、『絵図』にみえる「明地 / 清吉」、『営業便覧』にみえる「田口龍太郎」の区画である。『営業便覧』の時期には隣接する区画 AD を含めた一つの区画となっている。

土壙は 38 基検出された。うち、第 32・49・90 号土壙は第 1 号溝跡と重複し、第 78 号土壙 a は第 32 号溝跡と重複する。

土壙は調査区中央より西側に密集し、激しい重複がみられる。おおむね長方形を呈する土壙が多く、土壙の長軸方向は日光道中と平行する傾向にある。

第 26 表に、位置・規模等の基本的な情報を示した。



第 93 図　第 64 号土壙出土遺物

第 27 表　第 64 号土壙出土遺物観察表（第 93 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	(10.5)	6.0	4.2	―	30	良好	白	瀬戸美濃系　内外面施釉・染付	
2	磁器	碗	(5.8)	4.3	2.8	―	40	良好	白	瀬戸美濃系　内外面施釉　外面染付	
3	磁器	皿	(11.1)	2.6	(5.8)	―	20	普通	白	瀬戸美濃系　内外面施釉　内面色絵（赤・緑・黒）見込み蛇ノ目釉剥　焼継痕あり　高台内焼継印（赤）被熱	
4	陶器	碗	(9.4)	5.0	3.1	I	20	良好	灰	瀬戸美濃系　内面白化粧　内外面施釉　外面折枝梅花文	
5	陶器	土瓶	―	[3.9]	―	K	5	良好	灰	大堀相馬系　胎土砂鉄含む　外面灰釉・鉄絵（走馬）外面上位凹ます	
6	銅製品	不明	縦 4.6 横 2.3 厚さ 0.05 重さ 2.6								
7	鉄製品	釘	長さ [5.1] 幅 0.5 厚さ 0.5 重さ 3.7								

本区画で抽出した土壙は第 64・89・101・320・322 号土壙で、先行して第 92 図に遺構図、第 93 ～ 103 図に遺物図を示した。また、非抽出となった土壙は第 104 ～ 106 図に遺構図、第 107 ～ 136 図に遺物図を示した。

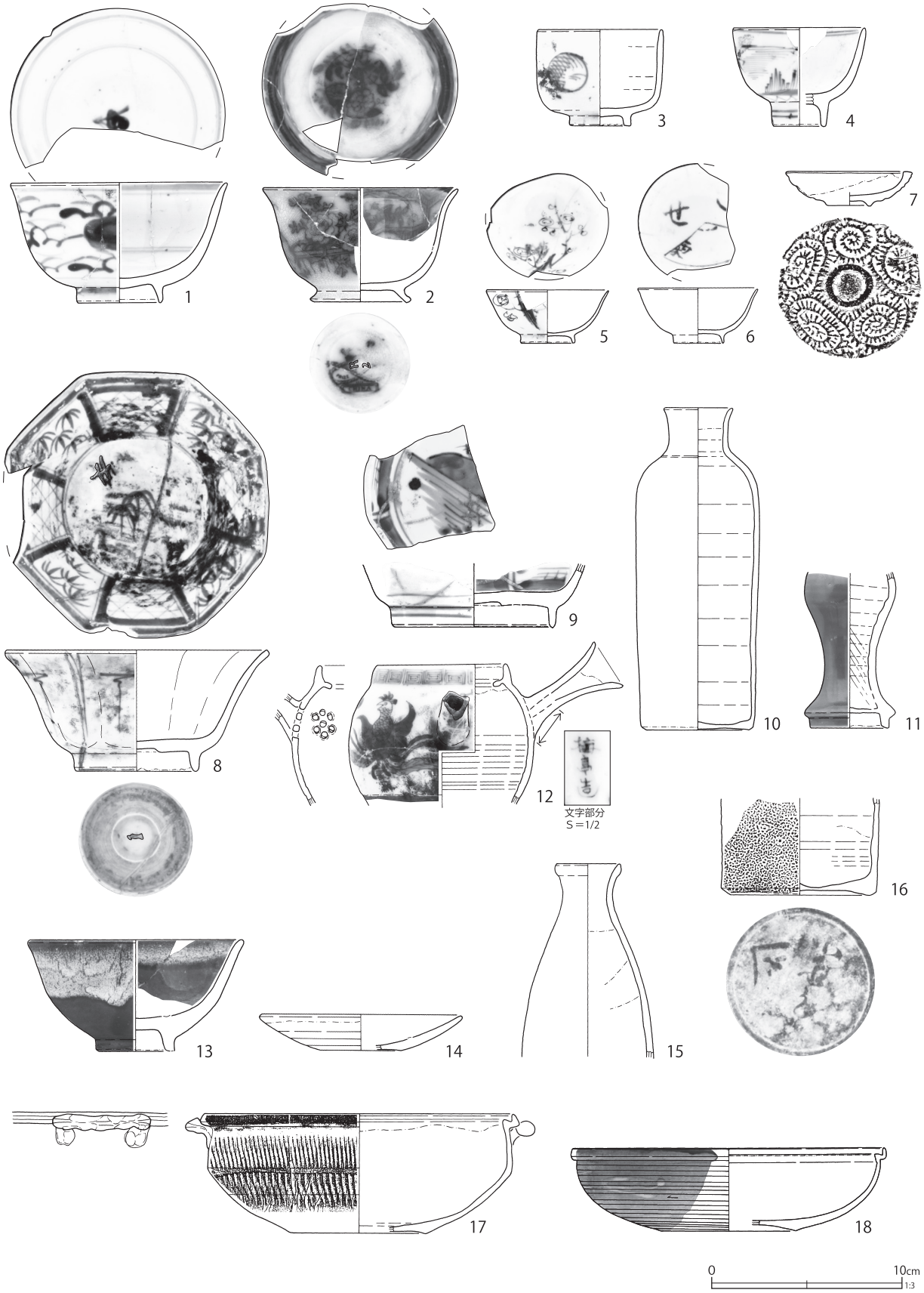
非抽出の土壙については、特徴的な土壙・遺物について記述していく。

第 64 号土壙（第 92・93 図）

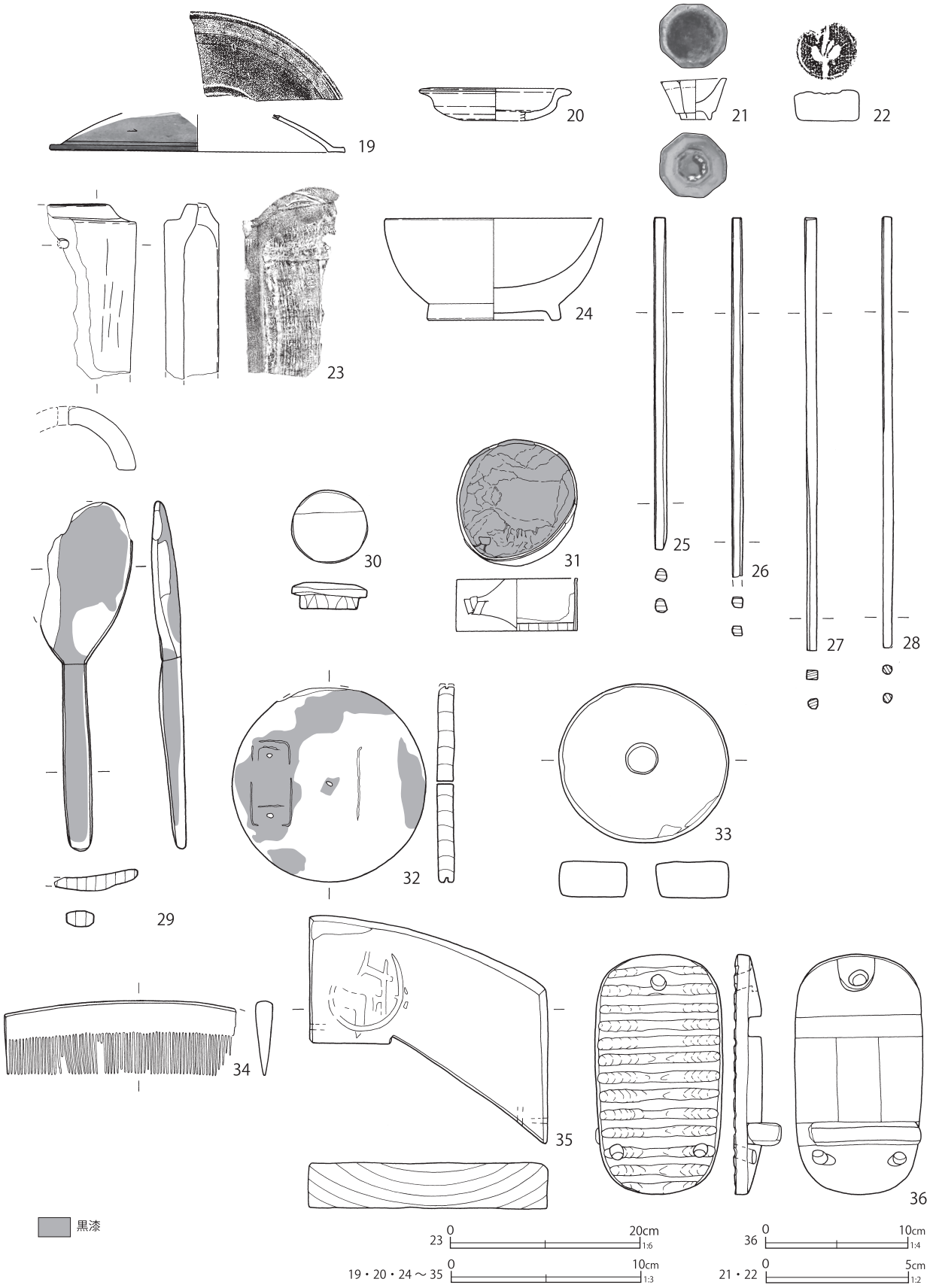
Ｆ７－Ｃ７グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長軸 1.4 m、短軸 1.1 m、深さ 0.25 mを測る。長軸方位はN－ 10°－Eを指す。第 93 図２の瀬戸美濃系磁器小碗が最新期の陶磁器である。推定廃絶期は 19 世紀中葉である。

第 93 図に出土遺物を図示した。１は瀬戸美濃系磁器の端反形碗である。丁寧な染付で、口縁は強く反る。２は瀬戸美濃系磁器の湯呑形小碗である。外面は線が細い丁寧な染付で、高台畳付には卵殻手坏と同様の段が付く。３は瀬戸美濃系磁器の手塩皿である。内面は赤・緑・黒の色絵で、見込み蛇ノ目状釉剥ぎがみられる。被熱しており、焼継痕と焼継印がみられる。

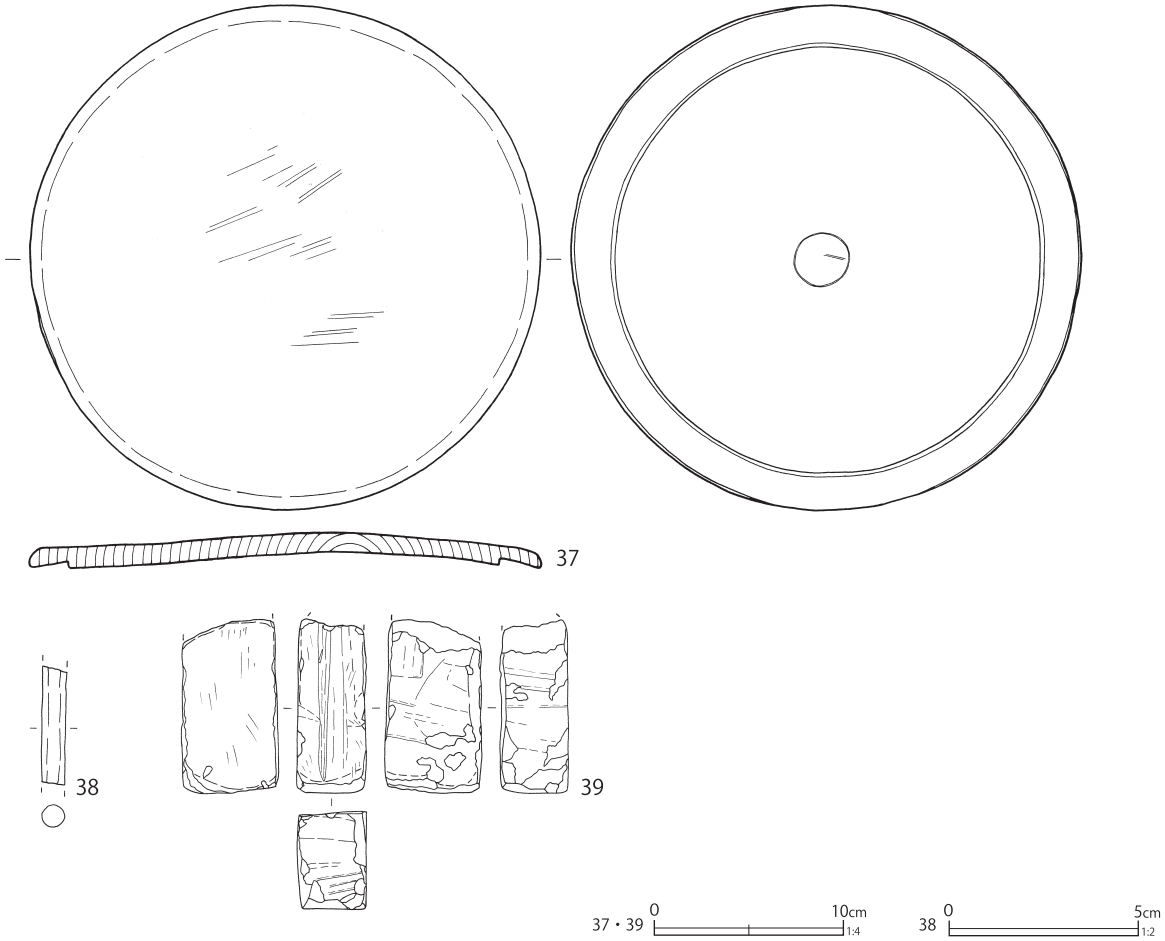
４は瀬戸美濃系陶器の端反形碗である。内面に白化粧、外面には白土と鉄で折枝梅花文が絵付けられている。栗橋宿での出土は少ない。５は大堀相馬系陶器の土瓶である。ソロバン形を呈し、外面上位に凹凸がみられる。胎土に粒径の大きい黒色粒子が多量に含まれ、表面にまだら模様に浮かぶ。外面に大堀相馬系陶器に特徴的な走馬文の鉄絵がみられる。６は極薄の板状銅製品、７は鉄製の頭巻釘である。



第 94 図　第 89 号土壙出土遺物（1）



第 95 図　第 89 号土壙出土遺物（2）



第 96 図　第 89 号土壙出土遺物（３）

第 89 号土壙（第 92・94 ～ 96 図）

Ｆ７－Ｃ６グリッドに位置する。第 241 号土壙と重複する。平面形は不整隅丸長方形で、長軸 2.3 m、短軸 1.2 m、深さ 0.55 mを測る。長軸方位はN－ 18°－Wを指す。

覆土は下層の粘質土主体で、第１層の砂質土に挟まれるように多量の木片がみられる。木片は第５層でも多量に出土している。出土している陶磁器は瀬戸美濃系磁器の卵殻手坏や湯呑形小碗を主体としており、陶器等を含め近代的な様相はみられない。型紙摺絵染付皿１点は混入と考えられる。推定廃絶期は 19 世紀後葉、具体的には 1860 ～ 1870 年代と考えられる。

第 94 ～ 96 図に出土遺物を図示した。第 94 図１は瀬戸美濃系磁器の端反形碗である。口縁部の反りは弱く、高台内はやや深く削り込む。

２はオランダのマーストリヒトにあるペトルス・レグー社で生産された軟質磁器碗である。内外面に銅版転写染付をするプリントウェアであり、酸化コバルトを意図的に釉に流出させ、滲ませるフロウ・ブルー（滲み手）がみられる。内面には極小窯道具痕（スパー痕）が２箇所遺存している。また、高台が「ハ」字にひらくヨーロッパでは一般的な器形である。

滲みが強く転写パターンが不明瞭であるが、高台内の銘鑑から「チャイナ（１）」パターンとわかる。所謂シノワズリーなパターンで、19 世紀のヨーロッパで流行した文様である。

ペトルス・レグー社で生産された 400 種に上るプリントウェアパターンと使用期間はオランダ

第 28 表　第 89 号土壙出土遺物観察表（第 94 ～ 96 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	11.2	6.2	(4.3)	―	60	普通	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付	
2	軟質磁器	碗	10.0	5.9	4.9	―	50	普通	白	マーストリヒト産 ペトルス・レグー窯 内外面施釉・銅版転写染付・フロウブルー 内面窯道具痕２遺存 高台内刻印「Ｒ／２」裏銘「PR/PRIZE/1851/CHINA/12」	67-10 74-6
3	磁器	碗	6.4	5.0	2.9	―	55	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	
4	磁器	碗	(6.8)	5.1	(2.6)	―	20	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 被熱（弱）	
5	磁器	坏	(6.3)	2.8	2.8	―	50	普通	白	肥前系 内外面施釉・上絵付（赤・黒・緑）	
6	磁器	坏	(6.1)	2.9	2.5	―	35	良好	白	肥前系 内外面施釉 内面上絵付（青）「［い］せ」「栗［　］」	74-5
7	磁器	紅皿	6.6	1.8	2.2	―	100	良好	灰白	肥前系 型成形 内外面施釉	
8	磁器	鉢	13.5	6.3	6.2	―	95	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付 焼継痕あり 高台内釘書き「一」内面釘書き「キ」	
9	磁器	鉢	―	[3.3]	(8.2)	―	20	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 底部輪状に砂付着 焼継痕あり 内面釘書き「井」	74-8
10	磁器	燗徳利	3.4	16.8	5.3	―	90	普通	白	瀬戸美濃系 外面施釉 頸部隆起線１条	
11	磁器	徳利	―	[8.1]	4.0	―	50	良好	白	肥前系 外面瑠璃釉	
12	磁器	急須	6.7	[8.5]	―	―	90	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付 体部下位煤付着	
13	陶器	碗	11.0	5.8	3.7	I	70	良好	褐灰	内外面施釉・上位うのふ釉流し掛け 内面ピン痕３畳付重焼痕	
14	陶器	灯明皿	10.4	1.9	4.2	K	50	普通	灰白	京都信楽系 内面施釉・ピン痕２遺存 外面上位タール状物質付着	
15	陶器	燗徳利	3.3	[10.0]	―	K	70	良好	灰白	外面青緑釉	
16	陶器	燗徳利	―	[5.1]	7.2	IK	10	良好	灰	外面鮫肌釉 内面鉄釉 底部墨書「㐂」「小島屋」ヵ	74-7
17	陶器	鍋	16.2	6.2	7.0	K	40	普通	灰白	外面上位トビガンナ状施文 内面柿釉 把手手捻り 露体部煤付着	
18	陶器	鍋	(16.3)	4.3	(7.0)	IK	15	良好	黄灰	外面白釉ピラ掛け状 内面鉄釉 19 の身	
19	陶器	蓋	―	[1.9]	15.6	IK	10	良好	灰白	上面白釉ピラ掛け状 内面鉄釉 18 の蓋	
20	陶器	蓋	(6.6)	[1.7]	(3.8)	I	25	良好	灰赤	備前系 底部糸切痕 胎土炻器質 上面塗土	
21	土製品	ミニチュア	2.3	1.4	1.1	AI	―	良好	明赤褐	江戸在地系 八角鉢 型成形 内面緑釉 外面上位施釉 弱く被熱 重さ 3.8 g	117-18
22	土製品	泥面子	径 2.3 厚さ 1.1 重さ 6.4			AHIK	―	良好	橙	江戸在地系 一枚型成形 中実 摩耗 雲母付着	122-11
23	瓦	丸瓦	長さ 18.4 幅 [9.9] 厚さ 2.1 高さ [5.3]			AHK	―	普通	灰白	雲母付着 燻す 穿孔１遺存	
24	木製品	漆椀	口径／径 11.2 高さ 5.3 底径 6.8							横木取り 内面赤漆 外面黒漆	128-6
25	木製品	箸	長さ 17.5 幅 0.7 厚さ 0.7							削出	
26	木製品	箸	長さ [18.9] 幅 0.6 厚さ 0.5							削出	
27	木製品	箸	長さ 22.7 幅 0.6 厚さ 0.5							削出	
28	木製品	箸	長さ 22.6 幅 0.5 厚さ 0.5							削出	
29	木製品	杓子	長さ 18.3 幅 [4.3] 厚さ 0.8							柾目 全面黒漆	128-7
30	木製品	栓	径 3.8 高さ 1.4							板目	
31	木製品	曲物	口径 6.4 高さ 2.7							底板柾目 内面黒色付着 歪み有	128-8
32	木製品	提灯	口径 10.2 厚さ 0.9							板目 底板 金具の痕跡 金具も出土するが接合せず黒色物付着	
33	木製品	不明品	口径／径 8.8 厚さ 1.9							板目 中央に 1.5 ㎝の孔	
34	木製品	櫛	長さ [12.1] 幅 3.9 厚さ 0.9							板目	
35	木製品	桶底板加工品	長さ 11.9 幅 12.6 厚さ 2.4							板目 表面に文字か記号 側面に木釘３	
36	木製品	下駄	長さ 16.8 幅 9.0 高さ 3.3							板目 陰卯下駄 表面年輪が文様状に表れる	
37	木製品	曲物	口径／径 26.9 厚さ 1.1							板目 蓋　表面に傷 裏面焼印 歪み有	
38	石製品	石筆	長さ [3.1] 幅 0.6 厚さ 0.6 重さ 1.6							滑石（白）	
39	石製品	砥石	長さ [9.2] 幅 3.6 厚さ 5.1 重さ 328.0							流紋岩 側・裏面幅広工具痕 表面刃物痕 砥面２ 被熱（一部黒化・剥落）	139-13

本国で明らかにされており、「チャイナ（1）」は1855～1895年である。

高台内には「R／2」の刻印とペトルス・レグー社の社章である王冠にスタッフォードノットの意匠が転写されている。社章の使用期間は1851～1880年である。社章内にはペトルス・レグーの「PR」と「PRIZE/1851/CHINA/12」がみえる。「PRIZE」と対になる位置は転写の失敗で消えているが、「MEDAL」の文字が入る。社章右上の「12」や刻印「2」の意味は製造年月日等の可能性が考えられる。

「1851」は第一回ロンドン万博の開催年であり、ペトルス・レグー社はこの時にイギリスから最新式の印刷機器を導入し、自社製品の質を向上させるとともに、日本市場への本格参入を始めている。さらに、幕末開港期にあたる1859年にレグー社の商船を3隻日本へ送り込んでいる（長久2011）。したがって、本製品は1859年以降に日本国内へもたらされたものと考えられる。

3は肥前系磁器の湯呑形小碗である。高台は幅広である。4は瀬戸美濃系磁器の湯呑形小碗で、高台が高い。弱く被熱する。

5・6は肥前系磁器の卵殻手坏である。5の内外面に赤・黒・緑で梅花文状の上絵付を施し、6は江戸絵付けで「[い]せ／栗[　]」と書かれる。いずれも高台に段が付かない輪高台である。7は肥前系磁器の紅皿である。型成形で、陽刻蛸唐草文が施文される。施文は口縁端部にまで及ぶ。体部下半と底部は露胎である。

8・9は肥前系磁器の八角鉢である。いずれも蛇ノ目凹形高台である。8は内面に笹文の染付がみられる。焼継痕が残るが、焼継印はみられない。見込みと高台内に釘書き「キ」、「一」がみられる。9は底部に輪状に砂が付着する。焼継痕が残るが、焼継印はみられない。見込みに釘書き「井」がみえる。「井」の文字は栗橋宿では類例が少なく、第1地点第10号土壙出土漆椀蓋、第3地点第248号土壙出土の漆椀にみられる（埼埋文2018）。

10は瀬戸美濃系磁器の燗徳利である。無文で、頸部に隆線が1条巡廻る。同様の特徴は坏にも例があり、幕末期から明治時代初頭頃に多い。11は肥前系磁器の瓶子形御神酒徳利である。外面に瑠璃釉が施釉される。12は瀬戸美濃系磁器の急須である。把手下面に「梅□造」の染付銘がみられる。体部下位に煤が付着する。

13は産地不詳陶器の碗である。内外面に鉄釉を施釉し、上位にうのふ釉を流し掛けている。胎土は極めて硬質・厚手で、口縁部は弱く反る。内面に窯道具痕が3箇所、高台畳付に重ね焼き痕がみられる。14は京都信楽系陶器の灯明皿である。内面に窯道具痕が2箇所遺存し、外面上位にタール状の付着物がみられる。

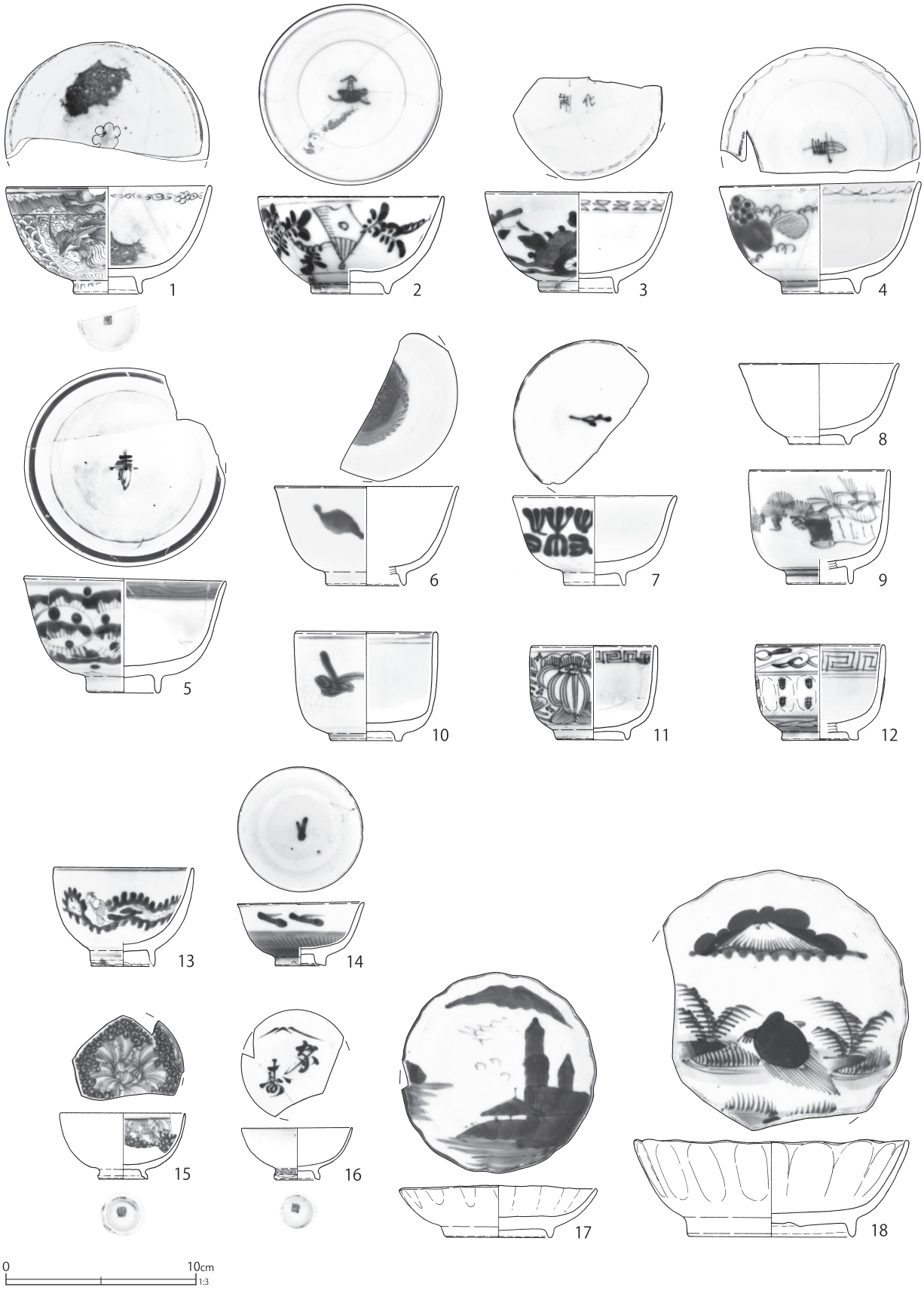
15・16は産地不詳陶器の燗徳利で、15は外面に青土瓶と同様の青緑釉を施釉する。16は外面鮫肌釉、内面に鉄釉を施釉する。底部に墨書「小」がみえ、その横に「小島屋」と推定される墨書がみえる。類似する墨書資料が第1地点第25号土壙（第61図315、埼埋文2018）で出土しており、「小□屋」と判読できる。

17は産地不詳陶器の両手鍋である。把手は手捻りで貼り付けてある。内面は柿釉で、外面は複刃状トビガンナが施文される。露胎部には使用痕と考えられる煤が付着する。

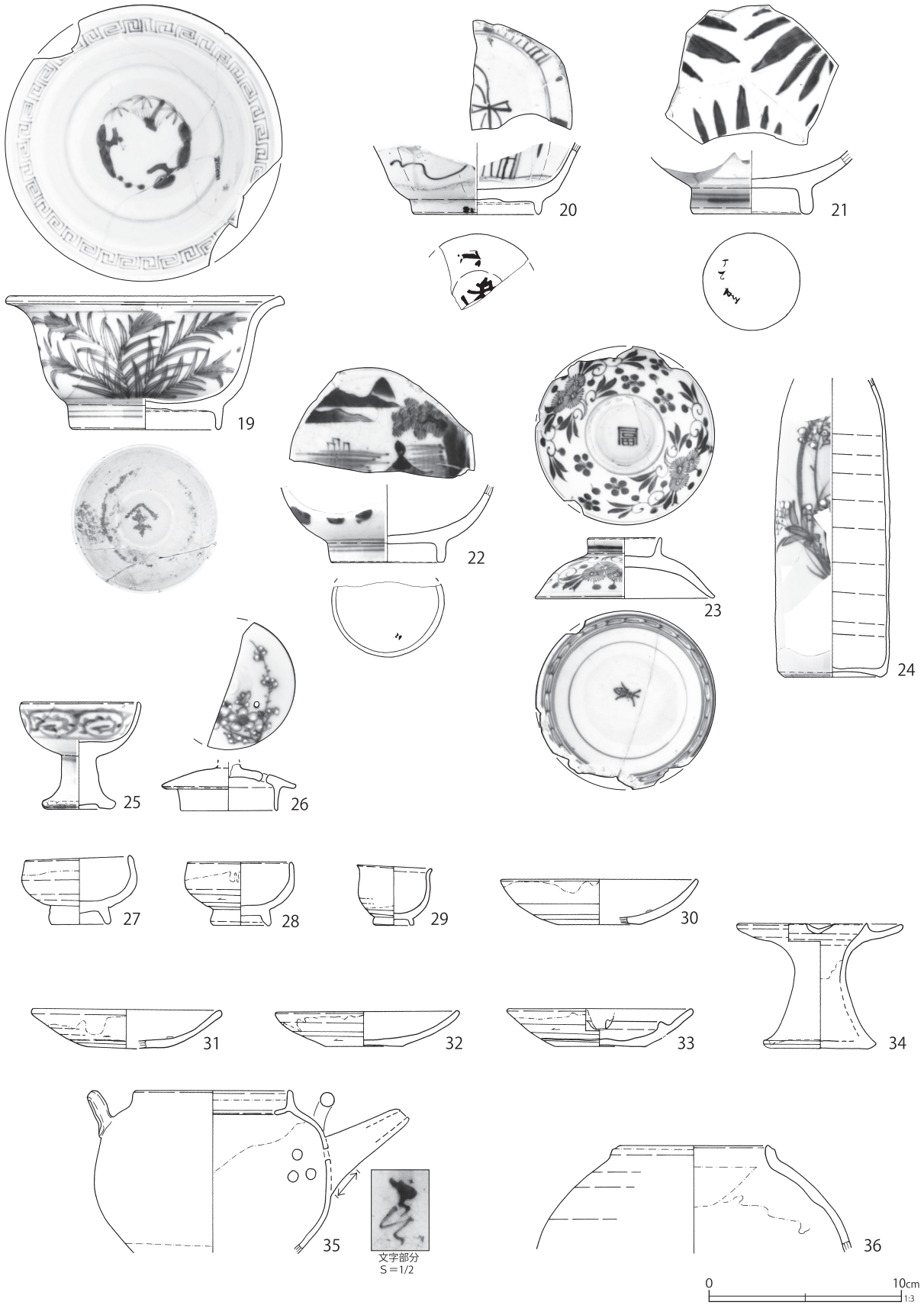
18・19は産地不詳陶器の鍋とその蓋である。同様の施文方法・調整からセットになるものと考えられる。18はいずれも内面全面に鉄釉、外面に白釉がピラ掛け状に施釉される。外面は大部分が露胎である。

20は備前系陶器の落し蓋である。胎土は炻器質で、底部に回転糸切痕が遺存する。上面に塗土状光沢がみられる。

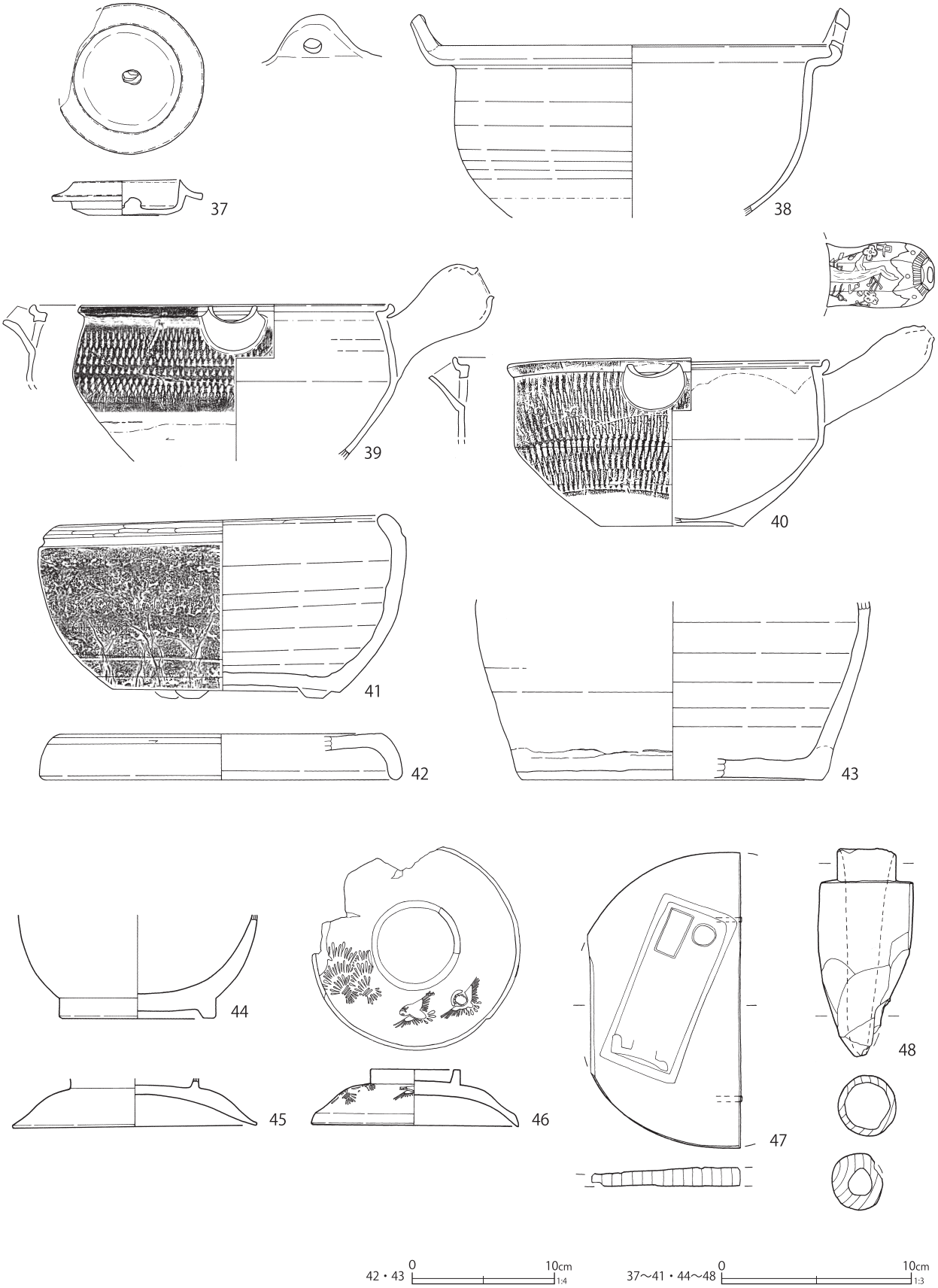
21・22は土製品で、21は江戸在地系のミニチュアである。型成形の八角鉢で、内面に緑釉が施



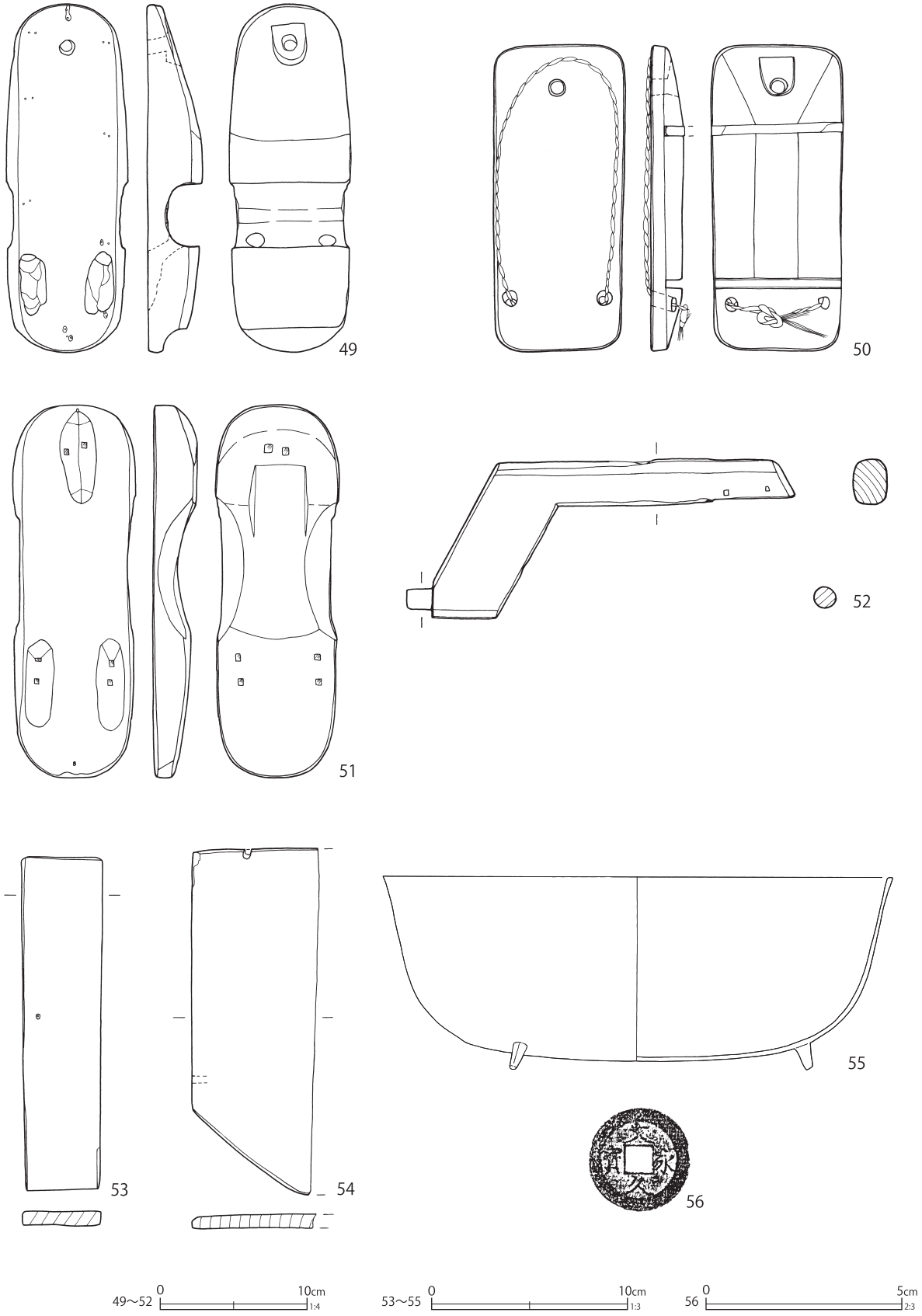
第 97 図　第 101 号土壙出土遺物（1）



第 98 図　第 101 号土壙出土遺物（2）



第 99 図　第 101 号土壙出土遺物（3）



第 100 図　第 101 号土壙出土遺物（4）

第 29 表　第 101 号土壙出土遺物観察表（第 97 ～ 100 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	10.6	5.6	(3.4)	―	50	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・色絵（赤・黒）内面被熱	
2	磁器	碗	9.7	5.1	4.0	―	95	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付	
3	磁器	碗	(9.7)	5.2	(4.0)	―	40	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 焼継痕あり	
4	磁器	碗	10.4	5.7	3.9	―	65	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付	
5	磁器	碗	10.5	6.1	3.6	―	90	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 内面上位陰刻文	
6	磁器	碗	(9.5)	5.1	(4.0)	―	30	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・陰刻文・染付	
7	磁器	碗	(8.5)	4.6	3.1	―	60	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・酸化コバルト染付 口紅	
8	磁器	碗	8.2	4.2	3.1	―	75	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 高台内露胎	
9	磁器	碗	(7.3)	6.0	(3.3)	K	45	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付	
10	磁器	碗	(7.3)	5.6	3.7	―	60	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 外面陰刻文	
11	磁器	碗	6.4	4.9	3.7	―	80	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付	
12	磁器	碗	(6.6)	5.0	(3.8)	―	45	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付	
13	磁器	碗	7.2	5.2	3.2	―	95	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付	
14	磁器	坏	6.5	3.3	2.6	―	100	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 口紅 外面下位トビガンナ状施文	
15	磁器	坏	(6.4)	3.4	3.5	―	40	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付 内面上絵付（青）	
16	磁器	坏	5.8	2.7	2.3	―	80	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付 内面上絵付（青・金）	
17	磁器	皿	10.0	2.7	5.4	―	95	良好	白	肥前系 内外面施釉 内面染付 口紅	
18	磁器	皿	(14.2)	5.0	8.5	―	75	良好	白	肥前系 内外面施釉 内面染付 口紅 底部煤付着	
19	磁器	鉢	13.9	6.9	7.6	―	95	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 高台内輪状重焼痕・釘書「令」	74-14
20	磁器	鉢	―	[3.7]	(6.4)	―	10	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 焼継痕あり 高台内焼継印（赤）	74-15
21	磁器	鉢	―	[3.3]	5.9	―	60	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 高台内焼継印（赤）	
22	磁器	鉢	―	[4.0]	5.8	―	40	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 焼継痕あり 高台内焼継印（赤）	
23	磁器	蓋	3.7	3.1	9.1	―	90	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付	
24	磁器	燗徳利	―	[15.4]	5.0	―	70	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付・白盛	
25	磁器	仏飯器	6.0	5.6	3.2	―	85	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	
26	磁器	蓋	―	[2.4]	(4.9)	―	45	良好	白	瀬戸美濃系 上・下面施釉 上面染付・白盛	
27	陶器	坏	5.3	3.5	3.0	IK	100	普通	灰黄褐	瀬戸美濃系 内外面灰釉	
28	陶器	坏	5.2	3.2	2.9	EIK	95	良好	灰	瀬戸美濃系 内外面灰釉	
29	陶器	坏	3.9	3.1	2.2	K	95	良好	灰白	京都信楽系 内外面施釉	
30	陶器	灯明皿	(10.0)	2.3	(4.2)	IK	20	良好	浅黄橙	京都信楽系 内外面施釉 内面ピン痕１遺存 外面上位煤付着	
31	陶器	灯明皿	(9.6)	[2.0]	(4.2)	IK	40	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面柿釉 外面下位・底部釉拭き取り 体部輪状重焼痕	
32	陶器	灯明皿	9.3	1.8	4.0	IKL	100	良好	褐灰	内外面柿釉 外面煤付着	
33	陶器	灯明皿	9.3	2.0	4.6	IK	90	良好	黄灰	瀬戸美濃系 内外面柿釉 外面下位・底部釉拭き取り 体部輪状重焼痕	
34	陶器	灯火具	4.5	6.4	5.0	IK	85	良好	灰白	京都信楽系 内外面施釉	
35	陶器	土瓶	7.9	[8.4]	―	K	70	良好	灰白	内外面施釉 外面白化粧 注口部下面呉須文字	
36	陶器	土瓶	(7.1)	[5.5]	―	EIK	5	普通	にぶい黄橙	松岡系 外面海鼠釉	
37	陶器	蓋	-	1.8	4.1	K	85	良好	浅黄橙	京都信楽系 上面施釉	
38	陶器	鍋	20.9	[9.0]	―	IK	60	普通	灰黄	内外面柿釉 被熱 外面煤付着	
39	陶器	行平鍋	16.2	[10.2]	―	IK	80	普通	灰白	外面トビガンナ施文 内外面柿釉 体部下位重焼痕・煤付着	
40	陶器	行平鍋	16.7	10.4	7.5	IK	85	良好	灰白	把手上下合二枚型成形 外面トビガンナ施文 内外面柿釉 口縁部内端に列点状の重焼痕 露体部煤付着	
41	瓦質土器	火鉢	16.9	9.6	11.8	EHIK	70	普通	灰白	底部ヘラナデ 体部下位ケズリ 口縁部ミガキ 外面施文後ナデ消し 燻す	
42	瓦質土器	蓋	―	[3.2]	(24.6)	FHIK	20	普通	にぶい橙	上面シワ状痕 体部上位ケズリ 燻す	
43	瓦質土器	火消壺	―	[12.5]	(21.0)	CIK	35	普通	黄灰	砂目底 外面下端部ケズリ 燻す	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
44	木製品	漆椀	高さ［5.4］ 底径 8.0							横木取り 内面赤漆 外面黒漆	
45	木製品	漆椀蓋	口径 12.6 高さ［2.5］							横木取り 内面赤漆 外面緑漆	
46	木製品	漆椀蓋	口径 10.8 高さ 3.0 つまみ径（4.7）							横木取り 内面赤漆 外面赤漆 黒と金で文様	128-11
47	木製品	曲物	径 15.5 厚さ 1.0							柾目 底板焼印「□」	
48	木製品	呑口	径 5.0 長さ 10.9 孔径 2.4							板目	
49	木製品	下駄	長さ 23.7 幅 7.2 高さ 3.8							板目 刳り下駄 表面外周釘穴	
50	木製品	下駄	長さ 20.8 幅 8.9 高さ［2.3］							板目 陰卯下駄	
51	木製品	下駄	長さ 25.4 幅 7.3 高さ 2.9							板目 無眼下駄	
52	木製品	不明品	長さ 10.7 幅 26.4 厚さ 2.3							板目	
53	木製品	木札	長さ 16.9 幅 4.1 厚さ 0.7							板目 表面墨書 孔 1	144-15
54	木製品	木札	長さ 17.5 幅［6.4］ 厚さ 0.7							板目 表面墨書 上部に孔 木釘 1	144-16
55	鉄製品	鍋	口径 26.0 器高 9.8 厚さ 0.3 重さ 330.9							三脚	
56	銅製品	銭貨	径 26.7 厚さ 1.1 重さ 3.2							文久永寶	

釉される。弱く被熱する。22 は江戸在地系の泥面子である。型成形で、離剤の役割を果たす雲母が付着する。表面は摩耗しており、意匠は不明である。

23 は釘穴と考えられる穿孔がある丸瓦である。江戸在地系の地瓦（丸・平・桟瓦）には江戸時代段階には釘穴がなく、江戸遺跡において軒瓦を除く丸瓦や桟瓦で釘穴を持つものは近代の所産とされる。しかし、地域によっては江戸時代から地瓦に釘穴を穿つものもあると指摘されている（金子 2018）。23 が軒丸瓦の可能性があるとともに、以上については留意しておきたい。

24 ～ 37 は木製品である。24 は漆椀で、内面赤漆塗り、外面黒漆塗りである。29 は杓子で、全面黒漆塗りである。31 は曲物である。側板が大きく歪んでいる。内面には、硬化した黒色の紙が付着している。漆により固まったものと考えられる。32 は提灯底部の底板と考えられる。金具の痕跡が残る。側面には浅い溝が掘られている。34 は櫛である。背の部分が直線的で、角に丸みがない。35 は桶底板の転用品と考えられる。黒漆で、屋号の痕跡が残る。36 は陰卯下駄である。台の表面に横方向の浅い溝が掘られ、年輪が文様のように表れている。前壺裏面には抉りが作られる。37 は曲物の蓋である。裏面に焼印が押されている。

38・39 は石製品で、38 は両端が欠失する白色の滑石製石筆である。39 は白色の流紋岩製砥石で、２面の砥面があり、うち１面に溝状の使用痕がみられる。側面、裏面には刃幅の広い工具痕がみられる。被熱しており一部が黒色化、剥落している。

第 101 号土壙（第 92・97 ～ 100 図）

Ｆ７－Ｃ７グリッドに位置する。第 34・48 号土壙より古い。平面形は隅丸長方形で、長軸 3.7 m、短軸 1.25 m、深さ 0.75 mを測る。長軸方位はN－ 16°－Wを指す。

上層、下層は砂質土とシルト質土で構成されているが、中層は粘土質で、粘性が極めて強い。木片等の有機物が多量に含まれている。

出土陶磁器は 19 世紀中葉の製品が主体で、酸化コバルト染付篆書体文「木」の端反形碗（第 97 図 7）と非掲載の酸化コバルト染付端反形坏が最新である。1863 年初鋳の文久永寶（第 100 図 56）が出土している。また、自然遺物はモモの種子が１点出土している。酸化コバルト染付磁器が極めて少ないため、推定廃絶期は 19 世紀後葉、具体的には 1870 年代である。

第 97 ～ 101 図に出土遺物を図示した。第 97 図１は瀬戸美濃系磁器の色絵丸碗である。赤色の色絵で、細線で丁寧に描く。色絵は一部黒色化し、内面は一部被熱している。高台内の削り込みは深

い。２・３は瀬戸美濃系磁器の染付丸碗である。３の内底面にみえる染付文字は「成化年制」と推定される。３には焼継痕がみられる。２は厚手、３は薄手で高台内は深く削り込まれる。

４～８は瀬戸美濃系磁器の端反形碗である。４は口縁部の反りが極めて弱い。５は内面上位に陰刻文染付を施し、口縁部の反りが極めて弱く、厚手である。６は内外面に陰刻文染付を施し、口縁部は弱く反る。７は酸化コバルト染付で外面に篆書体「木」の文様を絵付けている。口縁部は弱く反る。最新期の陶磁器である。８は無文で高台内は露胎である。

９・10 は瀬戸美濃系、11・12 は肥前系磁器の湯呑形碗である。10 は外面に陰刻文染付がみられ、高台畳付は幅広である。11 は細線文の染付で小法量である。12 は体部に鎬を施し、高台畳付は幅広である。13 は瀬戸美濃系磁器の小碗である。

14 ～ 16 は瀬戸美濃系磁器の坏である。14 は端反形坏で、体部下位にトビガンナ状施文がみられる。高台畳付は幅広である。15・16 は卵殻手坏で、高台畳付に段が付く。外面に染付、内面に江戸絵付けを施す。

17・18 は肥前系磁器の内面一枚絵の皿である。18 は高い高台の蛇ノ目凹形高台である。

第 98 図 19 は瀬戸美濃系磁器の染付鉢である。内底面に松竹梅環状文が絵付けられる。蛇ノ目凹形高台で、高台内に輪状の重ね焼き痕と屋号「㐂」の釘書きがみられる。既報告である栗橋宿本陣跡区画Ａの『絵図』にみえる「伊勢屋 / 質や / 年寄 / 長次郎」（埼埋文 2019a）、第３地点区画Ｐの『営業便覧』にみえる「足袋小賣商 / 堀越茂吉」（埼埋文 2018）で使用されている屋号である。

20 ～ 22 は肥前系磁器の鉢で、20 は蛇ノ目凹形高台の八角鉢である。いずれも朱書きで高台内に焼継印がみえ、20・22 には焼継痕もみられる。

23 は瀬戸美濃系磁器の蓋である。端反形碗の蓋で、丁寧な染付である。

27・28 は瀬戸美濃系陶器の坏である。外面上位から内面にかけて灰釉が施釉されている。器高が低く、体部が屈曲するように外側へ張り出す特徴があり、19 世紀後半にみられる器形である。

29 は京都信楽系陶器の坏である。口縁は反り、極小サイズである。

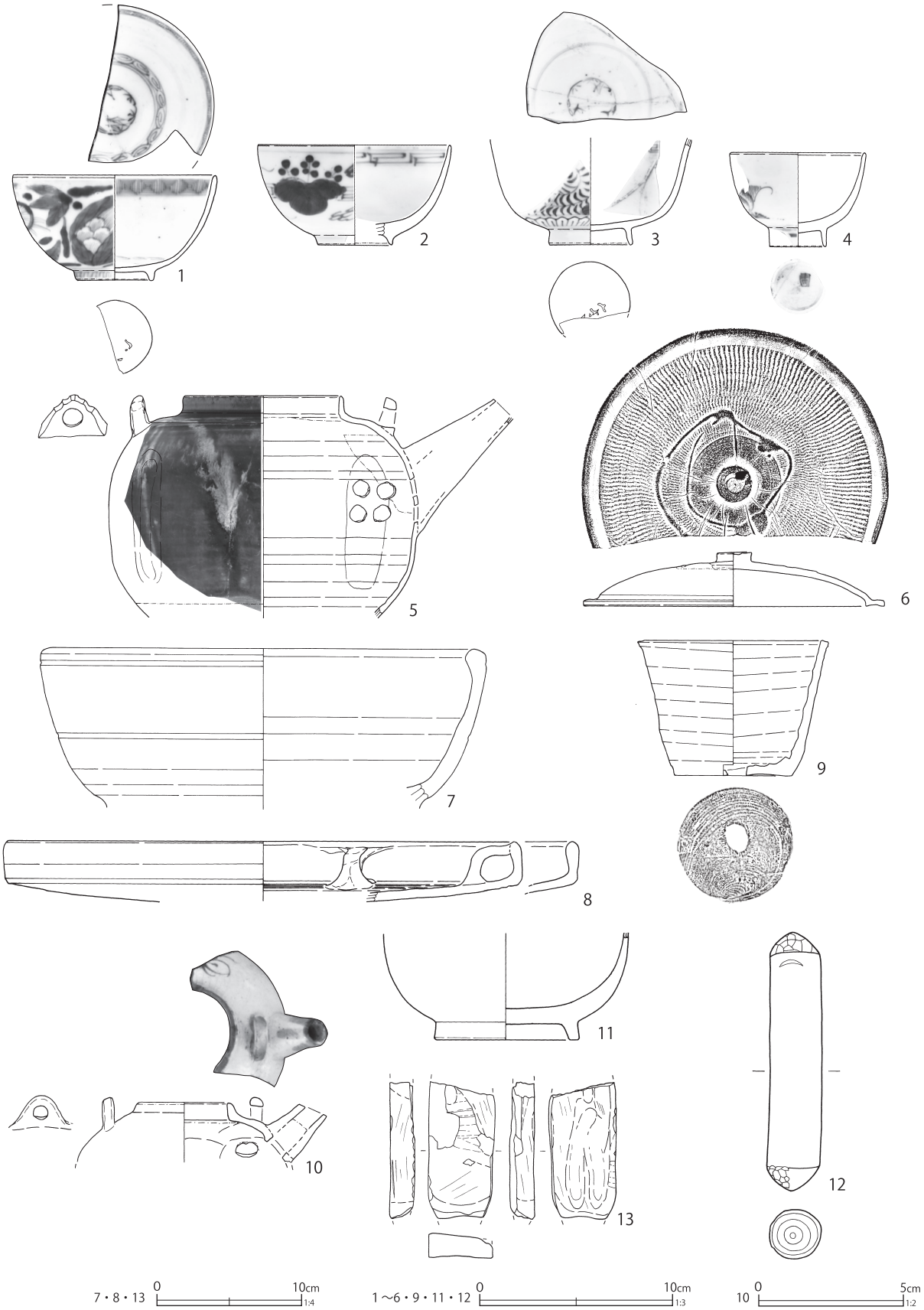
30 ～ 33 は陶器の灯明皿である。30 は京都信楽系で口縁端部から内面にかけて施釉され、外面の大部分は露胎である。内面に窯道具痕が１箇所遺存している。外面上位には煤が付着する。31 は瀬戸美濃系で内外面に柿釉が施釉される。外面下位から底部にかけて釉の拭き取り痕がみられ、体部下位に輪状の直重ね焼き痕がみられる。32 は地方窯系で、外面上位から内面に柿釉を施釉する。胎土はにぶい赤褐色で硬質である。33 は瀬戸美濃系の所謂油受皿で、内外面に柿釉を施釉する。体部下位から底部にかけて釉の拭き取り痕跡がみられる。また、内面受部の切込みは「U」字状を呈し、体部に輪状の直重ね焼き痕が遺存する。

35 は産地不詳陶器の白土染付土瓶である。鉄砲口状注口部の下部には染付文字「道八」がみえる。把手は環状である。36 は松岡系陶器の土瓶である。外面は海鼠釉が施釉され、黒色粒子が多量に含まれる粗粒な胎土である。

第 99 図 37 は京都信楽系陶器の落し蓋である。上面は施釉され、上端部は露胎である。筒形水注の蓋の可能性が考えられる。

38 ～ 40 は産地不詳陶器の鍋である。38 は土瓶などにみられる型成形把手が付き、柿釉が施釉される。被熱しており外面に煤が付着する。39・40 は柿釉トビガンナ施文の行平鍋である。39 は蛸状把手で、40 は二枚型成形で上下に合わせて成形している。

41 は瓦質土器の火鉢である。口縁部にミガキ調整をいれる硬質瓦質で、体部下位にケズリ調整がみられる。体部はスタンプ文を施文した後、ナ



第 101 図　第 320 号土壙出土遺物

第30表　第320号土壙出土遺物観察表（第101図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	(10.4)	5.4	(3.8)	K	20	良好	白	肥前系　内外面施釉・染付　焼継痕あり　高台内焼継印（赤）	
2	磁器	碗	(9.9)	5.2	(3.8)	―	20	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 ・染付	
3	磁器	碗	―	[5.5]	4.2	―	20	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 焼継痕あり 高台内焼継印（赤）	
4	磁器	碗	(6.8)	4.8	(2.8)	―	25	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付	
5	陶器	土瓶	(8.0)	[11.5]	―	IK	20	普通	黄灰	内面上位・外面鉄釉 内面下位施釉	
6	陶器	蓋	―	2.8	15.4	EIK	70	良好	浅黄橙	外面トビガンナ施文 渦巻状のツマミ 内面臙脂色釉 上面白釉流し掛け	
7	瓦質土器	火鉢	(29.2)	[11.1]	―	CHIK	40	普通	灰白	やや酸化焔焼成 破損後被熱（黒化）口縁部煤付着 SK319と接合	
8	土師質土器	焙烙	(35.0)	[4.1]	(35.4)	CDEGHK	15	普通	にぶい橙	砂目底 内底面円周状のナデ	
9	瓦質土器	植木鉢	9.1	6.9	6.1	IK	85	普通	灰	底部糸切痕（左）燻す	
10	陶器	ミニチュア	(3.0)	[2.1]	―	I	10	良好	褐灰	土瓶 型成形 外面白土染付 重さ108g	
11	木製品	漆椀	高さ[5.3] 底径7.2							横木取り 内側赤漆 外側黒漆	
12	木製品	すりこぎ	長さ13.3 径2.6							芯持材	
13	石製品	砥石	長さ[9.5] 幅4.6 厚さ1.7 重さ123.6							流紋岩 表面幅広工具痕 裏面溝状使用痕 砥面４遺存	

デ消している。

42は瓦質土器の火消壺蓋である。上面は無調整のシワ状痕が残る。43は瓦質土器の火消壺である。底部は無調整で砂目が残る。

44～54は木製品である。44は漆椀である。内面赤漆塗り、外面黒漆塗りで、やや大振りである。45は漆椀蓋で内面赤漆塗り、外面は緑色漆塗りである。46は漆椀蓋である。内外面赤漆塗りである。稲束と雀が金で描かれる。肩は丸みがあり、口縁近くに稜が作られる。47は曲物の底板である。側面に木釘が残り、二枚以上をつないで底板にしていたと考えられる。48は呑口と考えられる。栗橋宿跡のこれまでの報告では、段のある呑口は無く、特殊である。上部に段が作られ、下部は削られて細くなっている。中央の穴は上部の径が大きく、下部は小さくなっている。49は刳り下駄である。表面外周に釘固定痕跡が残る。表面後穴の周辺が大きく削られている。後歯から踵にかけて削りこまれる。50は陰卯下駄である。台の平面形は長方形である。51は無眼下駄である。前壺、後穴の位置に、鼻緒を留めた穴が作られている。木釘が残存する。53は木札である。54は木札で、曲物の蓋の転用と考えられる。

55は三脚の鉄製鍋である。

第320号土壙（第92・101図）

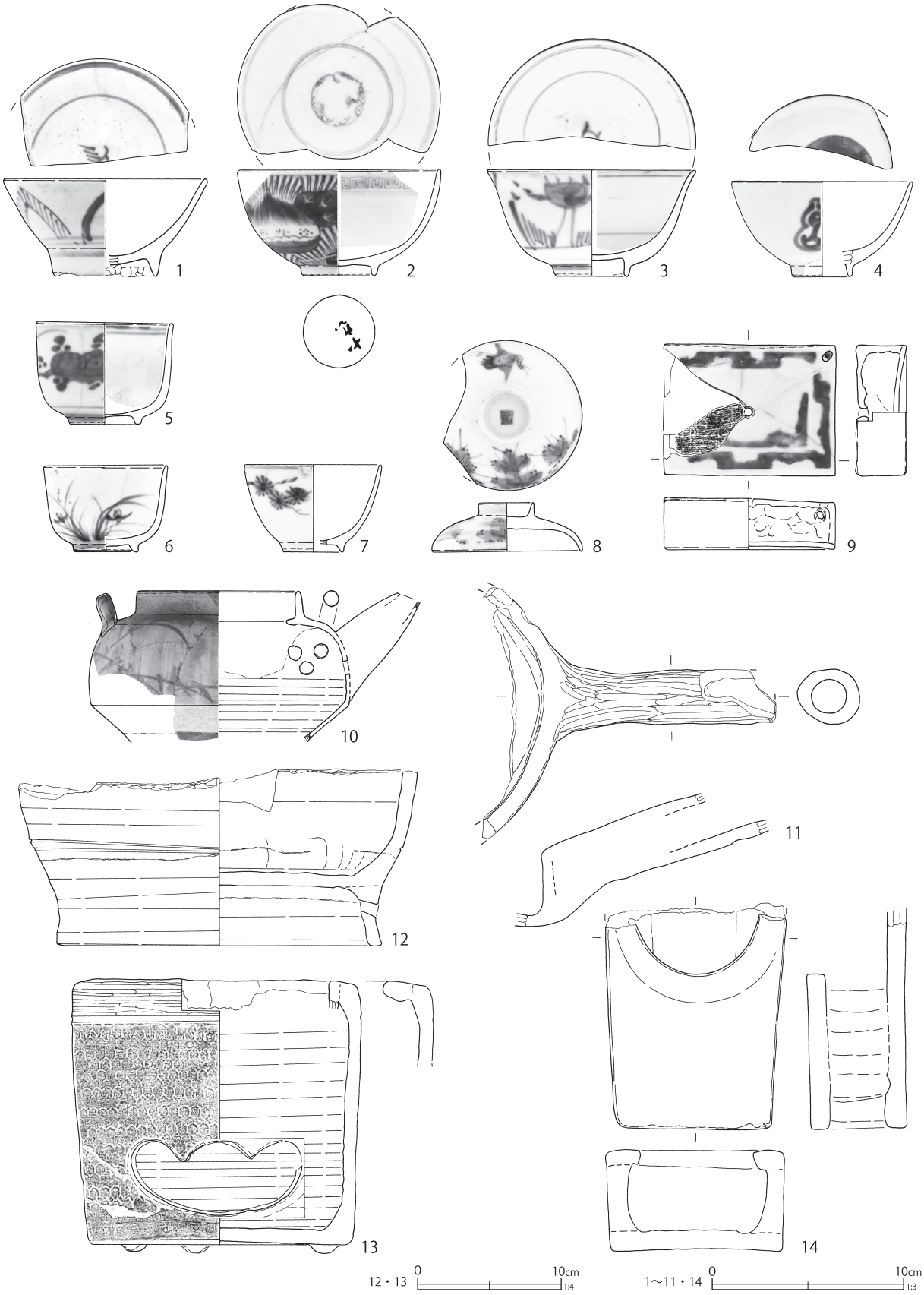
Ｆ７－Ｃ６グリッドに位置し、第319号土壙と重複する。平面形は隅丸長方形で、長軸1.5ｍ、短軸0.85ｍ、深さ0.4ｍを測る。長軸方位はＮ－14°－Ｗを指す。

粘土質な土が主体で、全体的に木質が多く含まれる。中層に砂、その上には木質層が堆積する。最上層には炭化物が含まれる。

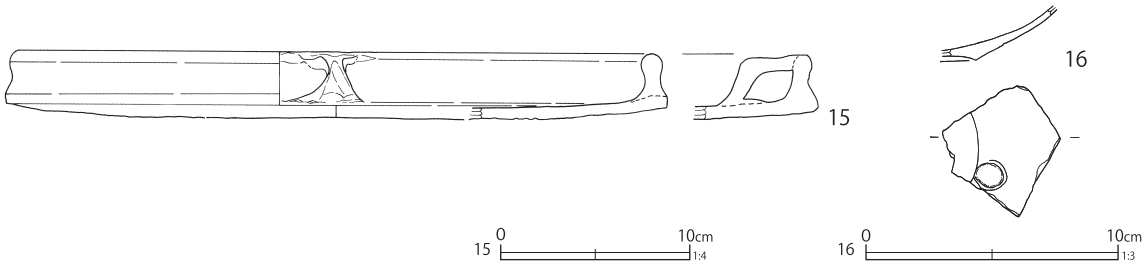
出土遺物は近代遺物が一切含まれず、瀬戸美濃系磁器の小碗（第101図４）が最新期の陶磁器である。また、第319・322号土壙出土陶磁器と接合関係にある。推定廃絶期は19世紀中葉である。第101図に出土遺物を図示した。

１は肥前系、２は瀬戸美濃系磁器の染付丸碗である。１は薄手で、焼継痕がみられ、高台内に朱書きで焼継印が認められる。３は肥前系磁器の端反形碗である。焼継痕がみられ、高台内に焼継印が認められる。４は瀬戸美濃系磁器の小碗で、最新期の陶磁器である。

５は産地不詳陶器の鉄釉土瓶である。把手は型成形で、体部を凹ます。６は産地不詳陶器の鍋蓋である。トビガンナ施文で、渦巻状のつまみが付く。内面は臙脂色の釉が施釉され、外面に白釉が流し掛けられている。



第 102 図　第 322 号土壙出土遺物（1）



第 103 図　第 322 号土壙出土遺物（２）

第 31 表　第 322 号土壙出土遺物観察表（第 102・103 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	(10.5)	5.1	(5.2)	―	35	良好	白	瀬戸美濃系　内外面施釉・染付　高台敲打痕　被熱	
2	磁器	碗	10.4	5.5	3.7	―	60	良好	白	肥前系　内外面施釉・染付　焼継痕あり　高台内焼継印（赤）	
3	磁器	碗	10.7	5.5	3.6	―	50	良好	白	瀬戸美濃系　内外面施釉・染付	
4	磁器	碗	(9.3)	4.9	(2.8)	―	40	良好	白	瀬戸美濃系　内外面施釉・染付　内面陰刻文	
5	磁器	碗	6.9	5.3	3.5	―	75	良好	白	瀬戸美濃系　内外面施釉・染付	
6	磁器	碗	6.2	4.4	3.2	―	60	良好	白	瀬戸美濃系　内外面施釉　外面染付　SK320 と接合	
7	磁器	碗	(7.0)	4.5	(3.0)	―	35	良好	白	瀬戸美濃系　内外面施釉　外面染付	
8	磁器	蓋	2.8	2.5	7.7	―	90	良好	白	瀬戸美濃系　内外面施釉　外面染付	
9	磁器	水滴	長辺 8.9　短辺 6.8 高さ 2.7　穿孔径 0.4			―	85	良好	白	瀬戸美濃系　型成形　下面内外布目痕　外面施釉（側面一面露胎）上面陽刻文・染付　煤付着	
10	陶器	土瓶	8.3	[7.8]	―	K	50	普通	灰白	外面施釉・白土染付　被熱・外面下位煤付着	
11	瓦質土器	十能	長さ [13.2]　幅 [12.5] 高さ [7.0]			ACIK	45	普通	灰黄	下面シワ状痕　把手ミガキ・中空　燻す	
12	瓦質土器	火鉢	―	[12.2]	22.6	CHIK	80	普通	にぶい橙・灰白	砂目底　やや酸化焔焼成　口縁部敲打痕・摩耗	
13	瓦質土器	焜炉	16.1	18.9	17.7	CHIK	95	普通	橙	底部板状圧痕　外面上端・口縁部ミガキ　体部亀甲文スタンプ施文をナデ消し	70-12
14	瓦質土器	風口	縦 [11.5]　横 9.3 高さ 5.3			CHIK	50	普通	浅黄橙	下面砂目　板作り成形　ほぼ酸化焔焼成	
15	土師質土器	焙烙	(33.4)	[3.4]	(34.8)	ACIK	30	普通	にぶい黄橙	底部シワ状痕・煤付着	
16	陶器	土瓶	―	[2.1]	―	I	5	良好	橙	吉見焼　胎土土器質・細粒輝石含む　外面・底部漆黒鉄釉　脚欠失	

７は瓦質土器の火鉢である。輪高台状の高い脚が付く火鉢であり、やや酸化焔焼成で橙色気味である。被熱により破断面は黒色化している。口縁部に使用による煤が付着する。第 319 号土壙と接合する。８は土師質土器の丸底焙烙である。底部は無調整の砂目底で、丸みは弱く、扁平である。内底面に円周状のナデがみられる。７・８は角閃石を多く含み、在地産と推定される。

９は瓦質土器の植木鉢である。底部は左回転の糸切痕が遺存する。底部の穿孔は中心からややずれる。

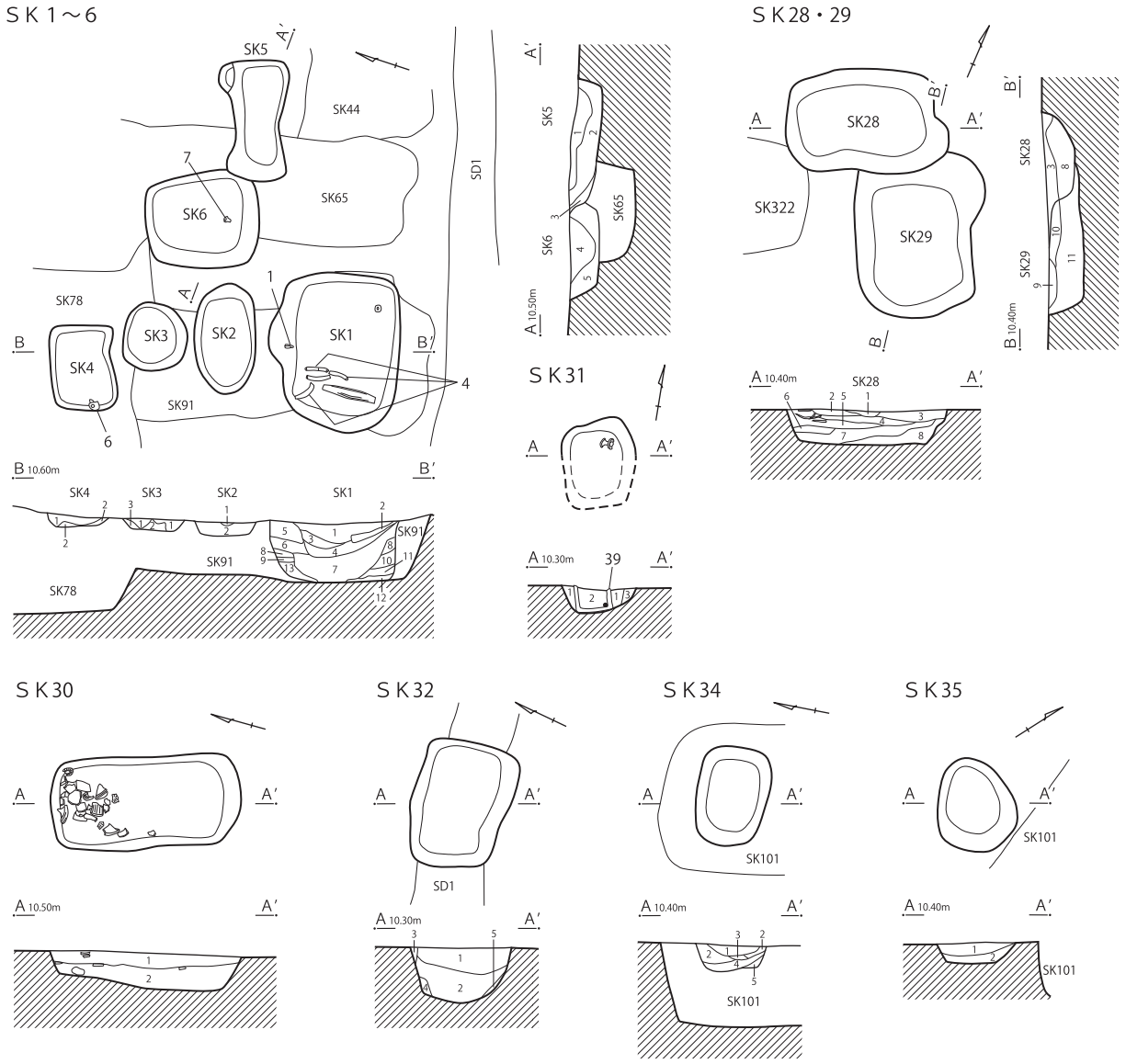
10 は産地不詳陶器で、白土染付土瓶のミニチュアである。型成形で胎土は硬質である。

13 は白色の流紋岩製砥石である。砥面は４面遺存し、表面には刃幅の広い工具痕がみられる。裏面には溝状の使用痕が２条みられる。

第 322 号土壙（第 92・102・103 図）

Ｆ７－Ｃ６グリッドに位置し、第 28・321 号土壙と重複する。平面形は隅丸長方形で、長軸 1.4 m、短軸 1.05 m、深さ 0.35 mを測る。長軸方位はN－ 70°－Eを指す。

出土陶磁器は 19 世紀中葉頃の製品が中心であり、非掲載遺物の瀬戸美濃系磁器の銅版転写染付燗徳利は重複遺構からの混入である。瀬戸美濃系磁器の湯呑形小碗（第 102 図 6）と小碗（同７）が最新期の陶磁器である。第 320 号土壙と接合関係にあり、同時期の遺構と考えられる。推定廃絶期は 19 世紀中葉である。第 102・103 図に出



ＳＫ１
1　灰褐色土　炭化物粒子・橙色土粒子含む
2　灰褐色土　木質片極多量
3　灰黄褐色土
4　黒褐色土
5　橙色土塊　(鉄分土塊)
6　灰黄色土　砂質
7　黒褐色土
8　黒色土
9　灰褐色土　炭化物粒子含む
10　灰黄褐色土
11　灰色土
12　灰黄色土　粘土質（下層との間層）
13　黒褐色土

ＳＫ２
1　橙色土　酸化鉄
2　灰褐色土

ＳＫ３
1　橙色土　酸化鉄多量
2　灰褐色土
3　灰褐色土　酸化鉄多量

ＳＫ４
1　暗褐色土　酸化鉄多量
2　灰褐色土　植物質多量

ＳＫ５（1～3）・ＳＫ６（4、5）
1　灰黄褐色土　粘土質
2　黒褐色土　粗粒　炭化物・酸化鉄含む
3　明灰色土
4　暗灰色土　酸化鉄多量
5　暗灰色土　酸化鉄極多量（一部互相）

ＳＫ28（1～8）・ＳＫ29（9～11）
1　炭化物・酸化鉄主体層
2　灰黄褐色土
3　暗褐色土　炭化物含む
4　灰色土　焼土多量
5　灰色土　粘土質　焼土少量
6　灰色土
7　暗灰色土　木片多量
8　灰黄褐色土　砂質　黄褐色土含む
9　灰褐色土　粘土質
10　灰黄褐色土　粘土質
11　灰黄褐色土　粘土質　炭化物含む

ＳＫ30
1　灰褐色土　砂質　炭化物多量
2　暗褐色土　橙色土・炭化物含む

ＳＫ31
1　灰褐色土
2　灰褐色土　粗粒
3　灰黄褐色土　砂質

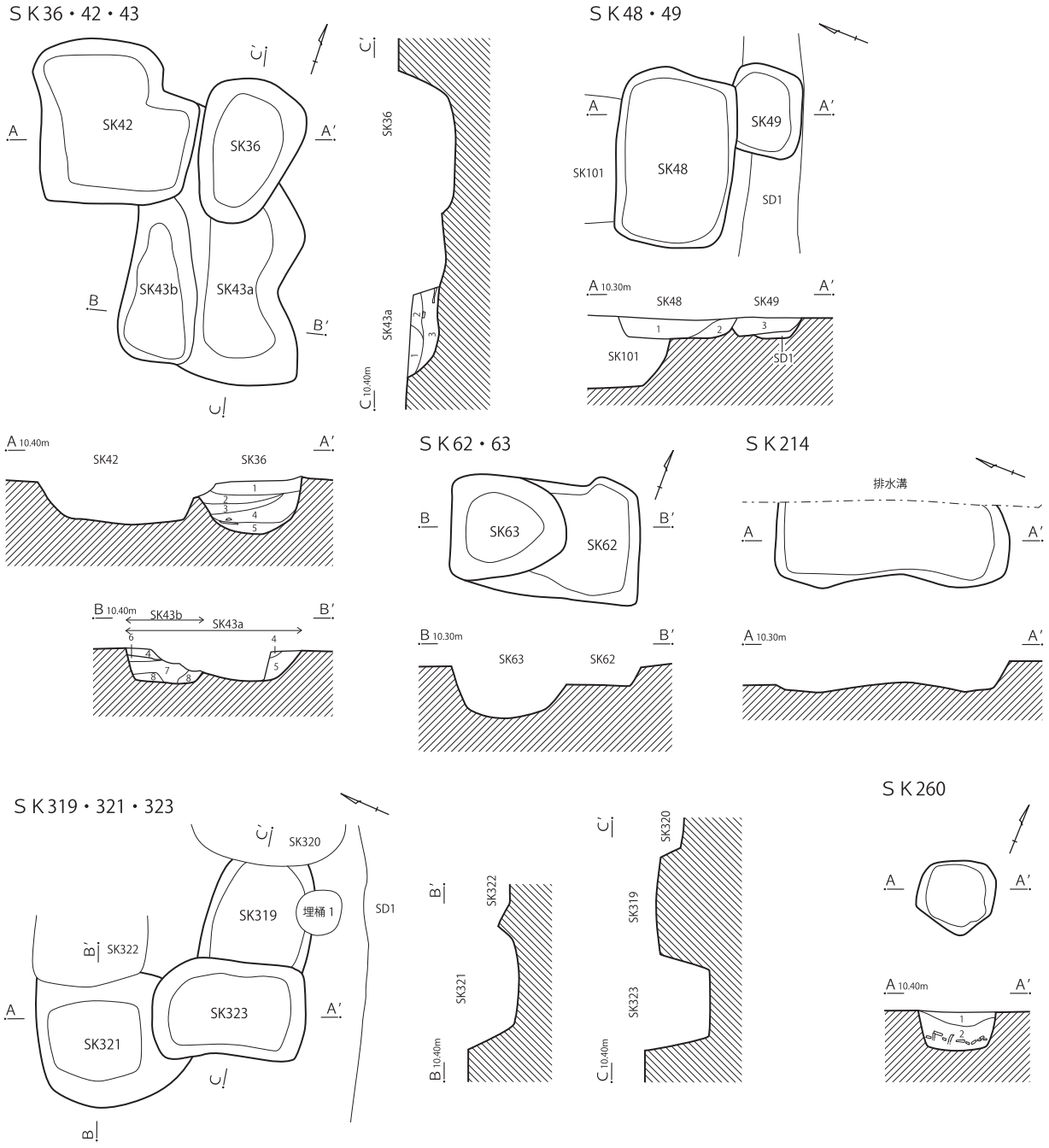
ＳＫ32
1　暗灰色土　砂質
2　暗灰色土　粘土質
　　瓦・土器・焼土多量
3　灰色土　しまり強
4　黒褐色土　粘土質
5　灰黄色土　酸化鉄

ＳＫ34
1　黒褐色土　小礫含む
2　黒褐色土
3　黒褐色土　焼土多量
4　灰色土　シルト質
5　黒褐色土

ＳＫ35
1　黒褐色土　炭化物・陶磁器・木片多量
2　灰黄色土　砂質

0　2m
1:60

第 104 図　区画 AC 土壙（２）



S K 36
1　灰黄褐色土　鉄分少量
2　灰褐色土　焼土・木質多量
3　暗灰色土　しまり強
4　暗灰褐色土　砂質
5　暗灰褐色土　粘土質　しまり強

S K 43a（1 ～ 5）・S K 43b（6 ～ 8）
1　灰黄褐色土　炭化物多量
2　灰褐色土　黄褐色土含む　しまり強
3　灰褐色土　黄褐色土含む　炭化物・酸化鉄含む
4　灰黄褐色土　砂質
5　暗黄褐色土　粘土質　炭化物粒子含む
6　灰褐色土　粘質土
7　暗灰色土
8　黒褐色土

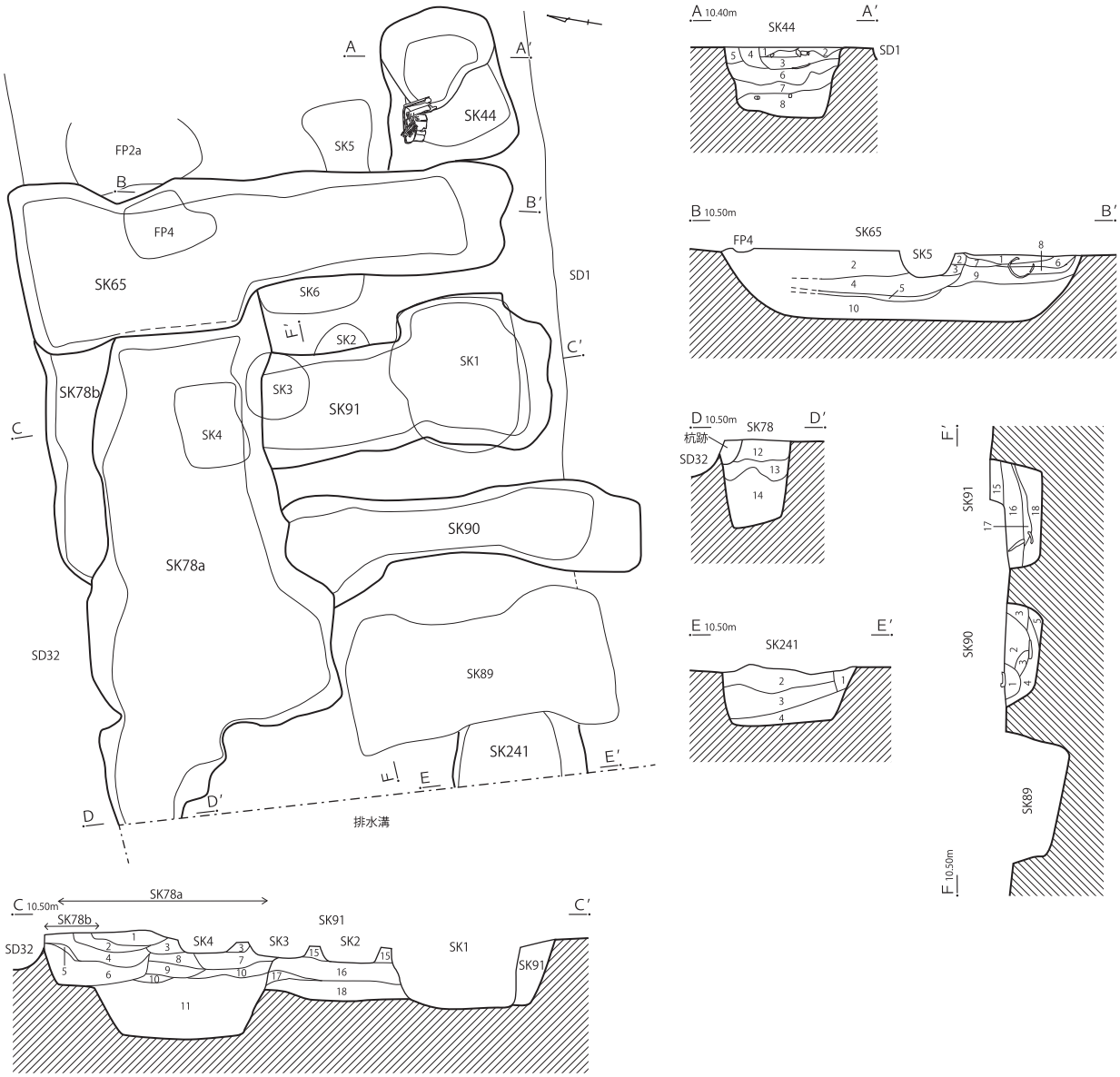
S K 48（1、2）・S K 49（3）
1　暗灰色土　木片少量
2　暗灰色土　炭化物少量
3　暗灰色土　黄褐色土・焼土・炭化物少量

S K 260
1　灰黄褐色土　炭化物粒子含む　しまり強
2　暗褐色土　粗粘　木片多量

0　2m　1:60

第 105 図　区画 AC 土壙（3）

ＳＫ44・65・78・90・91・241



ＳＫ44
1　焼土層
2　灰黄褐色土
3　暗灰黄褐色土
4　灰黄褐色土　砂質　炭化物・木質含む
5　灰黄褐色土　橙色土少量
6　暗黄褐色土
7　暗褐色土　焼土少量
8　灰褐色土　粗粒　木片極多量

ＳＫ65
1　灰黄褐色土
2　灰褐色土　鉄分・炭化物多量
3　暗黄褐色土　砂質
4　灰褐色土
5　炭化物層
6　褐色土　木質片多量
7　暗灰黄褐色土
8　黒褐色土　木質片微量
9　暗灰褐色土　木片極多量
10　黄褐色土

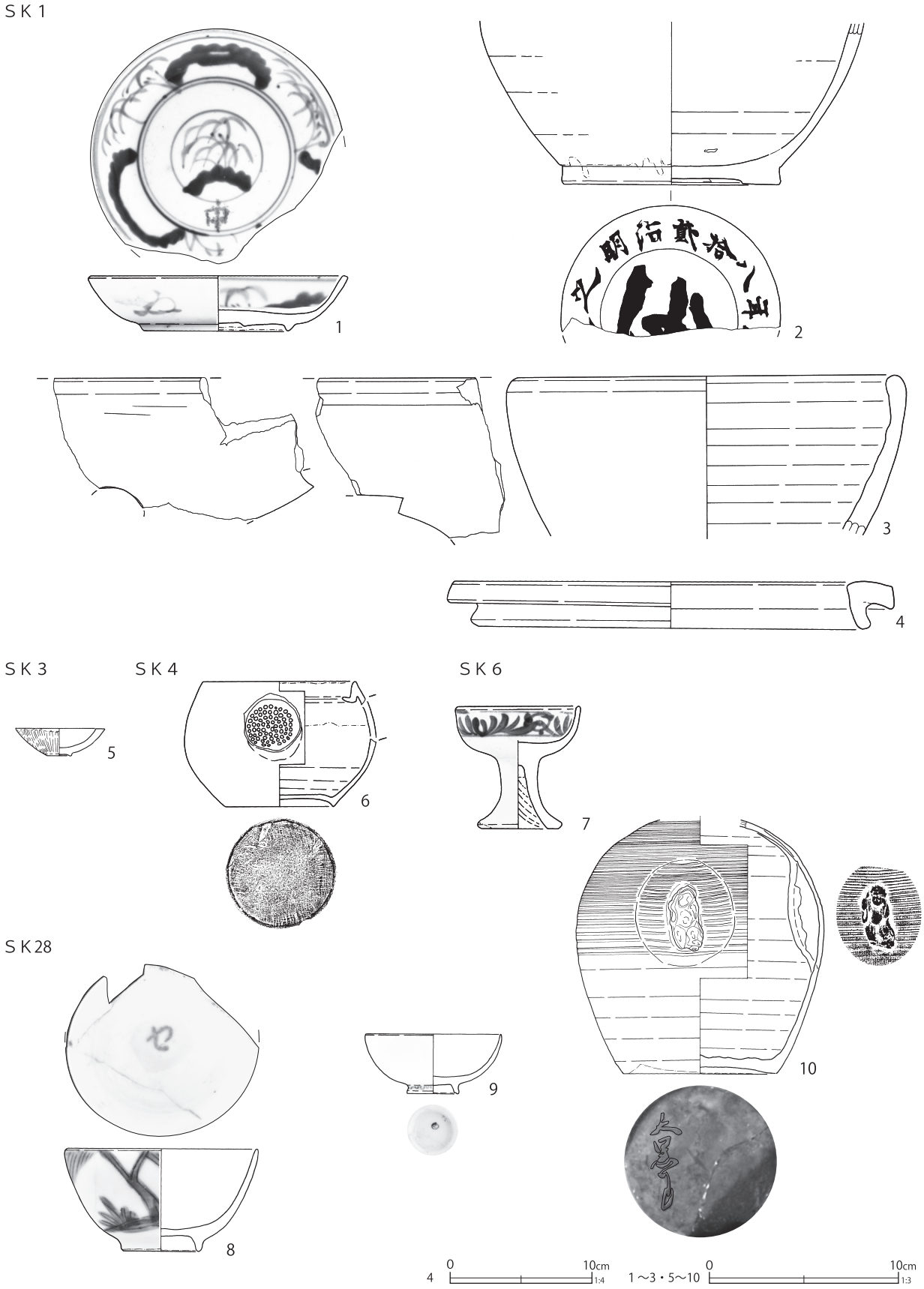
ＳＫ78（1～14）・ＳＫ91（15～18）
1　褐色土　炭化物・酸化鉄分粒子多量
2　黄褐色土　砂質
3　灰色土　砂質　酸化鉄分多量
4　黄色土　砂質
5　暗灰色土　砂質
6　黒褐色土　砂質
7　暗灰色土　橙色土微量
8　灰黄褐色土　黄褐色土多量
9　灰褐色土
10　灰黄褐色土　砂質
11　黒褐色土　木片極多量
12　灰褐色土　橙色土含む
13　灰褐色土　橙色土混合土　酸化鉄多量　板材微量
14　黒褐色土　木片極多量
15　灰褐色土　炭化物・鉄分（橙色土）粒子含む　しまり強
16　灰黄褐色土　砂質
17　黒褐色土　灰層
18　灰褐色土　炭化物・暗紫色土含む

ＳＫ90
1　灰褐色土　粘土質　炭化物微量
2　灰褐色土　炭化物・橙色土含む　しまり強
3　灰褐色土　砂質　橙色土多量
4　黒褐色土
5　灰色土　シルト質

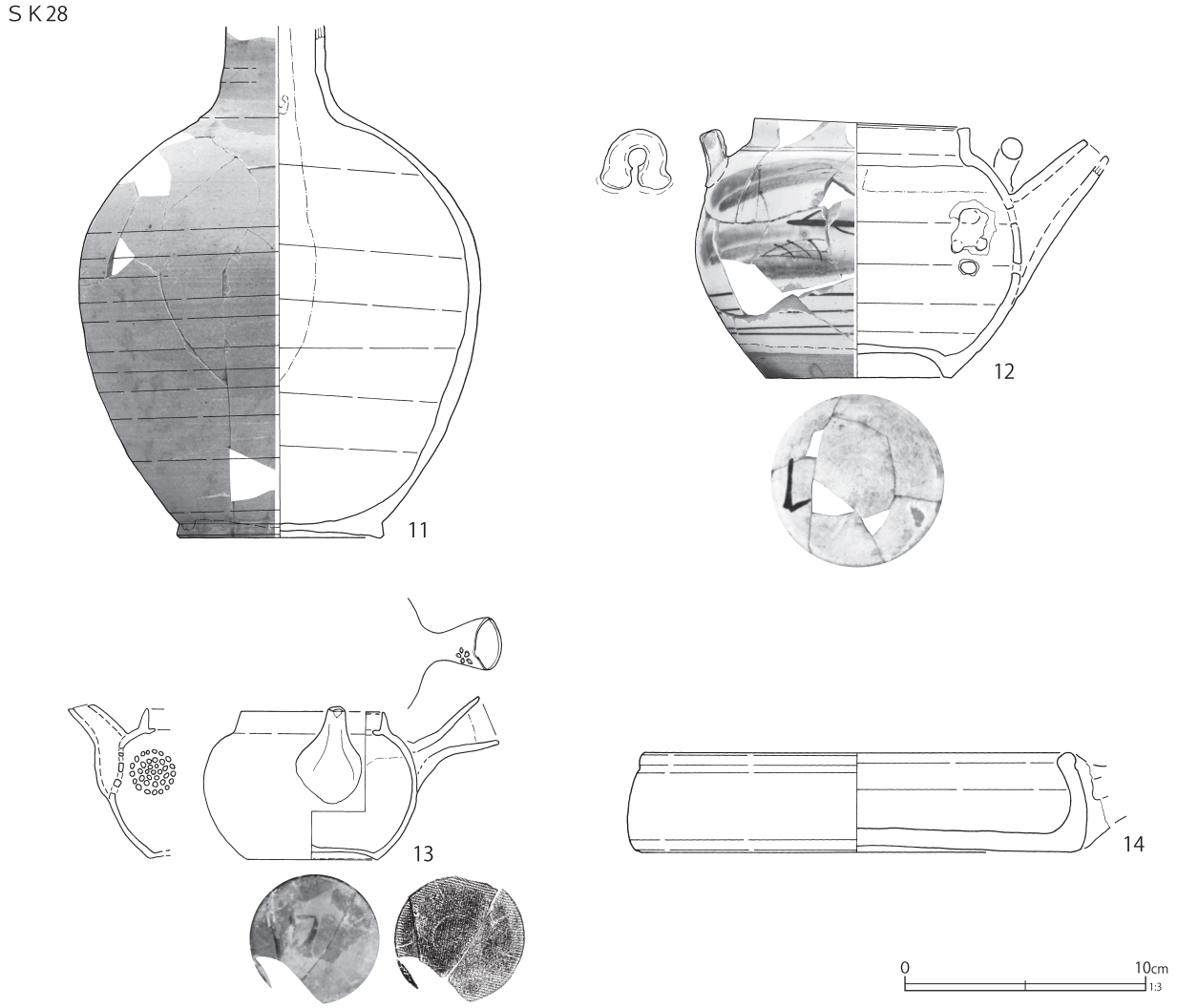
ＳＫ241
1　暗黄褐色土　炭化物含む
2　灰褐色土　木質少量
3　暗褐色土　木質多量
4　暗灰褐色土　砂質　木質多量

0　2m
1:60

第106図　区画AC土壙（4）



第 107 図　区画 AC 土壙出土遺物（１）



第 108 図　区画 AC 土壙出土遺物（２）

土遺物を図示した。

１は瀬戸美濃系磁器の広東碗である。高台を打ち欠いており、二次利用が考えられる。被熱している。３は瀬戸美濃系磁器の端反形碗である。高台内は深く削り込む。４は瀬戸美濃系磁器の丸碗である。内面に陰刻文染付がみられる。６は瀬戸美濃系磁器の湯呑形小碗である。高台畳付は幅広である。重複関係がないが、近接する第 320 号土壙と接合する。

９は瀬戸美濃系磁器の水滴である。型成形で、上面に陽刻文染付が施される。内底面、下面に布目痕がみられる。側面は１面が露胎である。

10 は産地不詳陶器の白土染付土瓶である。被熱し、外面下位に煤が付着する。

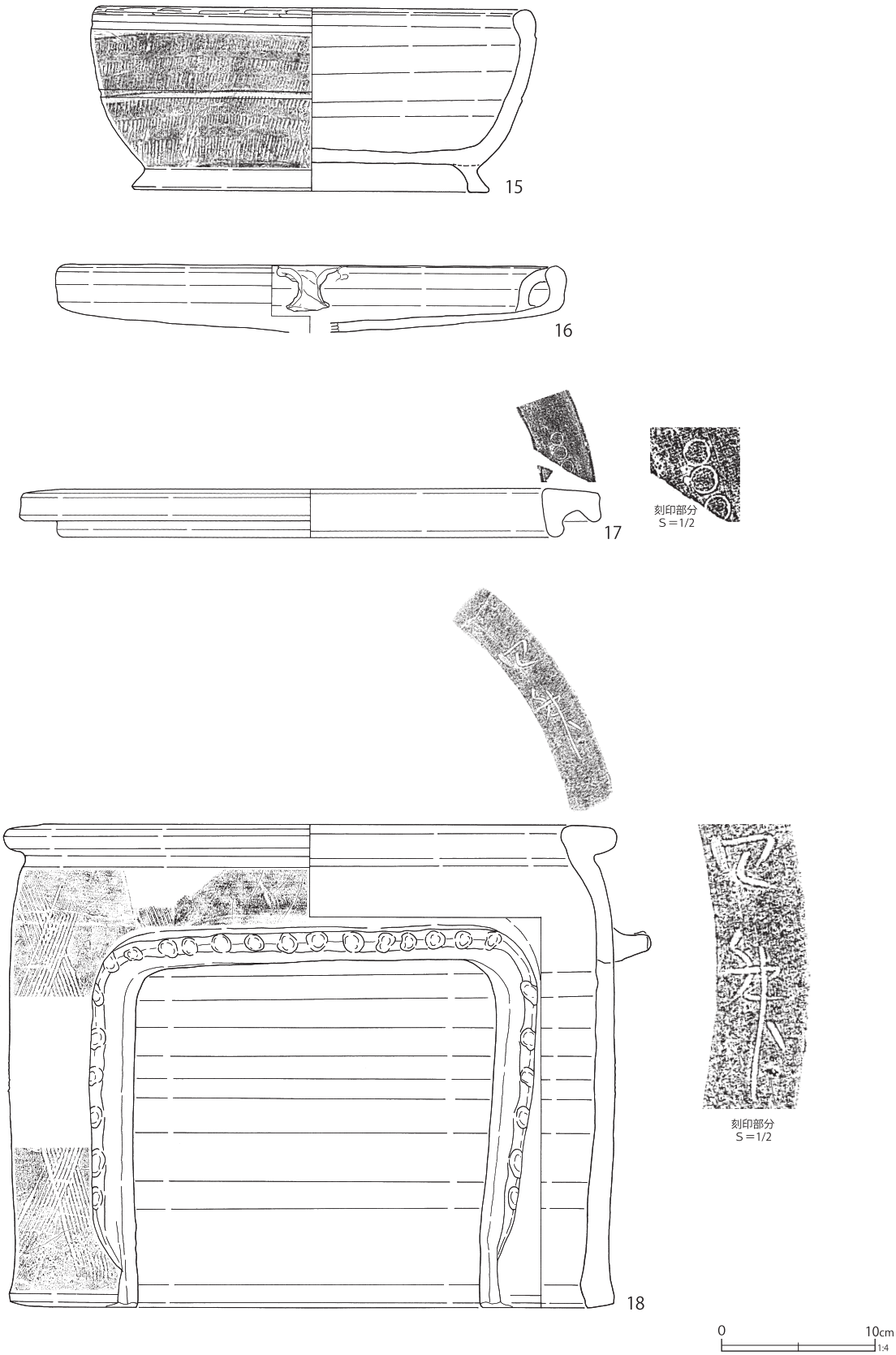
11 は瓦質土器の十能である。下面は無調整のシワ状痕が残り、把手は全面にミガキ調整を施す筒形である。表面は燻により黒色である。栗橋宿でみられる十能では極めて稀な製品である。

12 は瓦質土器の脚付き火鉢である。底部は無調整の砂目底である。やや酸化焔焼成で表面は橙色気味である。口縁部は敲打痕と摩耗がみられる。輪高台状の脚部は低く、焼成前穿孔がみられる。

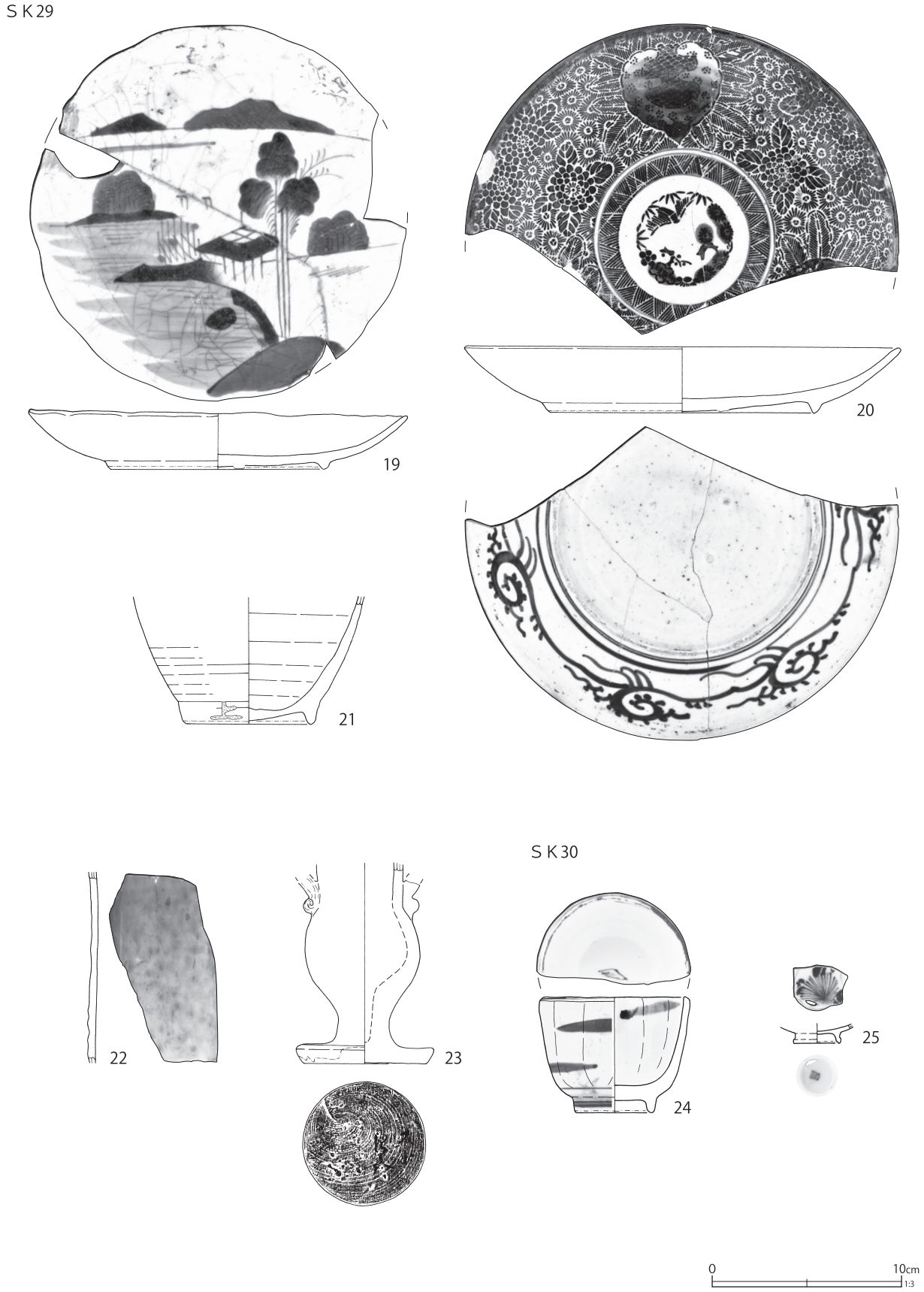
13 は瓦質土器の焜炉である。中筒は欠失し、五徳が一部遺存する。底部に圧痕が残り、外面上端部と口縁部にミガキ調整が行われている。体部には亀甲文状のスタンプが施文された後ナデ消されている。

14 は焜炉等と組み合わせで使用されると考え

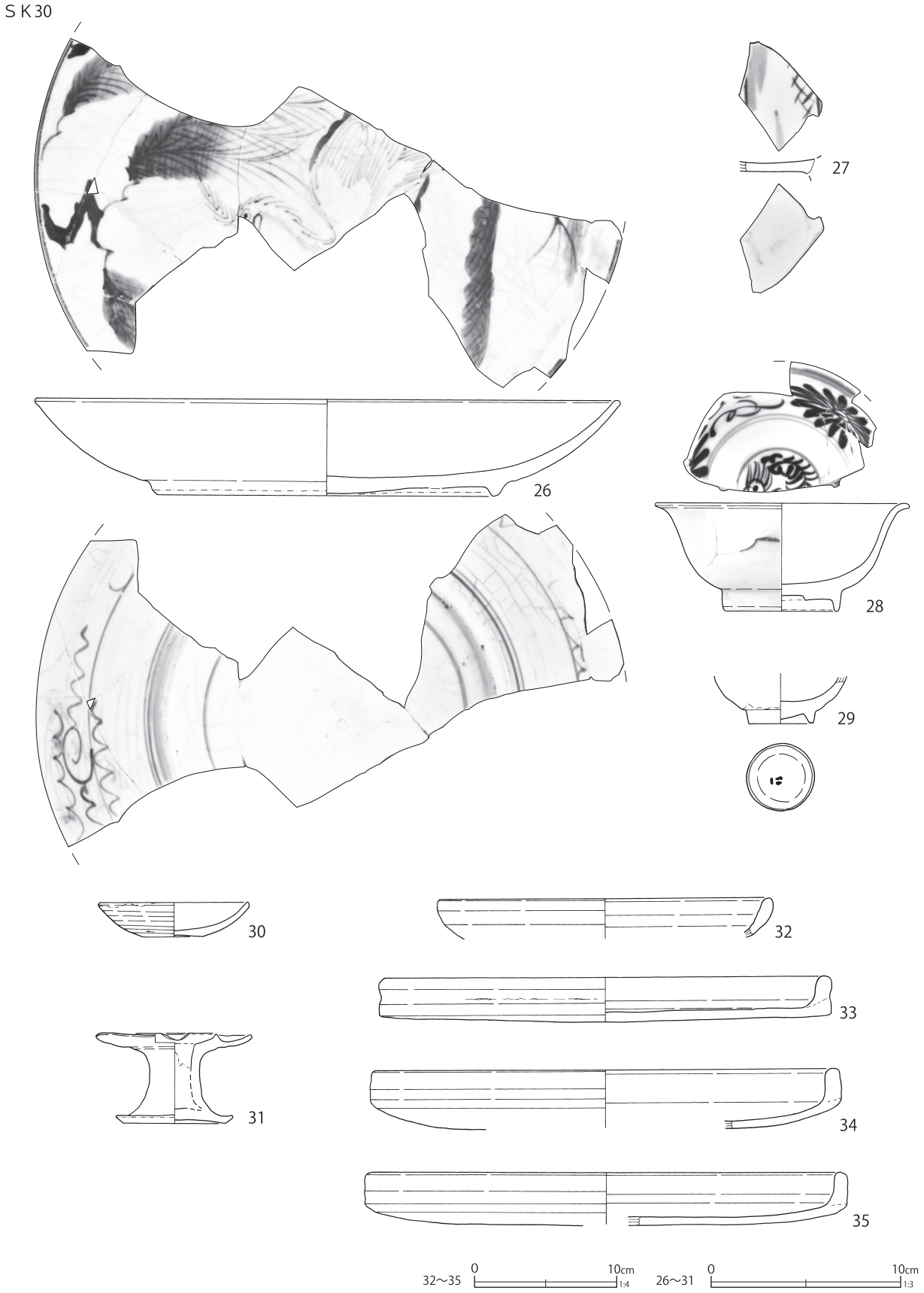
ＳＫ28



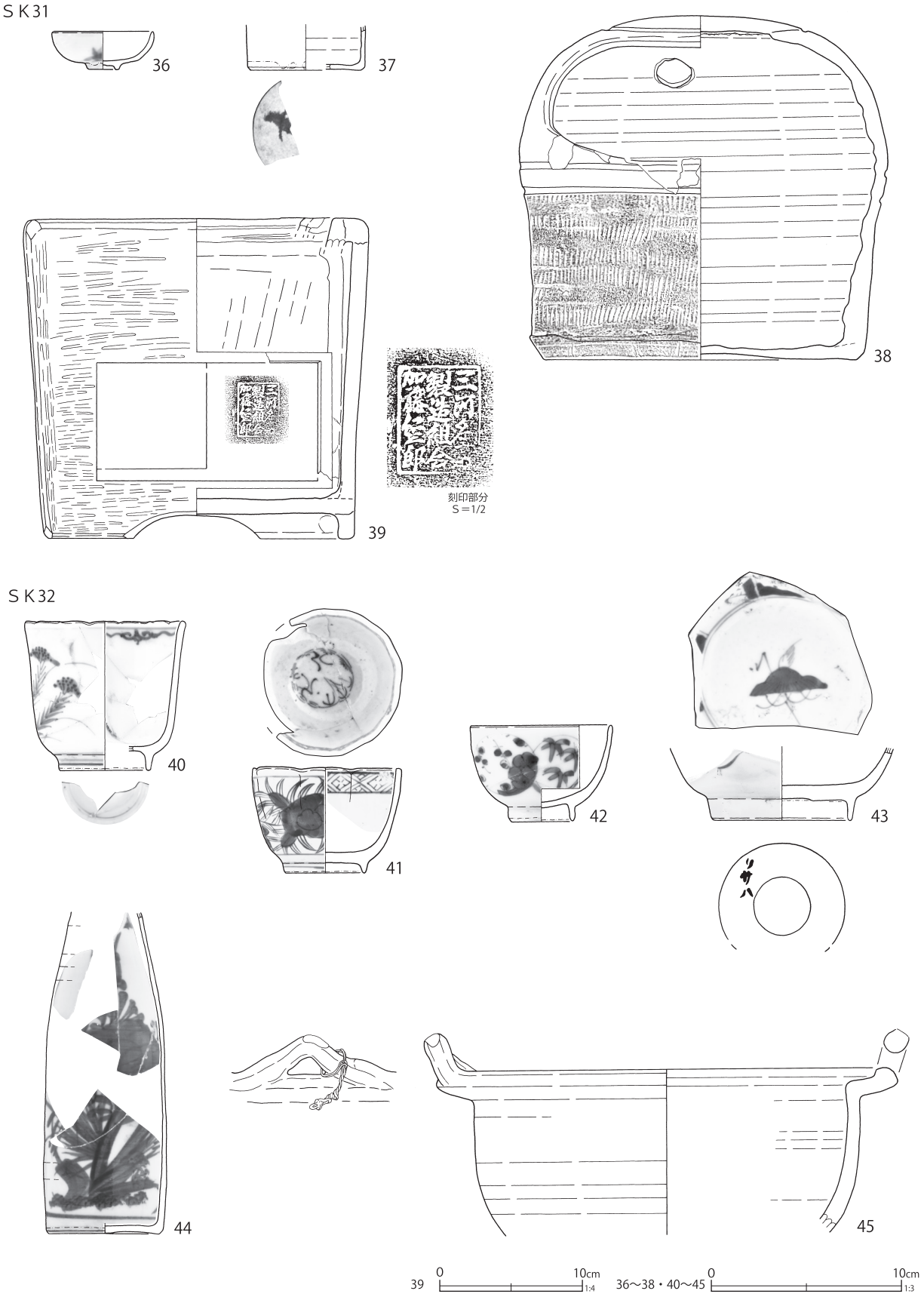
第 109 図　区画 AC 土壙出土遺物（３）



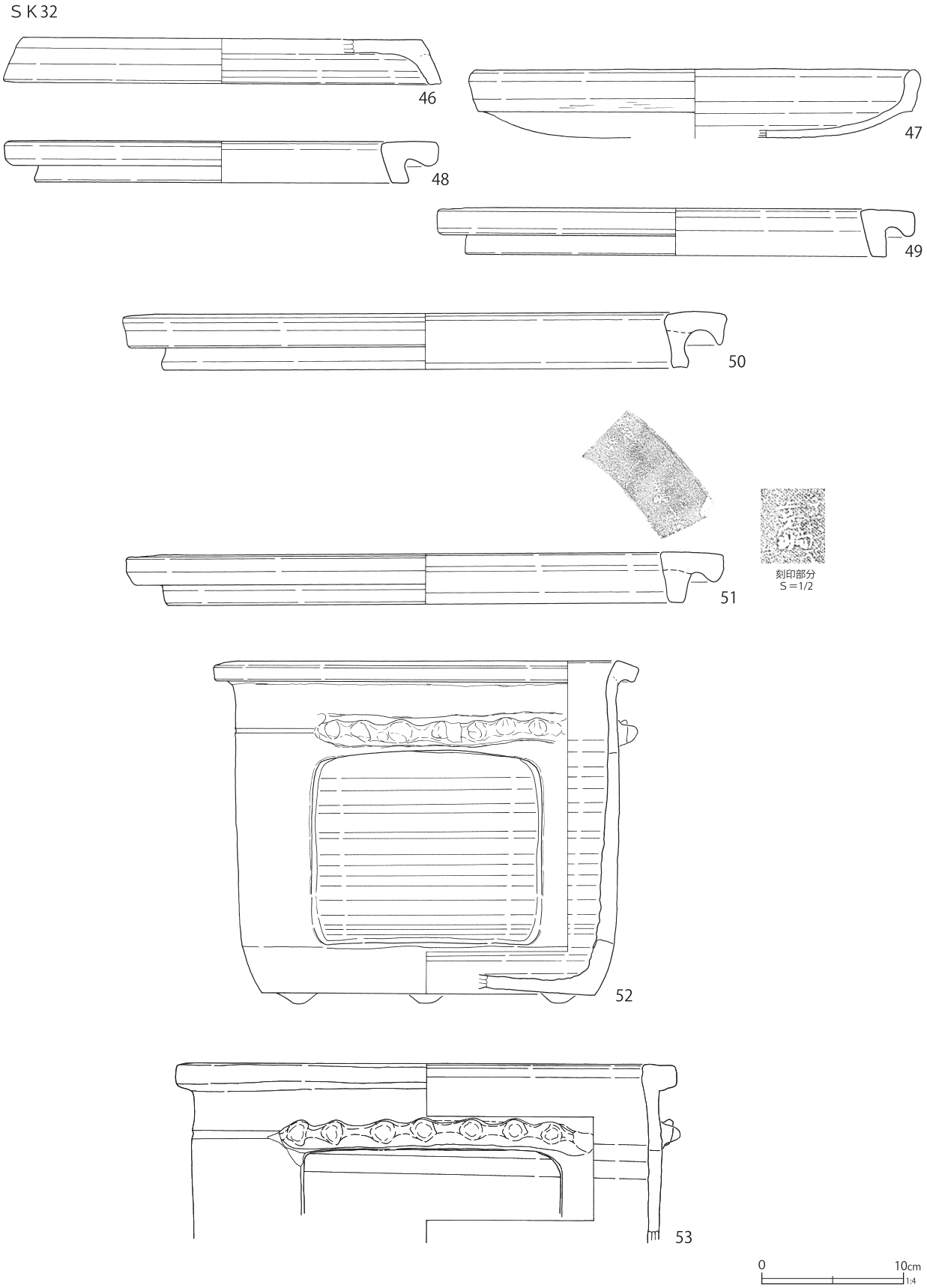
第 110 図　区画 AC 土壙出土遺物（４）



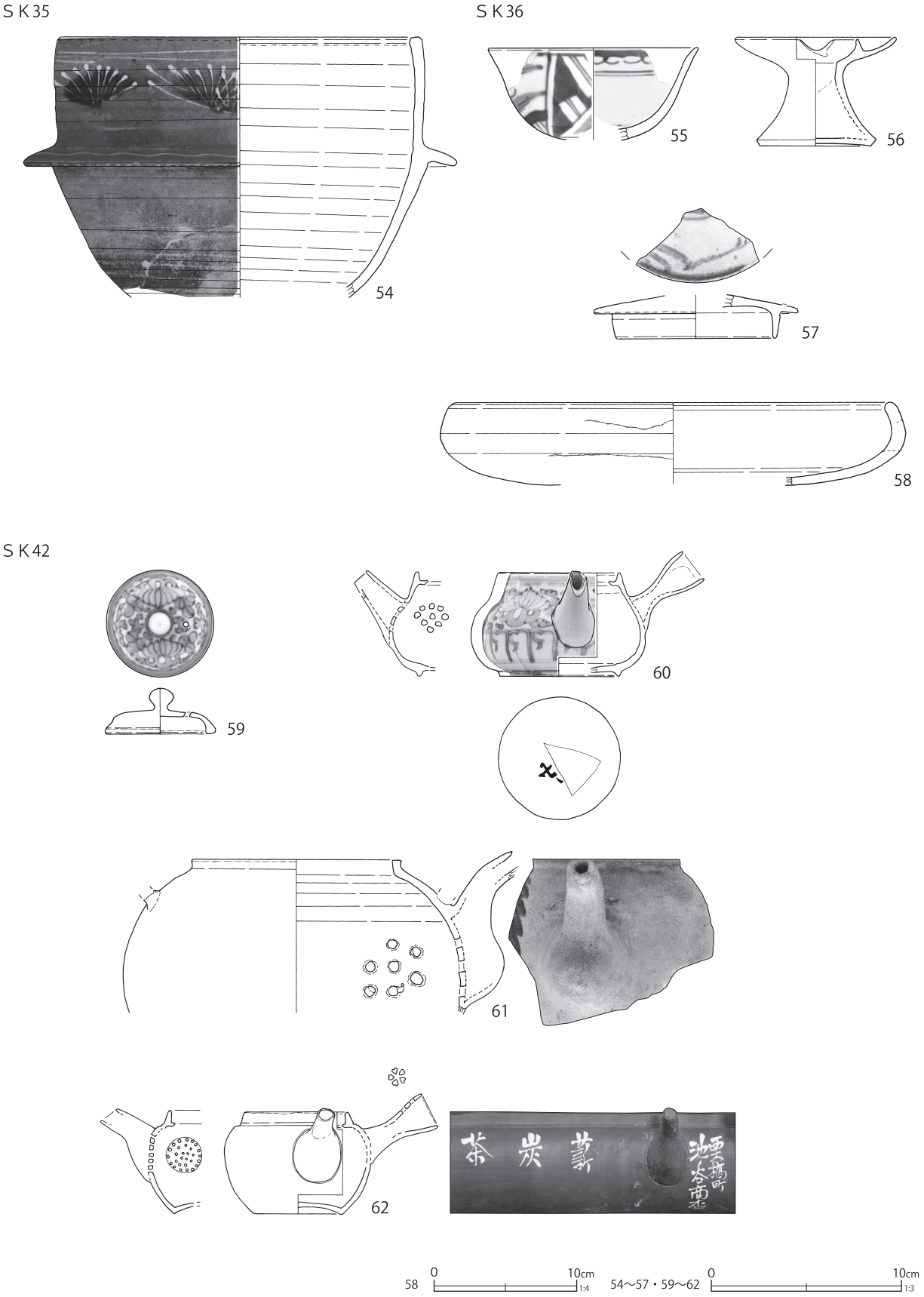
第 111 図　区画 AC 土壙出土遺物（５）



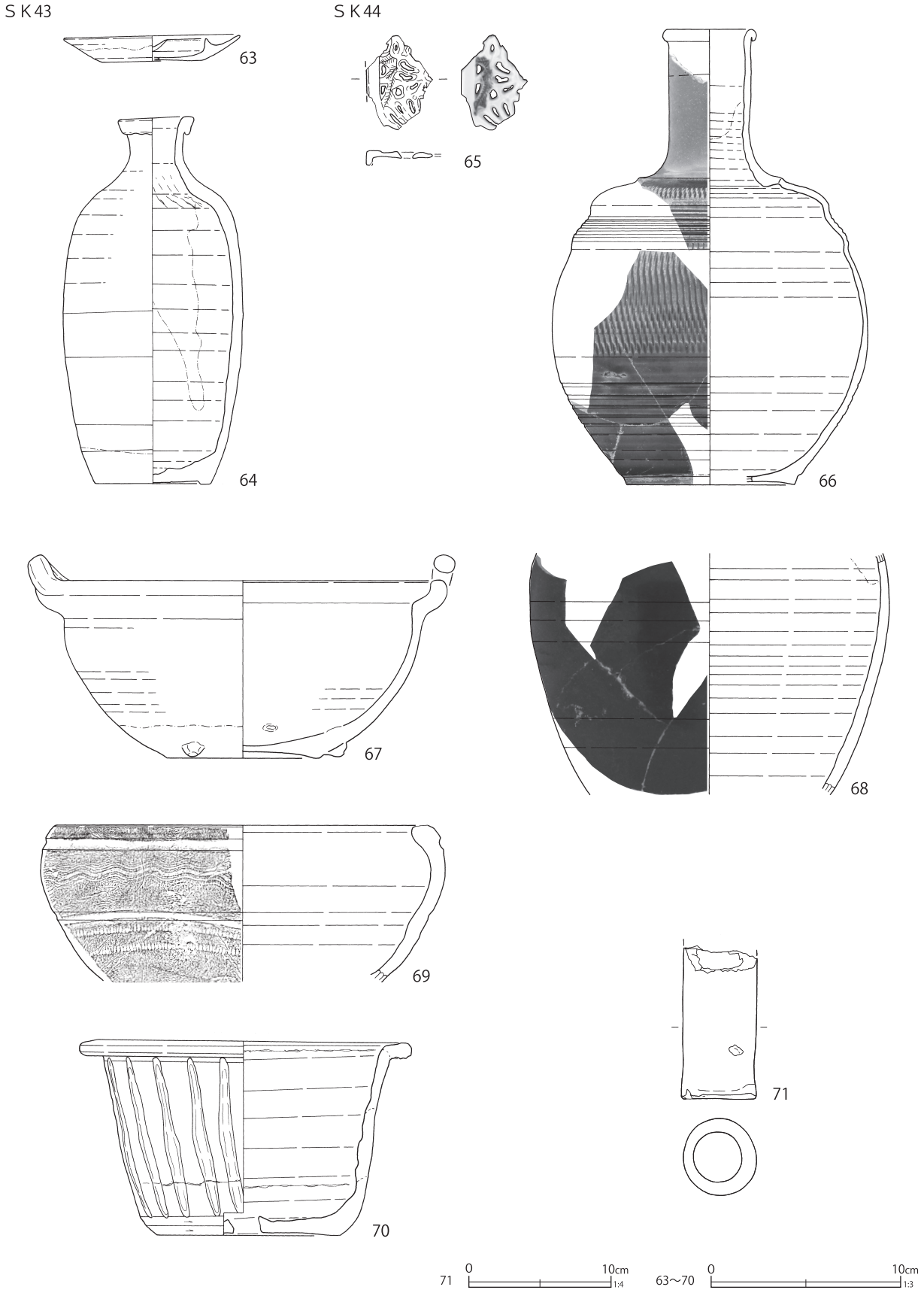
第 112 図　区画 AC 土壙出土遺物（6）



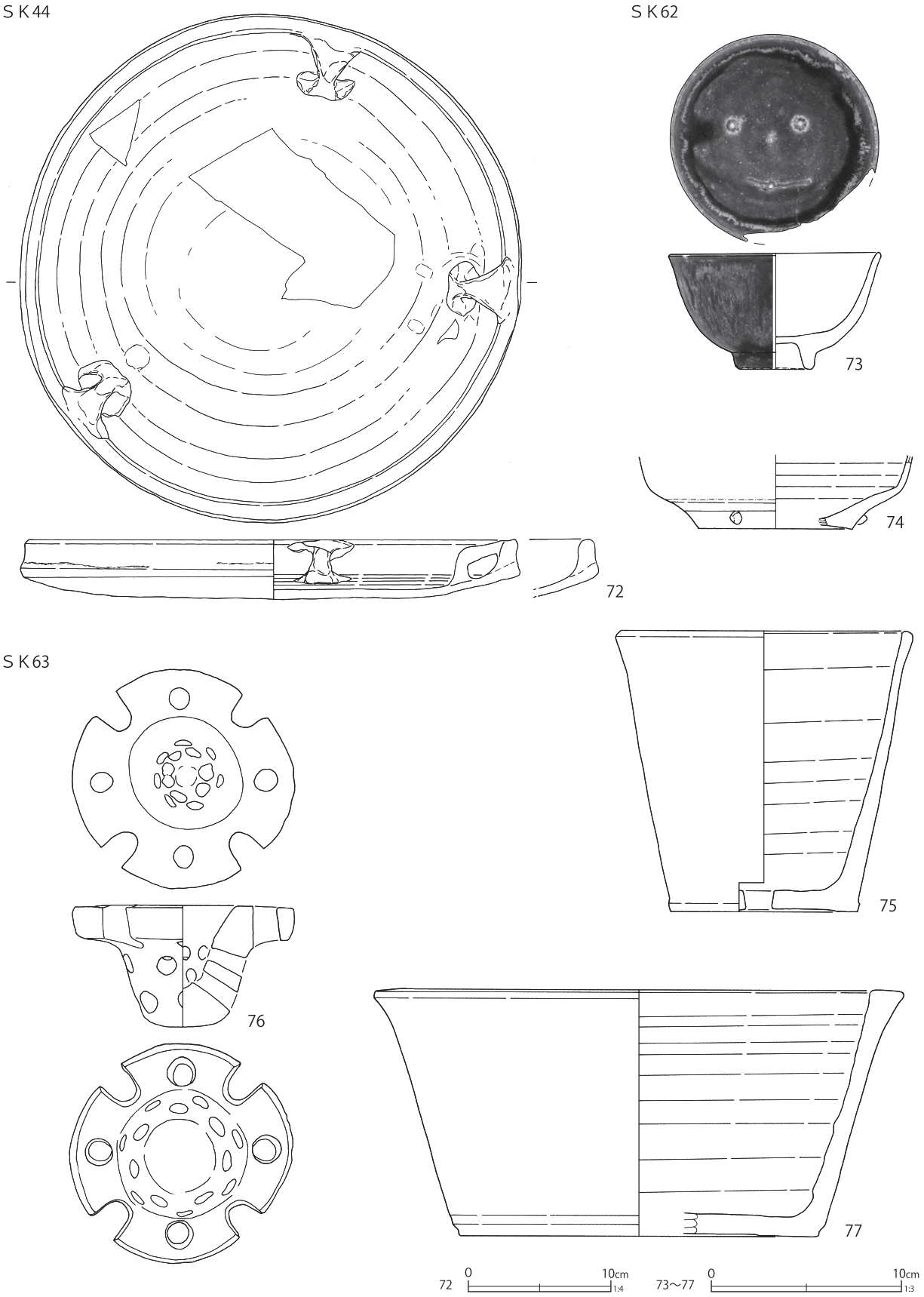
第 113 図　区画 AC 土壙出土遺物（７）



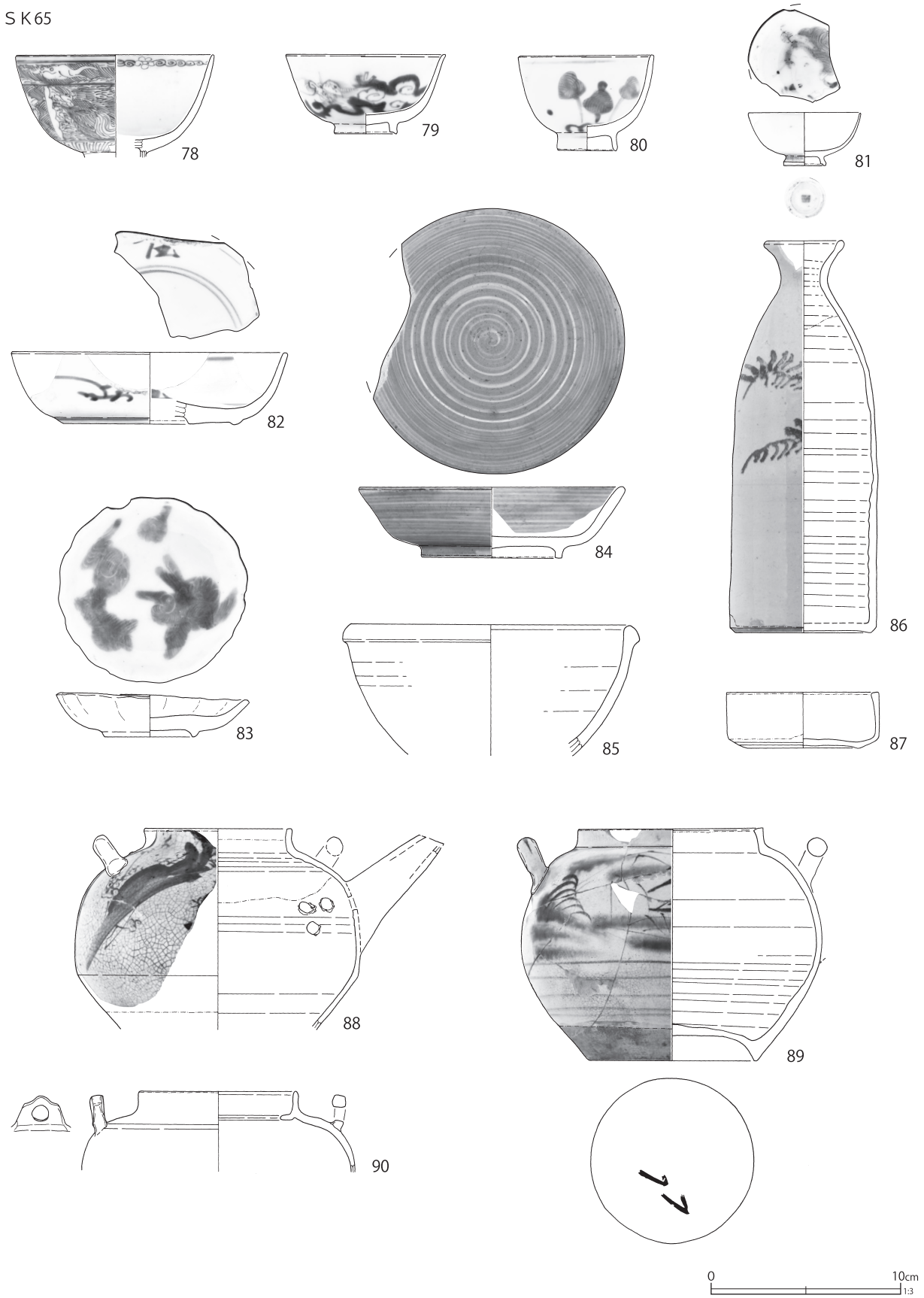
第 114 図　区画 AC 土壙出土遺物（８）



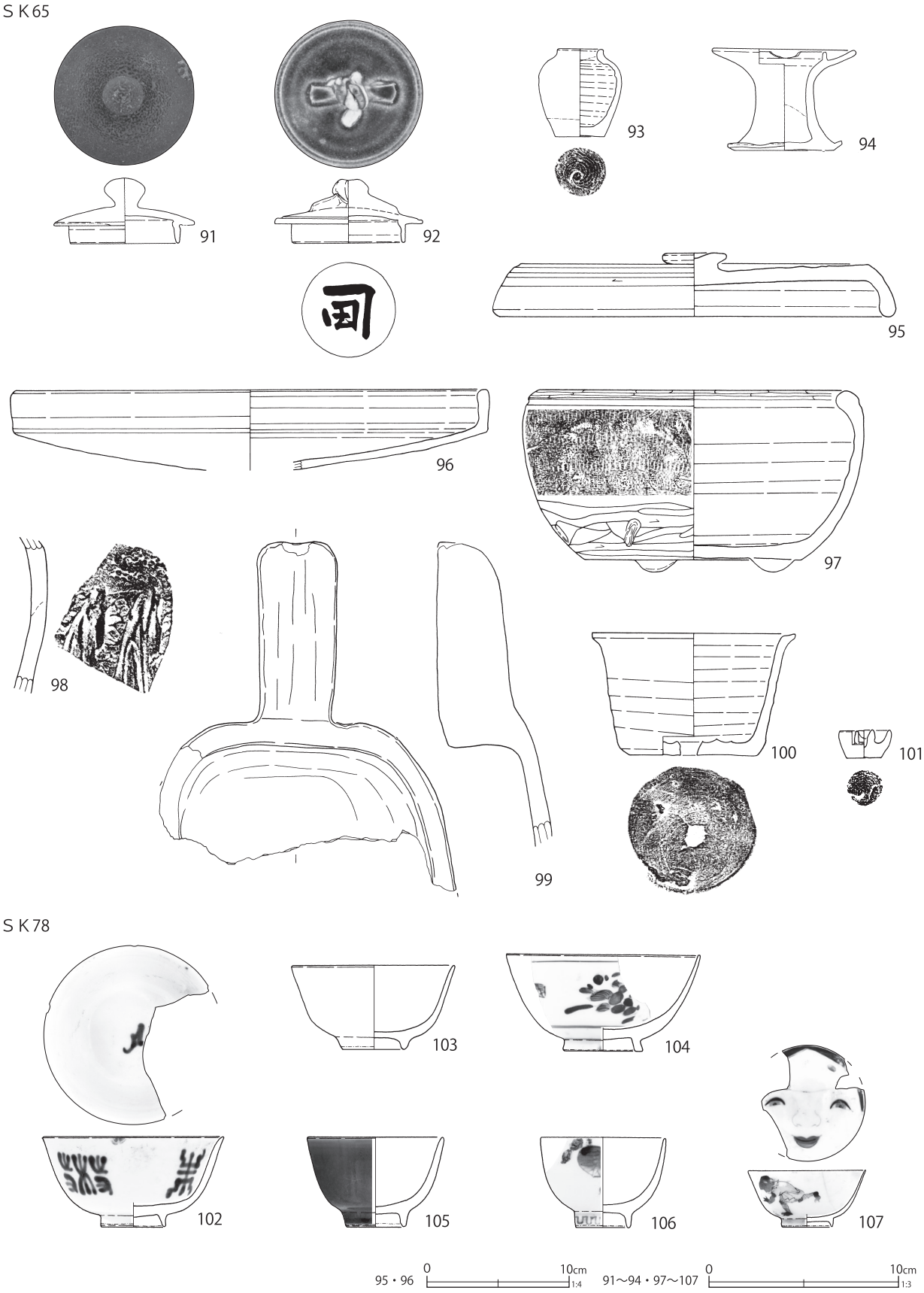
第 115 図　区画 AC 土壙出土遺物（９）



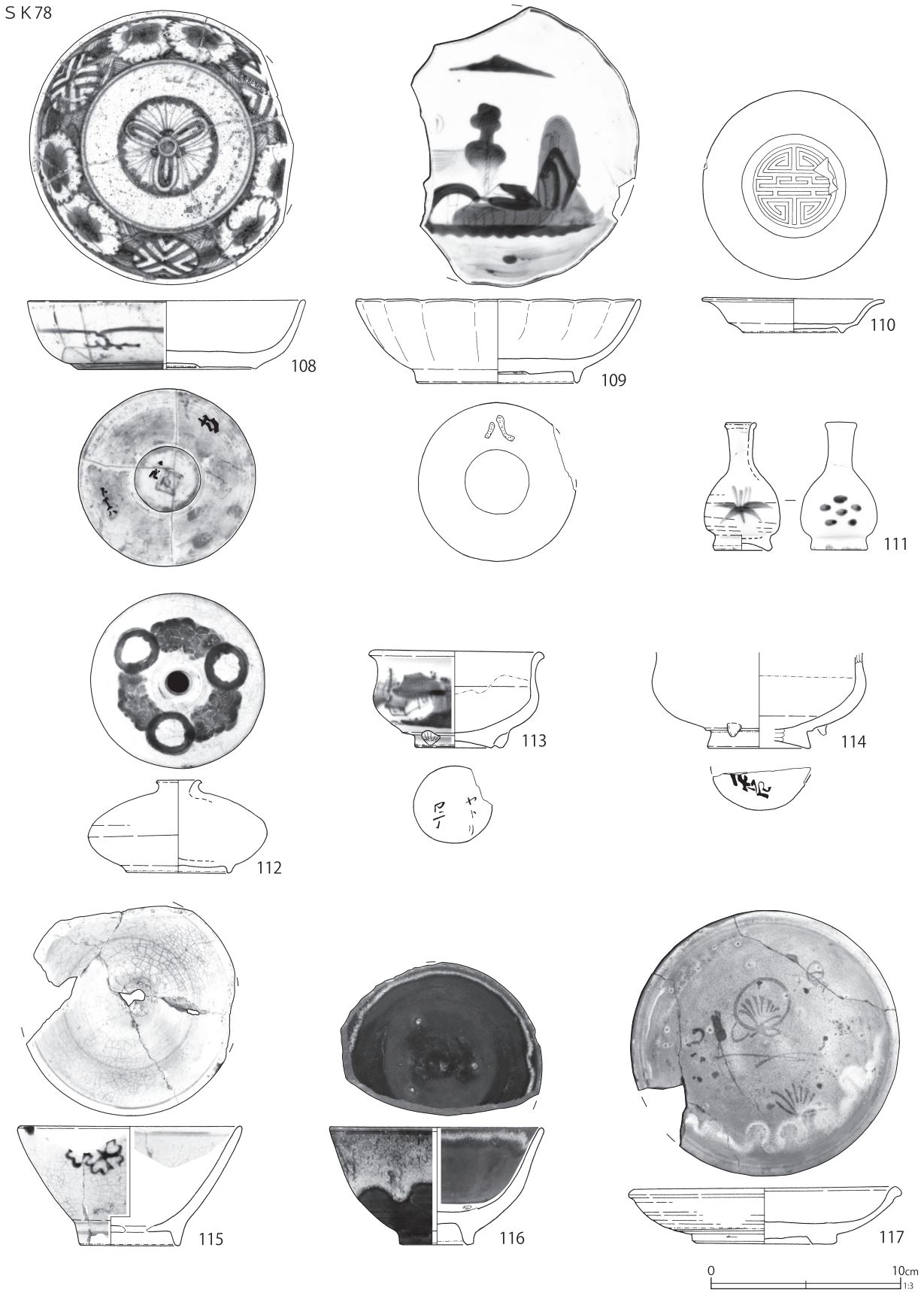
第 116 図　区画 AC 土壙出土遺物（10）



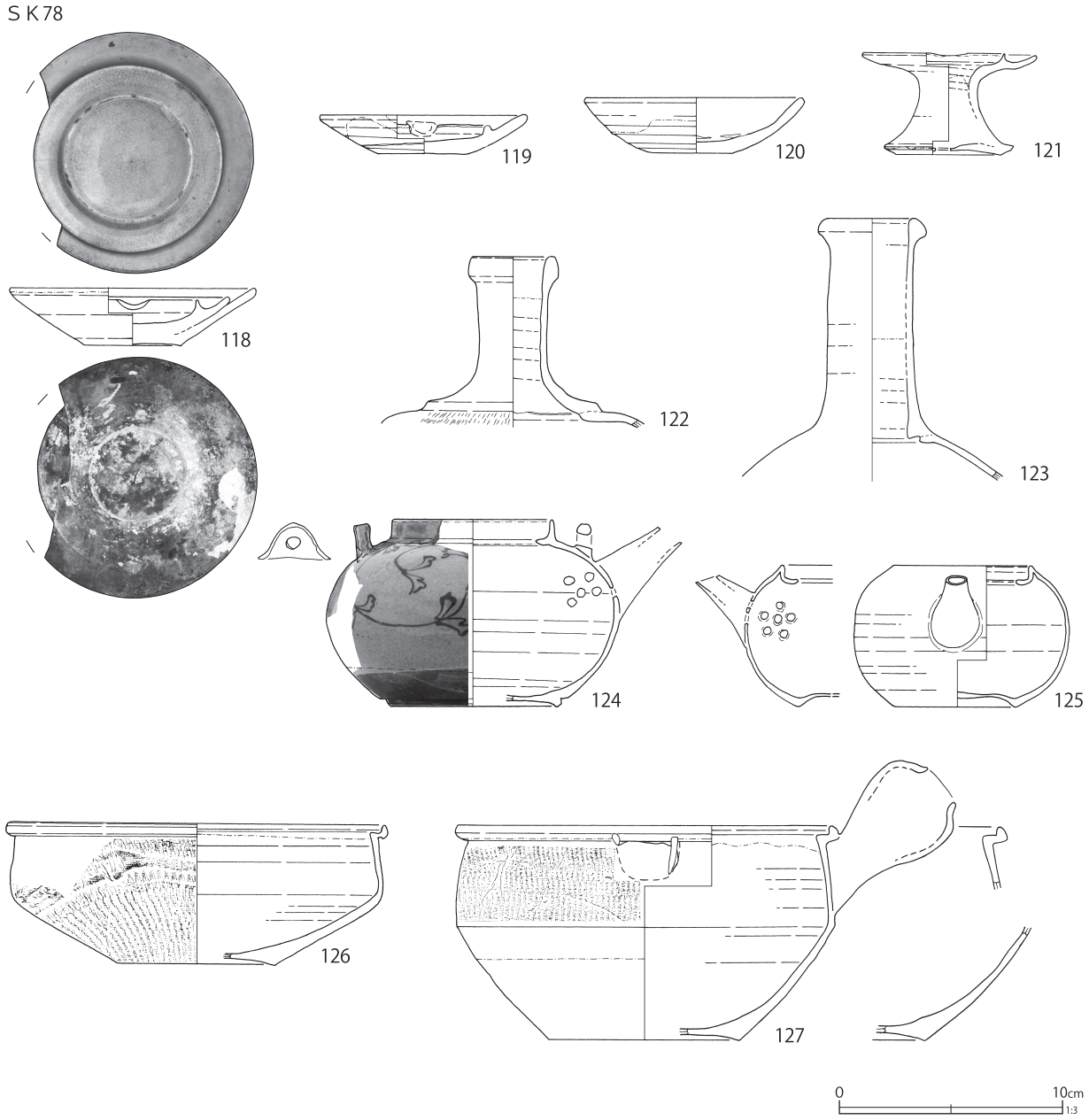
第 117 図　区画 AC 土壙出土遺物（11）



第 118 図　区画 AC 土壙出土遺物（12）



第 119 図　区画 AC 土壙出土遺物（13 ）



第 120 図　区画 AC 土壙出土遺物（14）

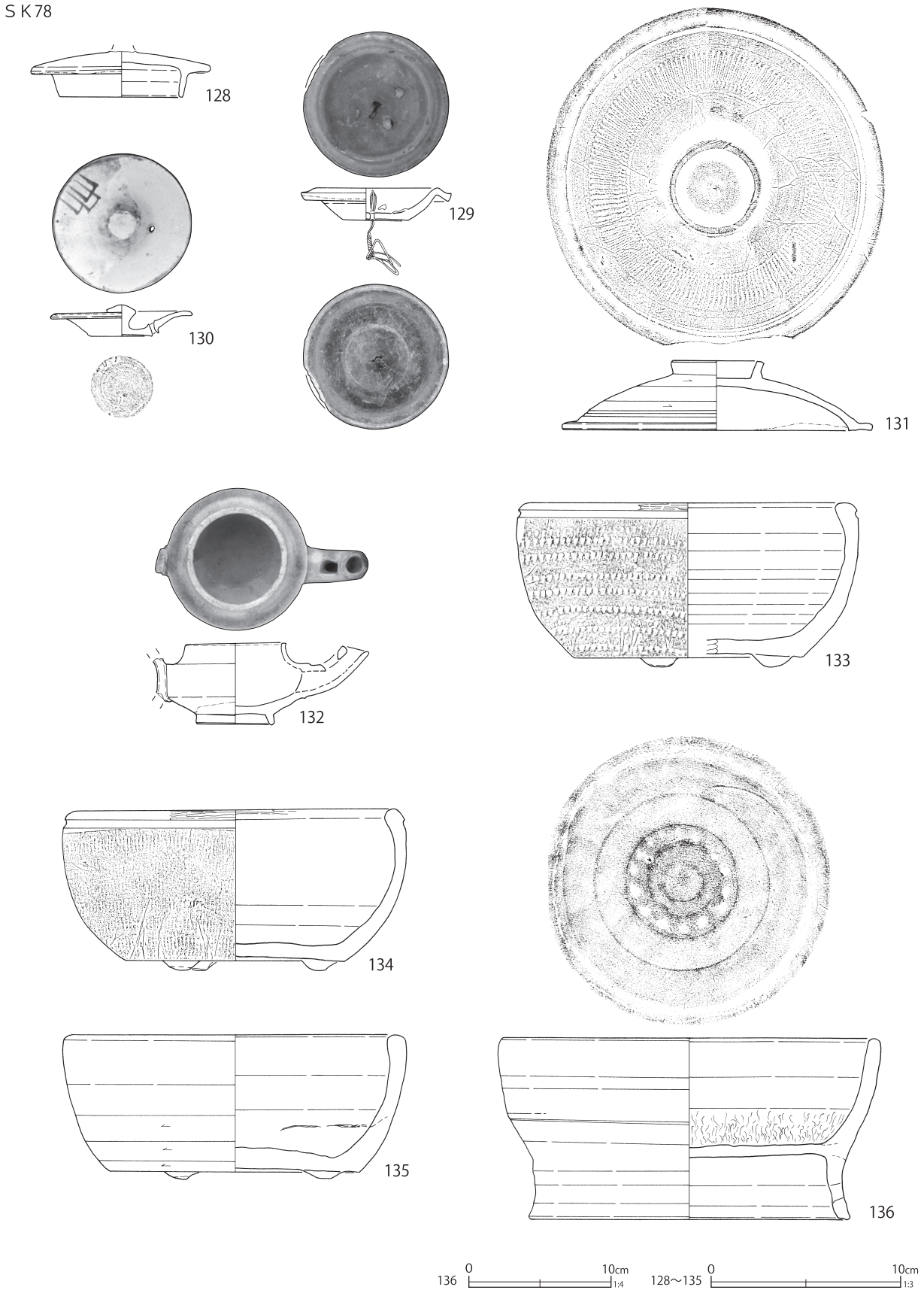
られる瓦質土器の風口である。板作り成形で、下面は無調整で砂目が遺存する。ほぼ酸化焔焼成で表面は橙色を呈する。栗橋宿では江戸在地系が多く、角閃石を含む在地産は稀である。

15 は土師質土器の丸底焙烙である。底部は無調整のシワ状痕が残り、丸みは弱く、扁平である。内耳は１箇所遺存する。

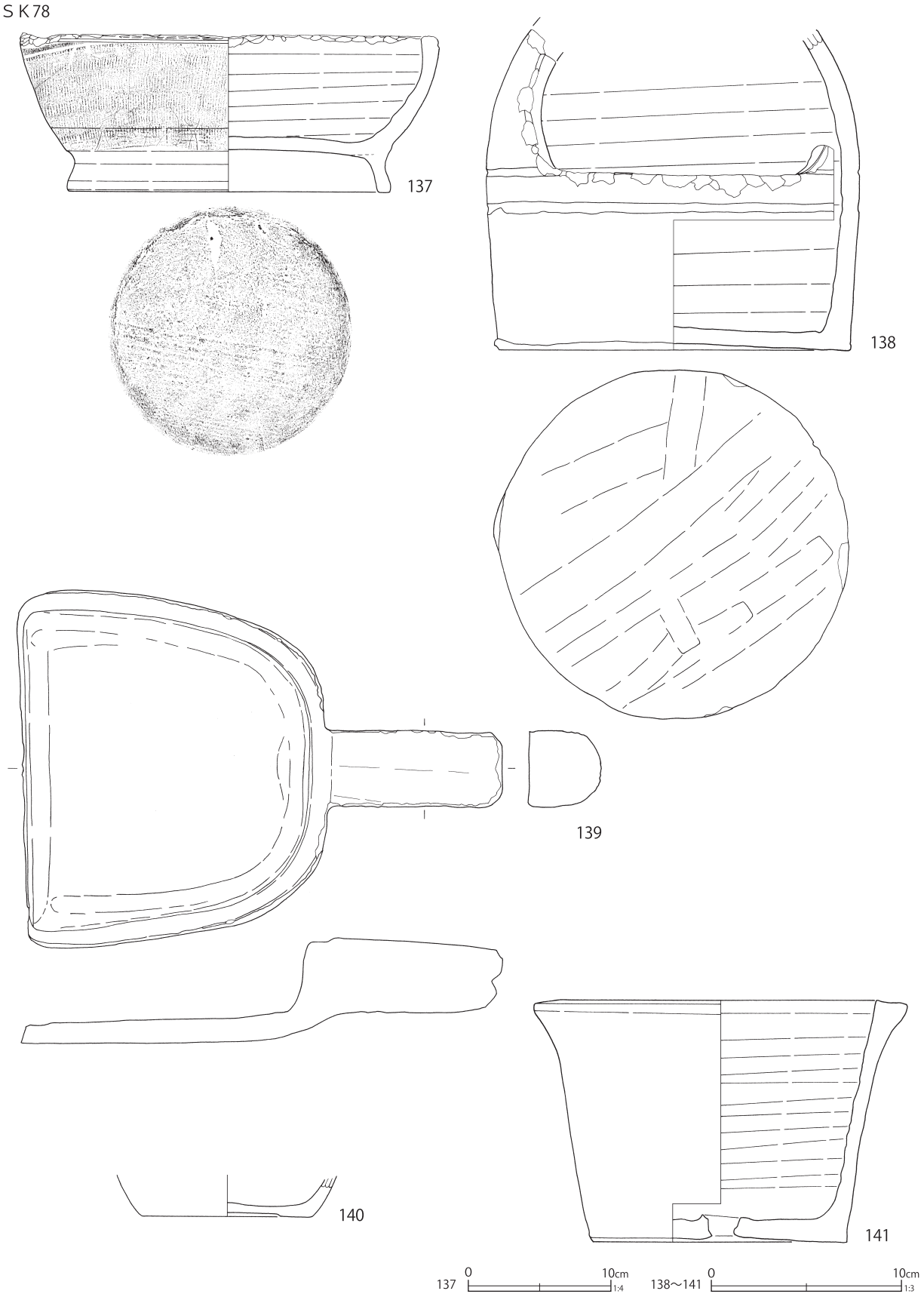
16 は土器質胎土で、黒釉を施釉する陶器土瓶の底部である。吉見焼と考えられる。外面から底部全面を黒釉で施釉する。

第 65 号土壙（第 106・117・118・127・128・130・131・134・136 図）

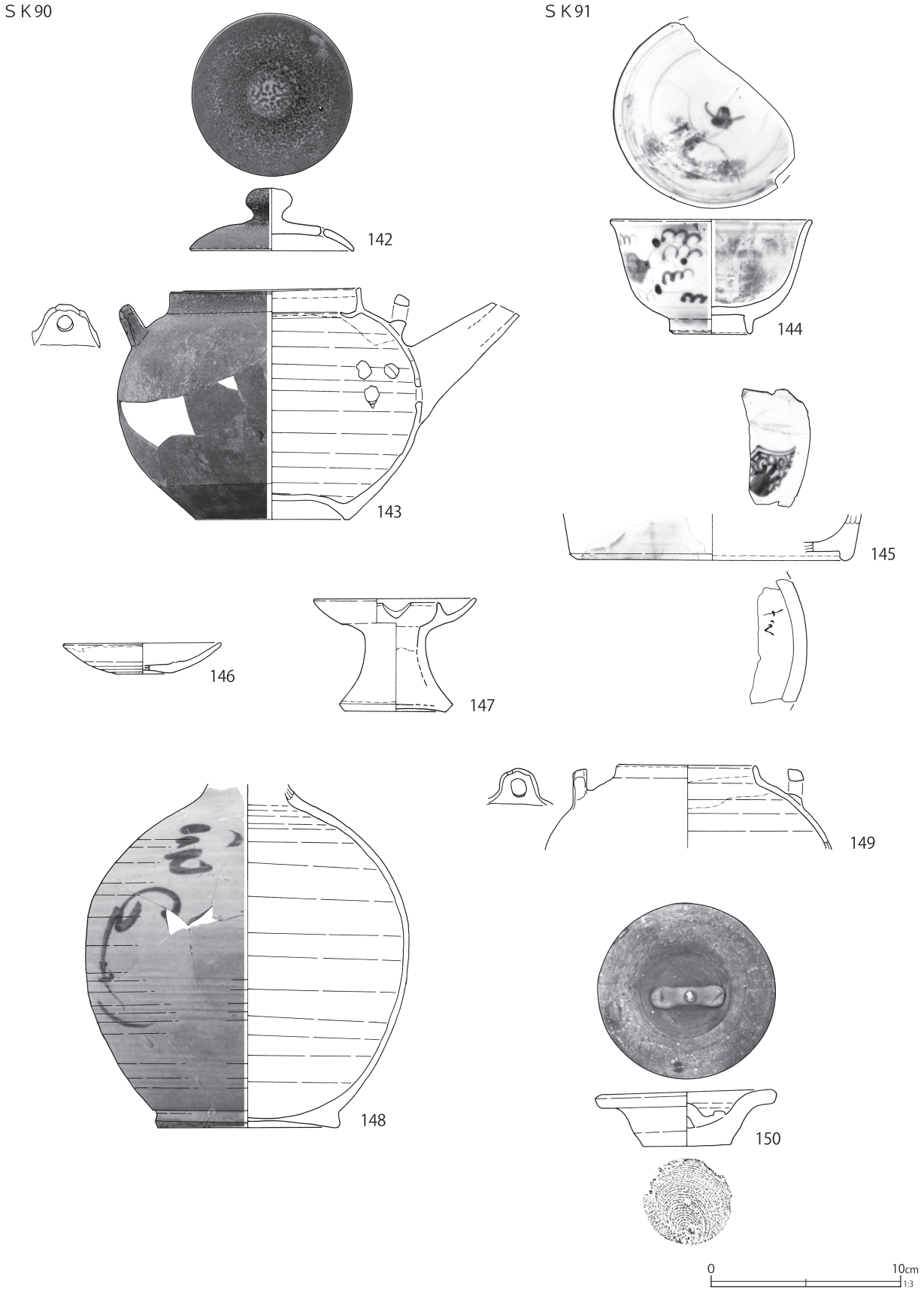
Ｆ７－Ｃ６　グリッドに位置する。第 32 号溝跡、第４号焼土遺構、第５・６号土壙より古く、第２号焼土遺構 a、第 44・78 号土壙と重複する。平面形は不整隅丸長方形で、長軸 4.35 m、短軸 1.5 m、深さ 0.6 mを測る。長軸方位はN－18°－Wを指す。



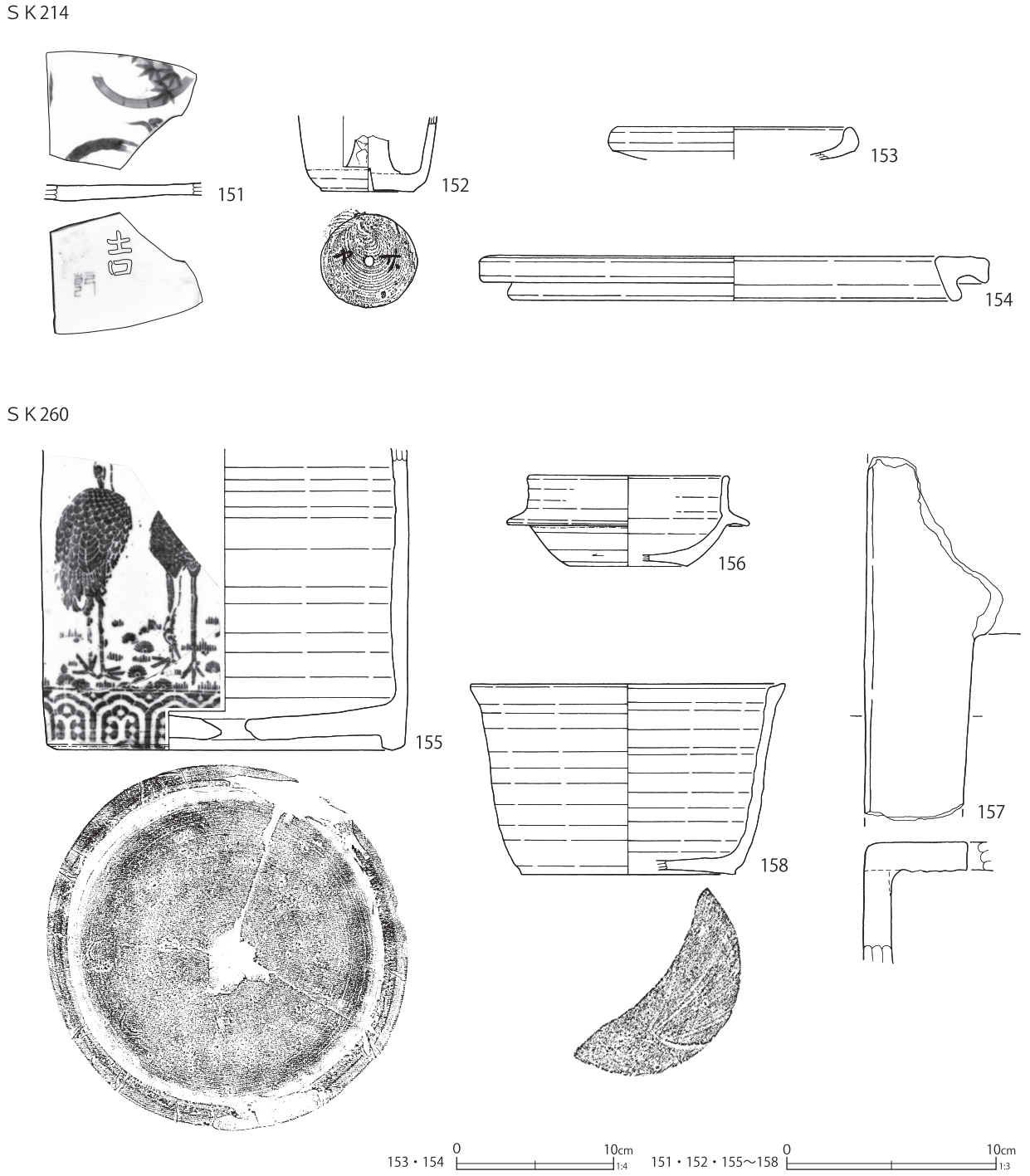
第 121 図　区画 AC 土壙出土遺物（15）



第 122 図　区画 AC 土壙出土遺物（16）



第 123 図　区画 AC 土壙出土遺物（17）

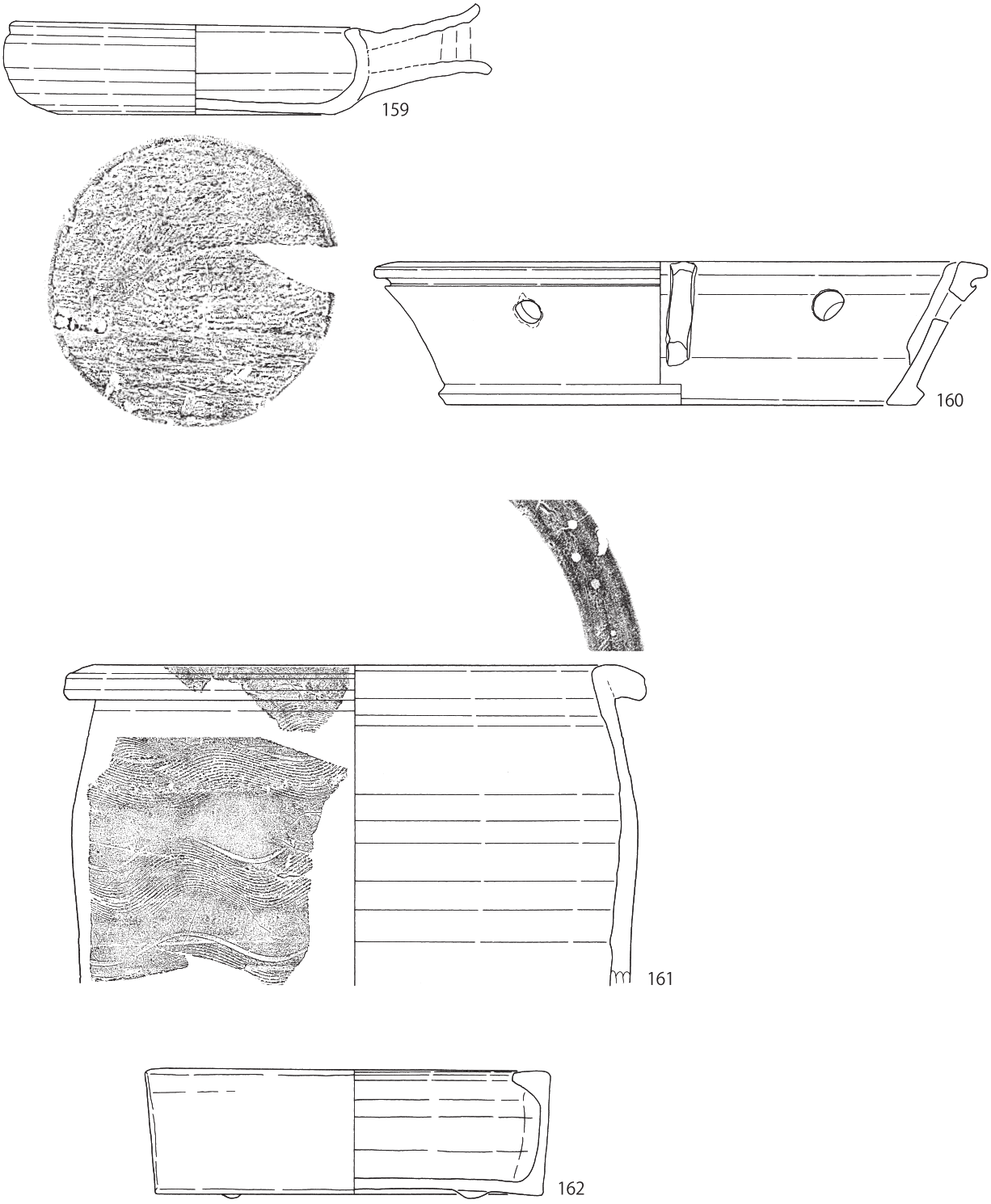


第 124 図　区画 AC 土壙出土遺物（18）

覆土は木質を多く含み、中層と上層に炭化物が含まれる。出土遺物と遺構の平面形、覆土の堆積状況から２時期の重複した長方形土壙と推定される。第２～５層は新しい土壙で、遺構北側に張り出している部分に対応する。第６～ 10 層は下層の土壙と推定される。

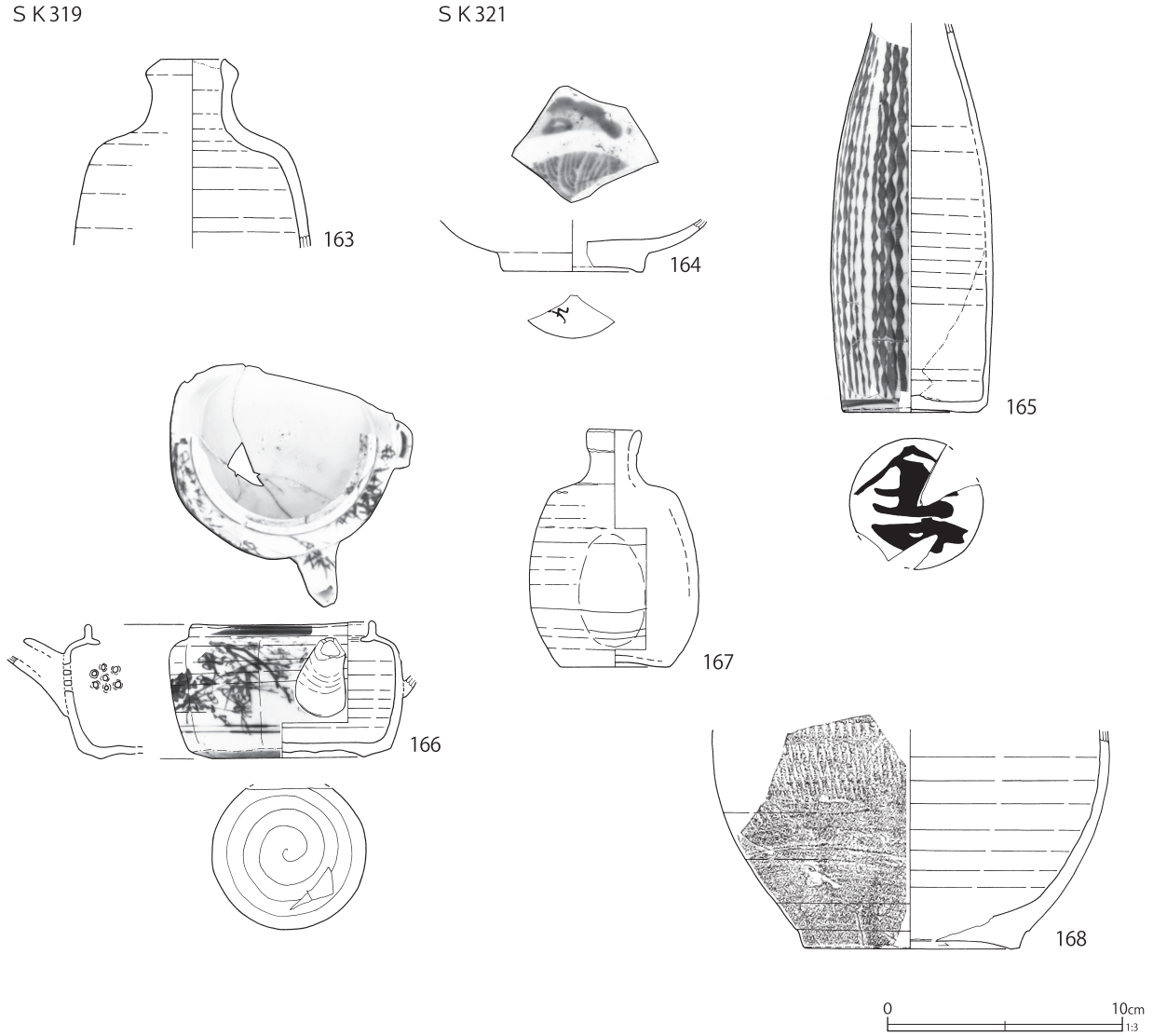
出土遺物は 19 世紀中葉と後葉の陶磁器が混在している。酸化コバルト染付磁器が極めて少量で、型紙摺絵染付皿・碗が残存率 50％を越えて出土しているほか、瀬戸美濃系磁器の染付小碗（第 117 図 80）を主体としていることから近代陶磁器は混入である可能性が高い。推定廃絶期は 19

SK260



161・162 0 10cm 1:4　159・160 0 10cm 1:3

第125図　区画AC土壙出土遺物（19）



第 126 図　区画 AC 土壙出土遺物（20）

世紀中・後葉である。

第117･118図78～101に陶磁器類､第127図４・５・第128図７・８に土製品、第130図９に瓦、第131図１～11に木製品、第134図９に鉄製品、第136図５に石製品を図示した。

第117図82は肥前系磁器の五寸皿である。高台高が低い蛇ノ目凹形高台で、内面に染付文字「屋」がみえる。同様の皿が第６号建物跡（第34図２）にみられ､染付銘「吉田屋」と推定される。区画AFに位置する「旅籠屋 / 太左衛門」が所有していたものと考えられる。

第118図92は産地不詳陶器の鉄釉土瓶の蓋である。紐状把手で、内面に墨書「田」がみえる。栗橋宿では初出の屋号である。区画ACは「明地 / 清吉」だが、出土文字資料と区画は必ずしも一致しないということを留意したい。

第131図１は漆椀で、被熱している。内外面赤漆塗りで、口縁部が金、高台縁が黒漆である。２は漆椀である。内面赤漆塗り、外面黒漆塗りである。体部中央に線状の装飾が施される。３は蓋である。外面を削り文様がつくられる。上面の穴に銅の板を差し込み、つまみとしている。８は束子で、棕櫚の繊維で作られる。繊維は中心部と外周の二重であり、繊維紐で固定される。９は陰卯

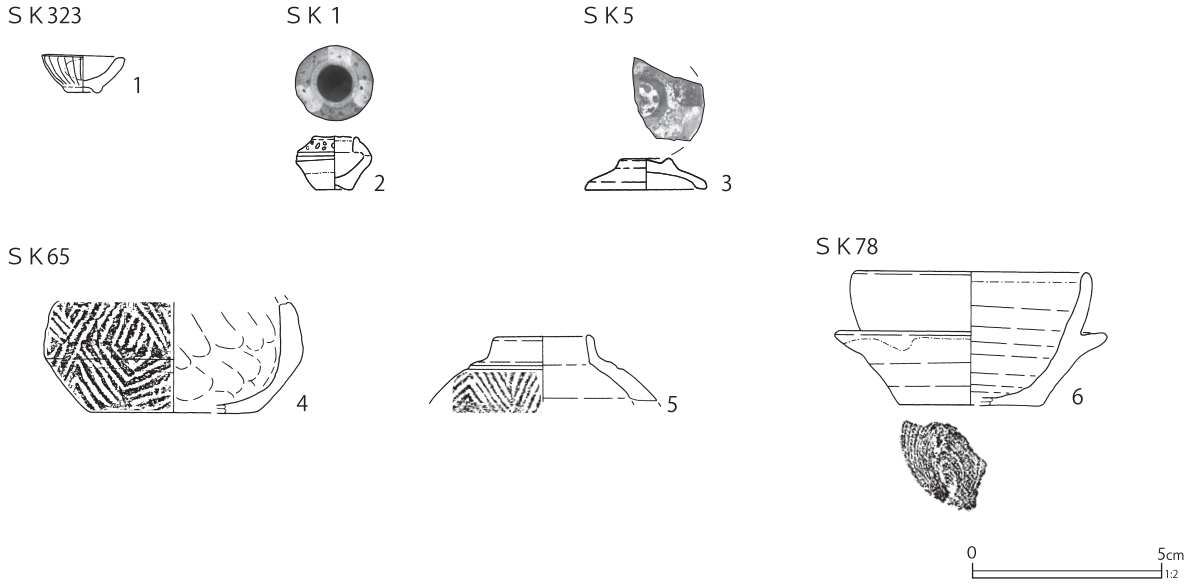
第 32 表　区画 AC 土壙出土遺物観察表（１）（第 107 ～ 126 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	磁器	皿	13.4	2.9	7.5	―	80	良好	白	SK1	肥前系 内外面施釉・染付 内面釘書「中」№.4	71-9
2	陶器	甕	―	[8.5]	(11.3)	EHK	30	良好	灰白	SK1	益子系 内外面柿釉 内面目跡２遺存 底部墨書「明治弐拾八年□□…之」SK182 接合	71-10
3	瓦質土器	火鉢	(19.8)	[8.4]	―	CIK	30	普通	にぶい褐	SK1	器台ヵ 体部切込（窓）あり 内面上位煤付着	
4	瓦質土器	竈鍔	27.5	3.3	27.1	CI	100	普通	暗褐	SK1	燻す 上面・内面煤付着 №.1・2・3	
5	磁器	紅坏	4.7	1.4	1.2	―	55	良好	白	SK3	肥前系 型成形 内外面施釉	
6	陶器	急須	8.0	6.5	5.6	―	90	良好	明赤褐	SK4	胎土炻器質 底部布目痕 胎土中心部還元焔焼成 内外面施釉 被熱 №.2	
7	磁器	仏飯器	6.4	6.4	4.2	―	95	良好	白	SK6	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面酸化コバルト染付 №.1	
8	磁器	碗	10.0	5.4	3.9	―	55	良好	白	SK28	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面陰刻文・染付 内面釘書「セ」SK322 接合	
9	磁器	坏	7.1	3.1	2.6	―	50	良好	白	SK28	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面酸化コバルト染付	
10	陶器	徳利	―	[11.1]	8.1	―	30	良好	褐灰	SK28	備前系 胎土炻器質 外面上位糸目状沈線 体部凹み２遺存・人形貼付 外面塗土 焼継痕あり 底部焼継印（赤）「□□□□／大黒屋」SK29・322 接合	71-19
11	陶器	徳利	―	[21.1]	8.3	IK	60	良好	灰	SK28	外面灰釉・呉須絵 底部輪状重焼痕 SK29 接合	
12	陶器	土瓶	8.9	10.7	7.6	K	60	良好	浅黄橙	SK28	外面三彩・施釉 底部白化粧・墨書 SK29 接合	
13	陶器	急須	5.8	6.1	5.4	―	75	普通	褐灰	SK28	萬古系 底部布目痕 把手透彫り 胎土炻器質 内外面施釉 底部墨書「ワ」	
14	土師質土器	焙烙	17.6	4.1	17.8	CHI	60	普通	浅黄橙	SK28	砂目底 SK29 接合	
15	瓦質土器	火鉢	27.8	11.9	22.8	CHIK	90	普通	にぶい橙	SK28	砂目底　口縁部ミガキ　体部トビガンナ状施文　燻す　口縁端部敲打状剥落　SK29 と接合	
16	土師質土器	焙烙	(31.8)	[4.3]	(33.8)	CEHI	45	普通	浅黄橙	SK28	砂目底 内面中心部ランダムなナデ SK29 接合	
17	瓦質土器	竈鍔	(30.6)	3.1	31.9	CEH	75	普通	灰黄	SK28	燻す 刻印「○○○」被熱・煤付着 SK29 接合	
18	瓦質土器	竈	34.0	31.5	35.6	CHIK	50	普通	にぶい橙・黄灰	SK28	外面櫛描状施文　燻す　口唇部ヘラ書き　内面被熱（剥落）　接点のない２片から復元　SK29 と接合	71-20
19	磁器	皿	19.8	3.1	11.2	―	90	良好	白	SK29	肥前系　内外面施釉　内面染付　焼継痕あり　被熱　SK28 と接合	
20	磁器	皿	(22.7)	3.4	13.8	―	65	良好	白	SK29	瀬戸美濃系　内外面施釉　内面型紙摺絵染付　高台内ハリ支跡３あり　SK28 と接合	
21	陶器	徳利	―	[6.6]	(6.4)	―	10	良好	灰白	SK29	肥前系　外面施釉　外面下位釘書「上」	72-1
22	陶器	燗徳利	―	[10.0]	―	K	5	良好	灰白	SK29	外面青緑釉　内面施釉	
23	陶器	花生	―	[10.5]	6.4	EHK	80	良好	灰白	SK29	瀬戸美濃系　底部糸切痕（右）・墨書　内外面鉄釉　外面長石釉散らし	72-2
24	磁器	碗	(7.4)	6.1	4.0	―	50	良好	白	SK30	肥前系 内外面施釉・染付 口紅	
25	磁器	坏	―	[0.8]	2.3	―	20	良好	白	SK30	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付 内面上絵付（青）	
26	磁器	皿	30.3	5.0	(17.5)	―	25	良好	白	SK30	肥前系 内外面施釉・染付 口紅 底部ハリ支跡２遺存 被熱（弱）ヵ	
27	磁器	皿	―	[0.7]	―	―	5	普通	白	SK30	肥前系 内外面施釉 内面染付 底部釘書	
28	磁器	鉢	12.6	5.6	(5.8)	―	45	良好	白	SK30	瀬戸美濃系 内外面施釉 内外面施釉・酸化コバルト染付	
29	陶器	碗	―	[2.5]	3.4	IK	15	良好	灰白	SK30	瀬戸美濃系 内外面灰釉 底部墨書「に」ヵ	
30	陶器	灯明皿	7.7	1.8	3.0	K	75	普通	灰白	SK30	京都信楽系 施釉（やや白濁）口縁タール少量付着	
31	陶器	灯火具	4.2	4.9	5.3	K	90	普通	灰白	SK30	京都信楽系 内外面施釉（白濁）口縁歪む　最大径 8.2 ㎝	
32	土師質土器	焙烙	(23.2)	[2.7]	(22.6)	AEHI	20	普通	にぶい橙	SK30	江戸在地系ヵ 砂目底 胎土粉質	
33	土師質土器	焙烙	(30.8)	3.1	(31.8)	CHIK	45	普通	灰白	SK30	砂目底 体部下位ケズリ 被熱（黒化）	
34	土師質土器	焙烙	(32.6)	[4.1]	(33.2)	CHIK	15	普通	にぶい橙	SK30	砂目底 胎土中心灰白	
35	土師質土器	焙烙	(32.8)	[3.7]	(32.6)	CHIK	20	普通	灰白	SK30	砂目底 体部下端ケズリ 色調内面灰白・外面橙色	
36	磁器	坏	2.6	2.0	1.3	―	60	普通	白	SK31	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付	
37	陶器	燗徳利	―	[2.3]	(5.7)	K	5	普通	灰白	SK31	京都信楽系 外面施釉 底部墨痕	
38	瓦質土器	手焙り	―	17.9	16.4	ACIK	75	普通	灰白	SK31	底部ヘラナデ 体部下端ケズリ・中位・上面ミガキ・下位トビガンナ状施文 燻す	
39	土師質土器	焜炉	22.8	22.3	21.3	AEHIK	40	普通	橙	SK31	三河産 外面ミガキ 窓部刻印 窓部は欠失のため推定	72-3
40	磁器	碗	(8.2)	7.7	(4.6)	―	40	良好	白	SK32	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 焼継痕あり	
41	磁器	碗	7.6	5.5	4.1	―	80	良好	白	SK32	肥前系 内外面施釉・染付	
42	磁器	碗	(7.3)	4.9	(3.2)	―	45	良好	白	SK32	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付 焼継痕あり	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
43	磁器	鉢	—	[3.8]	7.0	—	25	良好	白	SK32	肥前系 内外面施釉・染付 高台内円周状の重ね焼き痕・焼継印（赤）	72-5
44	磁器	燗徳利	—	[16.8]	5.7	—	45	良好	白	SK32	瀬戸美濃系 外面施釉・酸化コバルト染付	
45	陶器	鍋	[23.0]	[10.6]	—	IK	15	良好	にぶい黄橙	SK32	内外面柿釉 把手に胴線巻付 目跡１あり 外面煤付着	
46	瓦質土器	蓋	—	[3.1]	(30.7)	ACHIK	10	普通	橙	SK32	上面砂目 内面煤付着 火消壺の蓋	
47	土師質土器	焙烙	(30.8)	[4.8]	(30.6)	CEHIK	50	普通	橙	SK32	砂目底 体部煤付着	
48	瓦質土器	竈鍔	(24.6)	2.8	(26.2)	HIK	20	普通	にぶい褐	SK32	燻す	
49	瓦質土器	竈鍔	(27.0)	3.3	(29.5)	CHIK	15	普通	にぶい橙	SK32	燻す	
50	瓦質土器	竈鍔	(37.2)	3.9	(36.8)	HIK	15	普通	褐灰	SK32	燻す 上面煤付着	
51	瓦質土器	竈鍔	(33.3)	3.5	(36.0)	CHIK	20	普通	褐灰	SK32	燻す 上面刻印「岩﨑」内面煤付着	72-6
52	瓦質土器	竈	27.0	24.1	23.4	CHI	80	普通	灰白	SK32	砂目底 外面下位ミガキ状のナデ 内面上・下位煤付着	
53	瓦質土器	竈	34.0	[12.8]	(29.0)	CHI	40	普通	橙	SK32	燻す 口縁部・内面煤付着	
54	陶器	羽釜	(18.7)	[13.5]	—	IK	25	良好	灰白	SK35	内外面灰釉 外面呉須絵・イッチン描き文 外面下位煤付着 口縁欠失部二次利用（摩耗）	
55	磁器	碗	(10.8)	[4.8]	—	—	10	良好	白	SK36	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付	
56	陶器	灯火具	4.3	5.6	5.8	IK	85	良好	灰白	SK36	京都信楽系 内外面施釉 最大径 8.4 ㎝	
57	陶器	蓋	—	[2.2]	(8.2)	IK	20	良好	灰白	SK36	上面施釉・白土染付・ピン痕１遺存 最大径 (10.6) ㎝	
58	土師質土器	焙烙	(30.4)	[6.7]	—	CFHIK	10	普通	橙	SK36	底部シワ状痕 体部煤付着	
59	磁器	蓋	—	2.4	5.5	—	100	良好	白	SK42	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付 60 の蓋	
60	磁器	急須	(6.2)	6.5	6.2	—	90	良好	白	SK42	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付 焼継痕あり 底部焼継印（赤）59 の身	
61	陶器	土瓶	(10.8)	[8.4]	—	K	20	良好	灰白	SK42	京都信楽系 外面施釉・鉄絵	
62	陶器	急須	5.3	6.3	4.5	—	100	良好	赤灰	SK42	萬古系 胎土炻器質 口縁・注口部先端施釉 把手透かし彫り 外面イッチン描き文字「薪炭商／栗橋町／池谷商店」	
63	陶器	灯明皿	(9.0)	1.3	(5.2)	K	40	良好	にぶい橙	SK43	内外面施釉 外面煤付着	
64	陶器	徳利	3.8	19.2	6.0	IK	60	良好	灰	SK43	瀬戸美濃系 外面灰釉	
65	磁器	筆筒	縦 (4.9) 横 (3.5)			—	5	良好	白	SK44	瀬戸美濃系 板作り成形 透かし彫り 内外面施釉 外面染付	
66	陶器	徳利	(4.4)	23.8	(8.8)	IK	40	良好	にぶい黄橙	SK44	頸・肩部青緑釉流し掛け 体部鉄釉 肩・体部トビガンナ状施文	
67	陶器	鍋	21.0	10.6	8.0	K	90	良好	灰白	SK44	内外面柿釉 内面目跡５ 底部煤付着 被熱	
68	陶器	瓶類	—	[12.7]	—	EIK	20	良好	灰白	SK44	信楽系 外面漆黒鉄釉 内面柿釉 胎土石英質	
69	瓦質土器	火鉢	(19.4)	[8.1]	—	CHI	10	普通	にぶい橙	SK44	外面上位櫛歯波状文・下位トビガンナ状施文 燻す	
70	瓦質土器	植木鉢	16.0	10.2	9.6	CHIK	65	普通	褐灰	SK44	外面鎬状施文・下位ケズリ 弱く燻す	
71	土製品	筒形土製品	長さ [10.7] 径 5.3			CIK	40	普通	灰白	SK44	内面シワ状痕 外面砂目 燻す	
72	土師質土器	焙烙	33.8	4.2	34.6	CHIK	90	普通	浅黄橙	SK44	砂目底 内底面同心円状のナデ 底部端部・内面煤付着	66-11
73	陶器	碗	10.9	6.1	3.7	IK	95	良好	にぶい橙	SK62	胎土極硬質 内外面鉄釉（上位うのふ釉流し掛け）内面ピン痕３あり	
74	陶器	土瓶	—	[3.8]	(8.0)	IK	10	普通	灰	SK62	外面緑褐色系釉	67-4
75	瓦質土器	植木鉢	(14.8)	14.6	(9.8)	CGHIK	25	普通	明赤褐	SK62	ほぼ酸化焔焼成 SK63 と接合	
76	土師質土器	目皿	11.3	6.3	—	I	100	普通	淡黄	SK63	—	
77	瓦質土器	植木鉢	(24.4)	12.9	(18.5)	IK	60	普通	灰白	SK63	胎土中心黒褐色 燻す SK62 と接合	
78	磁器	碗	(10.2)	[5.3]	—	—	30	良好	白	SK65	瀬戸美濃系 内外面施釉・色絵（赤）	
79	磁器	碗	8.2	4.1	3.2	—	95	良好	白	SK65	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付	
80	磁器	碗	6.9	5.0	3.0	—	95	良好	白	SK65	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面陰刻文・染付	
81	磁器	坏	(5.8)	2.7	2.2	—	40	良好	白	SK65	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付 内面上絵付（赤・緑・黄・黒）	
82	磁器	皿	(14.4)	3.7	(9.0)	—	5	良好	白	SK65	肥前系 内外面施釉・染付「屋」被熱	67-5
83	磁器	皿	9.8	2.3	4.6	—	95	良好	白	SK65	瀬戸美濃系 内外面施釉 内面型押陽刻文・染付	
84	陶器	皿	13.8	3.7	7.2	IK	80	良好	灰白	SK65	瀬戸美濃系 内外面刷毛目釉（渦巻）	
85	陶器	鉢	(14.6)	[6.8]	—	EIK	10	良好	灰白	SK65	内外面施釉（海鼠釉ぎみ）	
86	陶器	燗徳利	(3.8)	20.5	7.1	IK	85	良好	灰白	SK65	京都信楽系 外面施釉・鉄絵	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
87	陶器	蓋物	(8.0)	2.9	5.9	I	30	良好	黄灰	SK65	内外面緑褐色系釉 口唇部鉄化粧	
88	陶器	土瓶	(7.6)	[10.5]	—	IK	50	良好	にぶい橙	SK65	外面白化粧・施釉・鉄絵・白盛 被熱・煤付着	
89	陶器	土瓶	9.7	12.2	8.6	IK	70	良好	にぶい橙	SK65	底部白化粧・墨書 外面施釉・三彩文 SK44 と接合	73-15
90	陶器	土瓶	(8.2)	[4.2]	—	K	10	良好	灰白	SK65	外面灰釉	
91	陶器	蓋	—	3.4	5.6	K	95	良好	灰褐	SK65	上面鮫肌釉（鉄釉）鍔下面輪状重焼痕（径 6.4 ㎝）最大径 7.3 ㎝	
92	陶器	蓋	—	3.3	5.8	K	95	良好	にぶい橙	SK65	上面鉄釉 下面墨書「田」最大径 7.8 ㎝	
93	陶器	豆甕	(2.2)	4.6	2.6	K	75	良好	灰白	SK65	京都信楽系 底部離し糸切痕(右)外面鉄釉 胎土緻密・硬質・光沢	
94	陶器	灯火具	4.0	5.3	5.1	I	95	良好	灰白	SK65	京都信楽系 内外面施釉 底部重焼痕 被熱 最大径 7.6 ㎝	
95	瓦質土器	蓋	—	4.4	(27.4)	CHIK	80	普通	灰白	SK65	上面砂目 体部上位ケズリ 燻す	
96	土師質土器	焙烙	(33.0)	[5.6]	(33.2)	CHIK	30	普通	灰白	SK65	砂目底 体部内外面煤付着	
97	瓦質土器	火鉢	(16.0)	9.5	(11.4)	CHIK	50	普通	灰白	SK65	口縁部ミガキ 体部下位ケズリ 体部トビガンナ状施文 燻す	
98	瓦質土器	火鉢	—	[8.1]	—	CHIK	5	普通	灰白	SK65	外面スタンプ状施文 燻す	
99	瓦質土器	十能	長軸［18.3］短軸［15.7］高さ 6.0			CFHIK	95	良好	にぶい橙	SK65	下・側面シワ状痕 やや酸化焔焼成	
100	瓦質土器	植木鉢	(10.6)	6.4	6.6	AI	60	普通	灰白	SK65	江戸在地系 底部糸切痕（左）胎土粉質 燻す	
101	土師質土器	秉燭	2.6	1.4	1.8	AHIK	100	普通	にぶい橙	SK65	江戸在地系 底部糸切痕（左）胎土粉質 灯芯立端部煤付着	
102	磁器	碗	(9.4)	4.7	(3.2)	—	70	普通	白	SK78	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付	
103	磁器	碗	8.4	4.4	3.2	—	60	普通	白	SK78	瀬戸美濃系 内外面施釉 底部露胎	
104	磁器	碗	(10.0)	5.0	(4.0)	—	15	良好	白	SK78	瀬戸美濃系 内外面施釉・色絵（赤・緑）	
105	磁器	碗	(7.0)	4.7	(3.0)	—	30	良好	白	SK78	瀬戸美濃系 内面・高台内施釉 外面瑠璃釉 口紅	
106	磁器	碗	6.5	4.7	2.7	—	60	普通	白	SK78	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付	
107	磁器	坏	6.1	2.9	2.6	—	60	普通	白	SK78	瀬戸美濃系 内外面施釉・上絵付（赤・黒・緑・黄）	
108	磁器	皿	14.4	3.6	9.3	—	85	普通	白	SK78	肥前系 内外面施釉・染付 焼継痕あり 高台内焼継印（赤）３あり 被熱（強）	73-18
109	磁器	皿	(14.8)	4.4	8.3	—	60	普通	白	SK78	肥前系 内外面施釉 内面染付 口紅 高台内釘書「八」	73-19
110	磁器	皿	9.2	1.8	5.2	—	95	良好	白	SK78	瀬戸美濃系 内外面施釉 内面型押陰刻文	
111	磁器	徳利	1.4	6.7	2.8	—	95	良好	白	SK78	瀬戸美濃系 外面施釉・染付	
112	磁器	油壺	2.1	4.8	5.2	—	95	普通	白	SK78	瀬戸美濃系 上下合二枚型成形 外面施釉・上位型押陽刻状施文・染付	
113	磁器	香炉	8.7	5.1	3.9	—	80	普通	白	SK78	瀬戸美濃系 内面上位・外面施釉 外面染付 底部墨書	73-20
114	磁器	香炉	—	[5.0]	(5.2)	—	25	良好	白	SK78	瀬戸美濃系 内面上位・外面施釉 底部墨書	74-1
115	陶器	碗	11.6	6.2	5.2	K	60	普通	灰白	SK78	瀬戸美濃系 内外面灰釉・呉須絵 底部二次穿孔１	
116	陶器	碗	(11.0)	6.1	3.2	I	55	普通	灰	SK78	胎土極硬質 内外面鉄釉（上位うのふ釉流し掛け）内面目跡３あり	
117	陶器	皿	13.6	3.0	7.2	IK	95	良好	にぶい橙	SK78	内外面施釉（被熱白色化）内面呉須絵・ピン痕６遺存	
118	陶器	灯明皿	8.4	—	—	—	100	普通	淡黄	SK78	京都信楽系 内外面施釉 外面タール状物質付着	67-7
119	陶器	灯明皿	9.2	1.8	4.0	IK	100	普通	灰白	SK78	瀬戸美濃系 内外面柿釉 外面下位・底部釉拭き取り輪状重焼痕	
120	陶器	灯明皿	9.5	2.4	3.6	K	100	良好	灰褐	SK78	瀬戸美濃系 内外面柿釉 外面下位・底部釉拭き取り内面輪状重焼痕（径 4.7㎝）	
121	陶器	灯火具	5.0	4.5	4.7	IK	95	良好	灰白	SK78	京都信楽系 内外面施釉 最大径 7.7 ㎝	
122	陶器	徳利	3.6	[7.6]	—	IK	5	良好	灰白	SK78	外面下位トビガンナ状施文・灰釉 頸部鉄釉	
123	陶器	徳利	3.9	[11.7]	—	IK	15	普通	浅黄橙	SK78	内面上位・外面鉄釉	
124	陶器	土瓶	(7.0)	8.3	(7.4)	K	30	良好	灰白	SK78	外面灰釉・鉄絵 露体部煤付着 SK89 と接合	
125	陶器	急須	6.2	6.3	5.4	K	70	良好	にぶい黄橙	SK78	胎土炻器質	
126	陶器	鍋	(16.6)	6.3	(7.0)	—	30	良好	にぶい橙	SK78	外面トビガンナ施文・白釉流し掛け 内面臙脂色釉 露体部煤付着	
127	陶器	行平鍋	16.6	12.4	8.5	K	60	良好	灰白	SK78	外面トビガンナ状施文・柿釉 内面灰釉 被熱・煤付着 被熱により大きく歪む	
128	陶器	蓋	—	[2.4]	6.4	K	90	良好	灰白	SK78	上面青緑釉 被熱・下面煤付着 最大径 9.5 ㎝	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
129	陶器	蓋	6.4	1.7	3.4	I	95	良好	灰白	SK78	上面施釉 ツマミ欠失 底部二次穿孔（銅線付）最大径 7.9 ㎝	
130	陶器	蓋	―	1.6	3.2	K	100	良好	灰白	SK78	底部糸切痕（右）上面白土染付・施釉 被熱ヵ 最大径 7.4 ㎝	
131	陶器	蓋	4.7	3.6	16.2	I	90	良好	灰白	SK78	外面中位トビガンナ施文 外面柿釉散らし 内面柿釉	
132	陶器	カンテラ	5.0	4.2	3.9	IK	80	普通	灰白	SK78	京都信楽系 内外面施釉 注口・露胎部黒化	
133	瓦質土器	火鉢	(16.3)	8.6	(11.8)	CHIK	35	普通	褐灰	SK78	口縁部ミガキ 体部スタンプ状施文 燻す	
134	瓦質土器	火鉢	16.8	8.5	11.5	CI	75	普通	灰白	SK78	口縁部ミガキ 体部トビガンナ状施文 燻す 胎土中心灰色	
135	瓦質土器	火鉢	17.0	7.5	13.0	HIK	55	普通	にぶい黄橙	SK78	体部下位ケズリ やや酸化焔焼成 内面上位煤付着	
136	瓦質土器	火鉢	25.9	12.7	(22.3)	CHIK	95	普通	灰白	SK78	砂目底 焼成前穿孔２あり やや酸化焔焼成 内面下位火箸傷	67-9
137	瓦質土器	火鉢	28.7	10.9	22.5	CIKM	95	普通	灰白	SK78	底部板状圧痕 口縁部ミガキ・敲打痕 体部トビガンナ状施文 体部下位弱いケズリ 燻す	67-8
138	瓦質土器	手焙り	―	[16.7]	18.4	CIK	60	普通	灰白	SK78	底部ヘラナデ 燻す 胎土中心灰色 口縁部敲打痕 底部周縁部摩耗	
139	瓦質土器	十能	長軸 25.1 短軸 18.7 高さ 5.6			CHIK	95	普通	灰白	SK78	下・側面シワ状痕 燻す 内面煤付着	
140	瓦質土器	香炉	―	[2.1]	(8.8)	AI	5	普通	灰白	SK78	江戸在地系 体部ミガキ 胎土粉質 燻す	
141	瓦質土器	植木鉢	16.3	12.6	13.2	AK	80	普通	灰白	SK78	江戸在地系 底部ヘラナデ 胎土粉質 燻す SK91 と接合	
142	陶器	蓋	―	3.3	8.5	K	100	良好	灰黄褐	SK90	上面鮫肌釉 143 の蓋	
143	陶器	土瓶	9.8	12.2	8.0	IK	75	普通	灰白	SK90	外面鮫肌釉 内面鉄釉 露胎部煤付着 142 の身	
144	磁器	碗	10.4	6.0	4.0	―	50	普通	白	SK91	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 内面煤付着	
145	磁器	鉢	―	[2.4]	(14.0)	―	5	良好	白	SK91	肥前系 内外面施釉・染付 焼継痕あり 高台内焼継印（赤）	
146	陶器	灯明皿	(8.2)	1.6	(2.8)	K	45	普通	灰白	SK91	京都信楽系 内外面施釉 内面ピン痕１遺存 被熱（一部黒化）	
147	陶器	灯火具	4.5	5.9	5.3	K	95	良好	灰白	SK91	京都信楽系 内外面施釉 被熱 最大径 8.5 ㎝	
148	陶器	徳利	―	[18.0]	9.4	K	70	良好	灰白	SK91	外面灰釉・呉須絵 底部輪状重焼痕（径 7.9㎝）	74-9
149	陶器	土瓶	(7.0)	[4.4]	―	K	5	良好	灰白	SK91	大堀相馬系ヵ 内外面糠白釉	
150	陶器	蓋	8.7	2.9	4.6	IK	100	良好	灰白	SK91	瀬戸美濃系 底部糸切痕（右）最大径 9.5 ㎝	
151	磁器	皿	―	[0.7]	―	―	5	普通	白	SK214	肥前系 内外面施釉・染付 焼継痕あり 下面釘書「吉」被熱	76-18
152	陶器	秉燭	―	[3.6]	4.4	IK	60	普通	灰白	SK214	底部糸切痕（右）内外面鉄釉 底部墨書	
153	土師質土器	焙烙	(14.8)	[2.0]	(15.4)	AHIK	5	普通	にぶい橙	SK214	砂目底	
154	瓦質土器	竈鍔	(30.0)	2.8	(28.2)	CIK	20	普通	にぶい橙	SK214	内外面煤付着 被熱	
155	陶器	火鉢	―	[14.4]	16.0	―	40	普通	白	SK260	瀬戸美濃系 外面施釉・型紙摺絵染付 底部二次穿孔	
156	陶器	羽釜	(9.3)	4.3	(5.6)	EIK	30	普通	にぶい赤褐	SK260	外面上位・内面鉄釉	
157	土師質土器	焜炉	―	[17.2]	―	CHIK	5	良好	にぶい橙	SK260	板作り成形 外面ミガキ 窓部遺存	
158	瓦質土器	植木鉢	(14.8)	9.0	(10.2)	CHIK	40	普通	にぶい橙	SK260	底部糸切痕をナデ消し 燻す	
159	土師質土器	焙烙	16.6	5.4	13.4	EHIK	95	普通	浅黄橙	SK260	底部ムシロ状圧痕をナデ消し 内底面同心円状のナデ 胎土石英小礫を含む 体部一部煤付着	
160	土師質土器	器台	(27.6)	7.0	(23.0)	ADEI	45	普通	橙	SK260	三河産 内面上位煤付着	
161	瓦質土器	竈	(33.0)	[21.1]	―	CHIK	15	普通	灰	SK260	やや酸化焔焼成 胎土中心灰色 口唇部刻印「○○○」内面・口唇部煤付着	
162	瓦質土器	火鉢	23.6	8.4	25.3	HIK	60	普通	にぶい黄橙	SK260	砂目底 口唇部ミガキ 燻す 胎土中心灰色	
163	陶器	徳利	2.7	[8.0]	―	IK	15	普通	黄灰	SK319	瀬戸美濃系 外面快癒 被熱（黒化）	
164	磁器	皿	―	[2.2]	(5.9)	―	10	良好	白	SK321	瀬戸美濃系 内外面施釉 内面陰刻文・染付 蛇ノ目凹形高台 高台内焼継印（赤）	77-15
165	磁器	燗徳利	―	[16.5]	5.6	―	80	良好	白	SK321	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面酸化コバルト染付 底部墨書「舎」	77-16
166	磁器	急須	(7.6)	5.7	6.5	―	80	良好	白	SK321	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面酸化コバルト染付 底部渦巻状・墨痕	
167	陶器	徳利	2.1	10.1	4.6	I	100	良好	明褐灰	SK321	瀬戸美濃系 内外面柿釉 底部釉拭き取り 注口部・頸部・肩部に重焼痕状の釉剥げ	
168	陶器	徳利	―	[9.3]	8.7	IK	20	良好	灰白	SK321	外面トビガンナ状施文 内外面灰釉 底部二次穿孔	



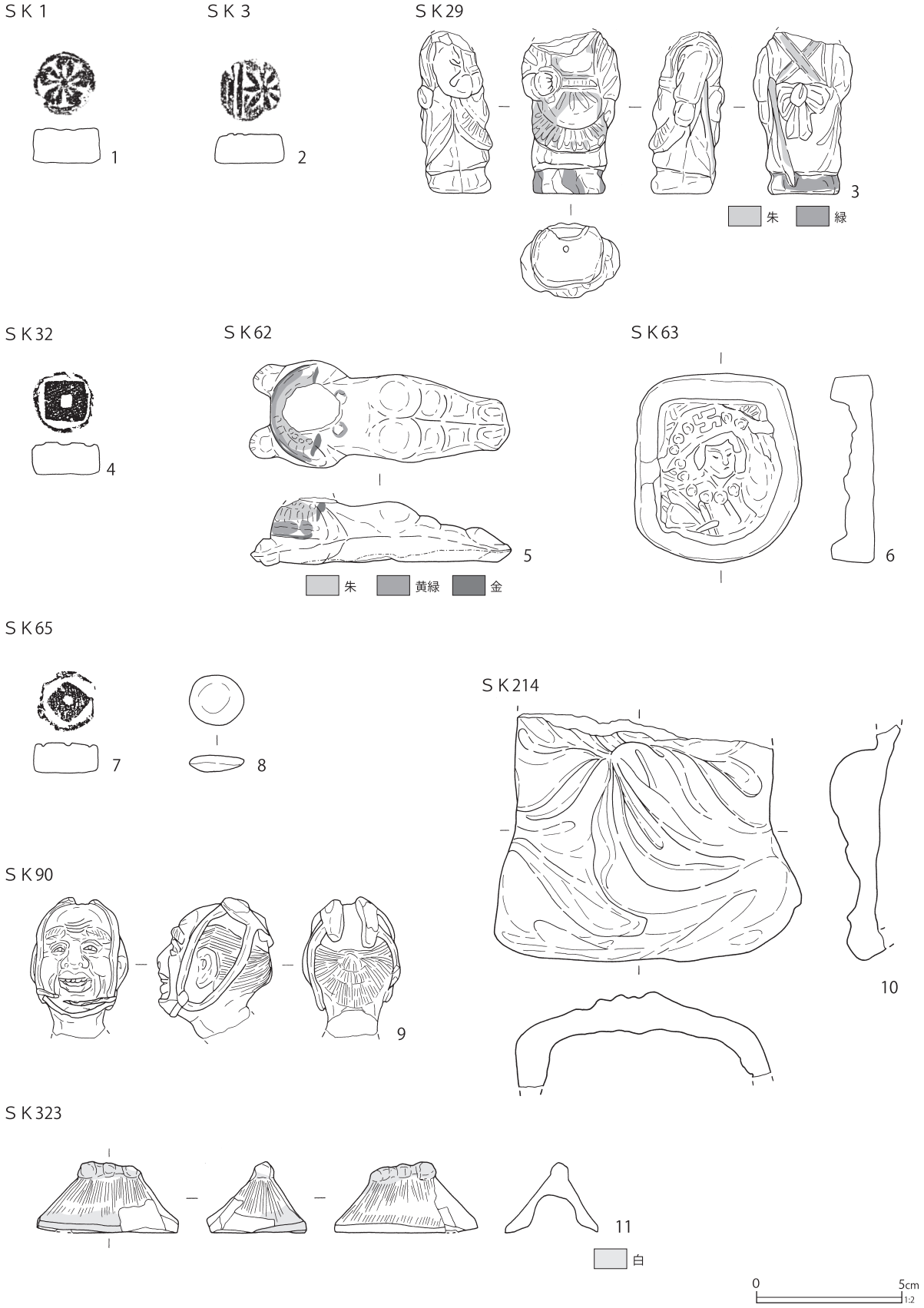
第 127 図　区画 AC 土壙出土遺物（21）

第 33 表　区画 AC 土壙出土遺物観察表（２）（第 127 図）

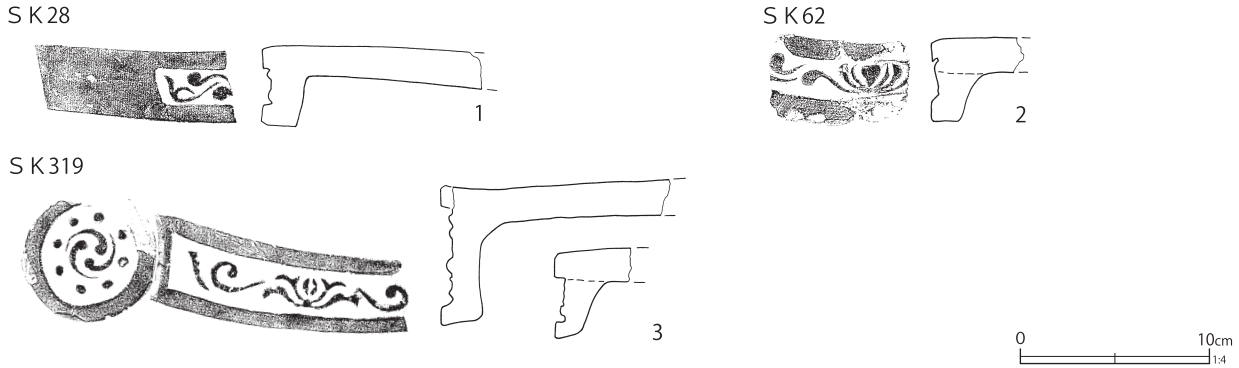
番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	胎土	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	磁器	紅坏	1.9	1.0	0.8	2.9	―	良好	白	SK323	瀬戸美濃系 型成形 内外面施釉	121-15
2	土製品	ミニチュア	1.1	1.4	0.8	3.4	IK	普通	にぶい橙	SK1	江戸在地系 壺 上下合二枚型成形 外面白土・緑釉・施釉	117-5
3	土製品	ミニチュア	(1.2)	0.8	(3.2)	1.2	AHIK	普通	にぶい橙	SK5	江戸在地系 蓋 型成形 内面雲母付着 上面鉄化粧 施釉（被熱・白化）	
4	土製品	ミニチュア	―	[2.9]	(4.4)	8.4	AHIK	普通	橙	SK65	江戸在地系 土瓶 上下合二枚型成形 外面下位・底部白化粧 外面上位施釉 SK65-3 と同一ヵ	
5	土製品	ミニチュア	(2.4)	[1.2]	―	3.0	AHIK	普通	橙	SK65	江戸在地系 土瓶 上下合二枚型成形 外面施釉	
6	土製品	ミニチュア	(6.0)	3.5	(3.8)	15.1	AHIK	普通	橙	SK78	釜形土製品 底部糸切痕（右）外面下位・底部白化粧 外面鉄釉・内面施釉	

第 34 表　区画 AC 土壙出土遺物観察表（３）（第 128 図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	土製品	泥面子	径 1.3		1.2	7.5	AHIK	良好	橙	SK1	江戸在地系 一枚型成形 雲母付着	122-11
2	土製品	泥面子	径 2.4		1.0	6.7	AHIK	良好	橙	SK3	江戸在地系 一枚型成形 雲母付着	122-11
3	磁器	人形	[5.6]	3.4	2.6	35.2	―	―	―	SK29	瀬戸美濃系 前後合二枚型成形 中空 外面施釉 彩色（赤・青緑・黄・金）	
4	土製品	泥面子	径 2.3		1.1	6.3	AHIK	良好	橙	SK32	江戸在地系 一枚型成形 雲母付着	122-11
5	磁器	人形	9.0	3.7	[2.3]	48.0	―	良好	灰白	SK62	瀬戸美濃系 這子 上下合二枚型成形 中実 上・側面施釉 彩色（赤・黄緑・金）	
6	土製品	土型	6.5	5.8	1.5	65.2	EIK	良好	明赤褐	SK63	胎土粗雑・硬質	117-16
7	土製品	泥面子	径 2.2		1.0	5.9	AHK	良好	橙	SK65	江戸在地系 一枚型成形 雲母付着	122-11
8	土製品	碁石	径 0.9		0.6	1.7	AHIK	良好	橙	SK65	江戸在地系 手捻り成形	117-17
9	土製品	人形	[4.8]	3.4	3.9	32.0	AEK	良好	灰白	SK90	京都系 彩色有り（黒・赤）	117-19
10	土製品	人形	[8.5]	10.6	1.9	148.6	AHIK	良好	にぶい橙	SK214	型成形 彩色（赤）遺存 雲母付着	119-9
11	土製品	箱庭道具	2.4	4.9	1.2	15.6	AIK	良好	橙	SK323	民家 江戸在地系 一枚型成形 開口 一部白化粧 外面施釉	120-20



第 128 図　区画 AC 土壙出土遺物（22）



第 129 図　区画 AC 土壙出土遺物（23）

第 35 表　区画 AC 土壙出土遺物観察表（４）（第 129・130 図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	高さ	径	胎土	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	瓦	軒平瓦	[11.6]	[10.8]	1.9	[5.7]	－	AIK	良好	灰白	SK28	江戸式ヵ 瓦当面幅狭 銀化 燻す	
2	瓦	軒桟瓦	[4.6]	[7.5]	1.8	[5.3]	－	AHIK	良好	灰	SK62	江戸式 瓦当面狭く浅い 燻す 雲母付着	
3	瓦	軒桟瓦	[12.1]	[21.7]	2.2	[7.8]	7.1	AEIKM	良好	灰白	SK319	右巻八連珠三巴文 胎土粗雑 銀化 燻す	
4	瓦	桟瓦	[15.9]	[10.8]	1.8	4.3	－	ACIK	普通	灰	SK28	弱く銀化 燻す	
5	瓦	丸瓦	28.3	[10.2]	1.9	[6.5]	－	AIK	良好	灰白	SK29	燻す	
6	瓦	軒丸瓦	[8.0]	[14.5]	2.1	－	(14.8)	AIK	良好	灰	SK32	銀化 燻す 瓦当面文字「吾」ヵ	123-17
7	瓦	軒丸瓦	[7.8]	14.0	2.5	－	14.0	AIK	普通	灰白	SK32	右巻十六連珠三巴文 燻す 雲母付着	
8	瓦	桟瓦	[20.9]	27.1	1.8	4.5	－	AIK	良好	灰白	SK42	燻す	
9	瓦	鬼瓦	[6.9]	[7.7]	[2.0]	－	－	ACHIK	良好	灰白	SK65	銀化 燻す	123-19
10	瓦	軒丸瓦	[5.0]	16.4	2.5	16.1	15.7	AK	良好	灰白	SK78	右巻十六連珠三巴文 銀化 燻す 雲母付着	
11	瓦	丸瓦	13.0	[13.0]	3.2	5.9	－	AIK	普通	灰	SK78	燻す	
12	瓦	丸瓦	[23.9]	[22.1]	2.2	[6.9]	－	AIK	良好	灰白	SK78	銀化 燻す 焼成前穿孔２遺存	

下駄で、全面黒漆塗りである。

第 78 号土壙（第 106・118 ～ 122・127・130・131・132・134 ～ 136 図）

Ｆ７－Ｃ５・６　グリッドに位置する。第３・４号土壙より古く、第 91 号土壙より新しい。第 32 号溝跡、第 65・90 号土壙と重複する。

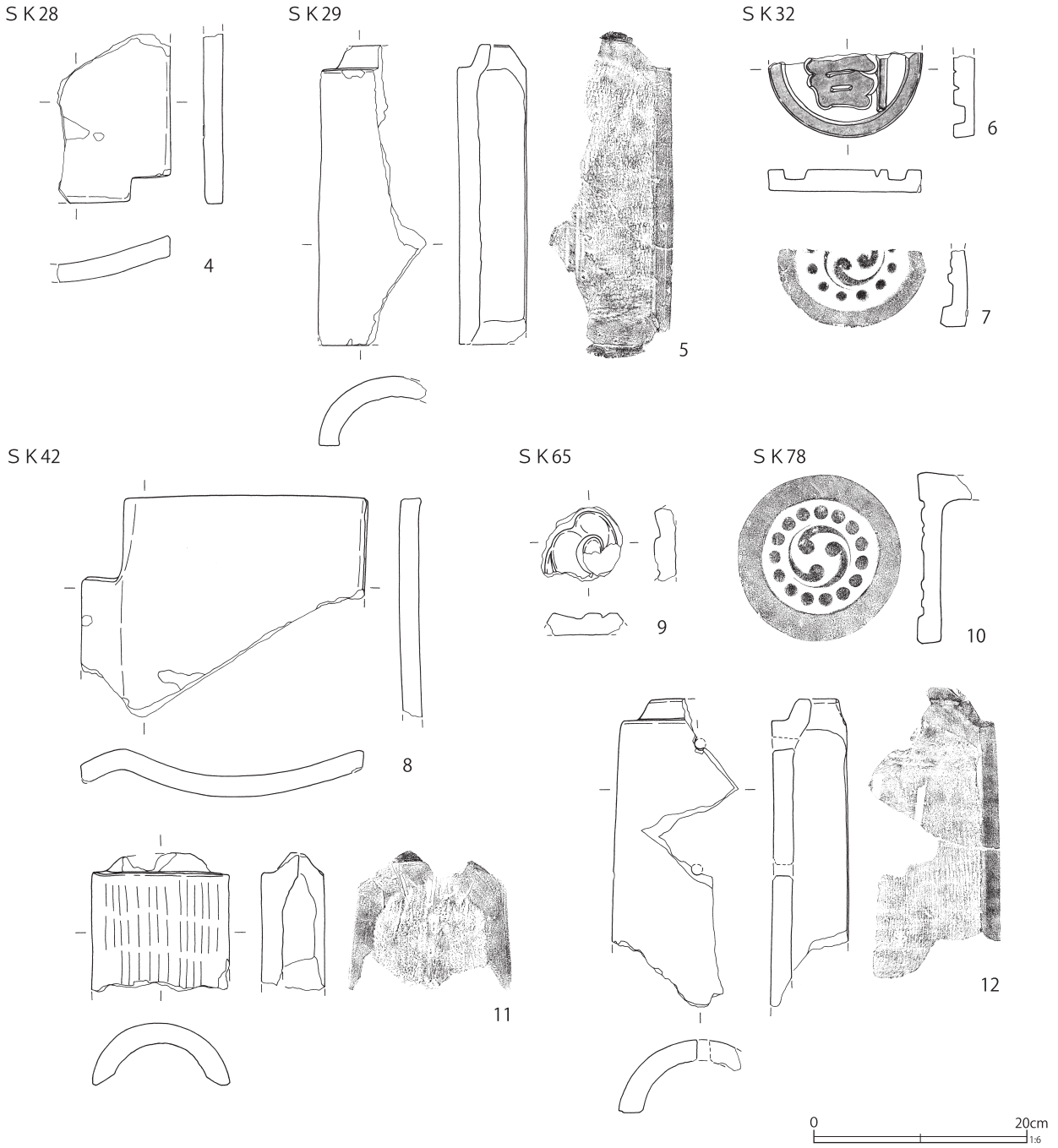
遺構の不自然な平面形態と土層の堆積状況から複数基の土壙から成ると考えられる。少なくとも２基が確認できたため、それぞれ a、b の枝番号を付した。なお、出土遺物は一括で取り上げているため、第 78 号土壙出土遺物として扱う。

a、b 共に平面形は不整形である。a の検出長軸は 4.2 m、短軸 2.15 m、深さ 0.95 mを測る。b は検出長軸 2.2 m、短軸 0.6 m、深さ 0.4 mを測る。いずれも長軸方位はN－ 74°－Eを指す。

a の覆土の大部分は最下層の第 11 層で、極めて多量の木片が混入している。木片は投棄されたものと考えられる。上層である a の覆土は砂質土が主体である。出土陶磁器は第 89・91 号土壙と接合関係にあり、b は第 89 号土壙と同時期の可能性がある。最新期の陶磁器は型紙摺絵染付磁器皿であり、地方窯系の陶器も多く認められる。しかし一方で端反形碗を主体とし、木型打ち込み成形そり皿、瀬戸美濃系磁器小碗がみられるため、幕末から明治初期の様相も垣間見える。

したがって、重複関係を考慮すると型紙摺絵染付段階の遺物は a に帰属する、もしくは重複する土壙からの混入と考えるのが妥当である。瀬戸美濃系磁器小碗や木型打ち込み成形そり皿段階の遺物は b に帰属すると推定される。a、b 共に推定廃絶期は 19 世紀後葉である。

第 118 図 102 ～ 107・第 119 ～ 122 図に陶磁器類、第 127 図 6 に土製品、第 131 図 12 ～ 15・第 132 図 16 ～ 26 に木製品、第 134 図 10 ～ 13



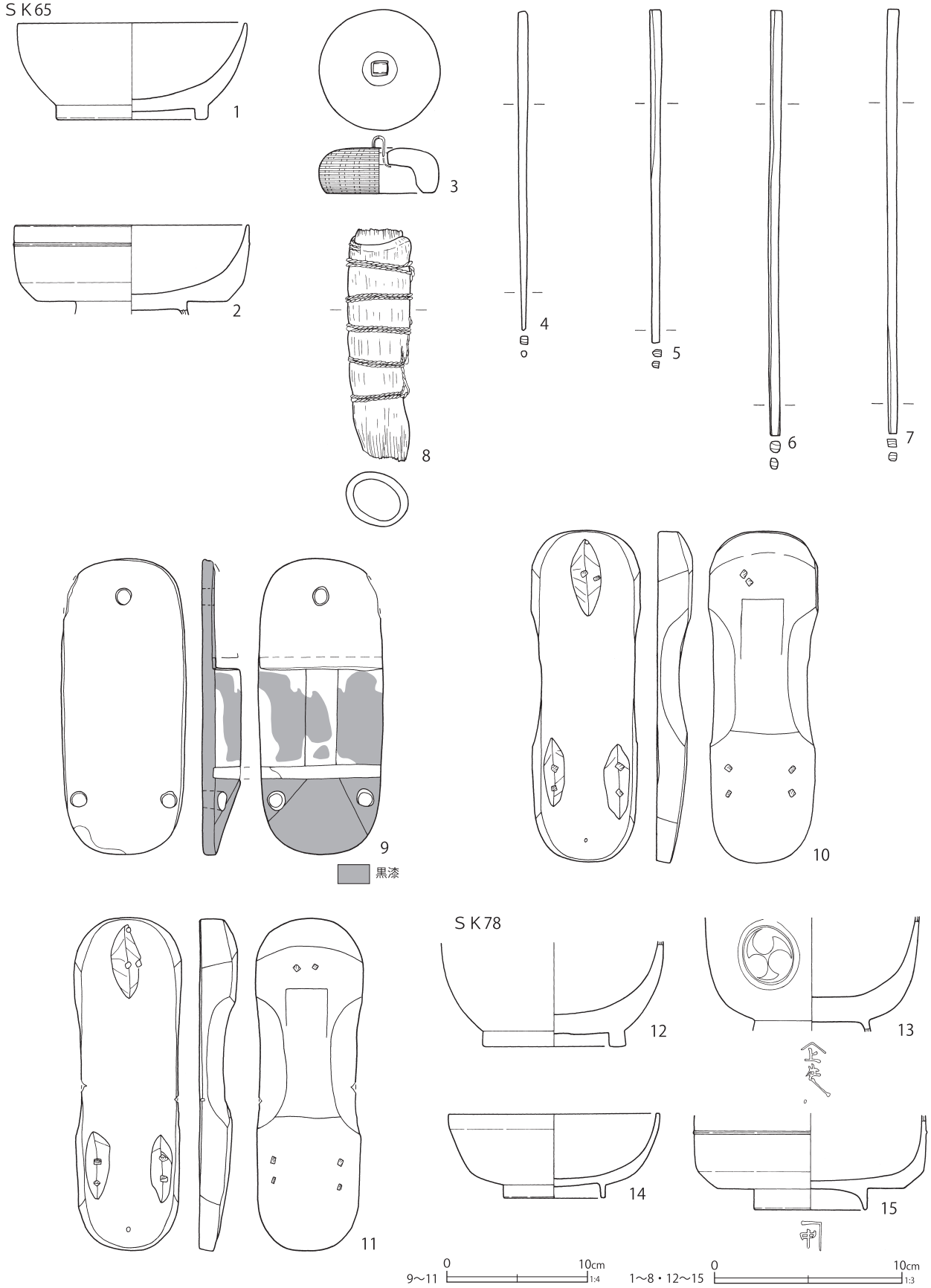
第 130 図　区画 AC 土壙出土遺物（24）

に金属製品、第 135 図２・３に銭貨、第 136 図６・７に石製品を図示した。

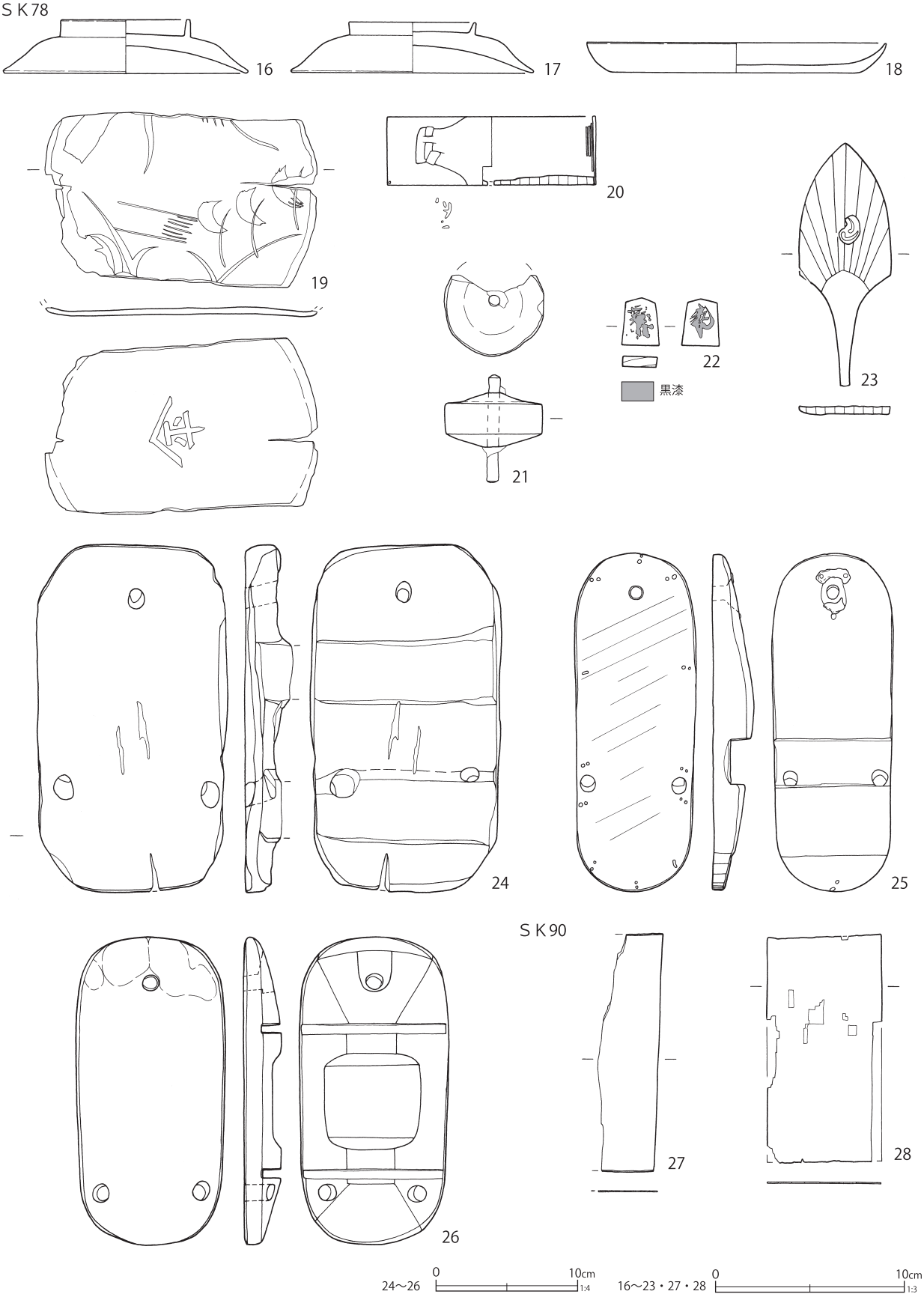
第 118 図 102・103 は瀬戸美濃系磁器の端反形碗で、102 の外面に篆書体文「木」の染付を施す。103 は無文で底部が露胎である。

第 119 図 110 は瀬戸美濃系磁器の木型打ち込み成形そり皿である。内面に陰刻文を施す。115 は瀬戸美濃系陶器の太白手広東碗で、栗橋宿での出土例は少ない。底部に二次穿孔がみられ、植木鉢に転用されたと考えられる。116 は産地不詳陶器の端反形碗で、第 89 号土壙で同品が出土している（第 94 図 13）。

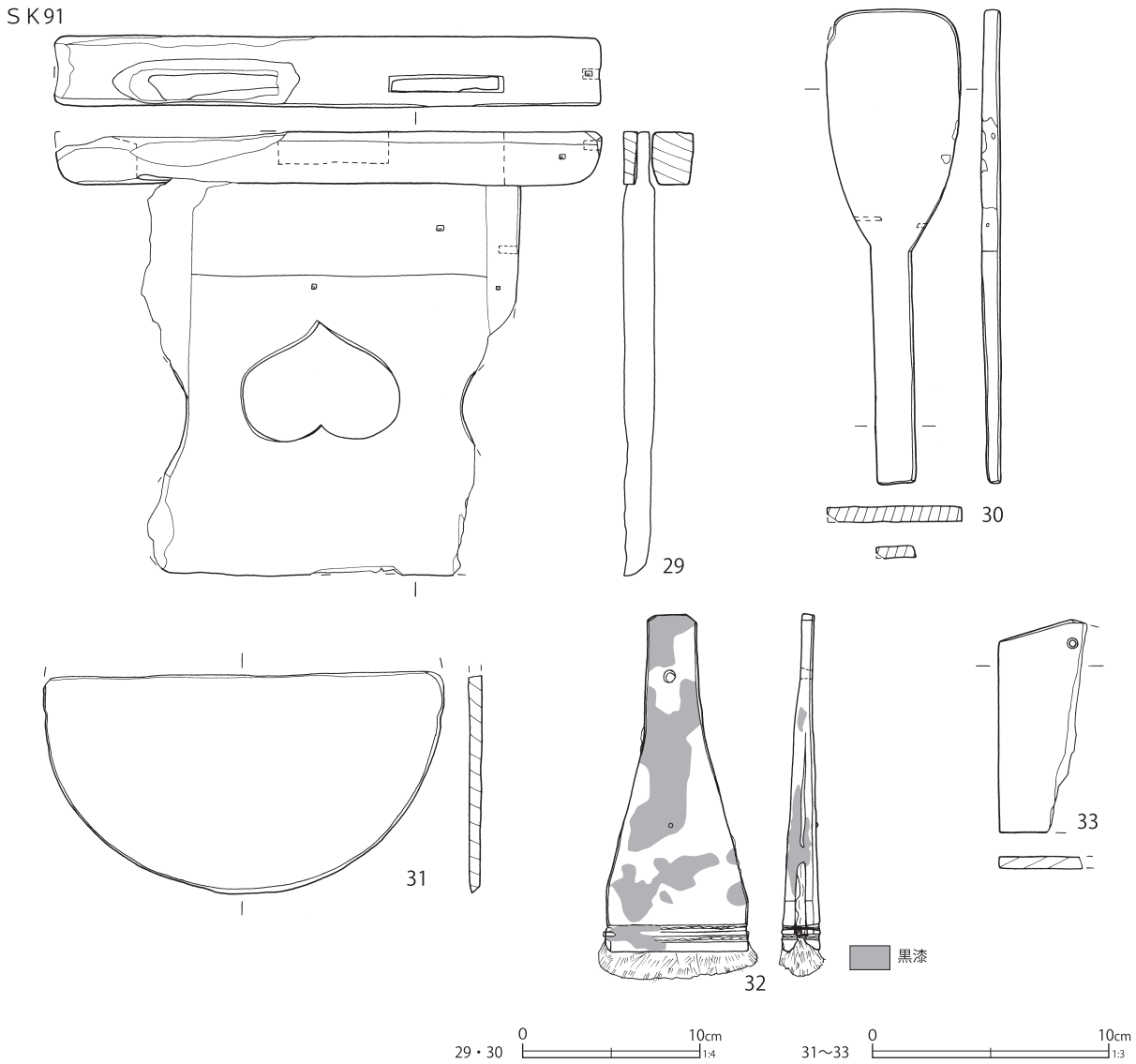
第 120 図 118 は京都信楽系陶器の灯明皿で、油皿の内面に油受皿がタール状の黒色付着物で癒着している。油皿の露胎部全面にもタール状の黒色付着物があり、下にも重ねていた可能性がある。



第 131 図　区画 AC 土壙出土遺物（25）



第 132 図　区画 AC 土壙出土遺物（26）



第 133 図　区画 AC 土壙出土遺物（27）

122・123 は東北・北関東地方を中心に分布する頸部別造りの大型長頸壺で、所謂「すず徳利」である。いずれも頸部断面に接ぎ跡がみられ、122 の外面にはトビガンナ状の施文がみられる。

第 121 図 136 は瓦質土器の脚付き火鉢である。底部無調整の砂目底で、表面は弱い酸化焔焼成により橙色気味を呈する。輪高台状の脚部には焼成前穿孔が２箇所みられる。内底面は同心円状のナデがみられ、中心付近に指頭痕状の圧痕が一周巡る。内側面下位には火箸による引っ掻き傷が残る。

第 127 図 6 はミニチュアで、羽釜である。底部に煤等の使用痕がみられなかったため、ミニチュアとして扱った。底部は右回転の糸切痕が遺存し、外面下位から底部にかけて白化粧が施される。外面上位から内面にかけて透明釉が施釉される。

第 131 図 12 ～ 15 は漆椀である。13 の外面には三巴の家紋が描かれ、高台内に「㊤㊥㊦」の文字が書かれる。14 は口縁部付近に稜を持つ器形である。15 は外面に漆による線状の装飾がある。高台内に「中」の文字が書かれる。第 132 図 16・17 は漆椀蓋で、揃いの漆器と考えられる。17 には被熱が見られる。18・19 は漆塗りの皿である。19 は黒漆塗で、赤と金で文様が描かれる。底部外面に「傘」の焼印が残る。21 は独楽である。

第 36 表　区画 AC 土壙出土遺物観察表（５）（第 131 ～ 133 図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	口径 / 径	高さ	底径	木取り	遺構	備考	図版
1	木製品	漆椀	－	－	－	12.1	5.1	9.8	横木取り	SK65	内外面赤漆 口縁部金 高台縁黒漆 炭化	127-11
2	木製品	漆椀	－	－	－	14.4	[4.7]	－	横木取り	SK65	内面赤漆 外面黒漆	127-12
3	木製品	蓋	－	－	－	5.6	3.0	－	横木取り	SK65	外面削りによる文様 銅製つまみ	127-13
4	木製品	箸	17.0	0.4	0.5	－	－	－	削出	SK65		
5	木製品	箸	17.7	0.6	0.4	－	－	－	削出	SK65		
6	木製品	箸	22.6	0.6	0.6	－	－	－	削出	SK65		
7	木製品	箸	22.6	0.5	0.4	－	－	－	削出	SK65		
8	木製品	束子	12.4	3.3	2.9	－	－	－	－	SK65	繊維を二重に巻く	
9	木製品	下駄	21.0	8.8	－	－	[2.7]	－	柾目	SK65	陰卯下駄 黒漆	
10	木製品	下駄	23.5	7.8	－	－	2.5	－	柾目	SK65	無眼下駄 木釘残	
11	木製品	下駄	23.6	7.6	－	－	2.7	－	板目	SK65	無眼下駄	
12	木製品	漆椀	－	－	－	－	[5.5]	7.6	横木取り	SK78	下地黒色塗料 内面赤漆 外面黒漆	
13	木製品	漆椀	－	－	－	－	[6.0]	－	横木取り	SK78	内面赤漆 外面黒漆 ３箇所に紋「三巴」高台内に赤で「㊥」	
14	木製品	漆椀	－	－	－	(11.1)	4.4	5.4	横木取り	SK78	内外面黒漆 歪み大	127-16
15	木製品	漆椀	－	－	－	－	[5.0]	6.0	横木取り	SK78	内外面黒漆 高台内に朱で「中」	
16	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径 6.6		(12.7)	2.6	－	横木取り	SK78	内面赤漆 外面黒漆	127-17
17	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径 6.8		12.8	2.8	－	横木取り	SK78	内面赤漆 外面緑又は黒色の漆 被熱	
18	木製品	漆皿	－	－	－	15.7	1.5	13.0	横木取り	SK78	表裏面黒漆 炭化	128-1
19	木製品	漆皿	[9.2]	[14.4]	－	－	[0.5]	(13.7)	横木取（板目）	SK78	内面黒漆 外面下地残存 赤と金で文様 底面に焼印「㊥」	
20	木製品	曲物	－	－	－	11.0	3.5	－	柾目	SK78	樹皮紐 底板孔１ 焼印 鉄釘穴３ 側板鉄釘穴３ 黒漆	
21	木製品	独楽	－	－	－	5.3	5.7	－	板目	SK78	鉄芯	128-2
22	木製品	将棋駒	2.5	2.0	0.6	－	－	－	板目	SK78	表面黒漆で「飛車」裏面黒漆で「龍」	128-3
23	木製品	神酒口	12.8	4.8	0.4	－	－	－	柾目	SK78	扇部分に銅鋲（三巴）	128-4
24	木製品	下駄	24.5	13.4	－	－	3.4	－	板目	SK78	連歯下駄	128-5
25	木製品	下駄	23.9	8.5	－	－	2.9	－	柾目	SK78	刳り下駄 表面鋸痕　留め金具 前穴に金属	
26	木製品	下駄	21.8	10.5	－	－	[2.7]	－	柾目	SK78	陰卯下駄	
27	木製品	経木	12.4	[3.1]	0.05	－	－	－	柾目	SK90	表裏面墨書 表：一石六拾四文［　］裏：不明	144-7
28	木製品	経木	11.8	6.0	0.08	－	－	－	柾目	SK90	表裏面墨書	144-8
29	木製品	机脚部	25.0	30.8	4.0	－	－	－	板目	SK91	中央に孔	
30	木製品	不明品	26.8	7.5	0.9	－	－	－	板目	SK91	表・側面金属付着	128-9
31	木製品	曲物	－	－	0.6	16.4	－	－	板目	SK91	底板　表面墨書「梅干」	144-10
32	木製品	刷毛	15.8	6.7	1.9	－	－	－	板目	SK91	漆状の付着物 中央に鉄釘 下部両面に木釘１つずつ	128-10
33	木製品	木札	8.7	3.5	0.5	－	－	－	板目	SK91	表面墨書「石川亀吉」	144-9

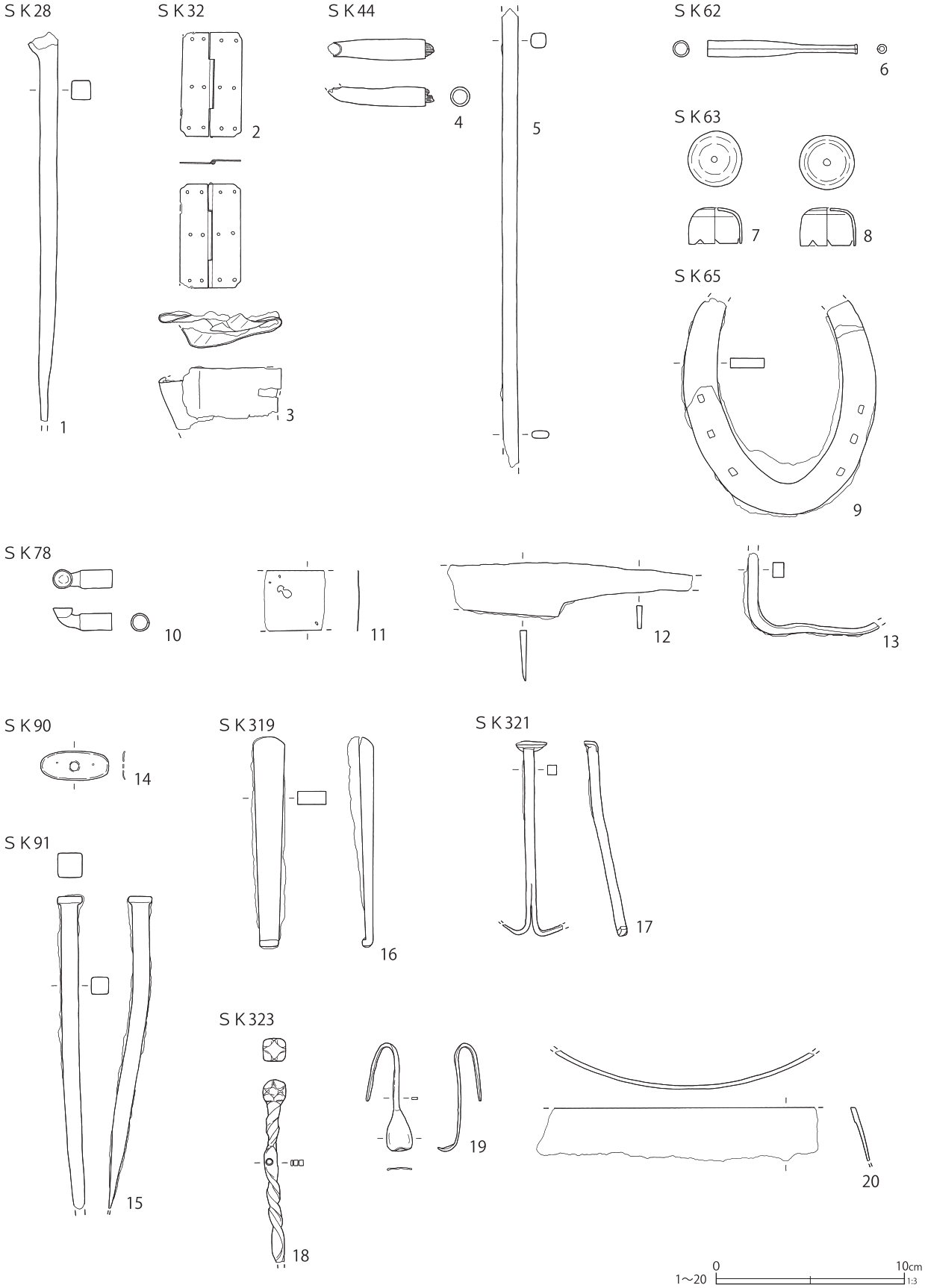
軸は鉄製である。22 は将棋駒で、黒漆で「飛車」「龍」と書かれる。23 は神酒口である。三巴の銅製の鋲が残存する。24 ～ 26 は下駄である。24 は連歯下駄である。長さ 24.5 ㎝、幅 13.4 ㎝である。連歯下駄の幅は９～ 10 ㎝程度が主体であり、幅広の下駄である。台は角が落とされた形である。26 は陰卯下駄で、台裏面の中央が窪む形である。

第 134 図 10 は銅製煙管の雁首である。第 135 図３は文久永寶の四文銭で、初鋳年は 1863 年である。

第 136 図６は白色の流紋岩製砥石である。両側面には、中央に凸帯状の段が付くノコギリ状工具痕がみられる。裏面や下端面には削り痕がみられ、刃幅の広い工具痕の可能性がある。

以上に取り上げた土壙の他にも、特徴的な遺物が出土しているので、以下に記述していく。

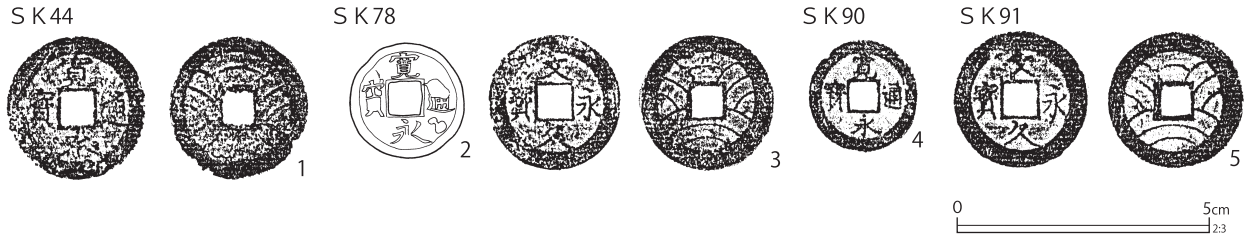
第 107 図３は瓦質土器の火鉢である。江戸遺



第 134 図　区画 AC 土壙出土遺物（28）

第 37 表　区画 AC 土壙出土遺物観察表（６）（第 134 図）

番号	種別	器種	法量	遺構名	備考	図版
1	鉄製品	釘ヵ	長さ［20.7］幅 1.0 厚さ 1.0 重さ 96.0	SK28		
2	銅製品	蝶番	長さ 5.5 幅 3.2 厚さ 0.08 重さ 3.9	SK32		
3	銅製品	不明	縦［3.3］横［6.5］厚さ 0.1 重さ 11.2	SK32	潰された状態の銅板	
4	銅製品	煙管	長さ［5.2］小口径 1.0 重さ 9.8	SK44	雁首 火皿欠失 羅宇残存	
5	鉄製品	不明	長さ［24.3］幅 0.8 厚さ 0.4 重さ 63.7	SK44		
6	銅製品	煙管	長さ 7.9 小口径 0.8 口付径 0.5 重さ 7.5	SK62	吸口	
7	銅製品	不明	径 2.9 × 2.8 高さ 1.9 厚さ 0.1 重さ 9.1	SK63	頂部に小孔 裾の切込み５箇所	
8	銅製品	不明	径 2.9 高さ 2.0 厚さ 0.1 重さ 12.8	SK63	頂部に小孔 裾の切込み５箇所	
9	鉄製品	蹄鉄	縦［11.4］横 10.2 厚さ 0.5 重さ 163.7	SK65	釘なし	
10	銅製品	煙管	長さ 3.1 火皿径 1.0 小口径 0.9 重さ 5.5	SK78	雁首	
11	銅製品	不明	縦 3.2 横［3.3］厚さ 0.05 重さ 4.0	SK78	錠前の一部ヵ	
12	鉄製品	包丁	長さ［13.0］刃長［5.9］刃幅 2.7 背幅 0.4 重さ 45.0	SK78		
13	鉄製品	釘ヵ	縦［4.4］横［7.0］幅 0.8 厚さ 0.6 重さ 22.6	SK78		
14	銅製品	煙草入れ金具	縦 1.5 横 3.6 厚さ 0.03 重さ 1.6	SK90	袋の前金具の裏金	
15	鉄製品	釘	長さ［16.6］幅 0.9 厚さ 0.9 重さ 98.5	SK91		
16	鉄製品	不明	長さ 11.2 幅 1.5 厚さ 0.7 重さ 45.1	SK319		
17	鉄製品	釘	長さ［10.3］幅 0.5 厚さ 0.5 重さ 15.7	SK321	脚部二又	
18	鉄製品	火箸	長さ［9.7］幅 0.7 厚さ 0.3 重さ 14.7	SK323	箸頭面取り 持ち方捩れ 中央に繋ぎ用の小孔あり	
19	銅製品	匙	長さ 5.7 幅 1.3 厚さ 0.1 重さ 3.2	SK323		
20	鉄製品	釜	径（13.5）厚さ 0.2 重さ 45.9	SK323		



第 135 図　区画 AC 土壙出土遺物（29）

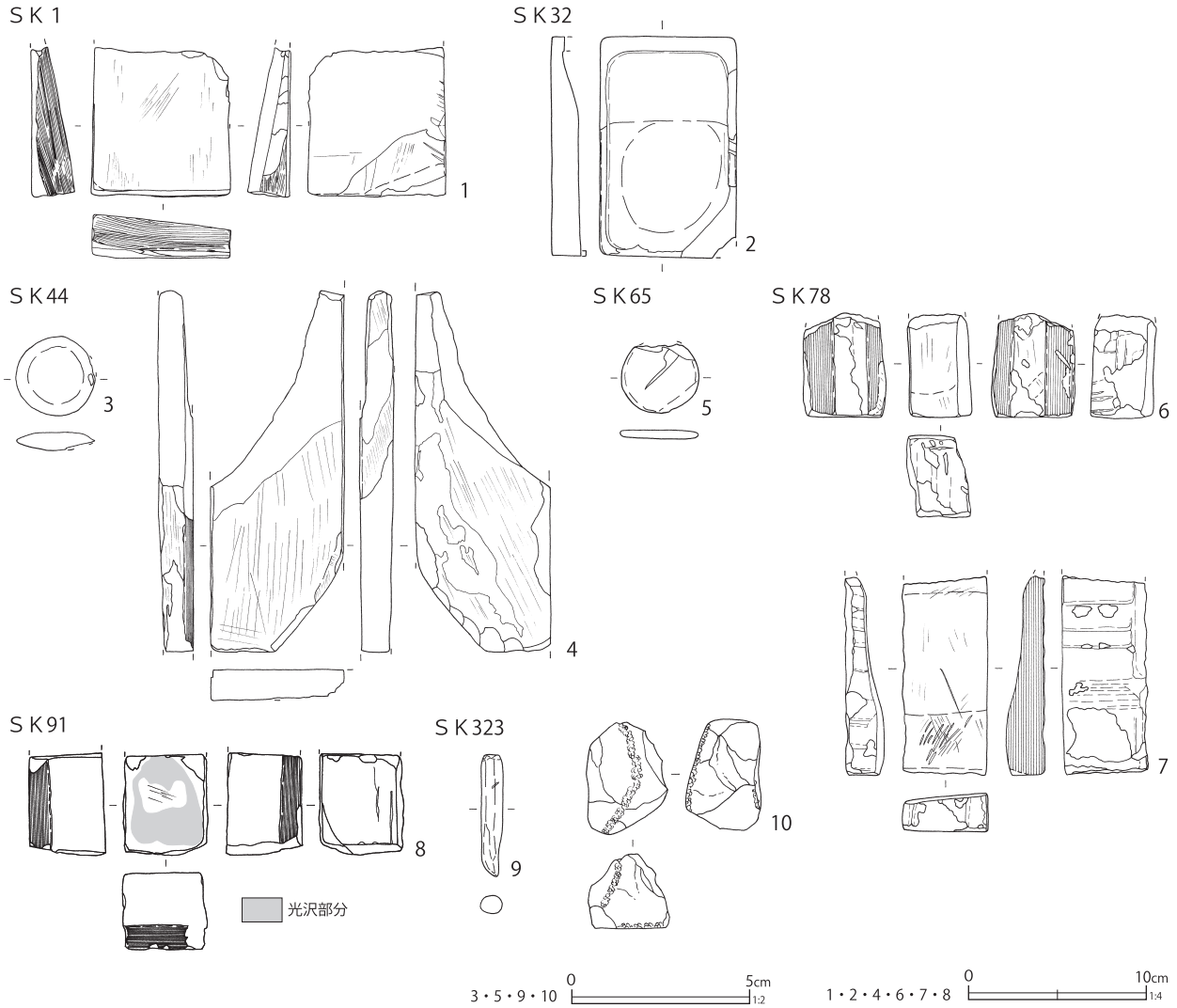
第 38 表　区画 AC 土壙出土遺物観察表（７）（第 135 図）

番号	種別	器種	法量	遺構名	備考	図版
1	銅製品	銭貨	径 28.3 厚さ 1.5 重さ 4.3	SK44	寛永通寶（新）11 波	
2	銅製品	銭貨	径 22.0 厚さ 0.8 重さ 1.2	SK78	寛永通寶（新）	
3	銅製品	銭貨	径 26.7 厚さ 1.2 重さ 3.2	SK78	文久永寶	
4	鉄製品	銭貨	径 21.8 厚さ 1.1 重さ 2.0	SK90	寛永通寶（新）	
5	銅製品	銭貨	径 27.3 厚さ 1.4 重さ 3.6	SK91	文久永寶	

跡でみられる丸火鉢に類似する器形だが、円形や角形の透かし彫りがあり、器台の可能性も考えられる。10 は、備前系陶器の人形徳利である。体部を２箇所凹ませ、凹みに型成形の人形を貼り付けている。外面上位は糸目状沈線がみられる。焼継痕がみられ、底部には朱書きで「□□□□ / 大黒屋」とみえる。

第 125 図 159 は土師質土器の把手付焙烙である。底部はムシロ状の圧痕をナデ消しており、内底面に同心円状のナデがみられる。胎土に石英や小礫が多く含まれる特徴があり、遠隔地からの搬入品の可能性が高い。

第 126 図 165 は瀬戸美濃系磁器の燗徳利である。底部に墨書「舍」がみえ、第６地点区画 J の『絵図』にみえる「住吉屋 / 餅菓子屋 / 爾吉」（埼埋文 2019c）、もしくは第７地点区画 AK １にみえ



第 136 図　区画 AC 土壙出土遺物（30）

第 39 表　区画 AC 土壙出土遺物観察表（８）（第 136 図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	遺構	備考	図版
1	石製品	砥石	[8.4]	7.8	2.4	183.6	粘板岩	SK1	側面ノコギリ痕 砥面２ 裏面刃物痕あり	
2	石製品	硯	[12.4]	[7.6]	―	293.1	粘板岩	SK32	器高 1.9cm 被熱・煤付着	
3	石製品	碁石	径 2.2		0.5	3.5	粘板岩	SK44		138-4
4	石製品	砥石	[20.3]	7.6	1.9	396.7	粘板岩	SK44	側面ノコギリ痕 砥面４ 裏・側面酸化鉄付着	139-13
5	石製品	碁石	径 2.2		0.2	1.9	粘板岩	SK65		138-4
6	石製品	砥石	[5.8]	3.7	4.6	150.8	流紋岩	SK78	側面ノコギリ痕 裏面幅広工具痕ヵ・刃物痕 端部削痕 砥面３	
7	石製品	砥石	[11.2]	4.8	2.2	171.8	流紋岩（緑色）	SK78	側面ノコギリ痕 側・裏面幅広工具痕 表面刃物痕 砥面１	139-13
8	石製品	砥石	[5.7]	[4.8]	[4.3]	236.8	ホルンフェルス	SK91	側面ノコギリ痕 裏面刃物傷 砥面１ 被熱（一部黒化・光沢）	
9	石製品	石筆	3.4	0.6	0.6	1.9	滑石（白）	SK323	両端使用	
10	石製品	火打石	3.2	2.3	2.1	18.0	石英	SK323	使用痕あり	

る「森田屋 / 炭薪商 / 北島半次郎」、未調査区である区画 AI の『絵図』にみえる「饂飩屋 / 吉左衛門」のいずれかの屋号である可能性が考えられる。

第 127 図 1 は瀬戸美濃系磁器で、極小の紅坏である。型成形で貝殻状の筋が施文される。

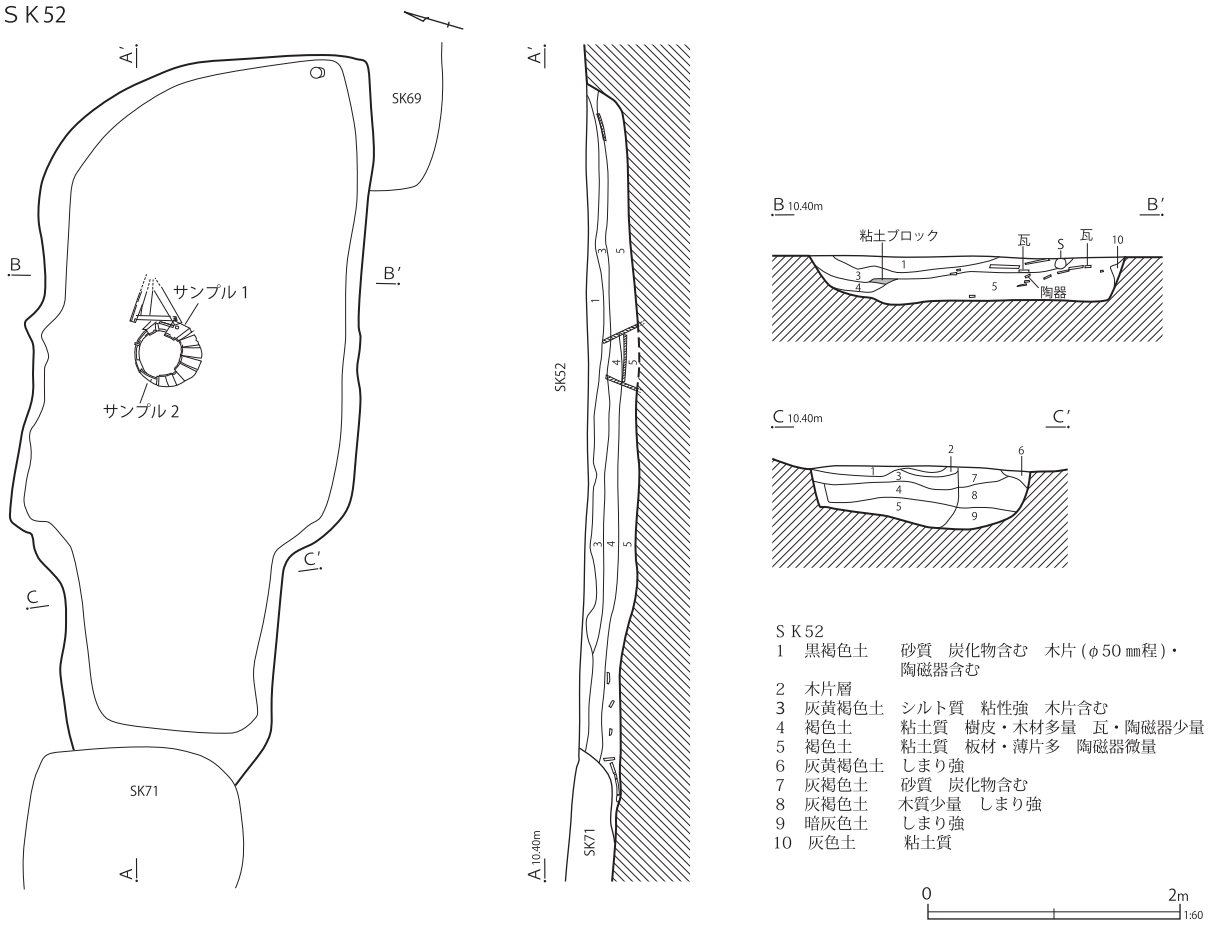
第 130 図 6 は軒丸瓦である。上半部が欠失しているが、「吉」の屋号を表した瓦当面である。既報告である第 5 地点（埼埋文 2020c）に位置する「米穀糸繭商 / 原勢屋 / 小林佐助」の屋号と同一だが、位置がかなり離れているため、第 8 地点内の屋号の可能性が考えられる。

第 132 図 27・28 は経木である。27 には「一石六拾四文［　］」の墨書が残る。第 133 図 29 は机の脚部と考えられる。板と横木の二つの材を組み合わせている。板材には猪目の穴があけられている。30 は杓子形の木製品である。受部の窪みが見られず、側面に金属の痕跡があることから、杓子としなかった。31 は曲物の蓋である。墨書で「梅干」と推定される文字が書かれている。32 は刷毛である。持ち手には黒漆が残り、刷毛の端部は漆が付着している。

第 134 図 14 は銅製の煙草入れ金具で、袋の前金具の裏金である。17 は鉄製の頭巻釘で、先端

第 40 表　第一面区画 AD 土壙一覧表　　単位：m

番号	グリッド	形態	長軸	短軸	深さ	方位	備考	挿図
37	F7-D6	楕円形	(0.80)	0.85	0.25	N-21°　-W	SK39 より新	148
38	F7-D6	隅丸長方形	1.40	1.00	0.45	N-75°　-E		148
39	F7-D6	楕円形	1.60	1.35	0.25	N-70°　-E	SK37 より古　桶 3・4・7 より新	148
40	F7-D6	隅丸長方形	1.80	1.55	0.40	N-70°　-E	桶 4 より新　SK50 と重複	148
41	F7-D6	楕円形	0.75	0.60	0.40	N-27°　-E	焼土土壙 5c・SK76 より新	148
50	F7-D6	楕円形	0.70	(0.45)	0.20	N-83°　-E	SK40 と重複	148
51	F7-D6	円形	0.80	0.75	0.20	N-19°　-W		148
52	F7-C6・D6・7	不整形	(5.75)	2.70	0.50	N-75°　-E	SK69・71 より古	137
53	F7-D6	隅丸長方形	(1.10)	0.70	0.80	N-70°　-E	SD2 より新	148
54	F7-C7	隅丸長方形	1.10	0.55	0.25	N-73°　-E		148
56	F7-C7	隅丸方形	1.60	1.50	0.40	N-15°　-W	SK57 より古	149
57	F7-C7	隅丸長方形	1.70	1.50	0.15	N-13°　-W	SK56 より新	149
58	F7-D7	隅丸長方形	2.00	1.35	0.70	N-75°　-E		149
59	F7-C・D7	隅丸長方形	2.90	2.40	0.25	N-73°　-E	SK69 と重複	149
66	F7-D7	隅丸長方形	1.50	0.75	0.45	N-70°　-E	SD2 より新	149
69	F7-D7	不明	1.70	(0.85)	0.10	N-76°　-E	SK52 より新　SK59 と重複	149
71	F7-D6	隅丸方形	1.70	1.50	0.35	N-18°　-W	SK52 より新	150
76	F7-D6	隅丸長方形	0.80	0.75	0.40	N-45°　-W	SK41 より古　焼土遺構 5c と重複	148
247	F7-D7・8	隅丸長方形か	3.80	(0.80)	0.20	N-73°　-E	SD2 より新	150
280	F7-C7・8	隅丸方形	1.75	1.60	0.70	N-73°　-E	SK289 より新	150
281	F7-C8	隅丸長方形	1.20	1.00	0.50	N-28°　-W	SK300 より新	150
284	F7-C8	隅丸長方形	2.65	2.30	0.35	N-20°　-W	SK292 より古　SK317・328 より新　SK293 と重複 SK288 と隣接	151
288	F7-C7・8	隅丸長方形	2.90	1.20	0.50	N-68°　-E	SK317 より新　杭列 3・SK284 と重複	151
289	F7-C7	不整形	1.70	0.70	0.35	N-18°　-W	SK280 より古	150
292	F7-C8	隅丸長方形	1.25	0.75	0.65	N-20°　-W	SK284 より新	151
293	F7-C8	隅丸長方形	1.20	0.60	0.25	N-20°　-W	SK317 より新　SK284 と重複	151
294	F7-C7・8	隅丸方形	1.10	0.95	0.20	N-23°　-W		150
300	F7-C・D8	楕円形	1.95	1.05	0.10	N-77°　-E	SK281 より古	150
317	F7-C8	不整形	(1.65)	0.70	0.45	N-70°　-E	SK284・288・293 より古	151
324	F7-C8	隅丸長方形	1.50	1.30	0.85	N-73°　-E		150
328	F7-C8	楕円形	0.65	0.50	0.15	N-53°　-W	SK284 より古	151



第137図　区画AD土壙（1）

が二股となっている。20は鉄釜の口縁部である。

第136図1は粘板岩製の砥石で、側面に極めて密なノコギリ状工具痕がみられる。8はホルンフェルス製の砥石で、側面に極めて密なノコギリ状工具痕がみられる。被熱し、砥面は一部黒化・光沢が認められる。

④区画ADの土壙（第137～178図）

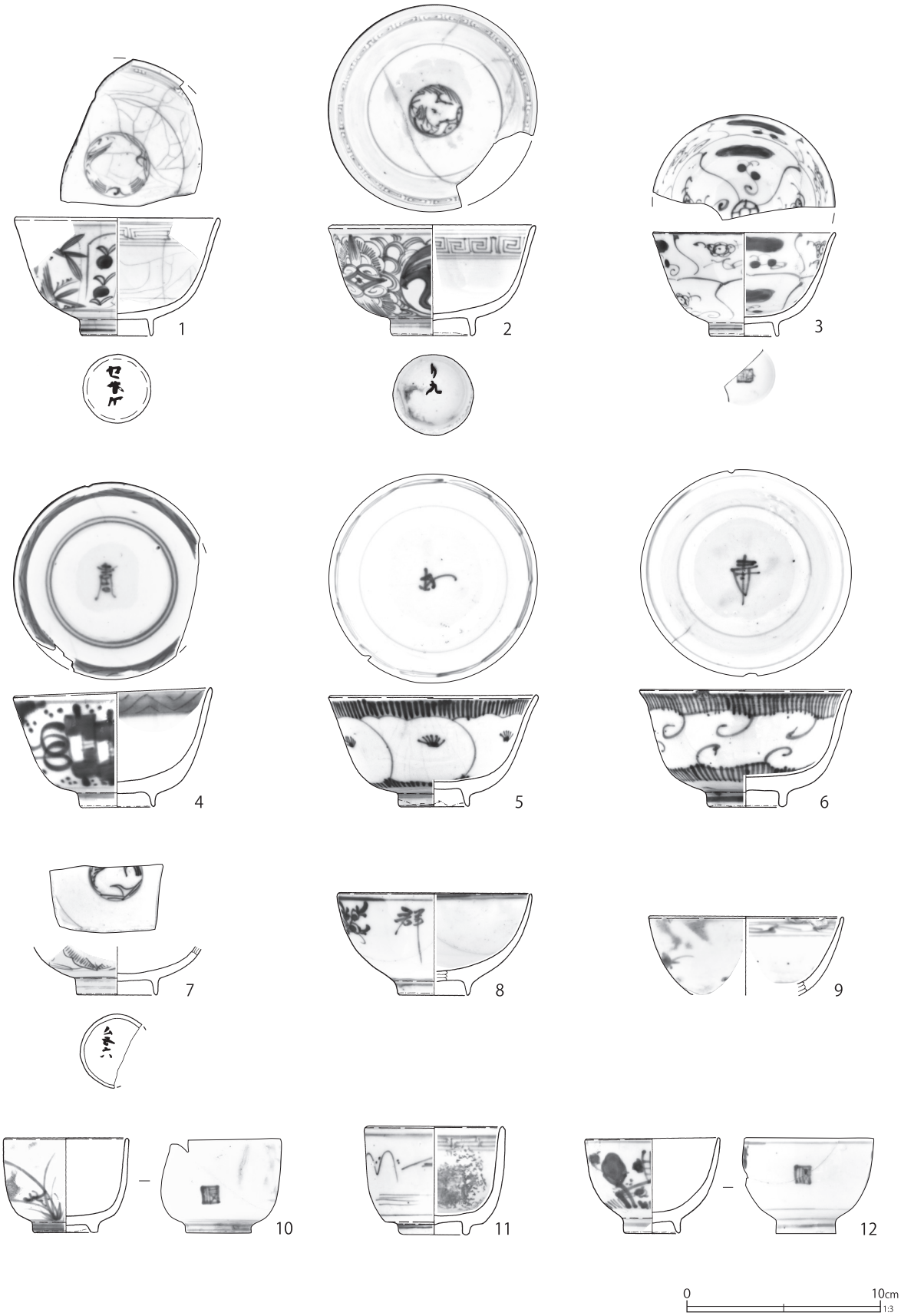
区画ADは第3号杭列・第1号溝跡より南、第2号溝跡より北に位置し、『絵図』にみえる「煮賣屋／兵藏」、『営業便覧』にみえる「田口龍太郎」の区画である。『営業便覧』の時期には隣接する区画ACを含めた一つの区画となっている。

土壙は31基検出された。うち第53・66・247号土壙は第2号溝跡と重複する。遺構は調査区の中央から東側に集中し、西側には大きく空間ができている。大型土壙が数基みられるが、多くは中・小型の土壙である。平面形態は長方形・方形が多く、長軸方向は日光道中と直交・平行のいずれかだが、傾向は掴み難い。また、出土遺物については、煮賣屋に関わるような釘書き資料は見出せなかったが、第52号土壙は碗・坏類が豊富であることから煮賣茶屋的な様相がみえる。

第40表に位置・規模等の基本的な情報を示した。

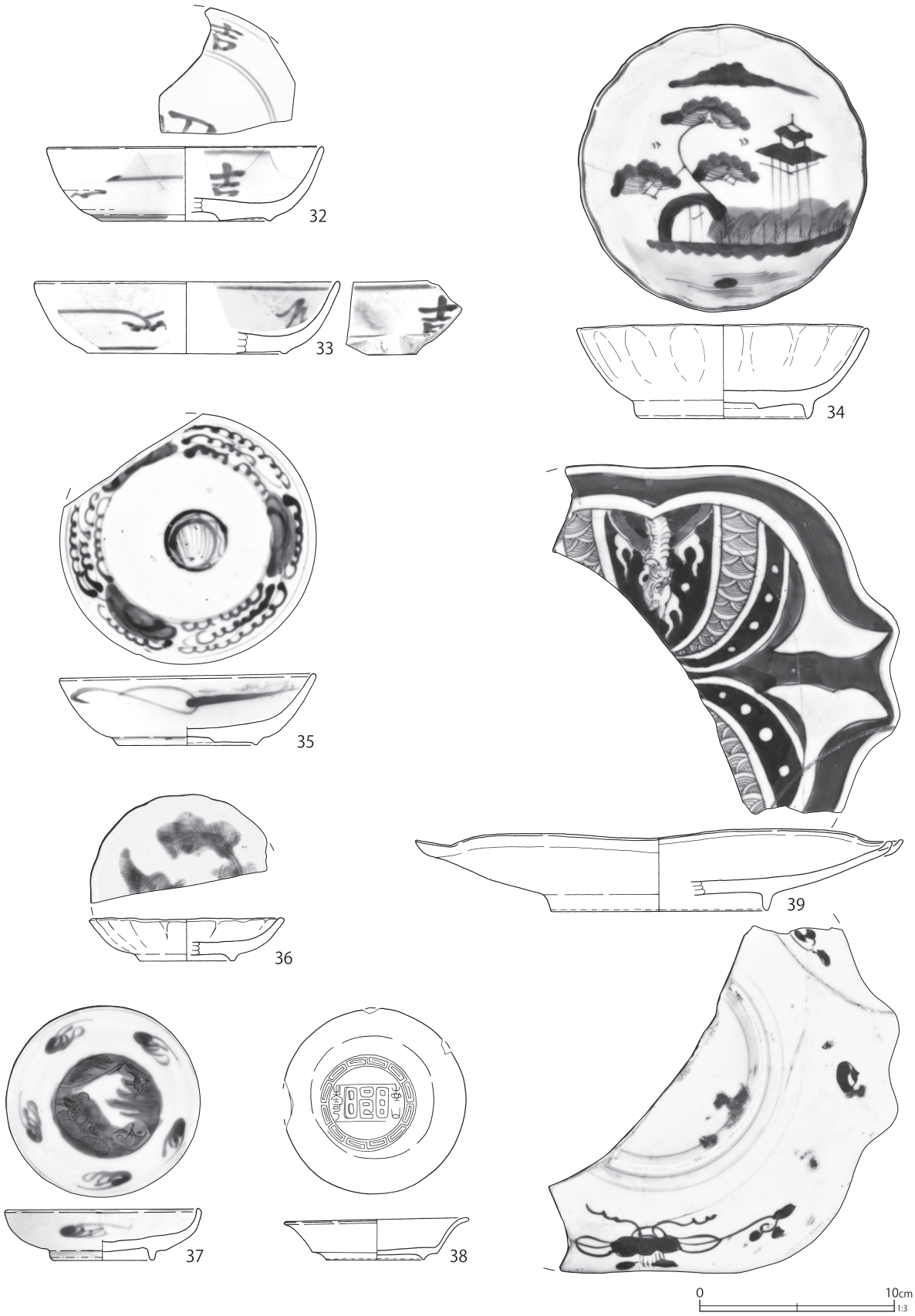
本区画で抽出した土壙は、第52号土壙である。先行して第137図に遺構図、第138～147図に遺物図を示した。また、非抽出となった土壙は第148～151に遺構図、第152～177図に遺物図を示した。

非抽出の土壙については、特徴的な土壙・遺物について記述していく。

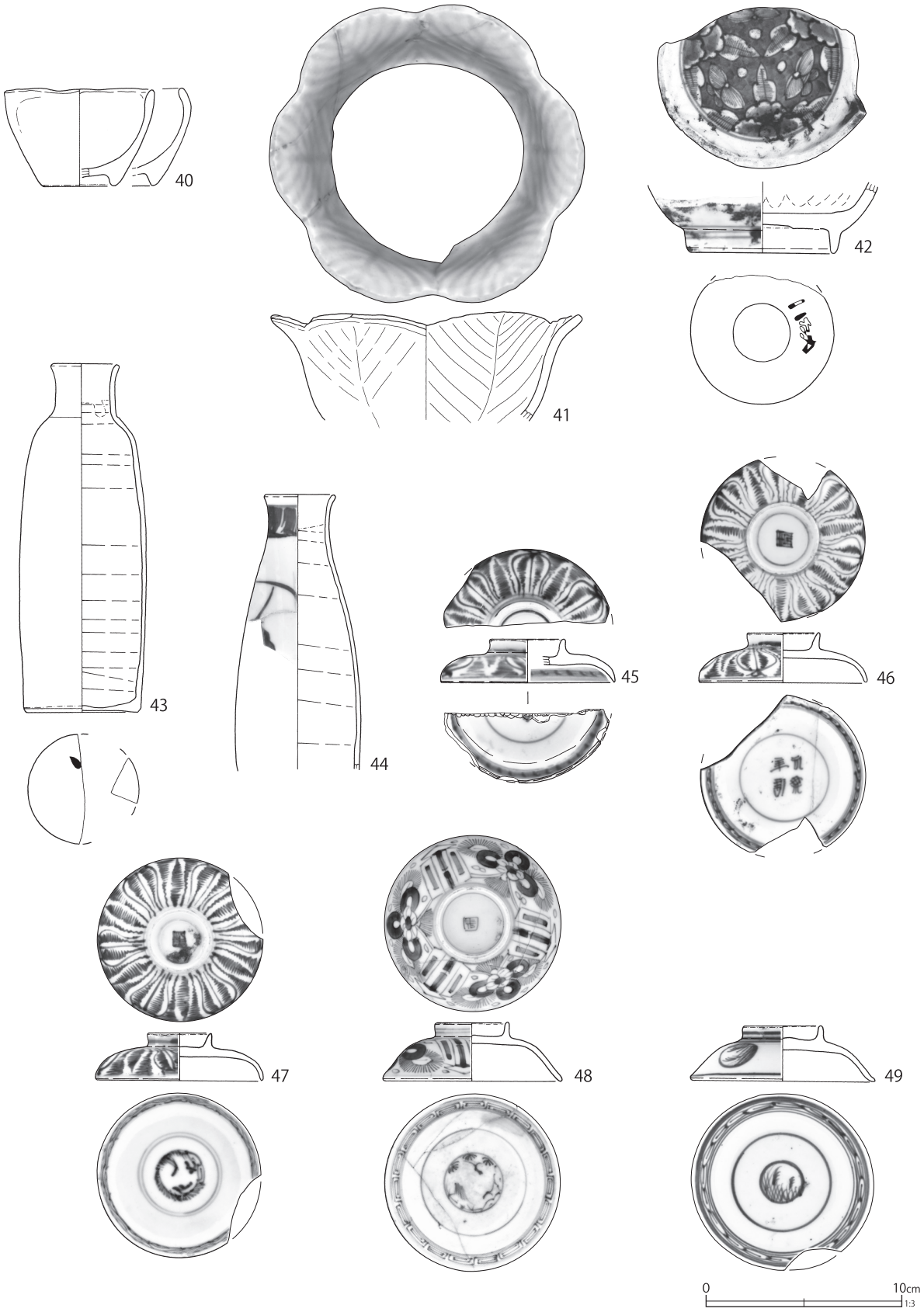


第 138 図　第 52 号土壙出土遺物（1）

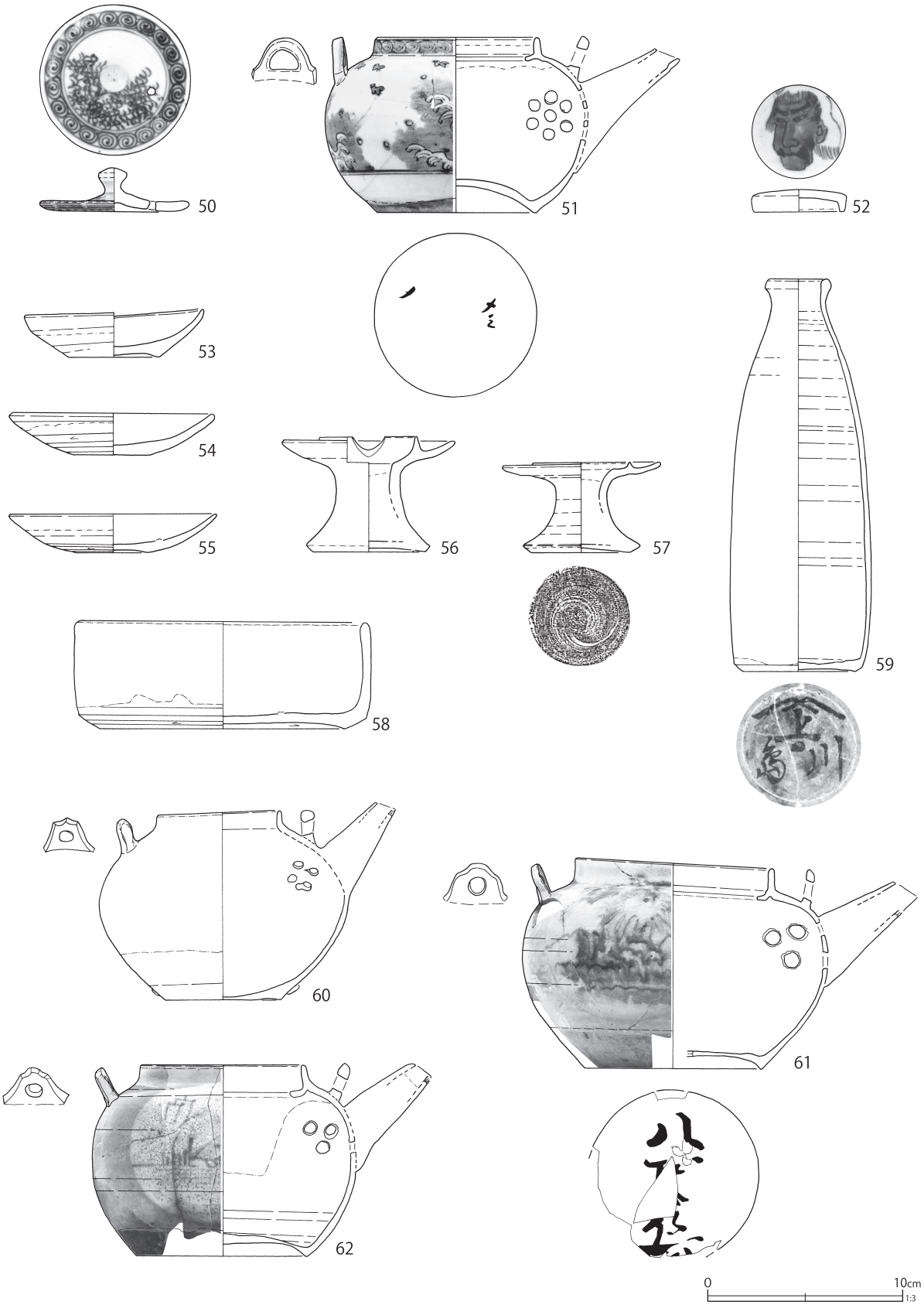
第 139 図　第 52 号土壙出土遺物（2）



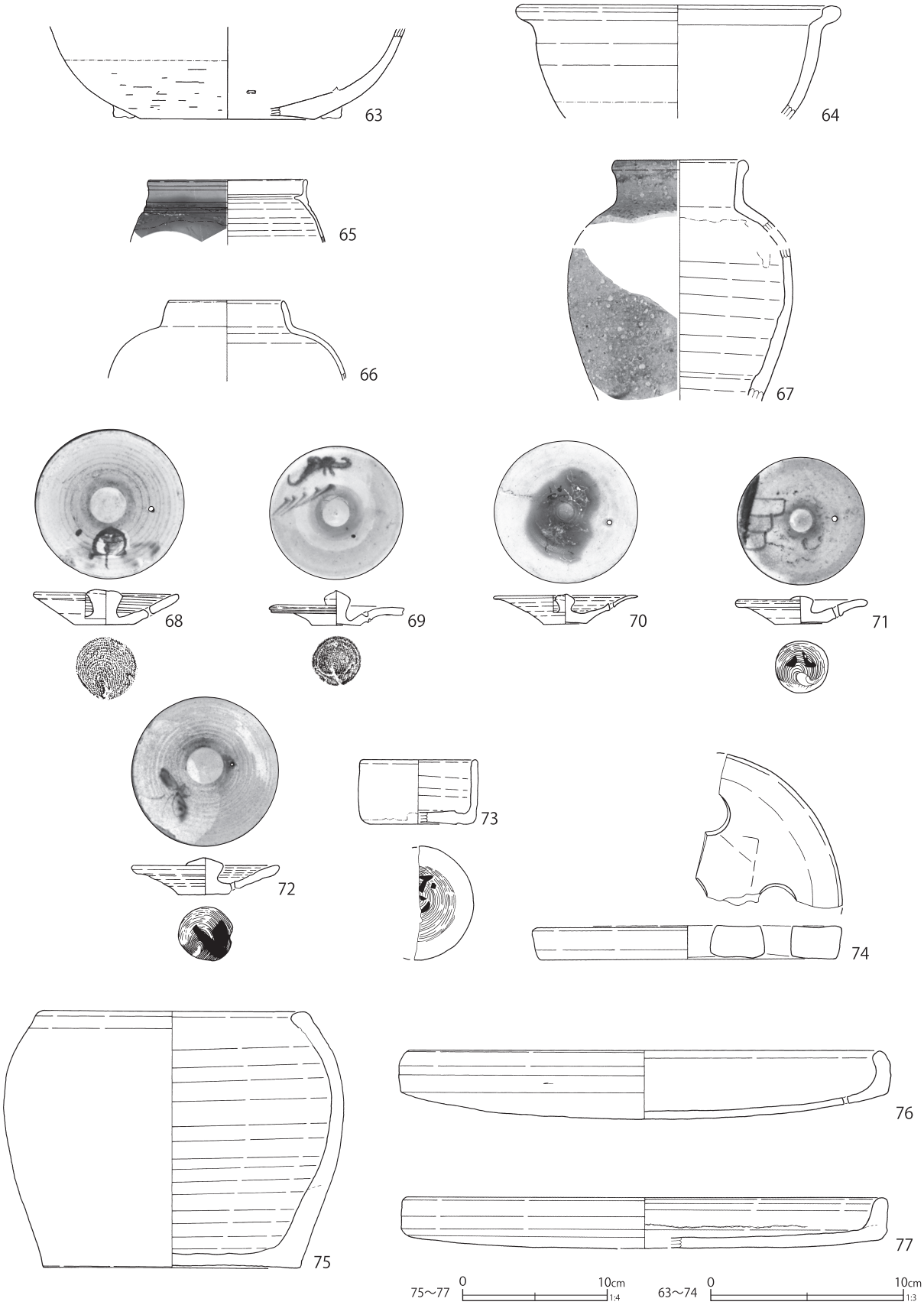
第 140 図　第 52 号土壙出土遺物（3）



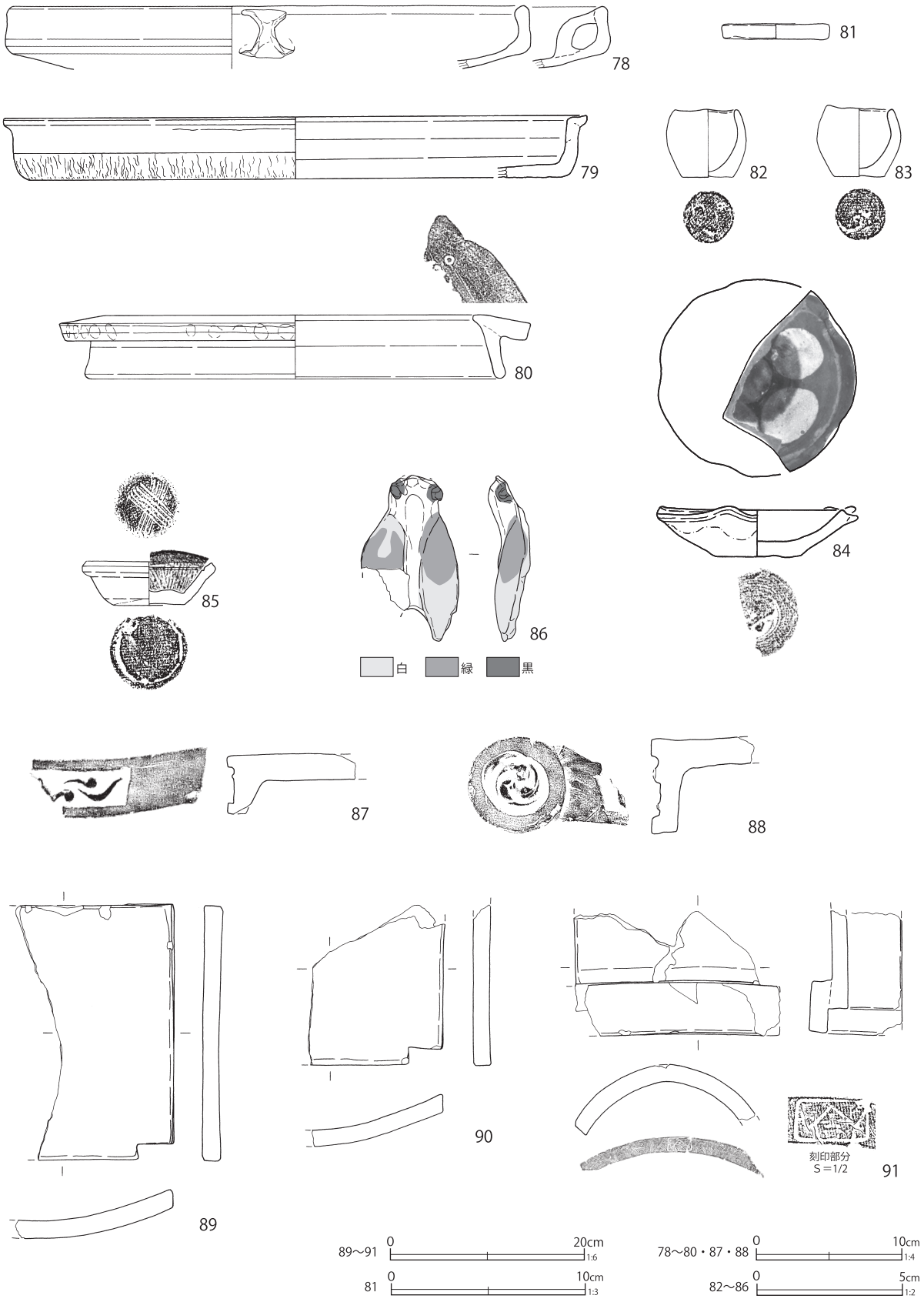
第 141 図　第 52 号土壙出土遺物（4）



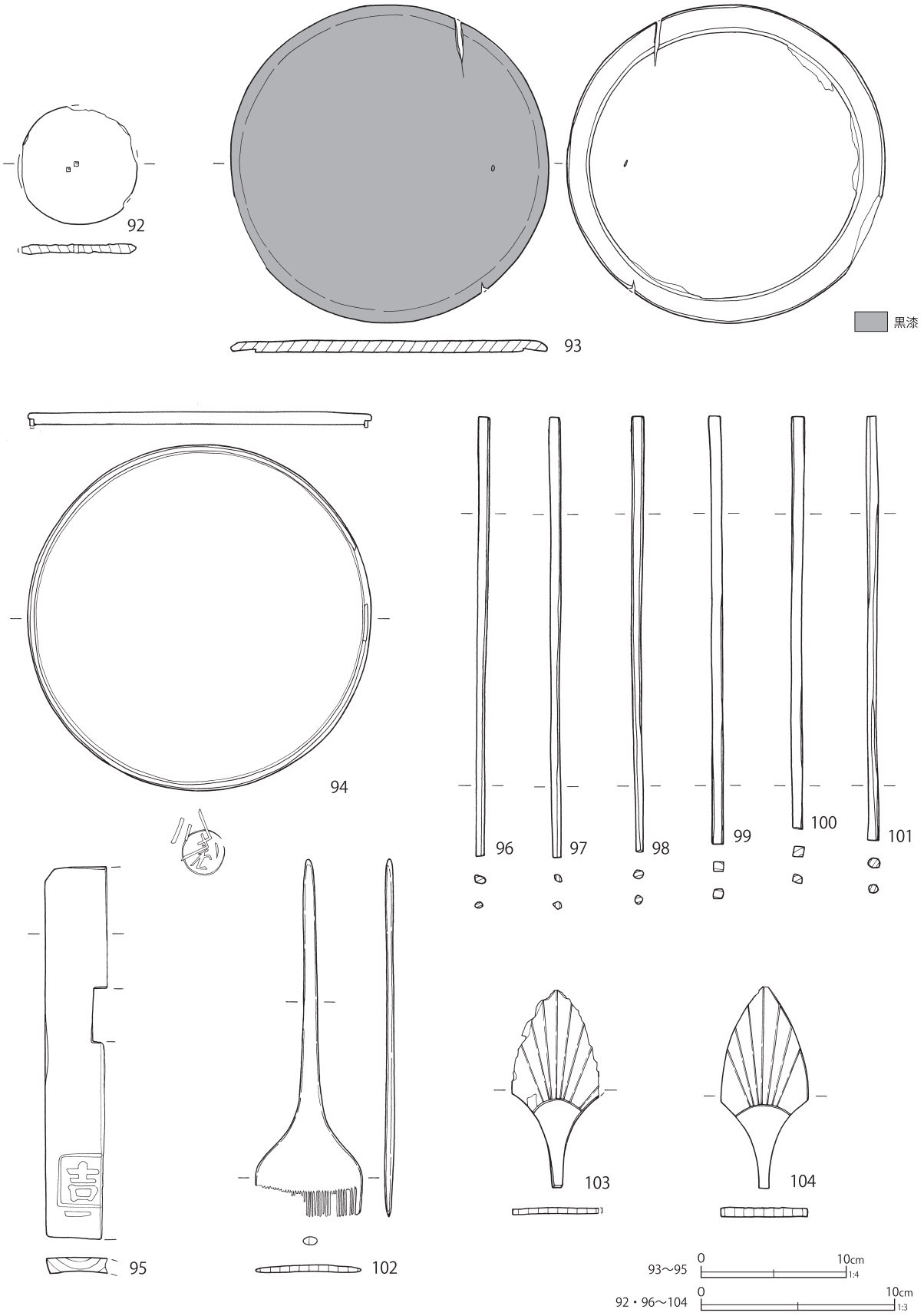
第 142 図　第 52 号土壙出土遺物（5）



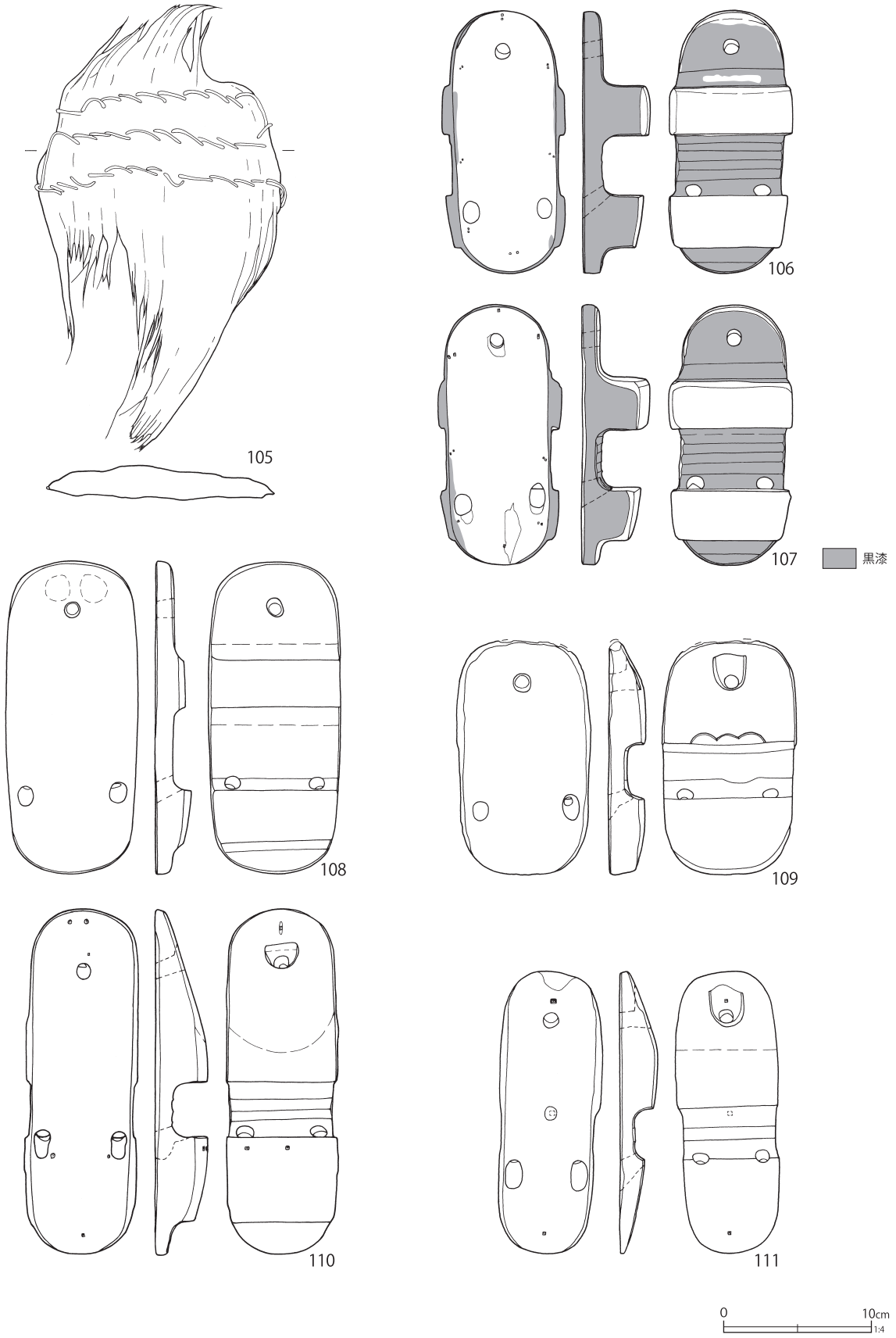
第 143 図　第 52 号土壙出土遺物（6）



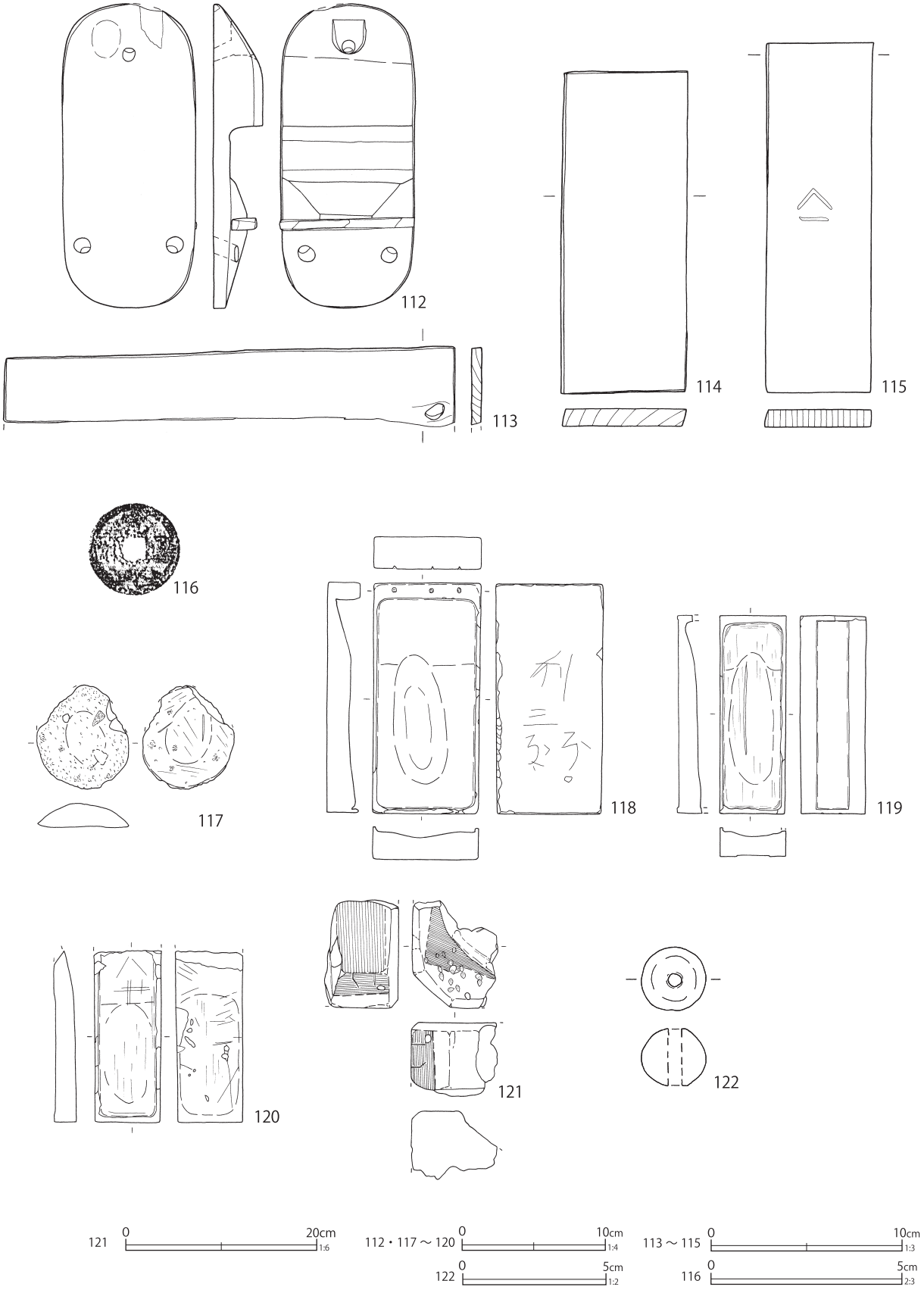
第 144 図　第 52 号土壙出土遺物（7）



第 145 図　第 52 号土壙出土遺物（8）



第 146 図　第 52 号土壙出土遺物（9）



第 147 図　第 52 号土壙出土遺物（10）

第 41 表　第 52 号土壙出土遺物観察表（第 138 ～ 147 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	(10.3)	6.1	3.5	―	35	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 高台内焼継印（赤）	73-1
2	磁器	碗	10.3	5.7	4.1	―	85	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 焼継痕あり 高台内焼継印（赤）同文別個体１あり	73-2
3	磁器	碗	(9.3)	5.3	(3.4)	―	45	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 口紅	
4	磁器	碗	10.0	5.9	3.7	―	80	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 内面上位陰刻文	
5	磁器	碗	10.6	5.7	3.5	―	95	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付	
6	磁器	碗	10.7	6.0	3.6	―	95	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付	
7	磁器	碗	―	[2.5]	(4.0)	―	10	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 高台内焼継印（赤）	72-11
8	磁器	碗	(9.8)	5.2	3.5	―	45	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・酸化コバルト染付	
9	磁器	碗	(10.8)	[4.0]	―	―	15	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 染付 被熱 欠失部二次利用ヵ	
10	磁器	碗	(6.2)	4.9	3.1	―	55	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付 被熱（弱）	
11	磁器	碗	6.8	5.5	3.3	―	50	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 被熱（弱）	
12	磁器	碗	6.8	4.9	2.8	―	80	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付 同文別個体１あり	
13	磁器	碗	(6.8)	4.6	3.2	―	40	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付	
14	磁器	碗	(6.2)	4.3	(2.4)	K	30	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面酸化コバルト染付 渦巻高台	
15	磁器	碗	6.4	4.2	2.8	―	100	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面酸化コバルト染付 内面被熱	
16	磁器	坏	―	[4.3]	3.4	K	25	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 内面型押陰刻文 高台内刻印「カワラ」ヵ	72-20
17	磁器	坏	―	[1.9]	2.4	―	60	良好	白	肥前系 内外面施釉 内面上絵付（赤・緑・黒・黄・青緑）被熱（弱）	
18	磁器	坏	5.9	2.9	2.4	―	95	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付 内面上絵付（青）	
19	磁器	坏	(6.0)	2.8	2.4	―	65	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付 内面上絵付（青）・（赤「中田」）	
20	磁器	坏	(5.9)	2.5	(2.1)	―	35	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付 内面上絵付（青が黒化）	
21	磁器	坏	6.1	2.6	2.4	―	55	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付 内面上絵付（青）	
22	磁器	坏	(6.5)	2.9	(2.2)	―	30	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付 内面上絵付（青）	72-12
23	磁器	坏	5.9	2.7	2.2	―	60	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付 内面上絵付（青）「㊗／一新講」	72-13
24	磁器	坏	(6.0)	2.8	2.1	―	65	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付 内面上絵付（青）「㊗／一新講」	72-14
25	磁器	坏	(5.9)	2.7	2.3	―	95	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付 内面上絵付（青・金）「名酒／原勢製／醸造／盛」	72-15
26	磁器	坏	(6.3)	2.7	2.4	―	50	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付 内面上絵付（青）「固」	72-16
27	磁器	坏	(5.7)	2.6	2.3	―	35	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付 内面上絵付（青・金）「名酒／原勢製／醸造／盛」	72-17
28	磁器	坏	6.1	2.8	2.0	―	70	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付・煤付着 内面上絵付（青）	
29	磁器	坏	6.1	2.8	2.4	―	85	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付 同文別個体１あり	
30	磁器	坏	(5.2)	5.6	3.7	―	70	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・酸化コバルト染付 腰部釉剥落	
31	磁器	坏	6.3	5.2	2.8	―	65	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面酸化コバルト染付	
32	磁器	皿	(14.0)	2.8	(8.6)	―	35	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付文字「吉／田」	67-2
33	磁器	皿	(15.4)	3.7	(10.0)	―	10	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 内面染付文字「吉［田］屋」蛇ノ目凹形高台 被熱（弱）	66-12
34	磁器	皿	14.7	4.7	8.6	―	100	良好	白	肥前系 内外面施釉 内面染付 口紅	
35	磁器	皿	12.9	3.6	7.0	―	90	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付	
36	磁器	皿	(9.5)	2.2	(4.8)	―	60	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 内面染付・型押陰刻文	
37	磁器	皿	9.7	2.6	5.0	―	95	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 口紅 内面型押陰刻文	
38	磁器	皿	9.4	2.1	5.0	―	95	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 内面型押陰刻文	
39	磁器	皿	(24.8)	4.1	(11.0)	―	40	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 焼継痕あり	
40	磁器	鉢	(7.3)	5.0	(3.4)	―	40	良好	灰白	三田系ヵ 内外面青磁釉 口縁部歪ませる 渦巻高台	
41	磁器	鉢	15.4	[4.7]	―	―	95	良好	白	肥前系ヵ 型成形 内外面青磁釉・陰刻文	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
42	磁器	鉢	—	[3.6]	7.2	—	90	良好	白	肥前系 内外面青磁釉・染付 焼継痕あり 高台内焼継印（赤）・輪状重焼痕 煤付着	
43	磁器	燗徳利	3.2	17.6	5.6	—	90	良好	白	瀬戸美濃系 外面施釉 頸部隆起線 底部墨痕 同製品別個体２あり	
44	磁器	燗徳利	3.4	[13.9]	—	—	50	良好	白	瀬戸美濃系 外面施釉・酸化コバルト染付 焼継痕あり 同文別個体１あり	
45	磁器	蓋	(3.6)	2.2	(8.7)	—	40	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 欠失部二次利用（剥離・潰れ）	
46	磁器	蓋	3.6	2.5	8.4	—	85	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 同文別個体１あり	
47	磁器	蓋	3.1	2.3	8.4	—	90	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付	
48	磁器	蓋	3.6	2.9	8.9	—	100	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付	
49	磁器	蓋	3.9	2.9	9.2	—	95	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付	
50	磁器	蓋	—	2.2	5.7	—	100	良好	白	瀬戸美濃系 上・下面施釉 上面酸化コバルト染付 最大径 7.6 cm	
51	磁器	土瓶	8.1	8.9	8.1	—	95	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉（釉白濁）外面酸化コバルト染付 焼継痕あり 底部焼継印（赤）	
52	磁器	蓋	—	1.1	4.6	—	100	良好	白	肥前系 内外面施釉 上面染付	
53	陶器	灯明皿	9.0	2.2	4.6	IK	90	良好	灰白	内外面灰釉 外面上位タール付着 口縁部歪む	
54	陶器	灯明皿	10.2	2.1	3.8	IK	75	普通	にぶい黄橙	瀬戸美濃系 内外面柿釉 体部下位釉拭き取り	
55	陶器	灯明皿	(10.5)	1.9	(3.6)	K	30	良好	灰白	京都信楽系 内外面施釉 内面ピン痕１遺存 外面上位タール付着	
56	陶器	灯火具	4.9	5.8	5.8	IK	85	良好	灰白	京都信楽系 内外面施釉 底部輪状重焼痕 被熱（弱）最大径 (8.8) cm	
57	陶器	灯火具	4.9	4.6	5.1	—	85	良好	灰白	内外面灰釉（釉白色化）底部糸切痕（中心・左） 最大径 8.1 cm	
58	陶器	蓋物	14.5	5.5	12.5	IK	90	良好	灰	内外面灰釉 内面ピン痕３ 被熱	
59	陶器	燗徳利	2.9	20.0	7.3	IK	60	良好	灰白	京都信楽系 外面灰釉 底部墨書「个」「川島」	72-18
60	陶器	土瓶	6.1	10.0	5.9	IK	95	良好	灰白	外面青緑釉 露胎部煤付着 脚３	
61	陶器	土瓶	9.9	10.7	9.1	IK	90	良好	灰白	外面灰釉・白土染付 底部墨書「八百兵」ヵ	72-19
62	陶器	土瓶	8.2	9.8	8.6	IK	90	普通	灰白	外面施釉・白土染付 体部下位・底部煤付着	
63	陶器	鍋	—	[4.8]	(9.0)	IK	10	普通	にぶい黄橙	松岡系ヵ 内外面鉄釉 外面ケズリ 内面長方形目跡２遺存	
64	陶器	鍋	(16.0)	[5.8]	—	EIK	10	普通	橙	松岡系 内外面海鼠釉	
65	陶器	急須	(8.0)	[3.3]	—	—	20	良好	灰白	胎土炻器質 外面中位火襷 70 の身	
66	陶器	土瓶ヵ	(5.8)	[4.1]	—	IK	20	良好	明褐灰	胎土炻器質 外面施釉 被熱ヵ（釉白濁）	
67	陶器	壺	(6.5)	[12.4]	—	EK	10	良好	灰白	信楽系 外面錆釉 胎土石英質 接点のない３片から復元 SK148・226 と接合	
68	陶器	蓋	—	3.1	3.2	I	95	普通	灰白	底部糸切痕 上面施釉・絵付（緑・白・青・茶） 最大径 7.5 cm	
69	陶器	蓋	—	1.7	2.5	IK	100	良好	灰白	底部糸切痕 上面灰釉・白土染付 穴は釉で塞がる 下面墨痕 最大径 6.9 cm	
70	陶器	蓋	—	1.5	2.3	—	100	良好	にぶい黄橙	胎土炻器質 上面部分的に施釉 底部糸切痕ナデ消し 65 の蓋 最大径 7.4 cm	
71	陶器	蓋	—	1.4	2.7	K	100	良好	灰白	底部糸切痕（左）・墨書「八」上面灰釉・白土染付 最大径 6.8 cm	73-3
72	陶器	蓋	—	1.9	2.8	IK	100	良好	灰白	底部糸切痕（右）・墨痕 上面施釉・緑釉・鉄絵・白土 最大径 7.6 cm	
73	陶器	餌入れ	(5.8)	3.3	(5.0)	IK	45	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 底部糸切痕・墨痕	
74	瓦質土器	目皿	(15.6)	1.8	(15.4)	CIK	20	普通	灰白	下面砂目 燻す	
75	瓦質土器	火消壺	(18.0)	17.7	17.8	CIK	70	普通	灰白	砂目底・板状圧痕 燻す 内面上位煤付着 被熱（剥落）	
76	土師質土器	焙烙	(32.4)	[4.7]	(33.8)	CHIK	25	普通	にぶい橙	砂目底 体部下位ケズリ 体部煤付着 補修痕１遺存 接点のない５片から復元	
77	土師質土器	焙烙	32.7	3.4	32.9	HIK	75	普通	灰白	底部シワ状痕 全面に黄灰色付着物 煤付着	
78	土師質土器	焙烙	(35.0)	[4.2]	(35.0)	EIK	25	普通	灰白	底部シワ状痕 体部下端ケズリ 内耳１遺存 外面煤付着	
79	瓦質土器	焙烙	(39.7)	4.2	(36.7)	CDHIK	5	普通	にぶい橙	底部・体部下位シワ状痕 内耳極僅かに遺存	67-1
80	瓦質土器	竈鍔	(24.4)	4.4	(28.0)	CI	30	普通	にぶい橙	燻す 内面煤付着 剥落著しい 上面刻印「○」	
81	土師質土器	蓋	5.4	0.7	5.5	AHIK	100	普通	浅黄橙	江戸在地系 胎土粉質 焼塩壺の蓋	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
82	土師質土器	小壺	2.1	2.3	1.8	AIK	―	普通	にぶい橙	底部糸切痕（左） 重さ 9.2 g	121-14
83	土師質土器	小壺	2.2	2.4	1.8	AHK	―	普通	にぶい橙	底部糸切痕（左） 重さ 10.3 g	121-14
84	施釉土器	皿	(6.1)	1.7	(3.2)	CHI	45	普通	橙	江戸在地系 底部糸切痕（左） 胎土粉質 内外面透明釉 内面白土・緑釉 重さ 13.0 g	117-11
85	土製品	ミニチュア	4.4	1.5	2.5	―	―	良好	橙	江戸在地系 擂鉢 胎土粉質 底部糸切痕（左） 内外面鉄化粧 被熱・煤付着 重さ 9.6 g	117-12
86	土製品	人形	長さ 5.7 幅 3.4 厚さ 0.9 重さ 9.9			AIK	―	良好	橙	江戸在地系 蝉 一枚型成形 中実 上面施釉・白土・緑釉	117-13
87	瓦	軒桟瓦	長さ［8.8］幅［12.1］厚さ 1.8 高さ［5.8］			ADIK	―	良好	灰白	江戸式 一部銀化 燻す	
88	瓦	軒桟瓦	長さ［6.9］幅［12.0］厚さ 1.8 高さ［7.6］径 6.8			AIK	―	良好	灰白	右巻三巴文 燻す 粗雑なつくり 上面ミガキ状の光沢 粒径２～３㎜の黒色粒子多量	
89	瓦	桟瓦	長さ 26.6 幅［16.4］厚さ 1.9 高さ 5.1			ADIK	―	良好	灰白	銀化 燻す 煤付着	
90	瓦	桟瓦	長さ［16.6］幅［13.6］厚さ 1.8 高さ［5.7］			AIK	―	良好	灰白	銀化 燻す	
91	瓦	道具瓦	長さ［12.8］幅［21.4］厚さ 3.9 高さ 7.3			HIK	―	良好	灰白	銀化 燻す 刻印あり「長門」「㐆」雲母・煤付着	123-18 124-15
92	木製品	曲物	厚さ 0.5 径 6.2							蓋 表面墨書 表面に漆付着 中央に木釘 板目	143-15
93	木製品	蓋	厚さ 0.8 径 21.8							表面黒漆 釘穴 1 板目	
94	木製品	蓋	径 23.6 高さ 0.9							側板残存 表・裏黒漆 表に焼印「㐆」・「㊋」板目	
95	木製品	樽	長さ 25.6 幅［4.3］厚さ 1.1							側板 焼印「固」板目	
96	木製品	箸	長さ 22.7 幅 0.5 厚さ 0.5							削出し	
97	木製品	箸	長さ 22.2 幅 0.4 厚さ 0.4							削出し	
98	木製品	箸	長さ 22.4 幅 0.5 厚さ 0.5							削出し	
99	木製品	箸	長さ 22.0 幅 0.5 厚さ 0.5							削出し	
100	木製品	箸	長さ 21.2 幅 0.6 厚さ 0.6							削出し	
101	木製品	箸	長さ 21.8 幅 0.6 厚さ 0.5							削出し	
102	木製品	櫛	長さ 18.3 幅 5.5 厚さ 0.4							柾目	
103	木製品	神酒口	長さ［10.1］幅［4.4］厚さ 0.3							柾目	
104	木製品	神酒口	長さ 10.3 幅 4.4 厚さ 0.5							板目	
105	木製品	箒	長さ 30.1 幅 17.0 厚さ 1.9								
106	木製品	下駄	長さ 17.6 幅 7.2 高さ 4.5							連歯下駄 黒漆 墨書「二乙」表外周釘穴 107 と一対 板目	143-14
107	木製品	下駄	長さ 17.6 幅 7.1 高さ 4.6							連歯下駄 黒漆 106 と一対 板目	
108	木製品	下駄	長さ 21.2 幅 8.9 高さ 2.4							連歯下駄 板目	
109	木製品	下駄	長さ［15.8］幅 9.0 高さ 2.5							刳り下駄 板目	
110	木製品	下駄	長さ 23.3 幅 6.7 高さ 3.3							刳り下駄 板目	
111	木製品	下駄	長さ 19.0 幅 7.0 高さ 2.5							刳り下駄 木釘・鉄釘残 板目	
112	木製品	下駄	長さ 21.2 幅 9.3 高さ 3.4							後歯下駄 柾目	
113	木製品	板	長さ［5.5］幅 31.5 厚さ 0.7							表裏面墨書 板目	
114	木製品	木札	長さ 16.8 幅 6.5 厚さ 0.9							表面墨書 人の顔の絵か 板目	
115	木製品	木札	長さ 18.1 幅 5.5 厚さ 0.9							焼印 裏面に墨書 柾目	
116	銅製品	銭貨	径 24.6 厚さ 1.6 重さ 3.1							寛永通寶（古）	
117	石製品	磨石	長さ 7.2 幅 6.4 厚さ 1.6 重さ 28.3							角閃石安山岩 多孔質 自然面遺存 使用面１ 被熱・煤付着	140-3
118	石製品	硯	長さ 16.2 幅 7.5 重さ 379.5							凝灰岩 器高 2.2cm 表面穿孔（貫通無し） ３ 裏面刻書 黒色塗布物付着	141-2
119	石製品	硯	長さ 13.8 幅 4.6 重さ 241.3							粘板岩 器高 2.0cm 墨付着	141-2
120	石製品	硯	長さ［12.0］幅 4.7 重さ 193.1							粘板岩 器高［1.5］cm 両面刃物傷 黒色塗布物付着	141-2
121	石製品	焜炉	長さ［11.4］幅［9.1］厚さ［7.8］重さ 459.0							凝灰岩 軟質 側・上面ノコギリ痕 上面刺突状痕・幅広工具痕 被熱・煤付着	138-6
122	硝子製品	簪の玉	長さ 2.3 径 2.0 厚さ 2.0 重さ 17.3							被熱 透明 孔径 0.5 ㎝	142-2

第52号土壙図（第137～147図）

Ｆ７－Ｃ６・Ｄ６・Ｄ７グリッドに位置し、第69・71号土壙より古い。平面形は不整形で、検出長軸5.75ｍ、短軸2.7ｍ、深さ0.5ｍを測る大型の土壙である。長軸方位はＮ－75°－Ｅを指す。

板材・樹皮等の木質が多量に投棄されており、粘土質な土が主体である。最上層は炭化物を含む砂質土である。土壙の中央では桶が検出されているが、投棄されたものと考えられる。

出土遺物は極めて多量である。ゴム印判染付磁器、多色刷り銅版転写染付磁器がみられるが、遺構の規模と重複関係から混入と考えられる。酸化コバルト染付磁器は少量みられるが、型紙摺絵染付磁器がないことから、遺構に伴うと考えられる。推定廃絶期は19世紀後葉、具体的には1870～1880年代と考えられる。

第138～147図に出土遺物を図示した。陶磁器類は碗・坏類が非常に多く、土瓶、燗徳利もみられ、煮賣茶屋のような様相が垣間見える。

第138図１・２・７は肥前系、３～６は瀬戸美濃系磁器の端反形碗である。１・２・７には朱書きの焼継印がみられ、長い間使用されていたことが窺える。４の内面上位には陰刻文染付がみられ、５は高台内の削り込みが深い特徴がある。２は非掲載遺物に同文製品が１個体みられる。

８は瀬戸美濃系磁器の丸碗で、酸化コバルト染付が施される。

10は瀬戸美濃系、11は肥前系磁器の湯呑形小碗である。いずれも弱く被熱し、11は腰が張り、高台内の削り込みが深い。

12・第139図13～15は瀬戸美濃系磁器の小碗である。見込みに絵付けがみられないため碗として扱った。12は非掲載遺物に同文製品が１個体みられる。13は高台内の削り込みが深く、底面が薄い特徴がある。14・15は同文の酸化コバルト染付がみられ、底部の造りも同じである。露胎の渦巻高台がみられる。

16は瀬戸美濃系磁器で木型打ち込み成形の坏である。内面に陰刻文がみられ、底部には刻印「カワラ」がみえる。地方窯系の可能性も考えられる。

17は肥前系、18～29は瀬戸美濃系磁器の卵殻手坏である。瀬戸美濃系の製品は高台畳付けに段が付く。17は輪高台で、極めて薄い。内面には赤・緑・黒・黄・青緑と多彩な上絵付が施される。

23･24は見込みに江戸絵付けで、旗の中に「㊗」、「一新講」の文字がみえる。「一新講」とは、明治六年（1873）に東海道筋の宿屋を中心に設立された「講」である。

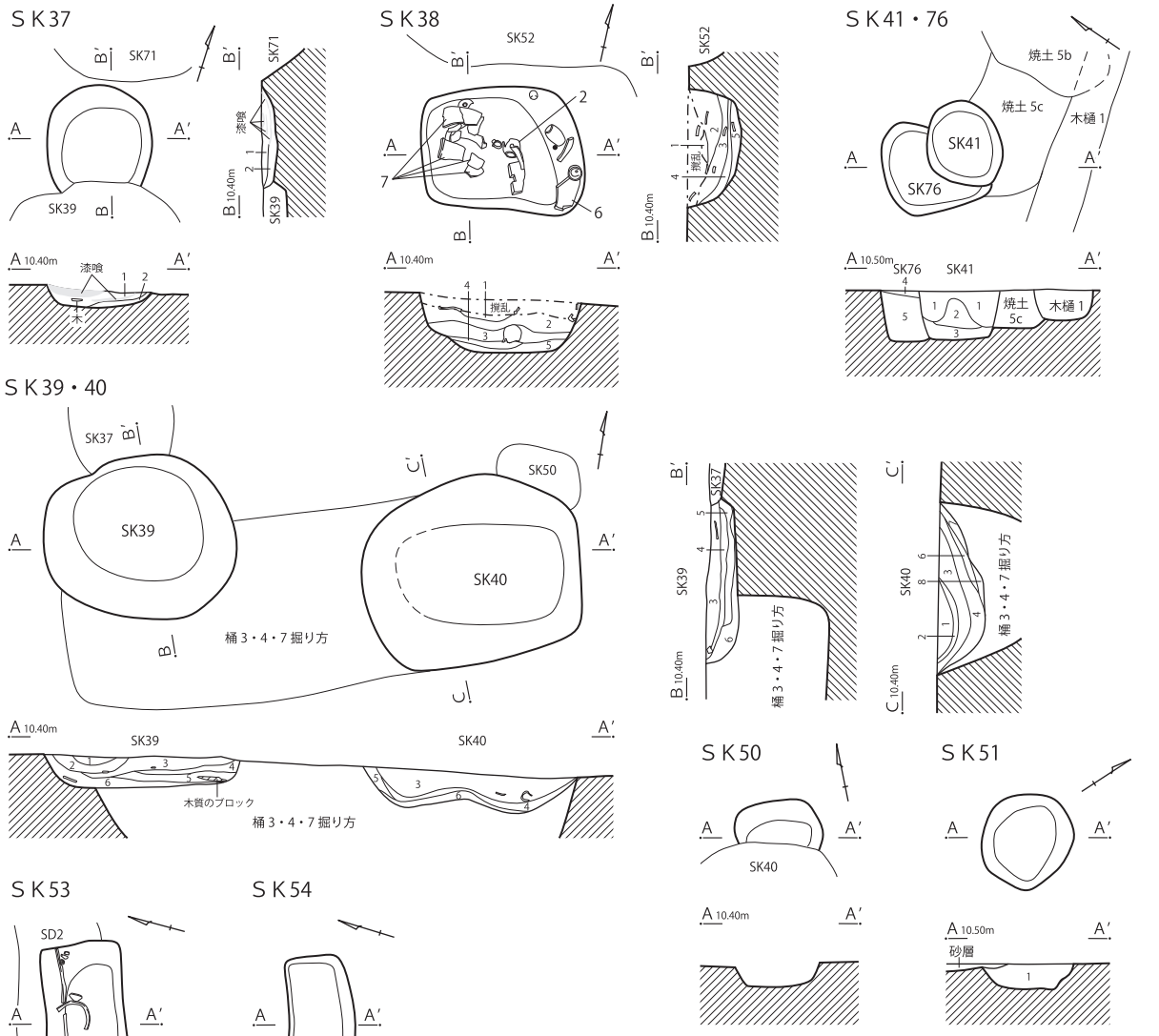
25は見込みに江戸絵付けで、「名酒／原勢製／醸造／盛」の銘がみえる。「原勢製」は第５地点に位置する『営業便覧』にみえる「原勢屋／米穀糸繭商／小林佐助」を指すと考えられる。「盛」は近隣の酒造では比企郡小川町に大正二年（1913）頃創業の「松盛」、市川市に「関東盛」、東松山市に明治三十九年（1906）創業の「敷島盛」がある。しかし、「原勢製」の銘のように販売する酒屋を示したものもあるため、必ずしも酒造を示すとは限らないことを留意したい。

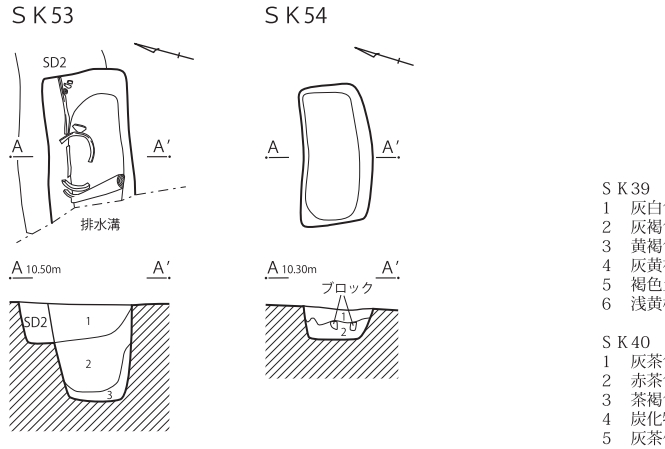
26は見込みに江戸絵付けで「㊐」がみえる。既報告である本陣跡（埼埋文2019a）や第３地点（埼埋文2018b）でみられる屋号で、安政二年（1855）に編纂された『東講商人鑑』に「㊐」、「酒造店／原瀬屋／勘兵衛」とあり、これを示す可能性がある。

30は瀬戸美濃系磁器の筒形坏である。酸化コバルト染付が施され、腰部の釉が剥落している。

31は瀬戸美濃系磁器の端反形坏である。酸化コバルト染付が施され、体部は屈曲するように立ち上がり、鎬状文が施される。

第140図32・33は肥前磁器の五寸皿である。高台高が低い蛇ノ目凹形高台で、32は内面に染付銘「吉／田」、33は「吉［田］屋」がみえる。





ＳＫ37
1　暗褐色土　　砂質　小礫（φ10㎜）含む　サラサラしている　木質少量
　　漆喰層状に堆積
2　暗灰褐色土　粘土質　木質・炭化物少量

ＳＫ38
1　砂層　　細粒（河原砂か？）　鉄板等の鉄製品を含む
2　茶褐色土　木質多量
3　暗灰色土　粘土質　木質少量
4　暗灰色土　シルト質　木質少量
5　灰褐色土　シルト質　しまり弱

ＳＫ41（1～3）・ＳＫ76（4、5）
1　灰褐土　　しまり強　炭化物少量
2　灰色土　　粘土質　しまり極強
3　黒色土　　炭化物主体層（φ10～20㎜）
4　黒褐色土　炭化物・焼土粒子少量　ややしまり強
5　灰褐色土　灰色粘土多量　やや均質　遺物少量

ＳＫ39
1　灰白色土　　砂質　小礫（φ5～10㎜）含む　炭化物・酸化鉄含む　パウダー状
2　灰褐色土　　砂質　炭化物・酸化鉄含む　粘性弱
3　黄褐色土　　砂質　炭化物・酸化鉄含む
4　灰黄褐色土　黄褐色粘土ブロック（シルト質）少量　樹皮など木質含む
5　褐色土　　粘土質　木質多量
6　浅黄橙色土　粘土質　木質等の混入は見られない

ＳＫ40
1　灰茶色土　　砂質　木質微量
2　赤茶色土　　木質多量　木質層
3　茶褐色土　　砂質　細かい木質　木の皮を含む　パウダー状
4　炭化物層　　黒色　木質・炭化物多量
5　灰茶化色土　砂質　炭化物・黄土色粘土ブロック微量　固くしまる　パウダー状
6　暗灰褐色土　砂質　固くしまる　パウダー状
7　茶褐色土　　粘土質　木質微量
8　灰褐色土　　粘土質　砂微量　ビール瓶・鉄板出土

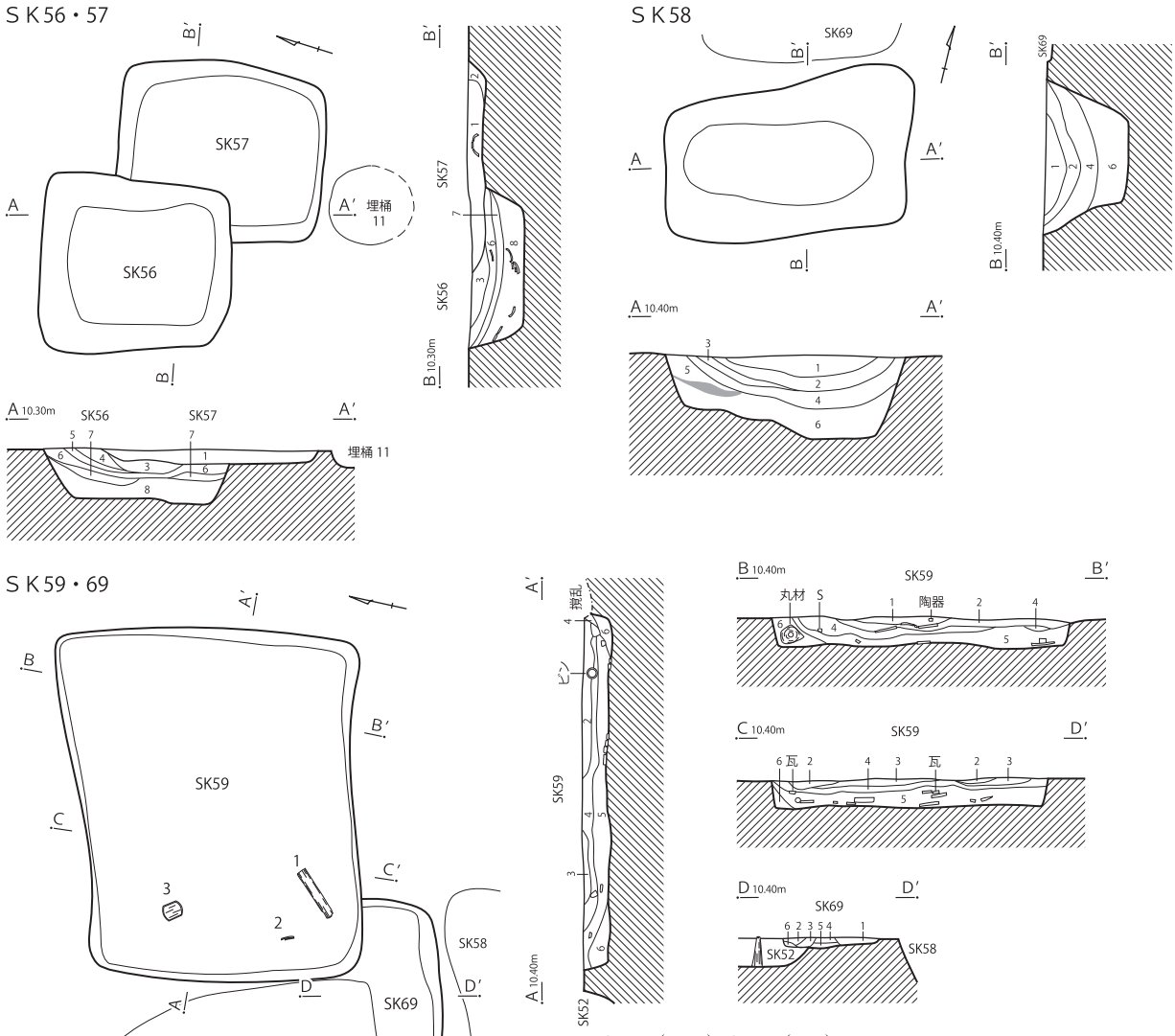
ＳＫ51
1　灰褐色土　　1㎝～数㎝台の粘土ブロック主体で褐色（含鉄？）の砂を含む
　　しまり強　遺物１点のみ　倒木痕の可能性あり

ＳＫ53
1　灰黄色土　　砂質　木片・炭化物多量　酸化鉄少量
2　褐色土　　シルト質　木片　植物質（藁か）　樹皮多量
3　灰白色土　　粘土質

ＳＫ54
1　暗灰褐土　　黄灰色粘土ブロック多量　しまり強
2　黒褐土　　しまり弱　黄灰色粘土ブロック少量

0　2m
1:60

第 148 図　区画 AD 土壙（２）



ＳＫ56（3～8）・ＳＫ57（1、2）
1　黒褐色土　　シルト質土主体　焼土・炭化物を部分的に層状
2　灰褐色土　　シルト質　炭化物少量　しまり弱
3　暗灰褐色土　灰色粘土多量　炭化物少量　しまり強　遺物含む
4　灰褐色土　　均質　しまり極強　ブロック状
5　暗灰色土　　炭化物粒子多量　砂質
6　灰白色土　　シルト質　しまり弱　均質
7　暗褐色土　　一部炭化した木片多量
8　暗灰褐色土　シルト質　比較的均質　炭化物少量　遺物多量

ＳＫ58
1　灰褐色土　　砂質　しまり弱　陶器片微量　プラスチック含む
2　黒褐色土　　砂質　木材・樹皮多量　瓦少量
3　灰白色土　　粘土質　木質混入　しまり弱
4　灰黄褐色土　シルト質　木片少量
5　灰色土　　シルト質　しまり強
6　灰褐色土　　粘土質　木片混入　遺物微量

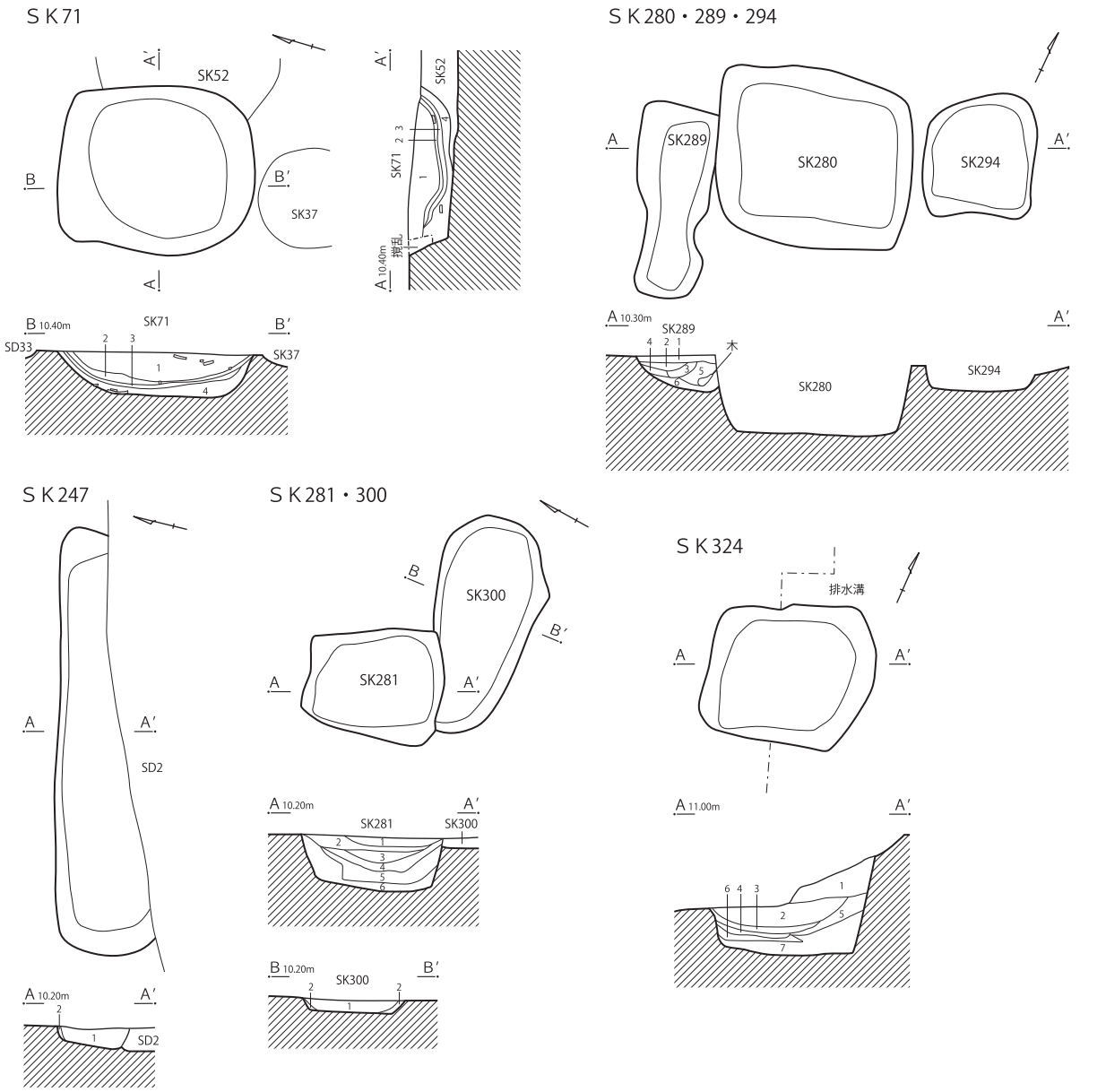
ＳＫ59
1　暗灰褐色土　均質　炭化物少量　しまり強　遺物（陶器、板硝子）含む
2　黒色土　　粘性強　極めて多量の炭化物を層状に含む　しまり極弱
3　暗灰褐色土　やや砂質　炭化物含む　しまり強
4　暗灰褐色土　粘性強　木片少量　部分的に砂層が見られる　しまり弱
5　暗褐色土　　樹皮状植物質（杉か）多量　しまり弱　板材等少量
6　暗灰色土　　しまり弱　粘性強　部分的に大型の木材等を含む

ＳＫ69
1　黒褐色土　　砂質　炭化物少量　しまり強　瓦含む
2　黒褐色土　　砂質　炭化物含む
3　黄褐色土　　シルト質
4　黒褐色土　　シルト質　炭化物少量
5　黄白色土　　粘土質　白色粘土ブロック少量
6　木質層　　別遺構か

ＳＫ66
1　暗灰褐色土　しまり極弱　粘性強　酸化鉄多量

0　2m　1:60

第 149 図　区画 AD 土壙（3）



SK71
1　黄褐色土　砂質　しまり弱　瓦含む
2　赤褐色土　粘土質　木質多量
3　灰黄褐色土　シルト質　しまり弱
4　黒色土　粘土質　木質・木製品多量

SK247
1　暗褐色土　樹皮片極多量　木片少量
2　暗灰色土

SK281
1　灰黄色土　砂質　炭化物少量　漆喰混入
2　暗褐色土　粘土質　木質多量
3　浅黄橙色土　粘土質　木質少量
4　褐色土　粘土質　木質主体層
5　灰褐色土　粘土質　炭化物・木質少量
6　灰色土　粘土質　炭化物・木質微量

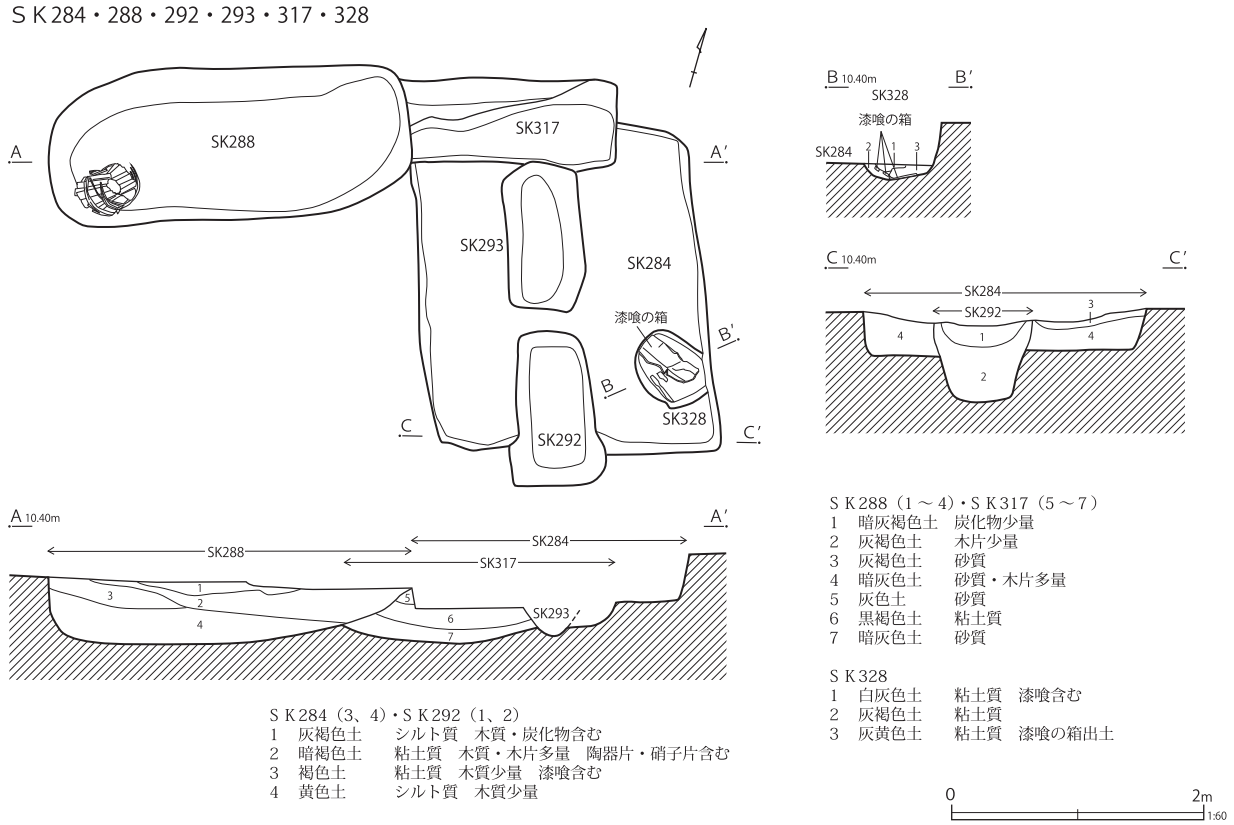
SK289
1　灰褐色土　砂質　酸化鉄・炭化物少量
2　灰褐色土　シルト質　炭化物含む　円形の浅黄橙色粘土ブロック（φ10㎜）含む
3　黄褐色土　粘土質　酸化鉄含む　円形の浅黄橙色粘土ブロック（φ10㎜）含む
4　灰褐色土　粘土質　酸化鉄・炭化物少量　円形の浅黄橙色粘土ブロック（φ10㎜）含む
5　灰褐色土　粘土質　酸化鉄微量　木質少量
6　灰褐色土　粘土質　炭化物含む

SK300
1　灰褐色土　砂質　瓦多量
2　黄褐色土　砂質

SK324
1　灰黄色土　砂質　炭化物少量
2　灰褐色土　粘土質　炭化物微量
3　暗褐色土　粘土質　木質多量
4　暗褐色土　粘土質　木質多量　炭化物混入
5　黒色土　粘土質　炭化物多量　陶磁器片出土
6　暗褐色土　粘土質　木質多量　ゴム製品・木片含む
7　黒色土　粘土質　炭化物・木質多量　硝子瓶出土

0　2m　1:60

第150図　区画AD土壙（4）



第 151 図　区画 AD 土壙（５）

同じ「吉」の字がみえるため、別個体である。区画 AE の「旅籠屋 / 太左衛門」が注文生産し、所有していたものと考えられる。33 は弱く被熱する。

38 は瀬戸美濃系磁器の木型打ち込み成形のそり皿である。内面に型押し陰刻文がみられる。

第 141 図 40 は青磁釉の鉢で、濃い青磁釉の釉調から三田系の可能性が考えられる。口縁部を歪ませ、底部は渦巻高台である。41 は肥前系磁器の青磁釉鉢である。型成形で、内外面に葉脈状の陰刻文が施文される。

42 は肥前系磁器の鉢である。青磁釉に染付が施される。焼継痕がみられ、底部に朱書きで焼継印が認められる。蛇ノ目凹形高台で、高台内に輪状の重ね焼き痕がみられる。被熱によるものか、煤が付着する。

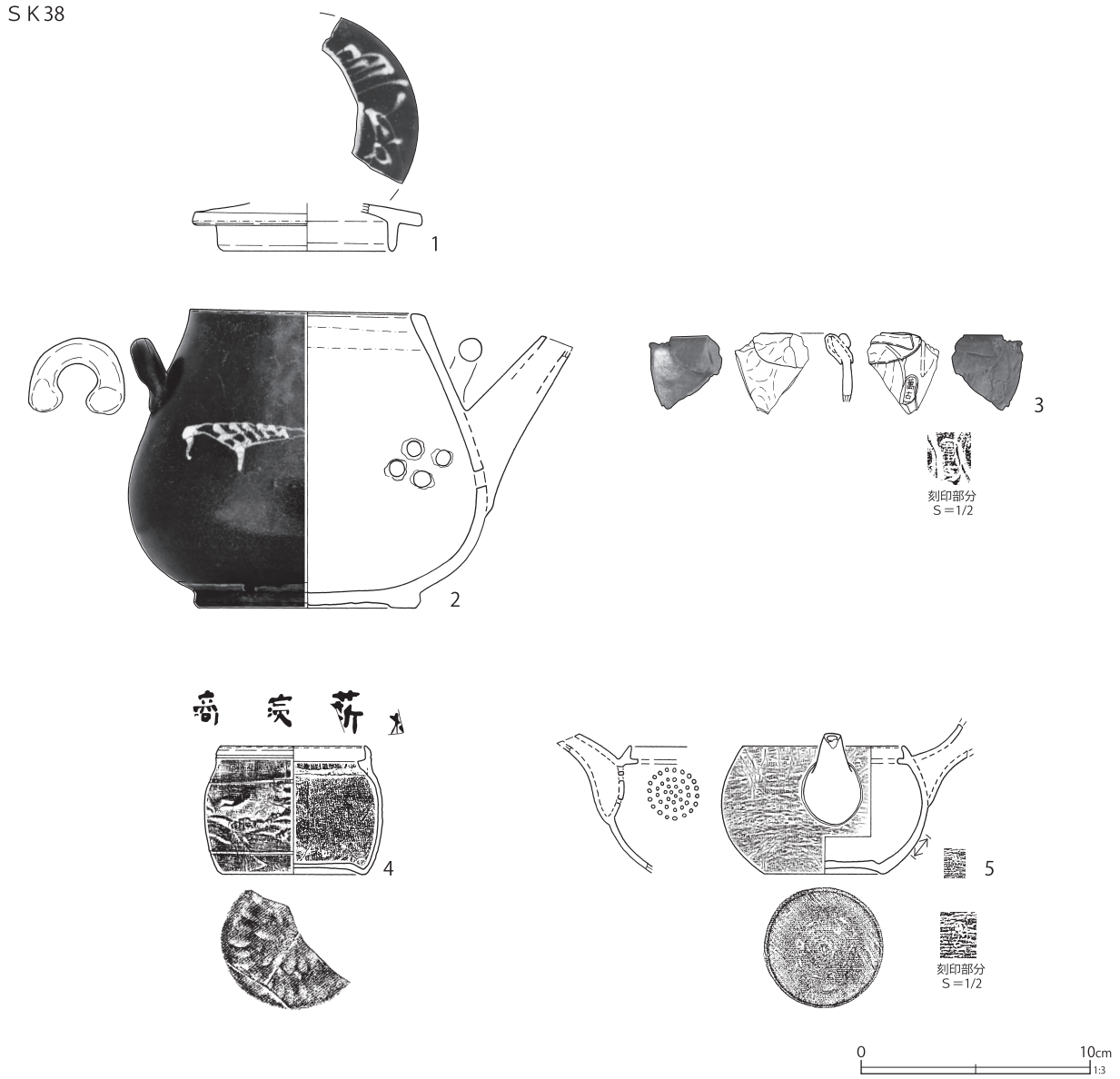
43・44 は瀬戸美濃系磁器の燗徳利である。43 の頸部には隆線が１条廻り、底部に墨痕がみられる。非掲載遺物に同製品が２個体ある。44 は酸化コバルト染付で、焼継痕がみられる。非掲載遺物に同製品が１個体ある。

45 ～ 49 は瀬戸美濃系磁器の碗蓋である。45 ～ 47 は丸碗の蓋で、外面は同文である。45 は欠失部に二次利用痕跡がみられる。46 と内外面同文の製品が非掲載遺物に１個体みられる。48・49 は端反形碗の蓋である。

第 142 図 50 は瀬戸美濃系磁器の土瓶もしくは急須の蓋である。染付文の類似性から 51 の蓋の可能性も考えられる。上面は酸化コバルト染付である。

51 は瀬戸美濃系磁器の土瓶である。外面は酸化コバルト染付で、釉は白濁化している。把手は環状である。焼継痕がみられ、底部に朱書きで焼継印が認められる。

53 は地方窯系と考えられる産地不詳陶器の灯明皿で、灰釉が施釉される。底部は上げ底状で、



第 152 図　区画 AD 土壙出土遺物（１）

外面上位にタール状の付着物がみられる。

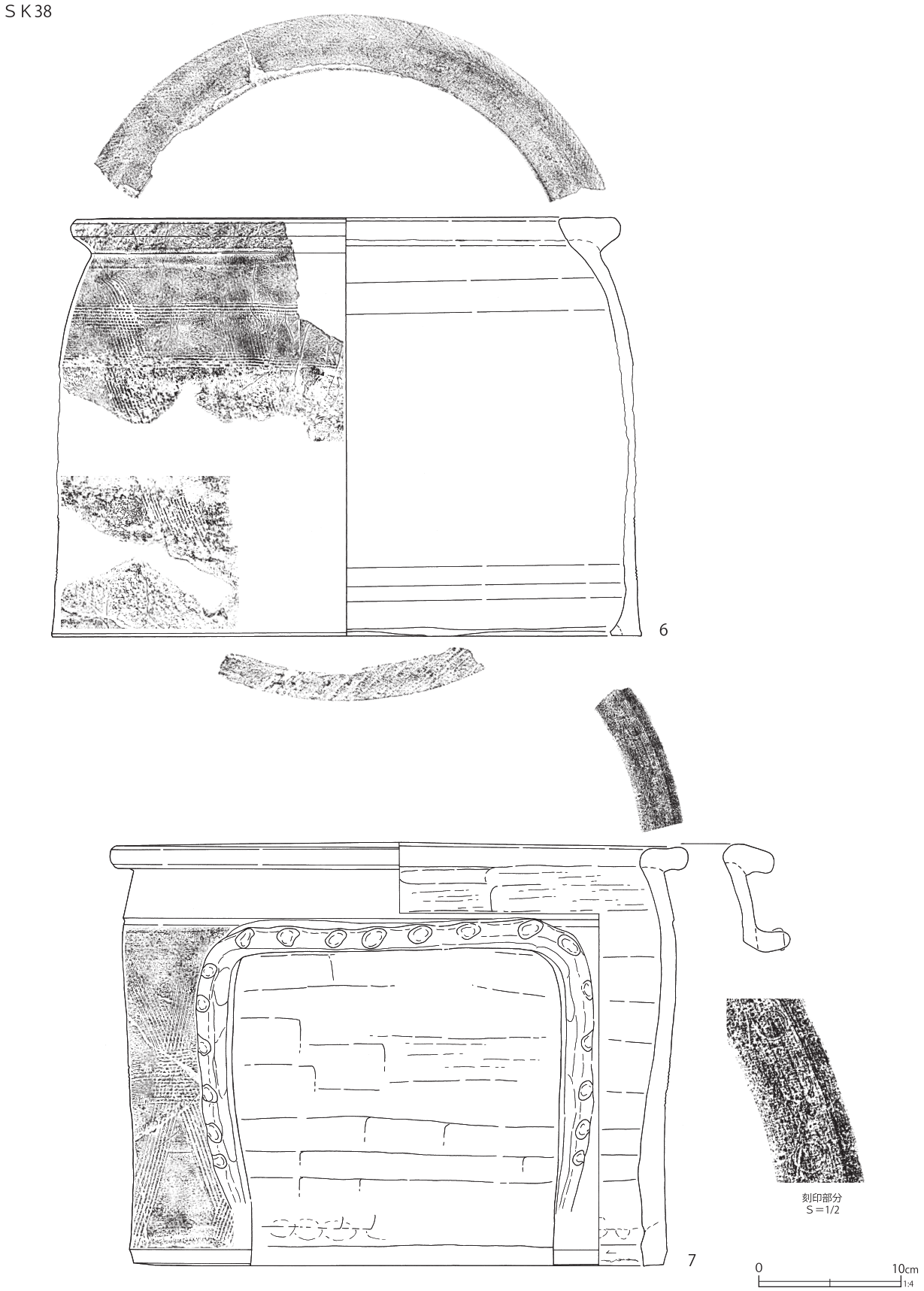
54 は瀬戸美濃系、55 は京都信楽系の灯明皿である。54 は柿釉が施釉され、体部下位に拭き取り痕がみられる。55 は内面に窯道具痕が 1 箇所遺存し、外面上位にタール状物質が付着する。

56 は京都信楽系陶器の灯火具である。底部に輪状の重ね焼き痕が遺存し、弱く被熱している。

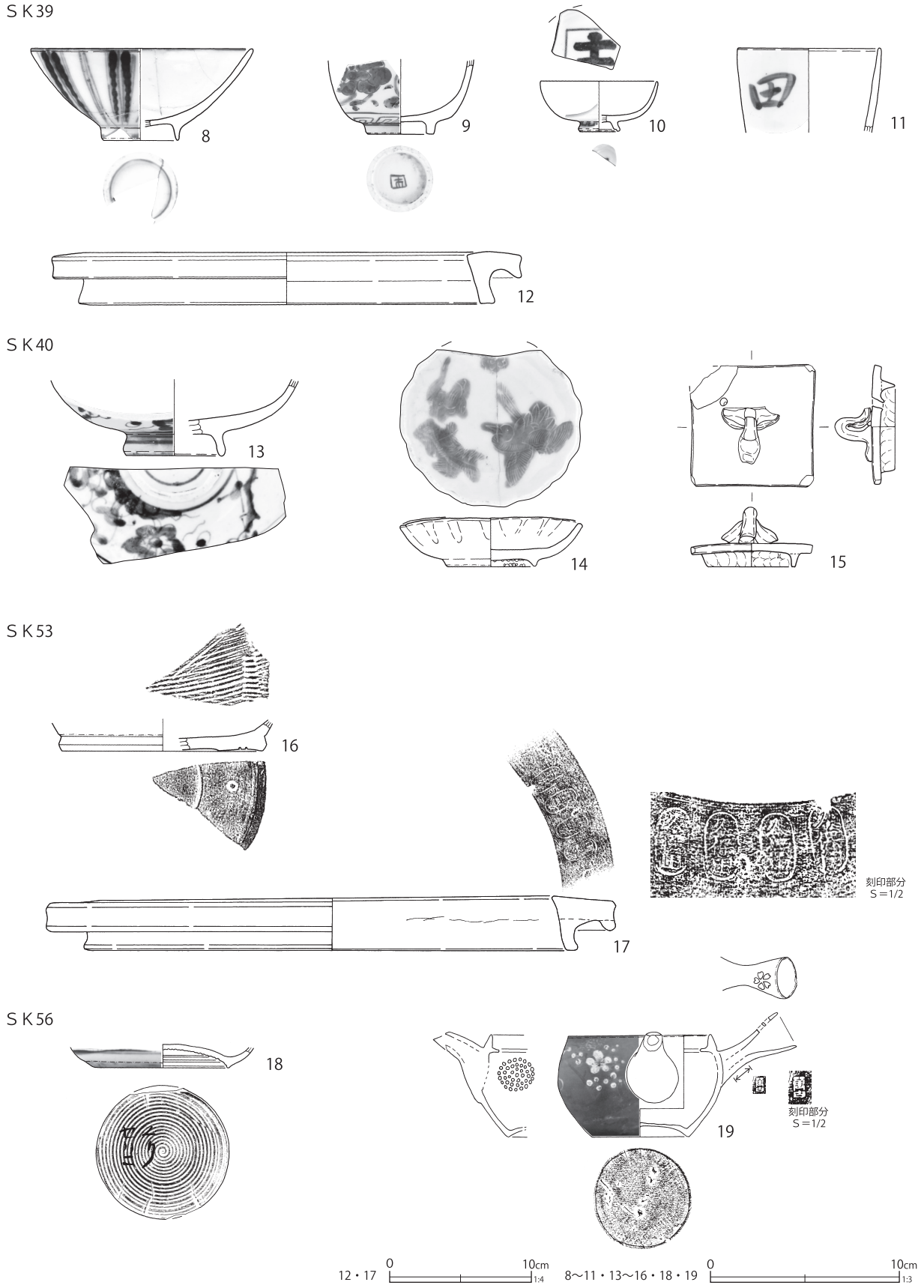
57 は地方窯系と考えられる産地不詳陶器の灯火具である。白色化している灰釉を施釉し、底部は左回転の離し糸切痕が遺存する。

59 は京都信楽系陶器の燗徳利である。底部に墨書「㐂」、「島川」がみえる。栗橋宿では初出の屋号であり、屋号の特定が課題となろう。

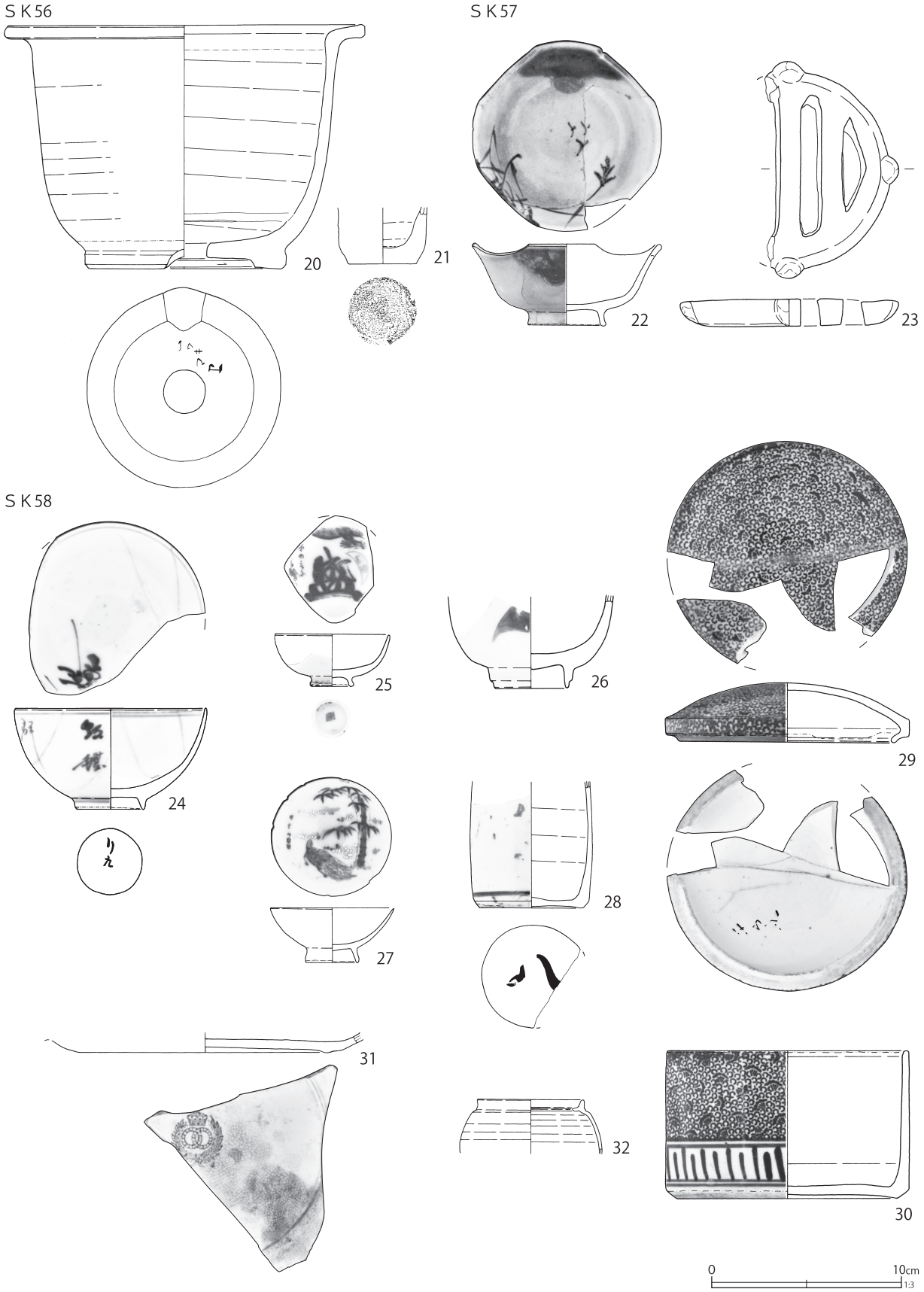
60 ～ 62 は産地不詳陶器の土瓶である。いずれも把手は型成形である。60 は青土瓶で、外面に青緑釉が施釉される。露胎部に使用痕と考えられる煤が付着する。61 は灰釉に白土染付を施された土瓶である。底部に「八百兵」と推定される墨書がみられる。同様の墨書が第 300 号土壙で出土している（第 163 図 101）。62 は透明釉に白土染付を施された土瓶である。露胎部に使用痕と考えられる煤が付着する。



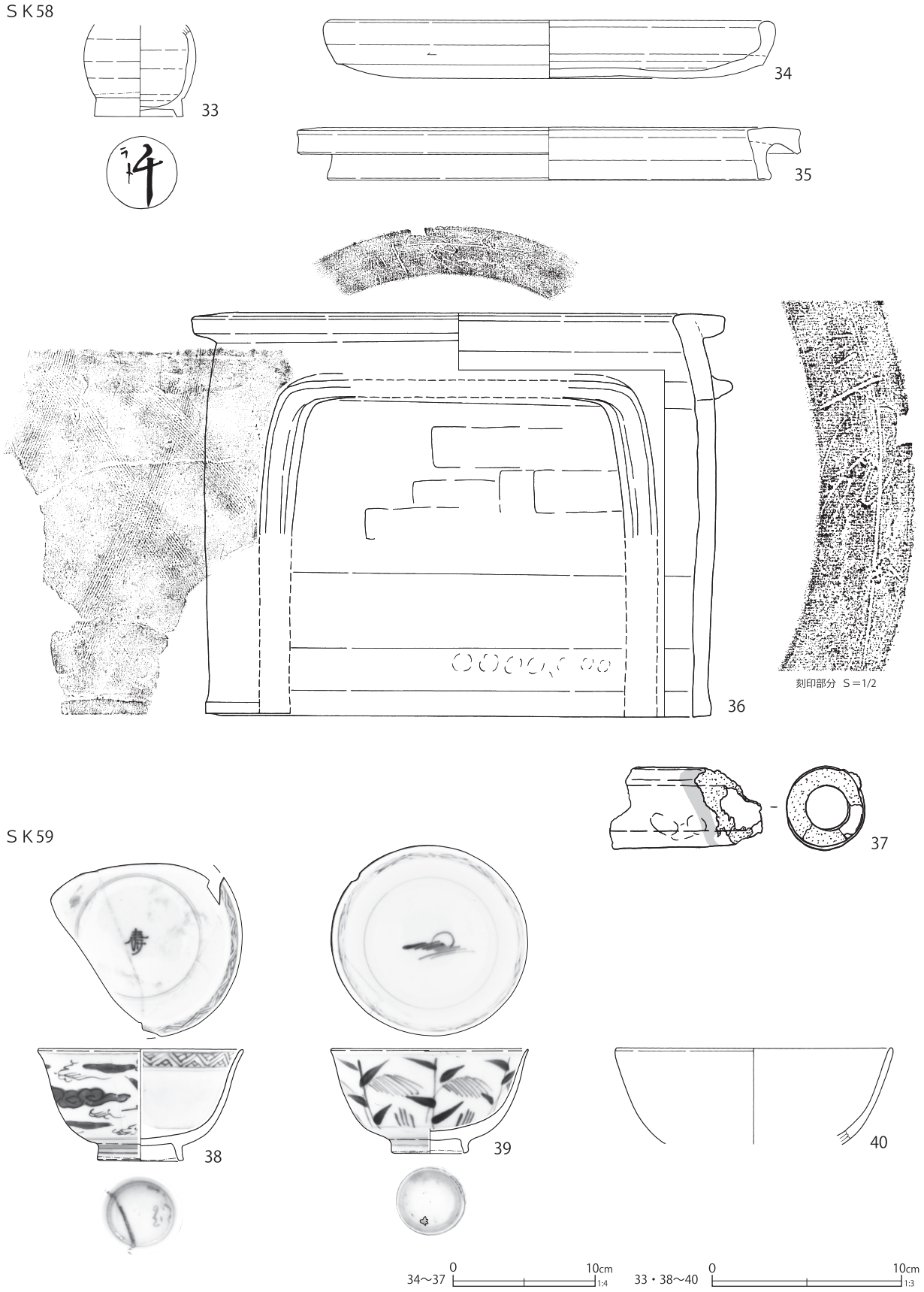
第 153 図　区画 AD 土壙出土遺物（2）



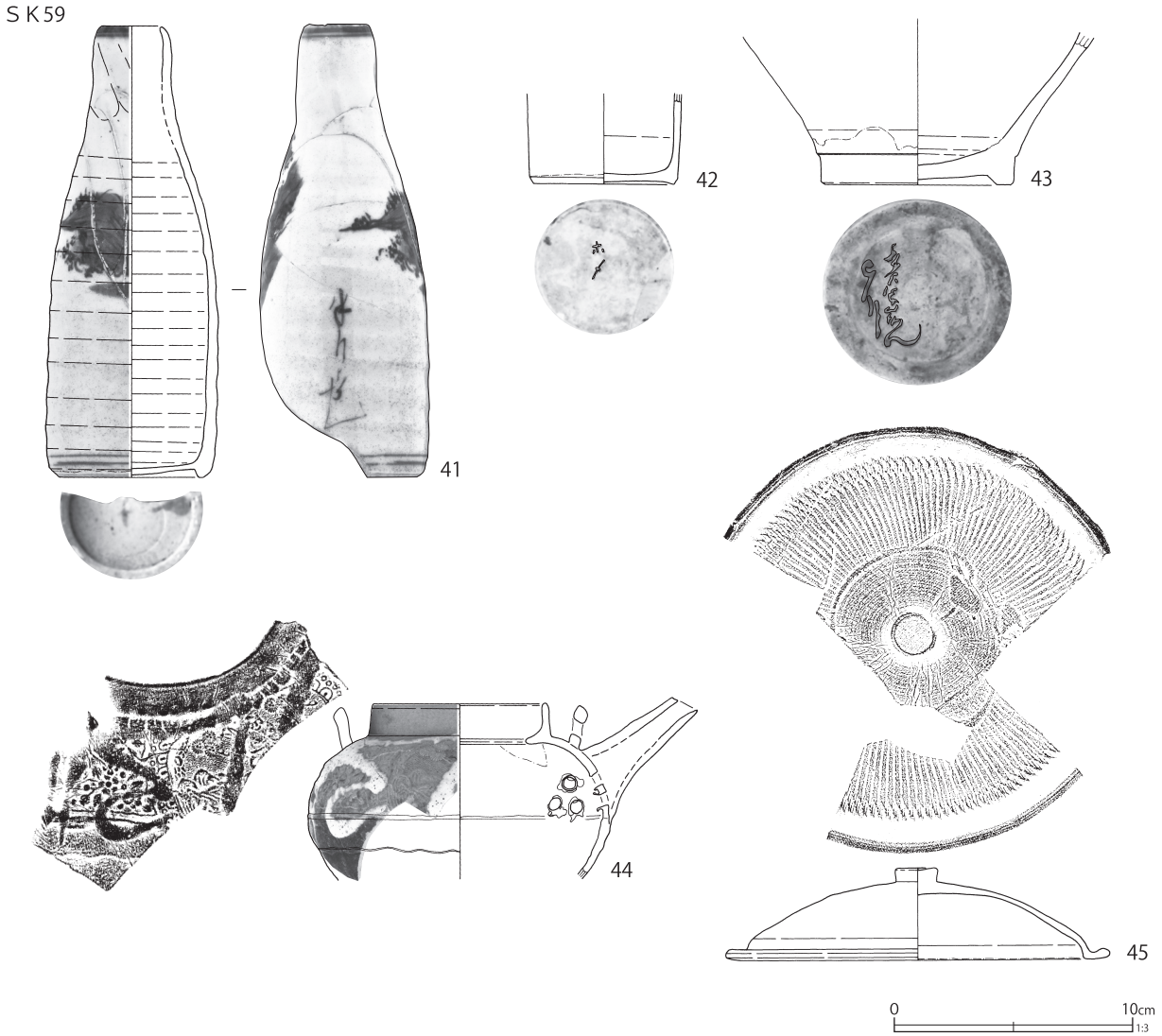
第 154 図　区画 AD 土壙出土遺物（3）



第 155 図　区画 AD 土壙出土遺物（4）



第 156 図　区画 AD 土壙出土遺物（５）



第 157 図　区画 AD 土壙出土遺物（６）

第 143 図 63 は、松岡系陶器に類似した胎土を呈する鉄釉鍋である。外面はケズリによる粒子の動きが明瞭である。内面に長方形の目跡が遺存する。

64 は松岡系陶器の鍋である。極粗粒な胎土で、海鼠釉が施釉される。

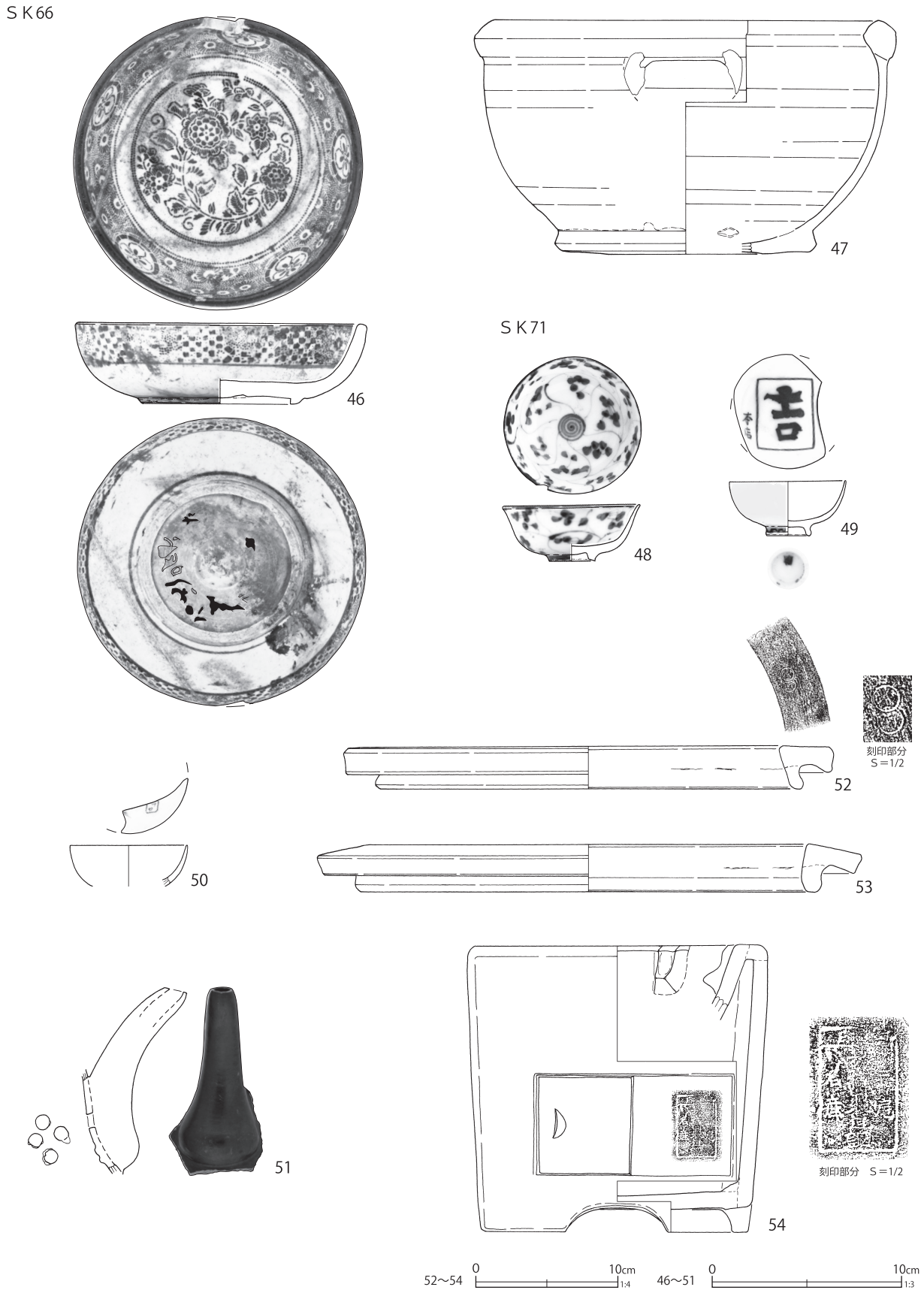
65 は産地不詳陶器の急須である。外面に火襷がみられ、炻器質な胎土である。70 の蓋の身と考えられる。

66 は胎土炻器質の袋物で、土瓶もしくは壺甕類と考えられる。備前系陶器に類似する。

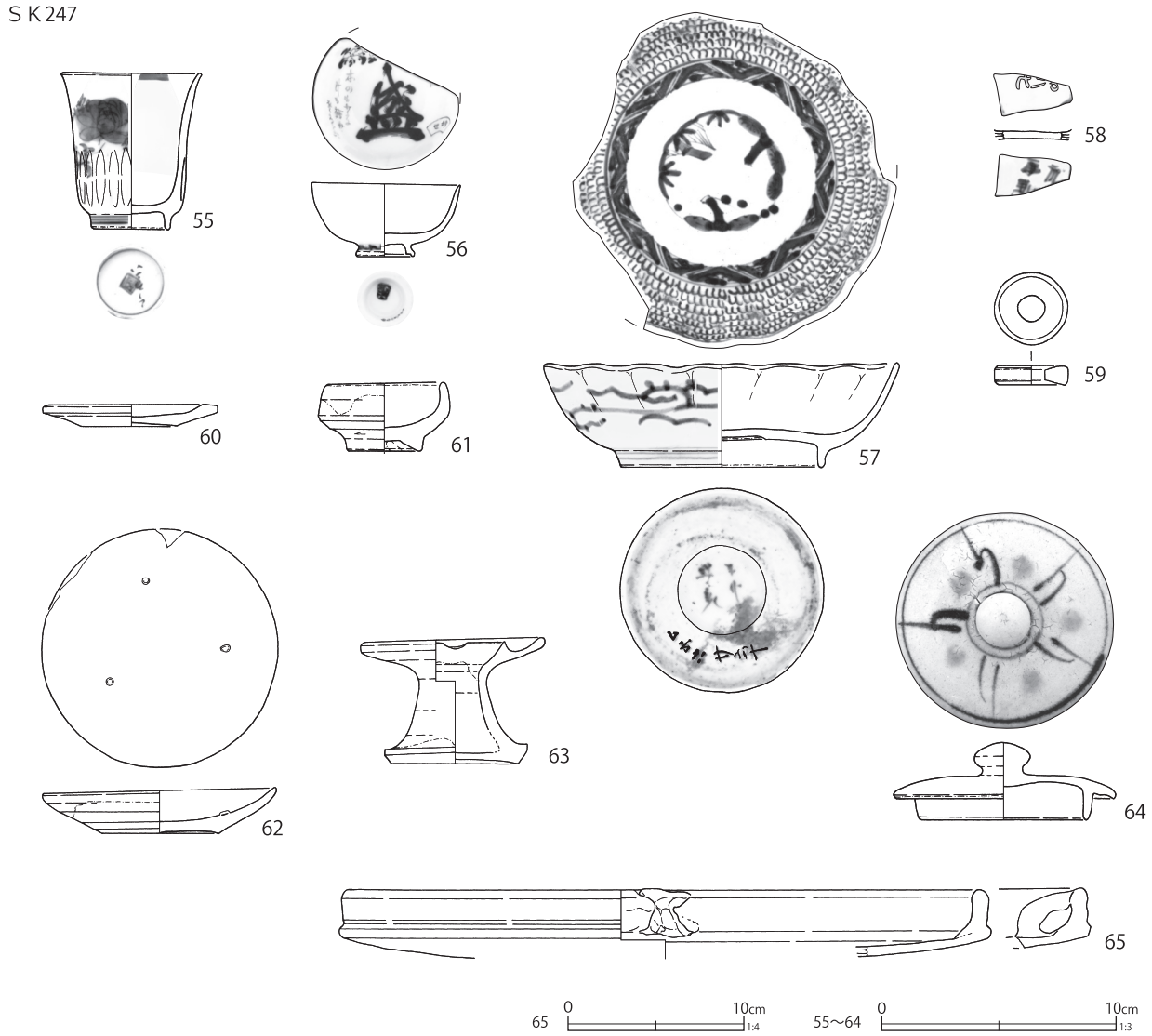
67 は信楽産陶器の壺である。石英質な胎土で、外面に錆釉状の釉がみられる。第 148・226 号土壙と接合する。挿図は接点のない 3 片から復元している。

68 ～ 72 は産地不詳陶器の急須の蓋である。蓋は多く出土しているものの、対応する身はほとんど出土していない。71 の底部に墨書「八」がみえる。本陣跡の「煮賣茶屋 / 佐野屋」を示す可能性がある。69・72 にも墨痕がみられるが、判読し得なかった。

74・75 は瓦質土器で、74 は目皿である。燻により表面は灰色で、下面は無調整の砂目が残る。75 は火消壺である。底部無調整の砂目底で、圧痕がみられる。内面上位に煤が付着し、被熱により剥落している。いずれも胎土に角閃石が含まれ、



第 158 図　区画 AD 土壙出土遺物（７）



第 159 図　区画 AD 土壙出土遺物（８）

在地産と考えられる。

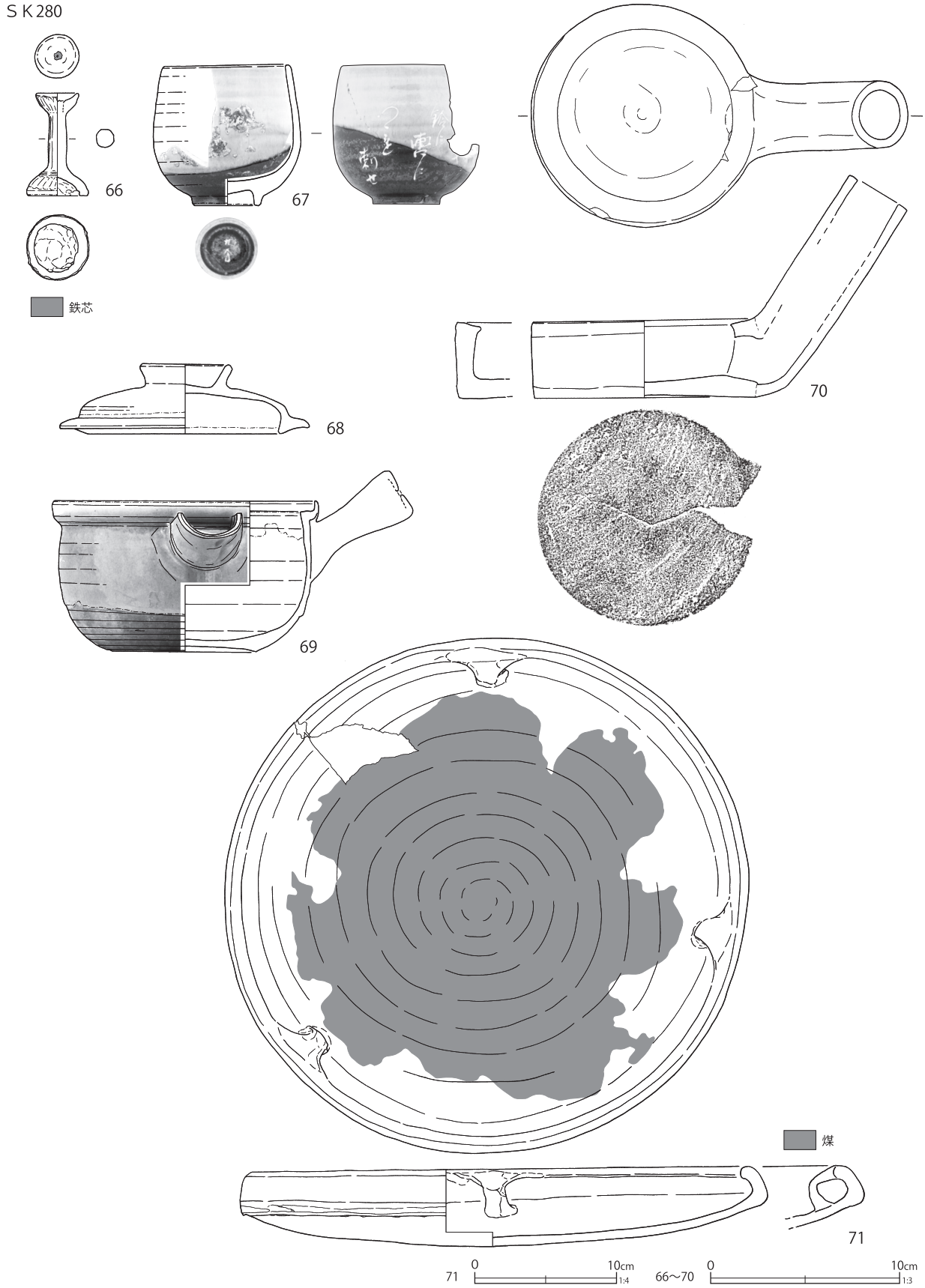
76 ～第 144 図 78 は土師質土器の丸底焙烙である。76 は底部無調整の砂目底で、体部下位にケズリ状の工具ナデが施される。底部の丸みは弱く、口縁は内湾する。体部に煤が付着し、底部に補修痕と考えられる二次穿孔が１箇所遺存する。胎土に角閃石が多く含まれ、在地産と考えられる。挿図は接点のない５片から復元した。

77 は底部無調整でシワ状痕が残る。底部の丸みが極めて弱く、扁平な形状である。内面全面に黄灰色の付着物がみられる。第 144 図 78 は底部無調整でシワ状痕が残る。底部の丸みは 77 より強い。内耳が１箇所遺存し、外面に使用痕と考えられる煤が付着する。

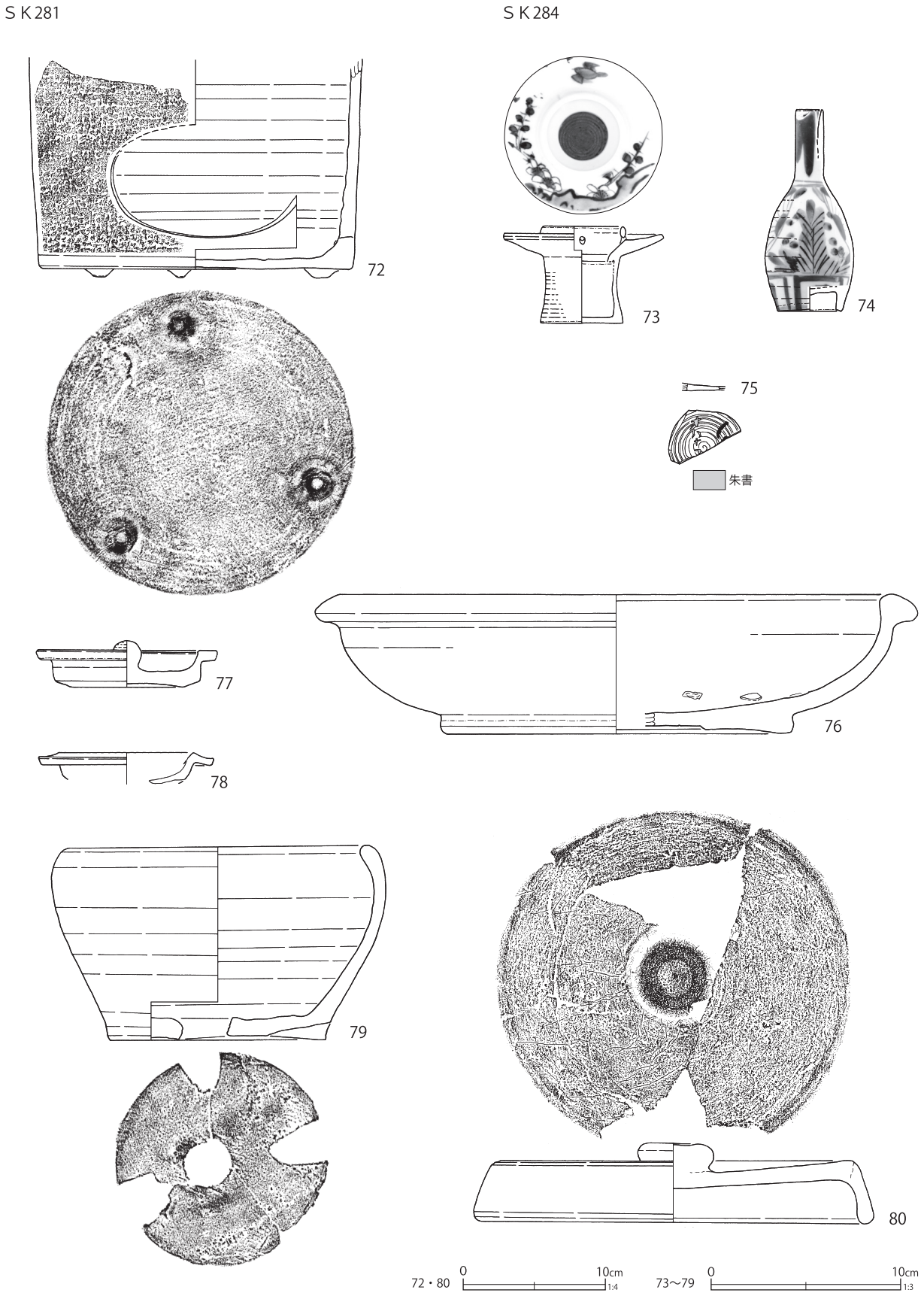
79 は瓦質土器の平底焙烙である。底部から体部下位にかけて無調整のシワ状痕が遺存し、体部下位まで一枚の粘土で成形したと推定される。口縁部は鍔状に外反しており、稀な器形である。内耳の痕跡が僅かに遺存する。

80 は瓦質土器の竈鍔である。器高が高く、外面上位に指頭状圧痕がみられる。内面に使用痕と考えられる煤が付着する。口唇部に刻印「○」がみえ、大きさを表していると推定される。

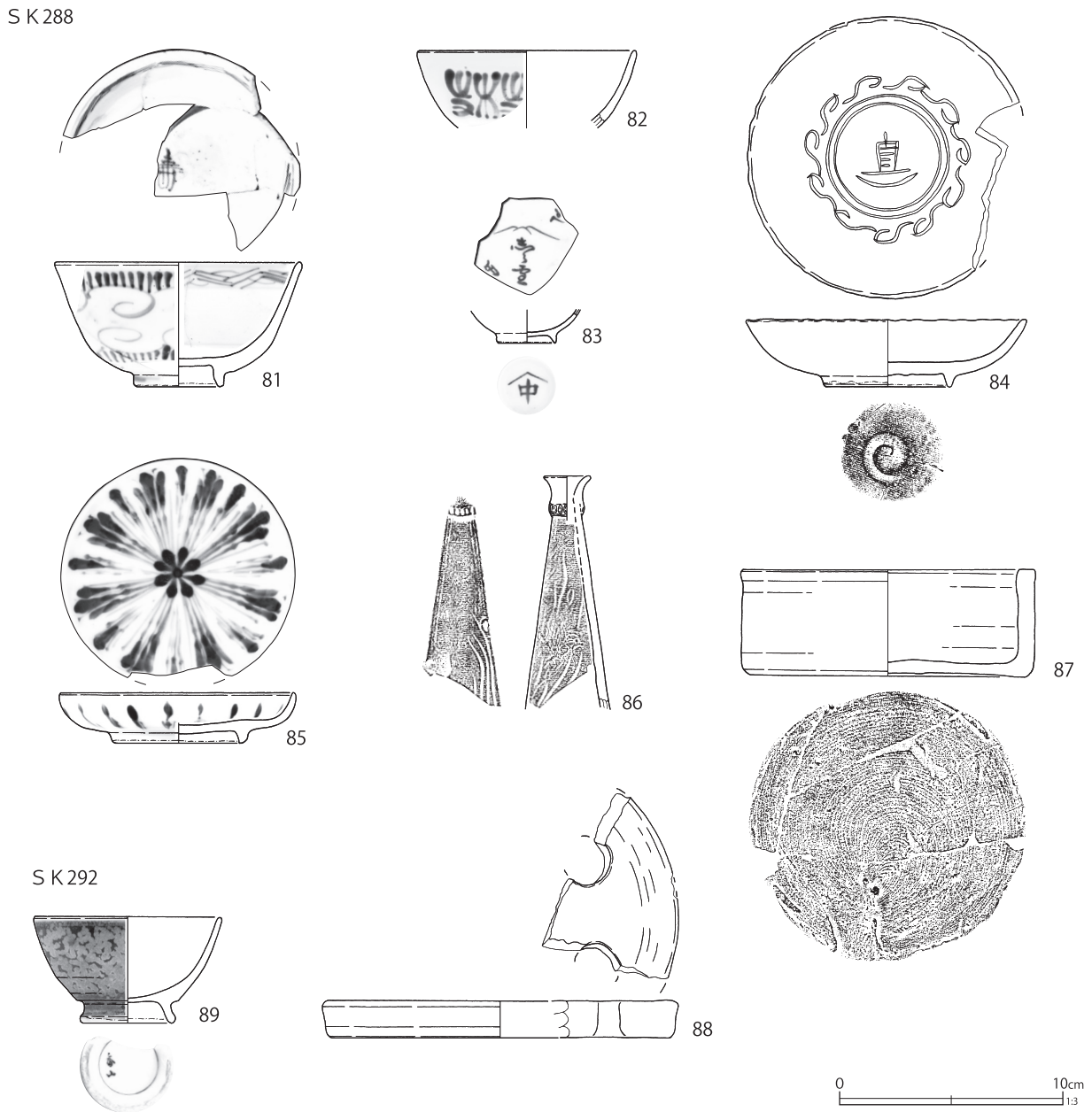
81 は土師質土器の焼塩壺の蓋である。雲母細粒を含む粉質胎土の江戸在地系で、断面は逆台形を呈する。



第 160 図　区画 AD 土壙出土遺物（９）



第 161 図　区画 AD 土壙出土遺物（10）



第 162 図　区画 AD 土壙出土遺物（11）

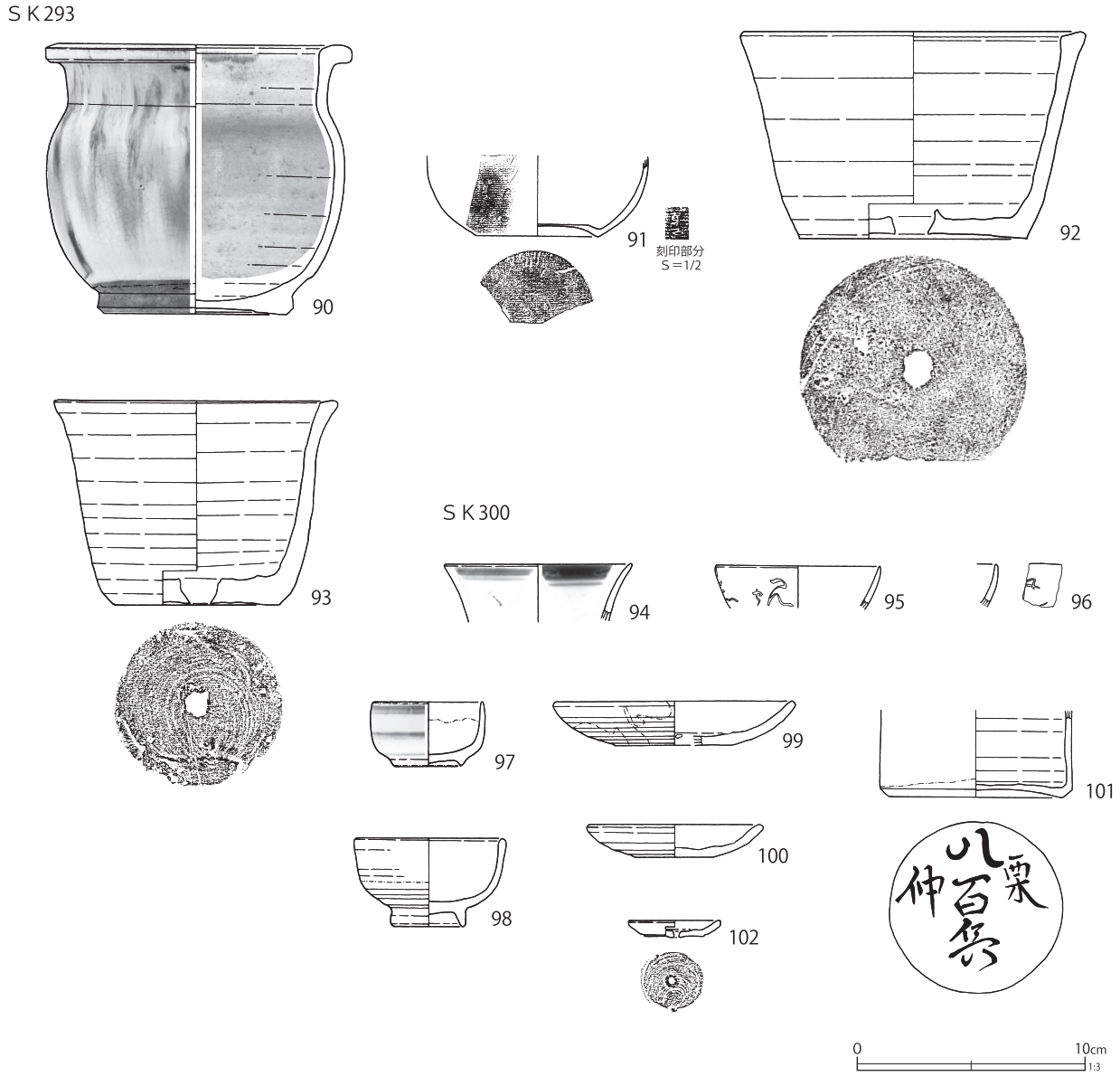
82・83 は土師質土器の小壺である。京都系の所謂「つぼつぼ」に類似するが、底部に左回転の糸切痕が遺存し、橙色の胎土である。19 世紀後半に多くみられる。

86 は蝉を模した江戸在地系の土製人形である。中実の一枚型成形で、上面に透明釉を施釉し、白土と緑釉で彩色される。

87 は江戸式と推定される軒桟瓦である。唐草文のみが遺存する。一部銀化光沢がみられる。

91 は道具瓦である。端面に刻印「長門」、「舎」がみえる。

第 145 図 93 は曲物の蓋である。表面は黒漆塗りである。94 は曲物の蓋で、表裏面黒漆塗りである。側板が残存する。裏面に焼印が２つ重ねて押されている。「㐅」と「㊋」である。95 は樽の側板である。上部に方形の穴があけられている。表面には、「固」の焼印が押される。102 は櫛で、髪を結う際、鬢や髷を整える櫛である。103・104 は神酒口である。放射状の段が削り出されている。第 146 図 105 は箒で、柄は残存し

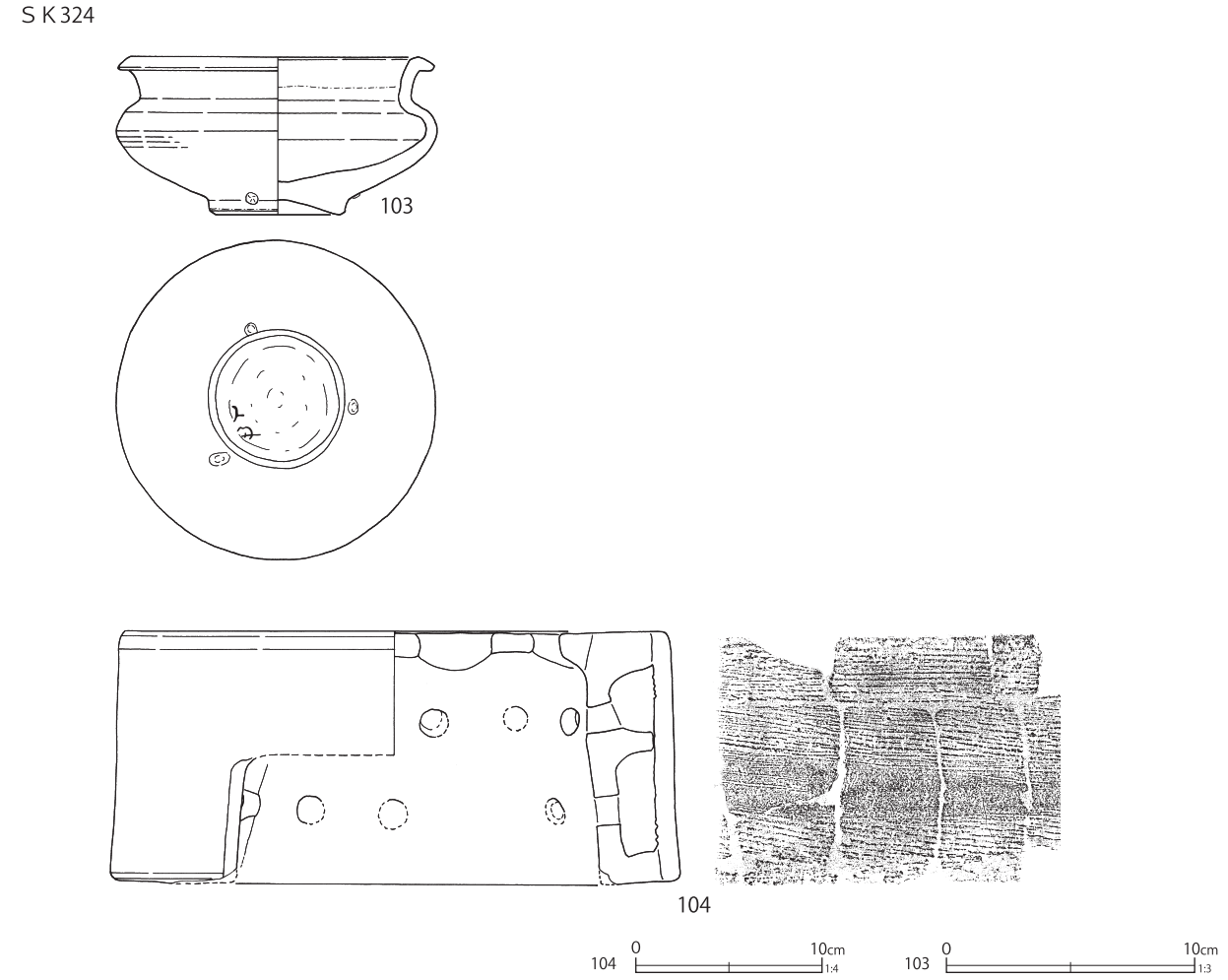


第 163 図　区画 AD 土壙出土遺物（12）

ない。銅線で穂先を固定している。106 ～ 112 は下駄である。106・107 は連歯下駄で、一組である。台の表面と歯の平坦部を除いた部分を黒漆塗りにしている。裏面の中央部は横方向の削り痕が残る。109 は刳り下駄で、前歯の平坦面に文様状の工具痕が見られる。前壷の周辺にくぼみが作られる。110 は刳り下駄である。表面に釘固定の痕跡が見られる。裏面の中央部は横方向の削り痕が見られる。前壷周辺にくぼみが作られる。111 は刳り下駄である。表面のつま先、中央部、踵部に木釘と鉄釘が残存する。第 147 図 112 は刳り下駄で、後歯のみ歯を差し込む形である。前壷周辺にくぼみが作られる。113 ～ 115 には墨書が見られる。114 には人の顔のような絵が描かれている。

第 147 図 116 は銅製の古寛永通寶である。栗橋宿では稀だが、第８地点は他地点と比べて多い。

117 は多孔質の角閃石安山岩転石製磨石である。使用面は平坦だが、中央が僅かに凹む。118 は凝灰岩製硯で、上端部に未貫通の穿孔が３箇所みられる。内面中央は使用により凹む。裏面に刻書がみえるが判読できない。黒色塗布物がみられる。121 は軟質凝灰岩製の焜炉の口縁部である。



第 164 図　区画 AD 土壙出土遺物（13）

口縁部は八角形と推定される。側面、上面にノコギリ状工具痕がみられる。上面には工具による削り痕がみられる。被熱し、煤が付着する。

122 は硝子製品で、簪の玉と考えられる。透明硝子で、被熱している。

第 39 号土壙（第 148・154・167・174 図）

Ｆ７－Ｄ６グリッドに位置する。第 37 号土壙より古く、第３・４・７号埋設桶より新しい。平面形は楕円形で、長軸 1.6 m、短軸 1.35 m、深さ 0.25 mを測る。長軸方位はＮ－ 70°－Ｅを指す。

下層は木質を含む粘質土、上層は炭化物を含む砂質土である。最上層には小礫が含まれる。

出土遺物は陶磁器、瓦、土製品、金属製品があり、瀬戸美濃系磁器の酸化コバルト染付平碗（第 154 図８）を最新とする。推定廃絶期は 19 世紀後葉である。

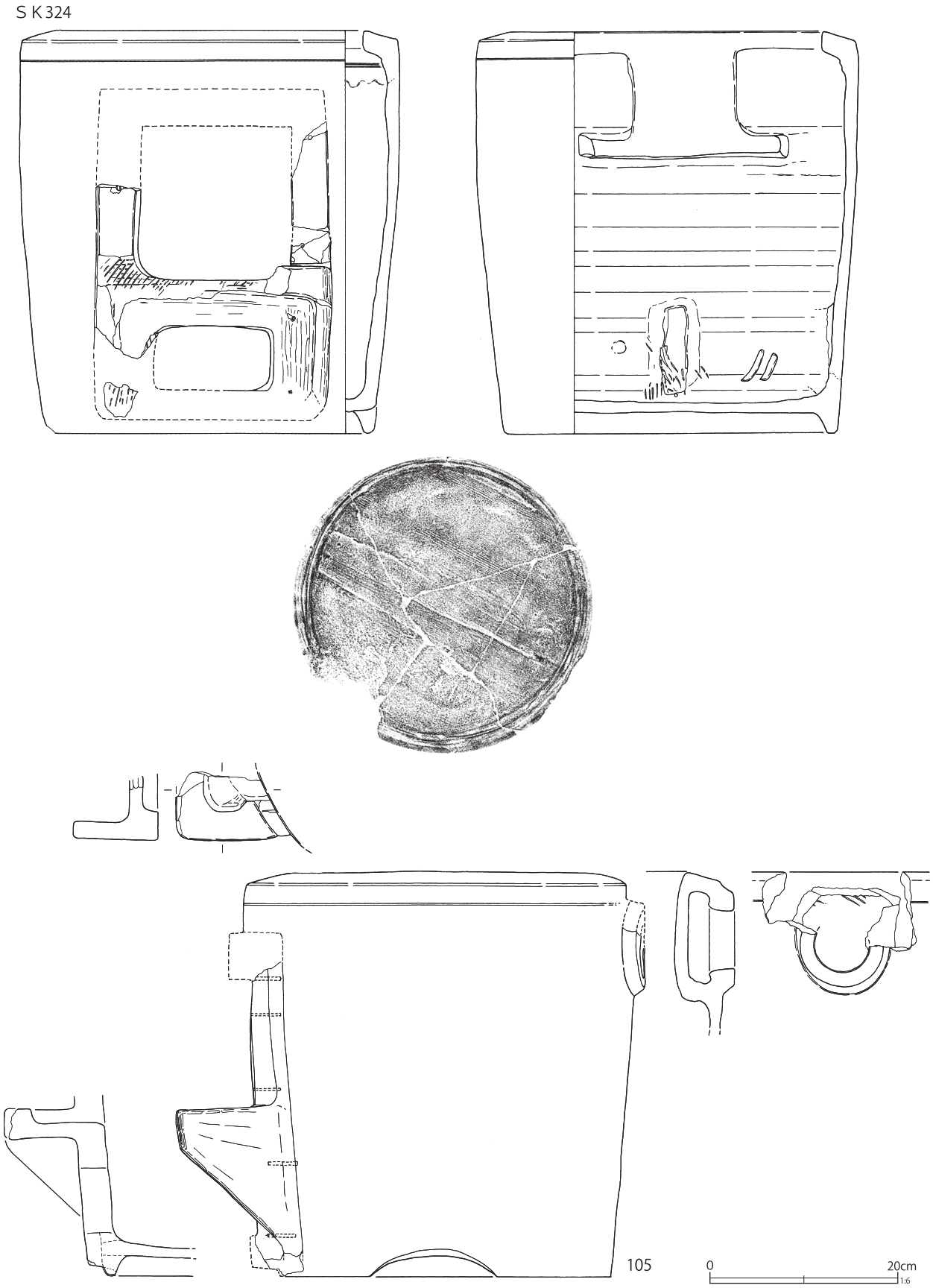
第 154 図８～ 12 に陶磁器類、第 167 図１～３に土製品、第 174 図１に金属製品を図示した。

第 154 図 10 は瀬戸美濃系磁器の卵殻手坏である。内面に江戸絵付けで「固」の屋号がみえる。第 52 号土壙で出土した製品（第 139 図 26）と同品である。

11 は肥前系磁器の蕎麦猪口である。外面に染付銘「田」がみえ、第８地点内で出土する各種染付銘磁器から銘「吉田屋」と推定される。

第 288 号土壙（第 151・162・168・173・176 図）

Ｆ７－Ｃ７・Ｃ８グリッドに位置する。第 317 号土壙より新しく、第３号杭列、第 284 号土壙と重複する。平面形は隅丸長方形で、長軸 2.9 m、



第 165 図　区画 AD 土壙出土遺物（14）

第 42 表　区画 AD 土壙出土遺物観察表（1）（第 152 ～ 165 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	陶器	蓋	―	[2.0]	(7.3)	IK	30	良好	灰白	SK38	上面鉄釉・イッチン描き文 2 の蓋　最大径 (10.0) cm	
2	陶器	土瓶	9.7	12.9	9.5	―	100	良好	灰白	SK38	外面鉄釉・イッチン描き文 底部煤付着 1 の身 №14	
3	陶器	不明	―	[3.0]	―	―	5	良好	灰褐	SK38	萬古系 胎土炻器質 内面緑釉 外面刻印「萬古」口縁部装飾貼付	72-4
4	陶器	急須	(6.2)	6.4	(6.1)	―	35	良好	黒褐	SK38	萬古系 型成形 胎土炻器質 内面布目圧痕 外面型押施文・施釉文字「□薪炭商」口縁部施釉	72-7
5	陶器	急須	7.0	6.4	5.1	―	95	良好	灰赤	SK38	萬古系 胎土炻器質 底部布目圧痕 口縁・注口部先端施釉 体部下位刻印「萬古」外面ウロコ状文 把手透かし彫り	66-10 72-8
6	瓦質土器	竈	(33.0)	29.5	(41.2)	EHIK	40	普通	灰黄褐	SK38	外面櫛描状施文　燻す　被熱（剥落顕著・煤付着）No.19	
7	瓦質土器	竈	39.3	29.8	34.2	CHIK	75	普通	にぶい赤褐	SK38	外面櫛描状施文　燻す　口唇部刻印「○○○○」No. １・４・５・６	
8	磁器	碗	11.7	4.8	3.9	―	65	良好	白	SK39	瀬戸美濃系 内外面施釉・酸化コバルト染付	
9	磁器	碗	―	[3.8]	3.5	―	50	良好	白	SK39	肥前系 内外面施釉 外面色絵（赤・青・緑・黒）	
10	磁器	坏	(6.1)	2.6	(2.0)	―	20	良好	白	SK39	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面酸化コバルト染付 内面上絵付（青）「固」	72-9
11	磁器	猪口	(7.4)	[4.4]	―	―	5	良好	白	SK39	肥前系 内外面施釉 外面染付文字「田」	72-10
12	瓦質土器	竈鍔	(27.6)	3.6	29.4	HIK	10	普通	灰白	SK39	やや酸化焔焼成 上面煤付着	
13	磁器	蓋物	―	[4.0]	5.0	―	30	良好	白	SK40	肥前系 内外面施釉（内面薄掛け）外面染付 被熱（弱）	
14	陶器	皿	9.3	2.5	4.6	―	90	良好	白	SK40	瀬戸美濃系 内外面施釉 内面陰刻文・染付 高台内砂付着 SK52 と接合	
15	陶器	蓋	―	3.1	4.6	―	90	良好	明褐灰	SK40	備前系ヵ 胎土炻器質 上面被熱 土瓶の蓋ヵ　最大径 6.4 cm	
16	陶器	擂鉢	―	[2.2]	(14.0)	HI	10	良好	灰白	SK53	益子系　内面擂目　外面柿釉　底部刻印「○」	67-3
17	瓦質土器	竈鍔	31.3	3.8	33.2	C	95	普通	黄灰	SK53	燻す　口唇部刻印４あり「久保田」 外面煤付着	
18	磁器	急須	―	[1.2]	7.2	―	10	良好	白	SK56	瀬戸美濃系　内外面施釉　外面酸化コバルト染付　焼継痕あり　底部焼継印（赤）・墨書「くり」	73-5
19	陶器	急須	7.4	6.6	5.1	―	95	良好	褐灰	SK56	萬古系　底部布目痕　胎土炻器質　口縁・注口・把手端部施釉　把手上面透彫・下面刻印「萬古」 外面彩色（赤・金・黒・白盛）	73-4
20	陶器	植木鉢	18.5	12.8	10.2	IK	90	良好	浅黄橙	SK56	内外面鉄釉　高台抉り１　内底面重焼痕　底部墨書 SK59 と接合	
21	土師質土器	焼塩壺	―	[2.9]	3.5	AHIK	30	普通	橙	SK56	江戸在地系　底部糸切痕（左）　胎土粉質　外面被熱（剥落）	
22	陶器	鉢	9.7	4.2	3.9	K	95	良好	灰白	SK57	内外面施釉　口縁部青緑釉流し掛け　内面呉須（酸化コバルト）・鉄絵	
23	土師質土器	目皿	幅 11.4	1.4	―	AIK	55	良好	橙	SK57	上面ヘラナデ　下面被熱（白色化）	
24	磁器	碗	(10.0)	5.3	3.5	―	50	良好	白	SK58	瀬戸美濃系　内外面施釉・酸化コバルト染付　焼継痕あり　高台内焼継印（赤）	73-7
25	磁器	坏	(5.7)	2.7	2.2	―	50	良好	白	SK58	瀬戸美濃系　内外面施釉　外面染付　内面上絵付（青）「盛／名酒」	73-6
26	磁器	碗	―	[4.8]	(3.9)	K	40	良好	白	SK58	瀬戸美濃系　内外面施釉　外面染付	
27	磁器	坏	6.4	2.8	2.8	―	95	良好	白	SK58	瀬戸美濃系　内外面施釉　内面上絵付（緑・金・赤・黒）	
28	磁器	燗徳利	―	[6.7]	5.4	―	10	良好	白	SK58	瀬戸美濃系　外面施釉・酸化コバルト染付　底部墨書「八」 外面煤付着	73-8
29	磁器	蓋	―	3.1	11.2	―	70	良好	白	SK58	肥前系　内外面施釉　外面型紙摺絵染付　焼継痕あり　内面焼継印（赤）30 の蓋　最大径 12.8 cm	
30	磁器	段重	(12.5)	7.7	11.5	―	65	良好	白	SK58	肥前系　内外面施釉　外面型紙摺絵染付　29 の身	
31	硬質陶器	皿	―	[1.0]	(13.0)	―	5	普通	白	SK58	裏銘ゴム印版（緑）	
32	陶器	急須	(5.5)	[2.8]	―	I	10	普通	赤褐	SK58	胎土炻器質	
33	陶器	甕	―	[4.8]	3.8	K	20	良好	灰白	SK58	京都信楽系　胎土磁質　外面鉄釉　底部墨書	73-9
34	土師質土器	焙烙	(30.8)	4.1	―	CHIK	45	普通	淡赤橙	SK58	砂目底　体部下位ケズリ	
35	瓦質土器	竈鍔	(30.6)	3.7	(31.1)	HIK	10	普通	灰黄	SK58	やや酸化焔焼成　口唇部・体部上位煤付着	
36	瓦質土器	竈	32.3	28.3	(33.0)	CIK	45	普通	灰白	SK58	外面櫛描状施文　燻す　口唇部ヘラ書き　内面煤付着	73-10
37	土製品	羽口	長さ 10.7 内径 3.2 重さ 310.3			CHI	―	良好	灰白	SK58	土師質 ナデ状調整　外面調整手持ち	
38	磁器	碗	(10.6)	5.9	4.2	―	45	良好	白	SK59	瀬戸美濃系　内外面施釉・染付　焼継痕あり　高台内焼継印（赤）	73-11
39	磁器	碗	10.2	5.5	3.7	―	100	普通	白	SK59	瀬戸美濃系　内外面施釉・染付　焼継痕あり　高台内焼継印（赤）	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
40	磁器	鉢	(14.4)	[5.0]	—	—	40	普通	白	SK59	淡路珉平焼 内外面黄色釉　焼継痕あり	
41	磁器	燗徳利	2.4	18.8	6.0	—	70	普通	灰白	SK59	瀬戸美濃系　内外面施釉　外面酸化コバルト染付　焼継痕あり　底部焼継印（赤）	
42	磁器	燗徳利	—	[3.8]	5.8	—	20	良好	白	SK59	瀬戸美濃系　外面施釉　墨書	
43	陶器	片口鉢	—	[6.4]	7.7	EKL	45	良好	灰白	SK59	瀬戸美濃系　内外面灰釉　内面目跡３　高台内墨書	73-12
44	陶器	土瓶	7.2	[7.5]	—	K	45	普通	灰白	SK59	上下合わせ二枚型成形 外面型押施文・白釉流し掛け 内面施釉 外面下位煤付着	
45	陶器	蓋	—	3.8	14.2	K	55	良好	灰白	SK59	外面下位トビガンナ施文・上位灰釉散らし　内面柿釉 最大径 16.0 ㎝	
46	磁器	皿	14.8	4.2	8.0	—	95	良好	白	SK66	瀬戸美濃系　内外面施釉・型紙摺絵染付　焼継痕あり 高台内焼継印（赤）２・墨書	
47	陶器	片口鉢	20.2	12.2	(13.0)	IK	60	良好	にぶい橙	SK66	内外面施釉　口縁部青緑釉流し掛け　内面目跡２遺存 煤付着	
48	磁器	碗	7.1	2.9	2.4	—	95	良好	白	SK71	瀬戸美濃系　内外面施釉・酸化コバルト染付　口紅	
49	磁器	坏	6.0	2.9	2.2	—	55	良好	白	SK71	瀬戸美濃系　内外面施釉　外面酸化コバルト染付　内面上絵付（青）「固」／本店	73-17
50	磁器	坏	(6.1)	[2.1]	—	—	10	良好	白	SK71	瀬戸美濃系　内外面施釉　内面上絵付	
51	陶器	土瓶	—	[10.0]	—	IK	5	普通	にぶい橙	SK71	吉見焼ヵ　胎土土器質　外面鉄釉（黒）　内面鉄化粧	67-6
52	瓦質土器	竈鍔	27.6	3.0	29.2	IK	50	普通	灰白	SK71	燻す　口唇部刻印「○○」　被熱・煤付着	
53	瓦質土器	竈鍔	(30.8)	3.3	32.0	IK	20	普通	灰白	SK71	燻す　煤付着	
54	土師質土器	焜炉	20.0	20.2	18.4	AEHK	60	普通	にぶい橙	SK71	板作り成形　胎土粉質　外面ミガキ　刻印「[　]尾／[　]／造証／名産」　扉付　内面上位・上面煤付着	73-16
55	磁器	坏	(5.8)	6.6	3.2	—	45	普通	白	SK247	瀬戸美濃系　内外面施釉・酸化コバルト染付　体部下位鎬　高台内焼継痕（赤）	
56	磁器	坏	6.3	3.1	2.4	—	55	普通	白	SK247	瀬戸美濃系　内外面施釉　外面酸化コバルト染付	
57	磁器	皿	(15.2)	4.4	8.6	—	60	普通	白	SK247	肥前系　内外面施釉・染付　焼継痕あり　高台内焼継印（赤）	
58	磁器	蓋	—	[0.4]	—	—	5	普通	白	SK247	瀬戸美濃系　内外面施釉　下面染付　上面焼継印（赤）	
59	磁器	戸車	径 3.1 孔径 1.1 厚さ 0.8			—	100	普通	白	SK247	肥前系　側面施釉　孔径 1.1 ㎝	
60	磁器	不明	—	1.2	8.2	—	95	普通	白	SK247	瀬戸美濃系　無釉　円形	
61	陶器	坏	4.9	2.9	3.0	IK	95	普通	黄灰	SK247	瀬戸美濃系　内外面灰釉　口唇部露胎	
62	陶器	灯明皿	9.8	1.9	4.9	K	95	普通	黄灰	SK247	内外面灰釉　内面ピン痕３あり　口縁部黒化　一部歪みあり	
63	陶器	灯火具	4.2	5.4	5.4	K	80	普通	灰白	SK247	京都信楽系　内外面灰釉　最大径 7.8 ㎝	
64	陶器	蓋	—	3.3	7.0	K	100	普通	浅黄	SK247	上面白化粧後施釉・鉄絵・緑釉彩　最大径 9.5 ㎝	
65	土師質土器	焙烙	(36.0)	[3.9]	(36.6)	CHIK	15	普通	灰白	SK247	底部シワ状痕　体部～底部・内底面煤付着	
66	磁器	燭台	2.2	5.4	3.1	—	100	良好	白	SK280	瀬戸美濃系　型成形　外面施釉　鉄芯遺存	
67	陶器	碗	6.5	7.4	3.3	K	85	良好	灰白	SK280	大堀相馬系　胎土磁質　内面糠白釉　外面糠白・鉄釉上下掛け分け・上絵付（被熱変色）・イッチン文字「久谷」	70-5
68	陶器	蓋	4.5	3.6	10.0	K	95	良好	灰白	SK280	内面灰釉　外面青緑釉　69 の蓋　最大径 13.2 ㎝	
69	陶器	行平鍋	13.7	8.0	7.6	K	95	良好	灰白	SK280	内面灰釉　内面上位青緑釉流し掛け　外面青緑釉　外面下位煤付着　68 の身	
70	土師質土器	練炭おこし	11.6	11.7	11.6	AHIK	95	良好	赤褐	SK280	底部静止糸切痕　把手内面布目圧痕　内面・口唇部被熱（白色化）	
71	土師質土器	焙烙	35.8	5.2	—	AHIK	95	普通	橙	SK280	砂目底　内底面渦巻状のナデ　胎土小礫含む　底部・内底面煤付着	
72	瓦質土器	焜炉	—	[15.4]	21.6	CHI	45	普通	灰白	SK281	砂目底　外面スタンプ施文をナデ消し　脚部周囲ナデ燻す　胎土中心灰色　内底面中筒痕跡（径 11 ㎝）	
73	磁器	灯火具	4.1	5.1	4.3	—	100	良好	白	SK284	肥前系　内外面施釉　上面染付　口唇部煤付着　最大径 8.4 ㎝	
74	磁器	徳利	(1.3)	10.6	3.3	—	95	良好	白	SK284	瀬戸美濃系　内外面施釉　外面色絵（赤・青・緑・黒）	
75	磁器	急須	—	[0.4]	—	—	5	良好	白	SK284	瀬戸美濃系　内面施釉　焼継痕あり　底部焼継印（赤）・墨痕	
76	陶器	皿	(29.0)	7.3	(17.6)	CIK	30	良好	灰黄	SK284	内外面灰釉　内面目跡５遺存	
77	陶器	蓋	—	2.4	5.8	I	90	良好	にぶい橙	SK284	胎土土器質　上面鉄釉　下面鉄化粧　被熱（黒化）最大径 9.5 ㎝	
78	陶器	蓋	—	[1.6]	7.0	AIJK	80	普通	橙	SK284	胎土土器質　上面鉄釉（黒）　下面鉄化粧・施釉（剥落著しい）　最大径 9.2 ㎝	
79	土師質土器	植木鉢	15.7	10.2	11.3	AHIK	95	普通	橙	SK284	江戸在地系　底部糸切痕（左）・抉り３あり　胎土粉質	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
80	瓦質土器	蓋	―	5.6	27.2	AHI	60	普通	灰黄褐	SK284	上面ヘラナデ　燻す　内面煤付着　被熱	
81	磁器	碗	(10.8)	5.6	(3.8)	―	40	普通	白	SK288	瀬戸美濃系　内外面施釉・染付	
82	磁器	碗	(9.6)	[3.4]	―	―	20	普通	白	SK288	瀬戸美濃系　内外面施釉　外面染付	
83	磁器	坏	―	[1.5]	2.6	―	45	良好	白	SK288	瀬戸美濃系　内外面施釉・上絵付（青）「㐂」	
84	磁器	皿	12.3	3.0	5.4	―	85	良好	白	SK288	瀬戸美濃系　内面陰刻文　内外面青磁釉　高台内鉄釉	
85	磁器	皿	10.3	2.2	5.4	―	90	良好	白	SK288	瀬戸美濃系　内外面施釉・酸化コバルト染付　口紅	
86	陶器	徳利	2.0	[10.4]	―	I	70	良好	灰赤	SK288	備前系　板作り成形　胎土炻器質　外面陰刻文・塗土	70-7
87	施釉土器	鉢	12.9	4.8	12.2	HIK	90	普通	橙	SK288	底部糸切痕（左）　胎土粉質　内外面施釉	
88	瓦質土器	目皿	(15.4)	1.7	(15.0)	AK	20	良好	灰白	SK288	下面シワ状痕　燻す　上面雲母光沢　胎土中心灰色	
89	磁器	碗	(8.2)	4.7	4.0	―	40	良好	白	SK292	瀬戸美濃系　内面・高台内施釉　外面鉄釉斑状　高台内酸化コバルト染付	
90	陶器	甕	12.4	11.8	8.0	IK	80	良好	黄灰	SK293	笠間系　内面灰釉　外面二彩釉（緑・白）SK294 と接合	70-8
91	陶器	急須	―	[3.5]	(5.4)	―	30	良好	褐灰	SK293	萬古系　胎土炻器質　底部布目痕　体部刻印「萬古」	
92	瓦質土器	植木鉢	(14.6)	9.0	10.0	CIK	50	普通	灰黄褐	SK293	底部糸切痕をナデ消し　胎土中心灰色	
93	瓦質土器	植木鉢	(12.2)	8.9	6.9	AIK	70	普通	黄灰	SK293	底部糸切痕（左）　口縁部燻す	
94	磁器	碗	(8.1)	[2.5]	―	―	5	普通	白	SK300	瀬戸美濃系　内外面施釉・染付	
95	磁器	紅坏	(7.1)	[1.8]	―	―	10	良好	白	SK300	肥前系　内外面施釉　外面色絵（赤）	
96	磁器	坏	―	[1.9]	―	―	5	普通	白	SK300	肥前系　内外面施釉　外面色絵（赤）	
97	磁器	合子	(4.7)	2.8	(2.8)	―	50	良好	白	SK300	肥前系　内外面施釉　外面染付	
98	陶器	坏	(6.3)	3.8	3.0	EIK	65	良好	灰白	SK300	瀬戸美濃系　内外面灰釉　体部下位・破断面に黒色塗布物付着	
99	陶器	灯明皿	(10.4)	1.9	(6.0)	K	30	良好	灰白	SK300	瀬戸美濃系　内外面柿釉　体部下位・底部釉拭き取り内面重焼痕	
100	陶器	灯明皿	(7.4)	1.4	(3.5)	IK	45	良好	黄灰	SK300	瀬戸美濃系　内外面柿釉　底部釉拭き取り　内面重焼痕	
101	陶器	燗徳利	―	[3.8]	7.6	IK	80	良好	にぶい橙	SK300	外面灰釉　底部墨書「栗仲／八百兵」	
102	かわらけ	小皿	(4.0)	0.7	2.6	AHIK	70	普通	にぶい橙	SK300	江戸在地系　底部糸切痕（左）胎土粉質　焼成前穿孔１あり	
103	磁器	香炉	11.6	6.3	4.9	―	95	良好	白	SK324	瀬戸美濃系　内面上位・外面酸化クロム青磁釉　底部墨書「せと」ヵ　内面黒色付着物	
104	土師質土器	焜炉	(29.9)	[13.6]	(29.5)	AHIK	60	不良	明赤褐	SK324	三河産　外筒内側櫛目　内面被熱（白色化）　上・下面黒化　窓は推定	
105	瓦質土器	竈	33.4	43.8	33.8	AHIK	70	普通	褐灰	SK324	内底面砂目・櫛歯状の圧痕　外面ミガキ　燻す　高台抉り２あり　釘孔５遺存（内鉄釘１遺存）内面下部五徳痕（突起）３あり　内面上位煤付着　窓は推定	

短軸 1.2 m、深さ 0.5 mを測る。長軸方位はN－68°－Eを指す。

覆土は砂質土を主体とし、木片が多量に含まれている。最上層には炭化物が含まれる。遺構の南西部には桶が投棄されている。出土遺物は混ざりがなく、瀬戸美濃系磁器の酸化コバルト染付皿（第162図85）を最新とする。推定廃絶期は19世紀後葉である。

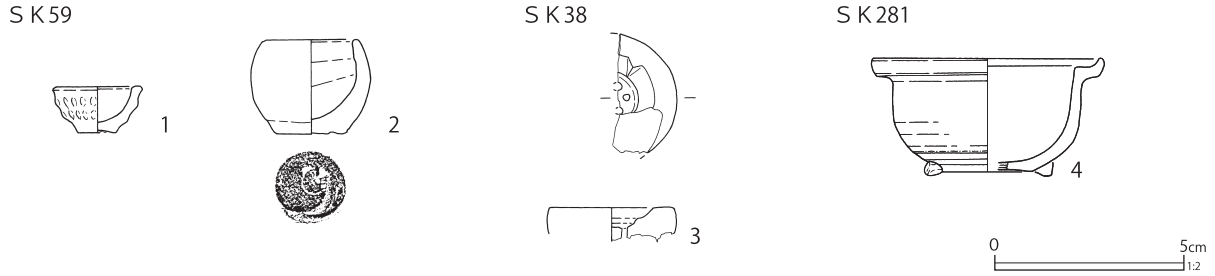
第162図81～88に陶磁器類、第168図6に軒桟瓦、第176図33・34に金属製品を図示した。

第162図82は瀬戸美濃系磁器の丸碗である。外面に篆書体文「木」の染付がみられる。83は瀬戸美濃系磁器の卵殻手坏である。底部は輪高台で、高台内に江戸絵付けで「㐂」の屋号がみえる。第7地点区画AQ「茶屋／勘兵衛店／幸七」に位置する第111号土壙（埼埋文2019d）の荷札に同様の屋号がみられる。

86は備前系陶器の角徳利である。４枚粘土板による板作り成形で、肩部と口縁部は別作りである。外面に陰刻文と塗土がみられる。

第168図6は軒桟瓦である。やや砂質な胎土で、江戸式に類似する瓦当文様である。中心弁は六枚である。

第173図28・29は桶の側板である。28は焼き印「北総上花輪邑／無類格別仕入／本家高梨改」、「㊙」とある。墨書「上」に「取」がみえ、上花



第 166 図　区画 AD 土壙出土遺物（15）

第 43 表　区画 AD 土壙出土遺物観察表（２）（第 166 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	胎土	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	磁器	紅坏	2.1	1.2	1.0	2.0	―	良好	白	SK59	瀬戸美濃系 型成形 内外面施釉	121-15
2	土師質土器	小壺	(2.4)	2.5	1.8	9.5	AHIK	普通	にぶい橙	SK59	底部糸切痕（中心）胎土粉質	121-14
3	土製品	ミニチュア	(3.2)	[0.9]	―	3.6	AKM	普通	灰白	SK38	京都系 焜炉 型成形 外面黒色塗付物	
4	陶器	ミニチュア	(6.0)	3.1	(2.4)	12.1	IK	良好	灰	SK281	鍋 内外面柿釉	

輪村の名主の高梨兵左衛門が寛文元年（1661）に生産開始した醤油醸造所の商標である。現キッコーマンの前身であり、「上取」の使用期間は不詳であるが、大正六年（1917）の野田醤油株式会社設立以前のものであることは間違いない。

29 は「ジガミ」に「サ」の墨書、「銚子」、「廣庄改」、「寅改正」、「萬代」の焼き印がある。安政五年（1858）の銚子領内の醤油醸造家に「荒野村 / 廣屋庄右衛門」がみえ、「ジガミ」に「サ」の商標を用いている（船杉・渡辺 1998）。銚子の造醤油屋である廣屋庄右衛門謹製の桶と考えられる。「ジガミサ」の廣屋庄右衛門は明治二十六年（1893）に「ヤマサ」（現ヤマサ醤油株式会社）に買収されており、本製品は同年以前のものと考えられる。

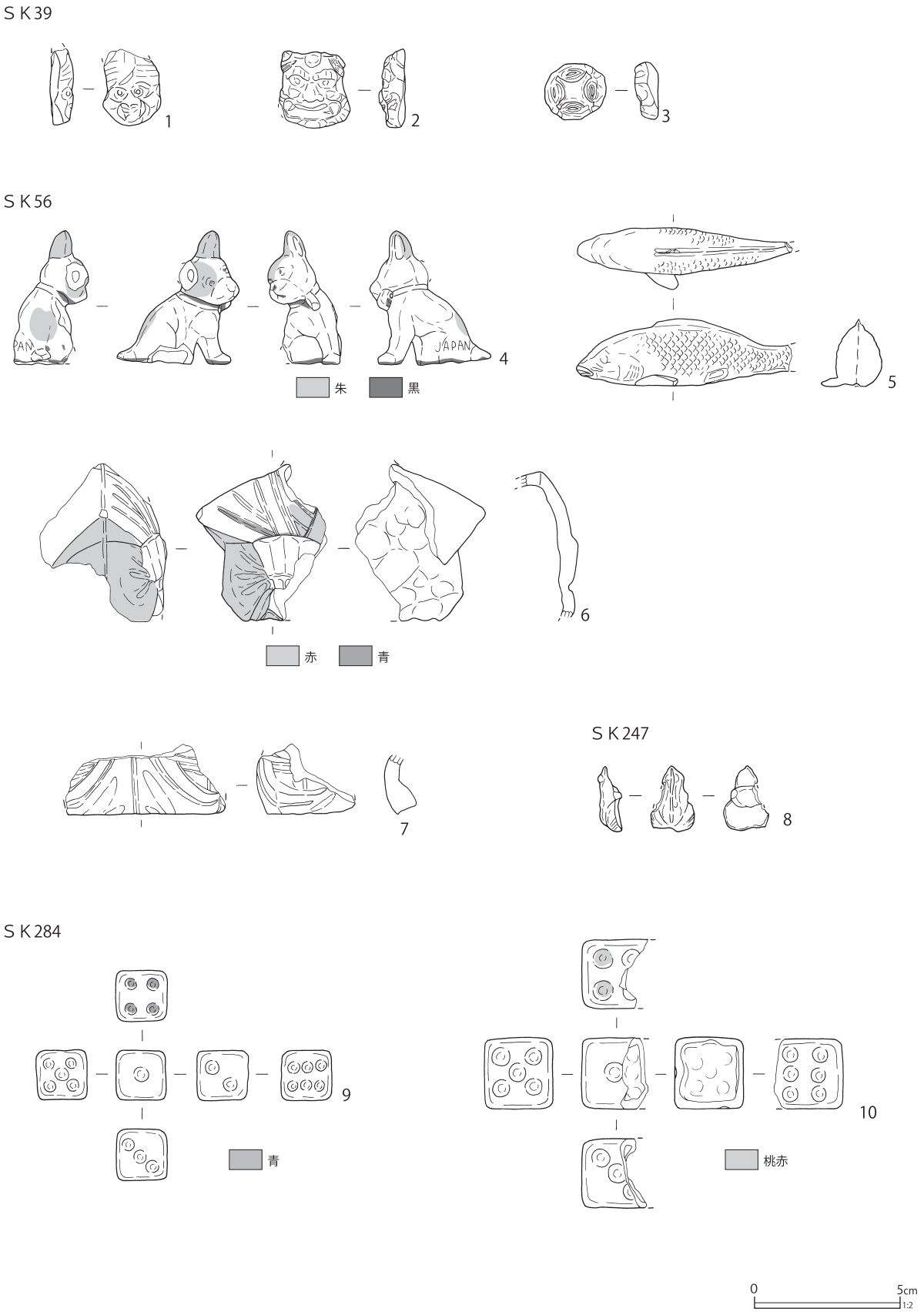
第 300 号土壙（第 150・163・168・169 図）

Ｆ７－Ｃ８・Ｄ８グリッドに位置し、第 281 号土壙より古い。平面形は楕円形で、長軸 1.95 m、短軸 1.05 m、深さ 0.1 mを測る。長軸方位はＮ－ 77°－Ｅを指す。

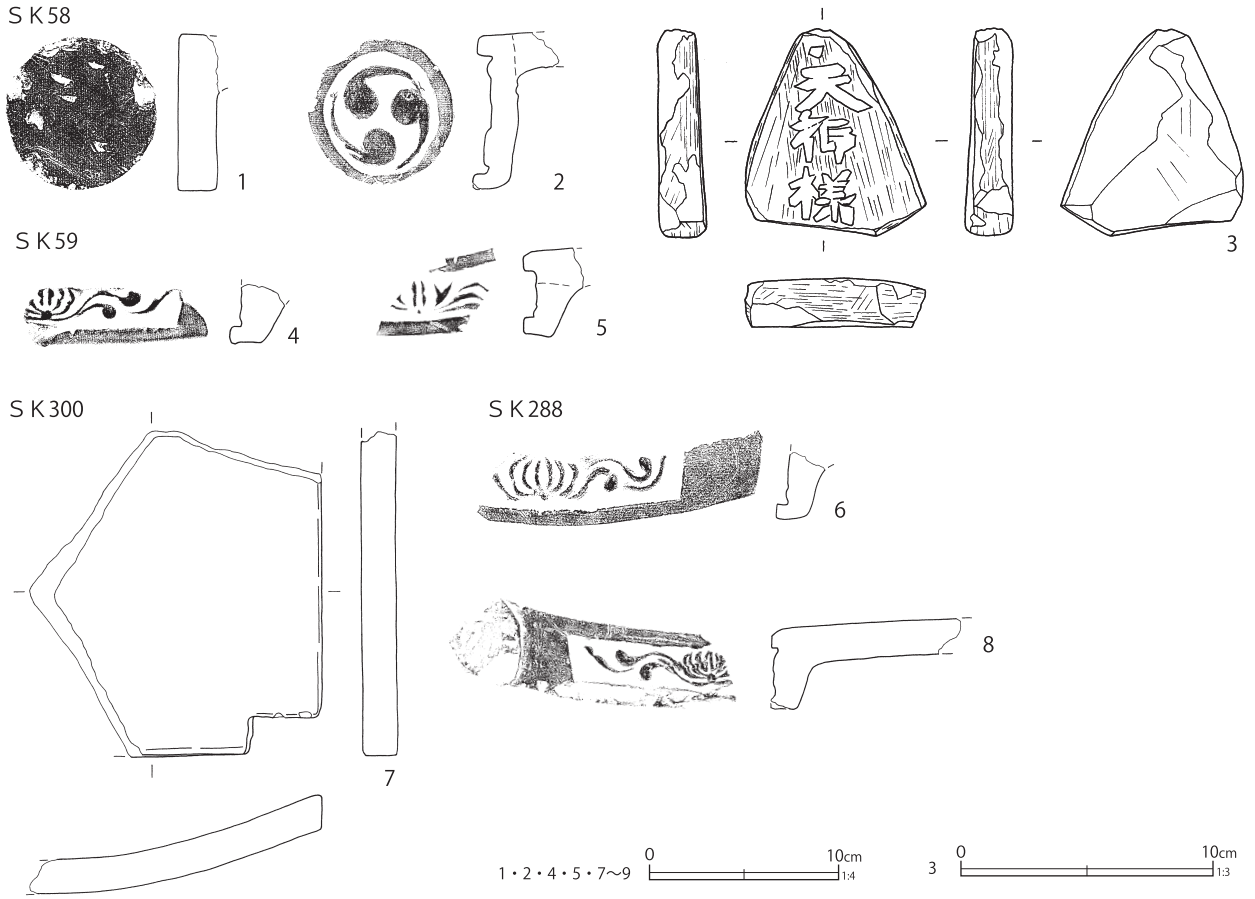
覆土は砂質土で、多量の瓦が含まれている。瓦は 40270.0g 出土している。出土遺物は、18 世紀

第 44 表　区画 AD 土壙出土遺物観察表（３）（第 167 図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	土製品	芥子面	2.6	2.0	0.8	3.7	HK	良好	橙	SK39	胎土粉質 一枚型成形	122-13
2	土製品	芥子面	2.6	2.4	0.9	4.5	AHK	良好	橙	SK39	江戸在地系 一枚型成形	122-13
3	土製品	芥子面	1.9	2.1	0.8	2.9	AHK	良好	橙	SK39	江戸在地系 一枚型成形	122-13
4	磁器	人形	4.6	4.2	0.3	13.5	―	―	白	SK56	瀬戸美濃系 犬 前後合二枚型成形 開口 彩色（朱・黒）刻印あり	
5	土製品	人形	2.3	[7.5]	[2.1]	17.1	―	良好	にぶい橙	SK56	京都系 鯉 左右合二枚型成形 中実 黒色塗付物	117-14
6	土製品	人形	[4.8]	[4.6]	0.8	19.2	AHIK	良好	灰白	SK56	京都系 裃人形 小礫含む 前後合二枚型成形 開口 彩色（青・赤）	
7	土製品	人形	[2.4]	[5.5]	0.8	12.4	AEI	良好	灰白	SK56	京都系 裃人形 小礫含む 前後合二枚型成形 開口 彩色（赤） ６と同一個体	
8	土製品	人形	2.2	1.5	0.8	1.4	A	良好	橙	SK247	江戸在地系 蛙 二枚型成形 白化粧 上面緑釉 下面施釉	119-16
9	磁器	サイコロ	1.7	1.7	1.7	10.3	―	良好	白	SK284	瀬戸美濃系 施釉彩色（青）遺存	
10	磁器	サイコロ	2.4	[2.3]	2.4	8.1	―	良好	白	SK284	瀬戸美濃系 型成形 中空 彩色（桃赤）遺存	



第 167 図　区画 AD 土壙出土遺物（16）



第 168 図　区画 AD 土壙出土遺物（17）

第 45 表　区画 AD 土壙出土遺物観察表（４）（第 168・169 図）

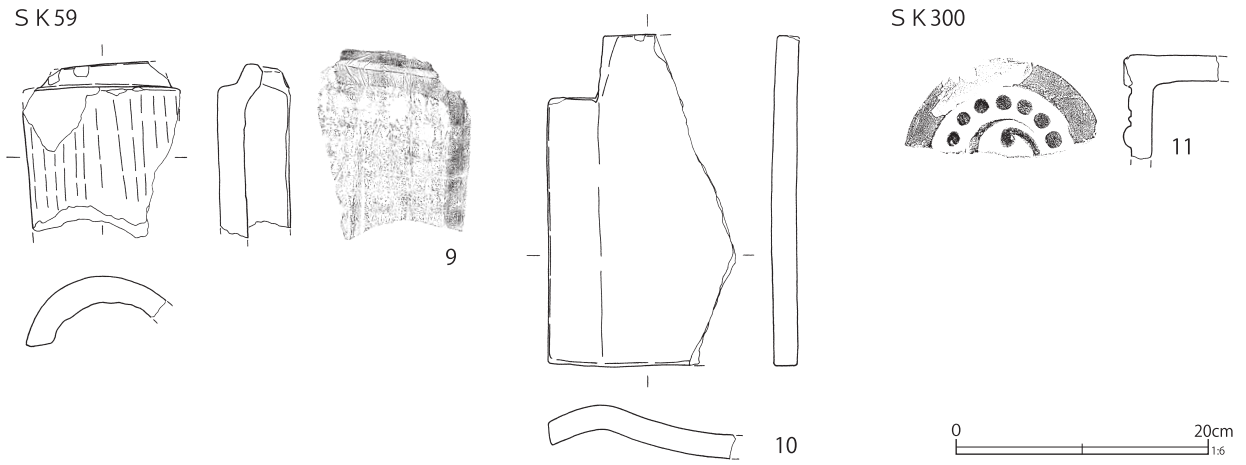
番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	高さ	径	胎土	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	瓦	軒桟瓦	―	8.2	2.0	―	8.0	AIK	良好	灰白	SK58	石持瓦 銀化 燻す	
2	瓦	軒桟瓦	―	[9.3]	1.9	[8.3]	7.8	AIK	良好	灰白	SK58	左巻三巴文 弱く銀化 燻す 粗雑なつくり	
3	瓦	転用瓦	7.9	7.1	1.9	―	―	ACIK	普通	灰白	SK58	裏面刻書「天神様」裏・側面線条痕 砥具転用	124-16
4	瓦	軒桟瓦	2.8	[10.3]	2.2	3.1	―	AK	普通	灰白	SK59	江戸式 弱く銀化 燻す	
5	瓦	軒桟瓦	[3.3]	[7.2]	2.3	[5.0]	―	AIK	良好	灰白	SK59	銀化 燻す	
6	瓦	軒桟瓦	[2.5]	[15.7]	2.2	[5.4]	―	AIK	普通	灰白	SK288	江戸式 胎土やや砂質 燻す	
7	瓦	桟瓦	[17.2]	[15.4]	1.8	[5.2]	―	AIK	良好	灰白	SK300	弱く銀化 燻す	
8	瓦	軒桟瓦	[10.2]	[16.3]	2.9	[6.6]	―	AIK	普通	灰白	SK300	江戸式 弱く銀化 燻す	
9	瓦	丸瓦	[14.0]	[12.6]	2.1	5.6	―	AK	良好	灰白	SK59	弱く銀化 燻す	
10	瓦	桟瓦	26.5	[15.0]	1.9	[4.3]	―	AIK	良好	灰	SK59	燻す 雲母付着	
11	瓦	軒丸瓦	[7.6]	[15.5]	2.1	[8.1]	(16.0)	AIK	良好	灰白	SK300	上面ヘラナデ 左巻十六連珠三巴文 銀化 燻す	

後葉の陶磁器を主体としており、第２号溝跡出土陶磁器と接合関係にある。瀬戸美濃系磁器の端反形碗（第 163 図 94）と産地不詳陶器の燗徳利（第 163 図 101）が最新期の陶磁器である。推定廃絶期は 19 世紀前半である。

第 163 図 94 ～ 102 に陶磁器類、第 168 図 7・8・第 169 図 11 に瓦を図示した。

第 163 図 94 は瀬戸美濃系磁器の端反形碗である。小破片で、最新期の陶磁器である。95・96 は肥前系磁器の坏で、赤い上絵付で文字が書かれている。京都を中心に販売・流行していた商標銘の坏で、所謂小町紅と推定される。江戸遺跡でも一定量出土しており、その盛行は 18 世紀後半～ 19 世紀頃と指摘されている（角谷 2005）。

98 は瀬戸美濃系陶器の坏である。灰釉で、体部下位と破断面に黒色塗布物が付着する。転用



第 169 図　区画 AD 土壙出土遺物（18）

が示唆される。99・100 は瀬戸美濃系陶器の柿釉灯明皿である。99 は体部下位から底部にかけて、100 は底部の釉を拭き取っている。内面に重ね焼き痕がみられる。

101 は産地不詳陶器の燗徳利である。底部に墨書「栗仲 / 八百兵」がみえる。「栗仲」は栗橋仲町、現在の第８地点周辺を指すと考えられる。「八百兵」の意味は明らかにし難い。しかし、「兵」は本区画の「煮賣屋 / 兵藏」の「兵」を指す可能性について留意しておきたい。

102 は底部中央に焼成前穿孔がみられるかわらけ小皿である。左回転の糸切痕が遺存し、粉質胎土の江戸在地系である。

以上に取り上げた土壙の他にも、特徴的な遺物が出土しているため、以下に記述する。

第 152 図３は萬古系陶器で、器種は不詳である。内面に緑釉をを施釉し、萬古系陶器では稀である。外面に刻印「萬古」がみえる。

第 153 図６は瓦質土器の竈である。底抜けで、外面に櫛歯状工具による施文がみられる。口縁端部と底部の端部に粘土切断時のものか、斜めに線条痕がみえる。薄手で、胎土は石英が目立ち、栗橋宿でみられる竈では稀な胎土を呈している。利根川流域外からの搬入品の可能性がある。被熱による剥落が著しい。

第 154 図１７は瓦質土器の竈鍔である。口唇部に刻印「久保田」がみえる。刻印の数は大きさを示すものと推定される。胎土に角閃石が含まれ、利根川流域の在地産と考えられる。

第 155 図 28 は瀬戸美濃系磁器の燗徳利である。外面に酸化コバルト染付がみられ、底部に墨書「八」がみえる。佐野屋を示す可能性がある。『絵図』にみえる本陣北側に位置する「煮賣茶屋 / 十平次」であろうか。

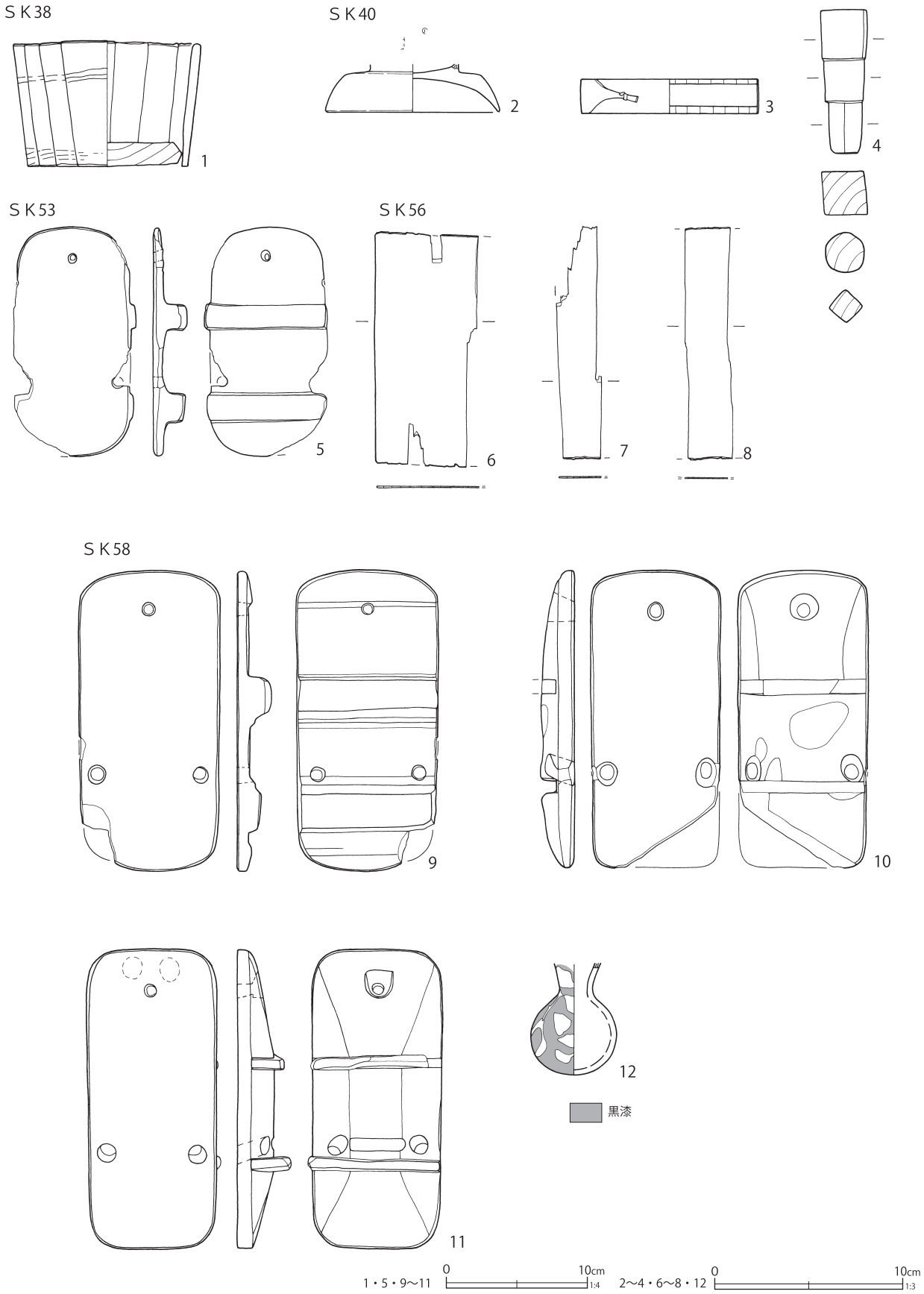
第 157 図 44 は産地不詳陶器の土瓶である。上下合わせの型成形で、外面に陽刻状文がみられる。外面井白釉が流し掛けられている。

第 158 図 49 は瀬戸美濃系磁器の卵殻手坏である。外面に酸化コバルト染付が施され、内面に江戸絵付けで「吉」、「本店」の銘がみえる。原勢屋製の坏で、第 39・52 号土壙で同様の坏が出土している（第 139 図 26、第 154 図 10）。

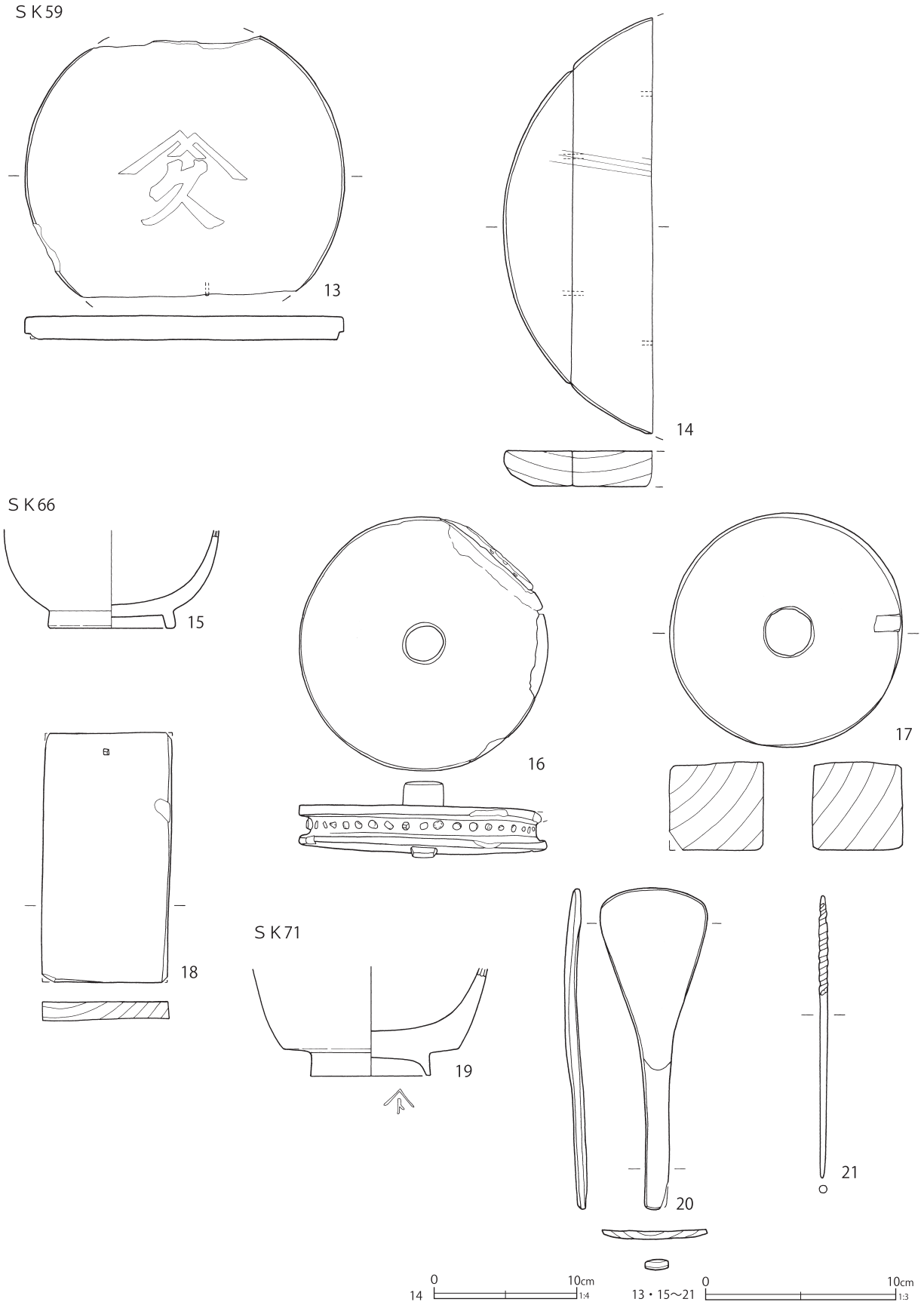
第 158 図 51 は胎土土器質の黒釉土瓶で、現吉見町で 19 世紀に焼かれていた吉見焼の可能性がある。注口部はＳ字状を呈する。

第 160 図 71 は土師質土器の丸底焙烙である。底部無調整の砂目底で、内底面に渦巻状のナデがみられる。胎土に多量の赤色粒子と金雲母、小礫を含む特徴がある。内底面には煤が付着する。

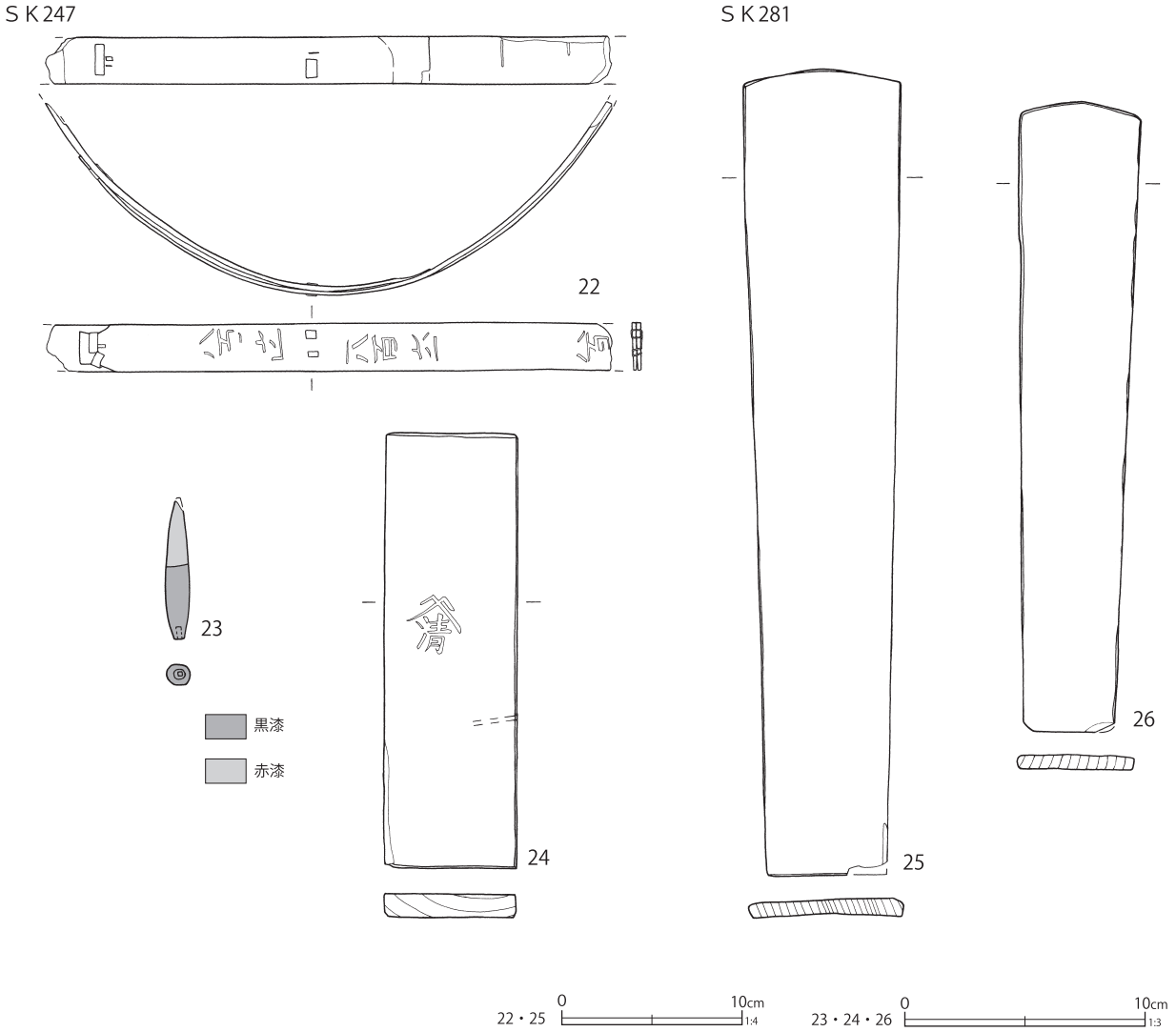
第 161 図 73 は肥前系磁器の灯火具、もしくは坏台である。内面に１箇所孔がみられ、口唇部に煤の付着が認められるため、灯火具である可能性



第 170 図　区画 AD 土壙出土遺物（19）



第 171 図　区画 AD 土壙出土遺物（20）



第 172 図　区画 AD 土壙出土遺物（21）

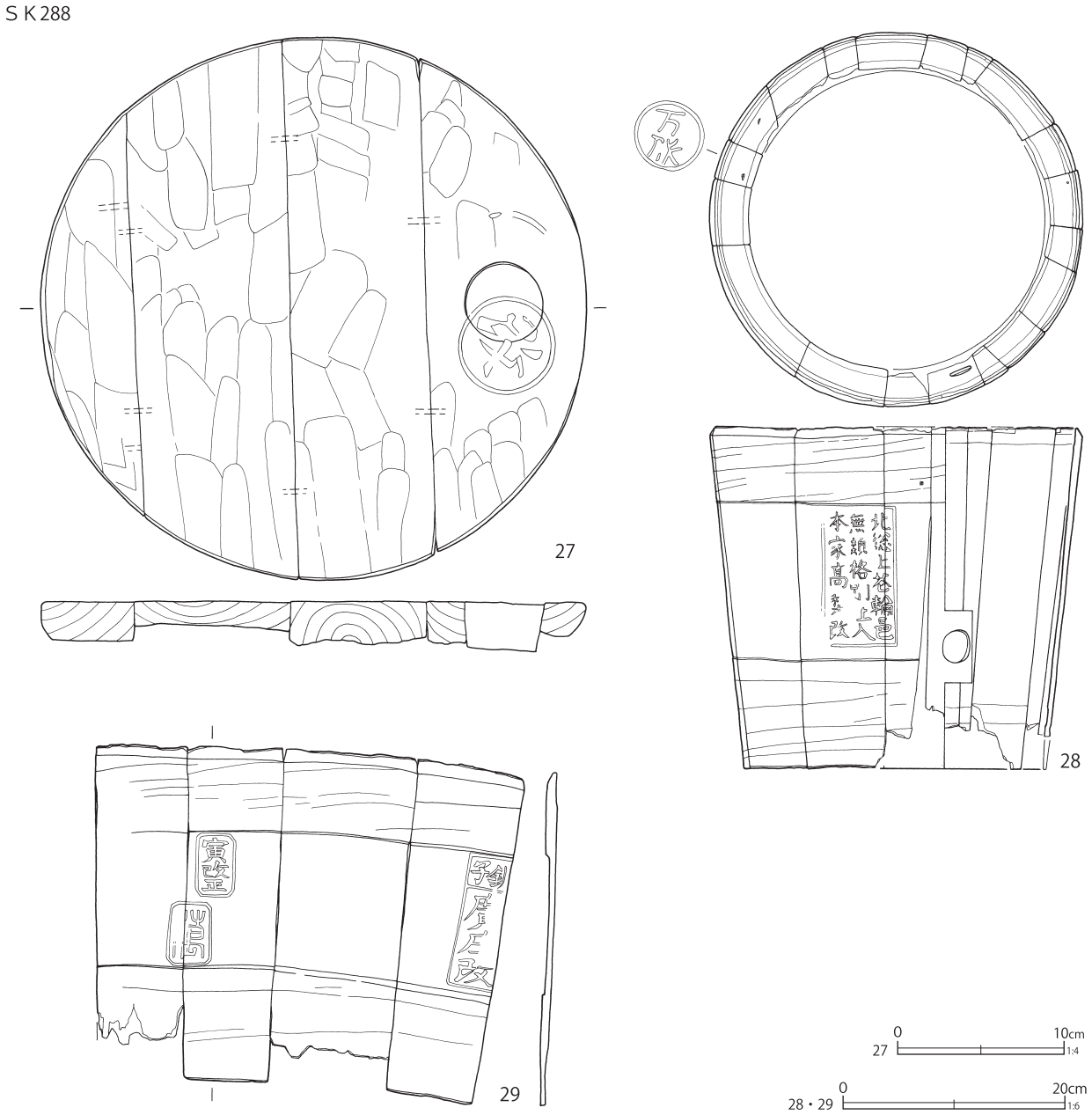
が高い。

第 163 図 90 は笠間系陶器の甕である。外面は二彩釉流し掛けで、内面は灰釉である。第 294 号土壙出土製品と接合する。

第 164 図 104 は土師質土器の円筒形焜炉である。胎土に金雲母や石英が多量に含まれることから三河産と推定される。底部は底抜けで、正面にアーチ状の窓が付くと考えられる。挿図では窓の形を推定復元した。外筒の内壁には三河産箱形焜炉にみられるような櫛歯状工具による櫛描きが無数にあり、中筒の粘土と接着しやすくするためにつけられたと考えられる。

第 165 図 105 は瓦質土器の竈である。内底面に無調整の砂目と櫛歯状の圧痕がみられ、通常の瓦質土器とは無調整部分が逆転している。外面はミガキ調整がみられ、高台に２箇所の抉りがある。内面下位には突起が剥がれた痕跡があり、３箇所に五徳状の突起がついていたと考えられる。背面には円形の孔が開いており、煙出しの役割をはたしていると考えられる。舌状の受皿がついており、上下に窓がみられる。挿図では窓の欠損部を推定復元した。また、鉄釘が窓の周囲に穿たれていることから、扉が附属していたと推察される。

第 166 図１は瀬戸美濃系磁器の極小紅坏と考えられる。型成形で外面に陽刻状文がみられる。２は土師質土器の小壺である。胎土は粉質で、底



第 173 図　区画 AD 土壙出土遺物（22）

部に離し糸切痕が遺存する。３は京都系の土製品で、焜炉のミニチュアである。上部が遺存し、外面に黒色塗布物がみられる。

第 167 図５は京都系の土製人形で、鯉を模している。左右合わせの二枚型成形で、中実である。彩色と思われる黒色塗布物が付着する。６・７は京都系の土製人形で、同一個体の裃人形である。６は正面、７は背面である。前後合わせの二枚型成形で、下面は開口している。胎土に小礫を含む特徴がある。青と赤で彩色されている。

第 168 図２は軒桟瓦である。粗雑な作りで、通常より一回り以上大きな三巴文が施文される。３は転用瓦で、刻書「天神様」がみえる。宿内おける信仰との関係性を示唆する資料である。全面に使用痕がみられ、線状痕が明瞭に認められる。４は江戸式の軒桟瓦である

第 170 ～ 172 図１～ 24 は木製品である。１は桶である。２は漆椀蓋で内外面黒漆塗りである。

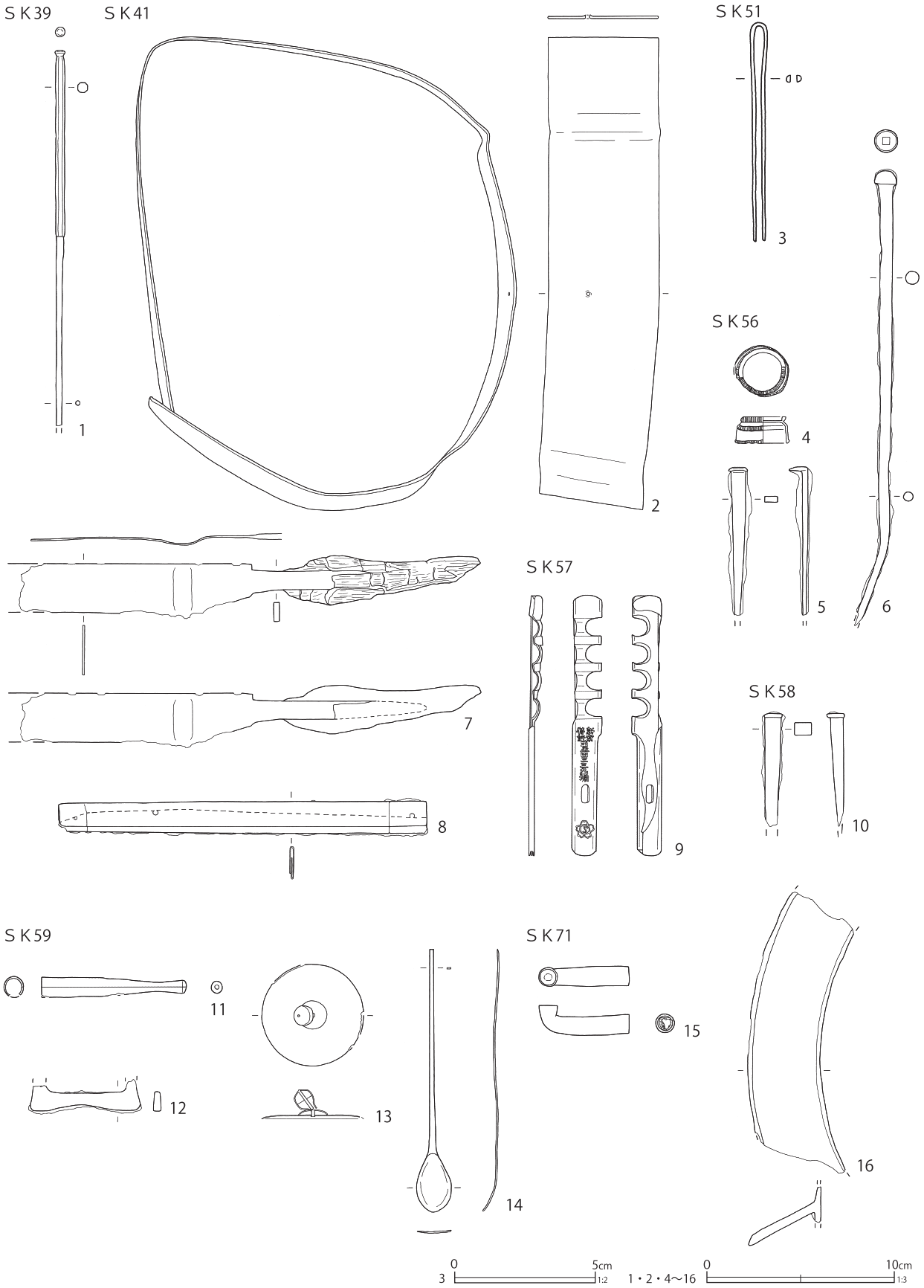
第46表　区画AD土壙出土遺物観察表（５）（第170～173図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	口径／径	高さ	底径	木取り	遺構	備考	図版
1	木製品	桶	－	－	－	13.3	8.8	11.4	板目	SK38	タガ痕２段	
2	木製品	漆椀蓋	－	－	－	9.1	[2.6]	－	横木取り	SK40	内外面黒漆 つまみ内赤で文字	
3	木製品	曲物	－	－	－	9.4	1.8	9.4	柾目	SK40		
4	木製品	栓	7.1	2.4	2.3	－	－	－	削り出し	SK40		
5	木製品	下駄	16.1	[8.3]	－	－	2.4	－	板目	SK53	連歯下駄	
6	木製品	経木	12.4	[5.4]	0.05	－	－	－	柾目	SK56	表裏面墨書 表「十三 □三郎 六□□ 五十」裏不明	143-16
7	木製品	経木	12.3	[2.2]	0.05	－	－	－	柾目	SK56	表裏面墨書 表「多九ろロ□□」裏不明	143-17
8	木製品	経木	12.2	[2.4]	0.05	－	－	－	柾目	SK56	表裏面墨書 表「太郎□」裏「十三□」	144-1
9	木製品	下駄	21.2	10.0	－	－	2.5	－	柾目	SK58	連歯下駄	
10	木製品	下駄	(21.0)	9.2	－	－	2.4	－	板目	SK58	陰卯下駄	
11	木製品	下駄	21.1	9.2	－	－	3.8	－	板目	SK58	陰卯下駄	
12	木製品	瓢箪	－	－	0.3	4.5	[5.9]	－	－	SK58	表面黒で文様	127-10
13	木製品	漆蓋	－	－	1.2	16.6	－	－	板目	SK59	表裏面黒漆 木釘 表面金で「㐂」	
14	木製品	樽	－	－	2.5	(31.0)	－	－	板目	SK59	蓋 表面に墨書	144-2
15	木製品	漆椀	－	－	－	－	[5.1]	6.5	横木取り	SK66	内面赤漆 外面黒漆	
16	木製品	滑車	17.7	17.4	5.2	－	－	－	板目	SK66	側面に金属	127-14
17	木製品	不明品	－	－	4.5	12.2	－	－	板目	SK66	炭化	
18	木製品	木札	13.0	6.6	1.0	－	－	－	板目	SK66	表面墨書 孔１	144-5
19	木製品	漆椀	－	－	－	－	[5.6]	(6.3)	横木取り	SK71	内外面黒漆 高台内赤で「㐂」	
20	木製品	杓子	16.8	5.5	0.6	－	－	－	板目	SK71		127-15
21	木製品	簪	14.7	0.4	0.4	－	－	－	削出	SK71	らせん状の削り	
22	木製品	曲物	－	31.4	0.5	－	2.6	－	柾目	SK247	側板　樹皮紐残存 表裏面焼印	
23	木製品	浮子	[5.8]	1.0	0.9	－	－	－	不明	SK247	黒漆と赤漆	129-14
24	木製品	木札	17.9	5.5	1.0	－	－	－	板目	SK247	焼印「㐂」鉄釘１	
25	木製品	お札ヵ	44.6	8.8	1.0	－	－	－	板目	SK281	表面墨書	148-1
26	木製品	お札	35.0	6.7	0.8	－	－	－	板目	SK281	表面墨書	148-2
27	木製品	樽	－	－	3.0	32.6	－	－	板目	SK288	蓋 墨書 焼印「㊗」板毎に厚みが異なる 栓径4.7㎝厚さ2.8㎝	152-8
28	木製品	桶	－	－	－	(34.0)	31.0	[27.6]	板目	SK288	側板19枚 木釘２ 木釘跡２ 丸い孔１ 墨書１ 焼印２	152-9
29	木製品	桶	[30.5]	[39.1]	0.9	－	－	－	板目	SK288	側板墨書ジガミサ印 焼印「銚子」「廣庄改」「寅改正」「萬代」	152-10

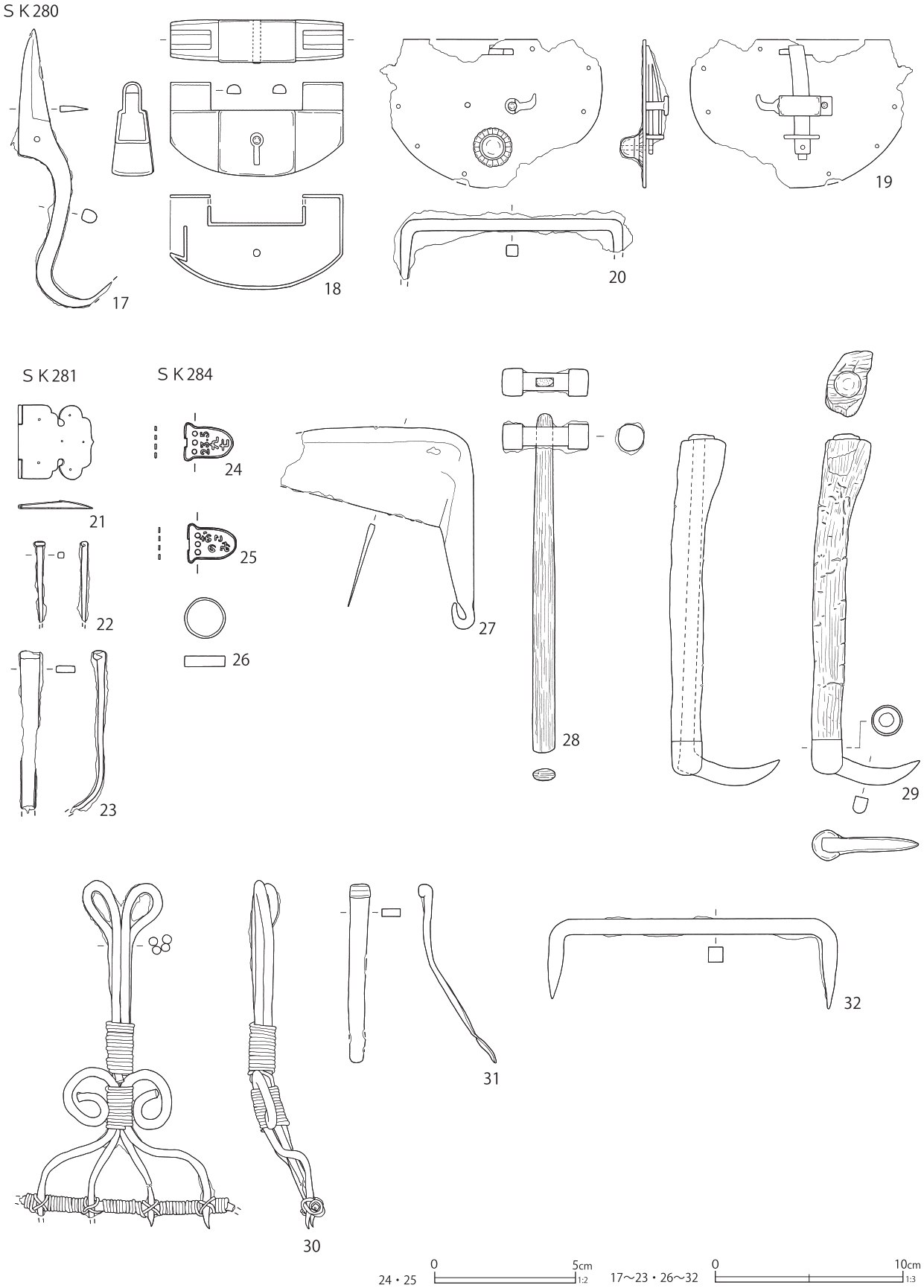
つまみ中央部が擂鉢状に窪んでいる。３は小型の曲物である。５は連歯下駄である。６～８は経木である。９は連歯下駄である。裏面の爪先と踵部分に段が作られ、特異な形である。12は瓢箪で、表面に黒漆で文様が描かれている。13は表裏面黒漆塗りの蓋である。木釘でつないだ痕跡が残る。表面に金で「㐂」の文字が書かれる。15は漆椀で、内面赤漆塗り、外面黒漆塗りである。16は滑車と考えられる。中央部には軸が付いている。側面には浅い溝が作られ、鉄釘状のものが埋め込まれている。18は木札である。墨書で「臺□十六街／□益御□□／１５つり」と書かれる。19は漆椀である。内外面黒漆塗りで、高台内に赤で「㐂」と書かれる。20は杓子である。受部の外形が逆三角形である。受部の窪みは浅く、平坦である。21は簪である。上下端部が細く作られ、上部はらせん状に削られる。22は曲物の側板である。表面には「八百六」の焼印が３箇所残る。23は浮子で、上半は赤漆、下半は黒漆塗りである。下面に金具取付の穴があいている。24は木札で、「㐂」の焼印が押される。

第175図18・19は鉄製錠前で開錠状態である。19は引き出しに伴う錠前である。20・32は鉄製の鎹である。建物などの構築に使用されたと推察される。

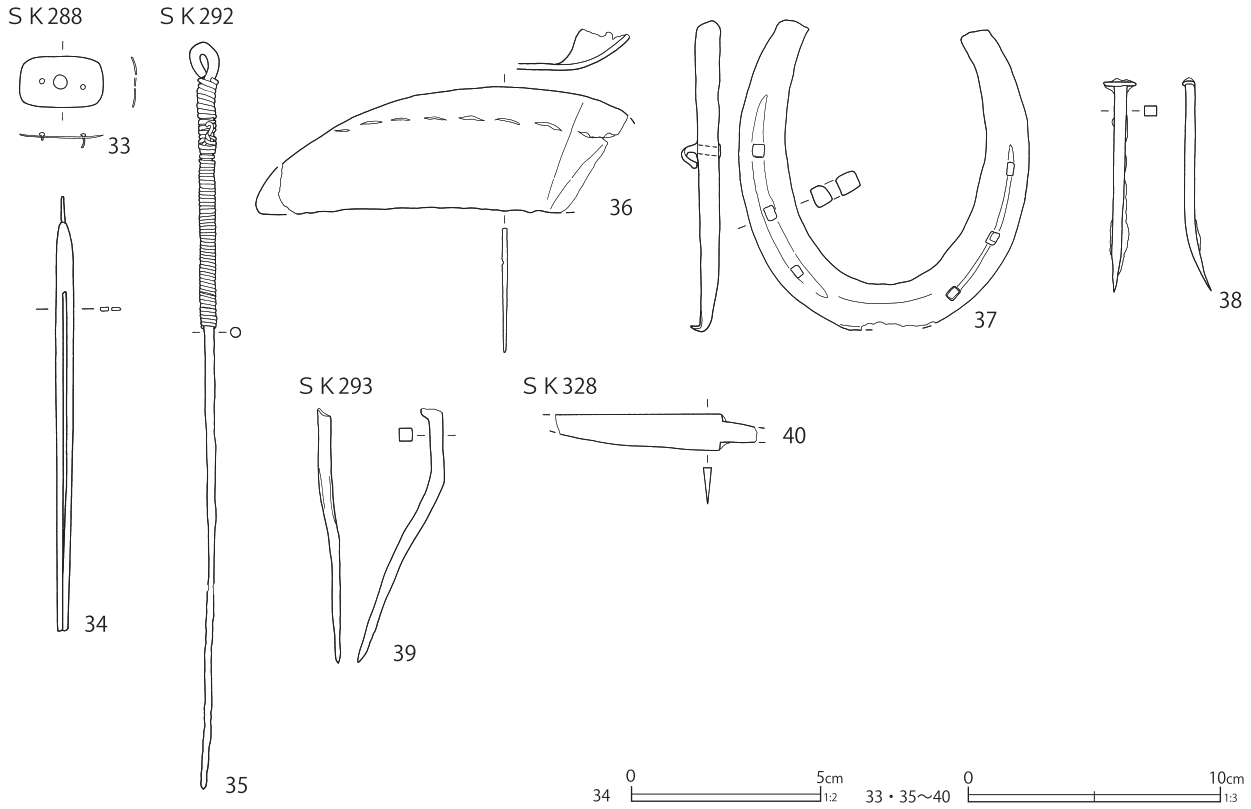
第178図１はホルンフェルス製の砥石である。



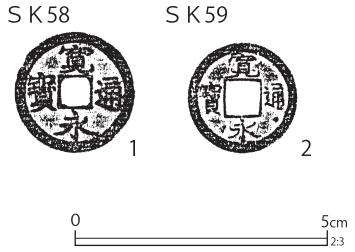
第 174 図　区画 AD 土壙出土遺物（23）



第 175 図　区画 AD 土壙出土遺物（24）



第 176 図　区画 AD 土壙出土遺物（25）



第 177 図　区画 AD 土壙出土遺物（26）

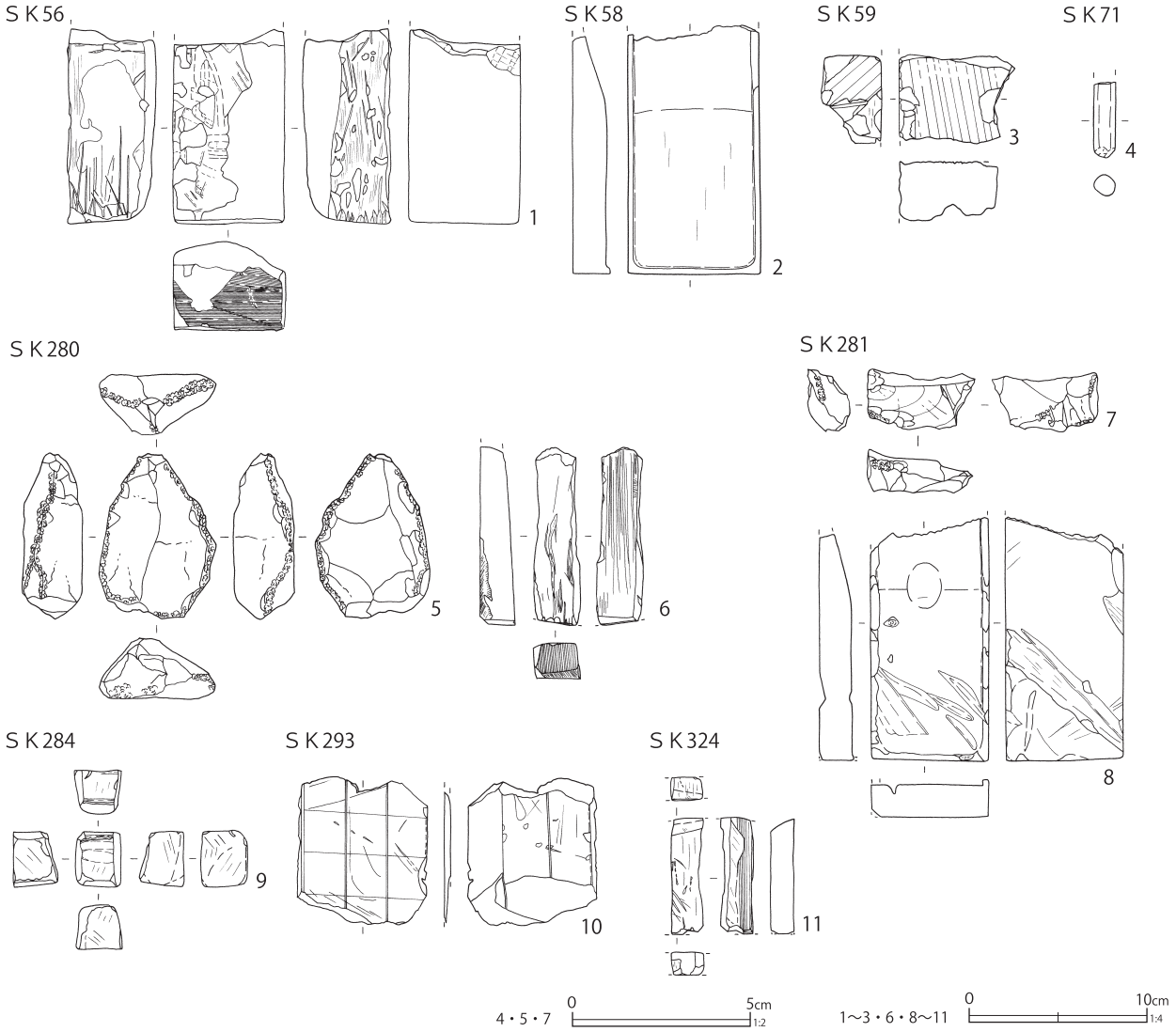
下端面に密なノコギリ状工具痕が遺存し、表・裏面にランダムな削り痕がみられる。破損したものを再加工した様子が窺える。側面は砥面で、刃ならし状の傷が多数みられる。３は凝灰岩製の切石材である。表・側面はノコギリ状工具痕に類似する平行する深い溝がみられる。６はホルンフェルス製の砥石で、下端面に密なノコギリ状工具痕がみられる。表面には刃物傷がみられ、裏面には無数の線条痕が認められる。５・７は玉髄製火打石である。５は稜の潰れが著しく、使い込まれている。７は打ち割り痕跡が認められる。８は凝灰岩製の硯で、両面に削り痕がみられる。再加工を意図したものであろうか。９は流紋岩製砥石で、サイコロ状に使い込まれている。11 はホルンフェルス製の砥石で、裏面に密なノコギリ状工具痕が摩耗している。

第 47 表　区画 AD 土壙出土遺物観察表（６）（第 174 ～ 176 図）

番号	種別	器種	法量	遺構名	備考	図版
1	銅製品	火箸	長さ［20.0］厚さ 0.5 重さ 17.7	SK39	持ち代を八角に面取り	
2	銅製品	不明	縦 25.2 横 20.3 幅 5.9 厚さ 0.15 重さ 421.9	SK41	銅板の長さは約 75cm 径２㎜の小孔１点あり	
3	銅製品	簪	長さ 7.8 幅 0.5 厚さ 0.2 重さ 3.9	SK51		
4	銅製品	不明	径 2.8 × 2.7 高さ 1.4 厚さ 0.1 重さ 10.3	SK56	キャップか	
5	鉄製品	釘	長さ［7.9］幅 0.7 厚さ 0.3 重さ 10.4	SK56		
6	鉄製品	火箸	長さ［24.2］厚さ 0.7 重さ 50.1	SK56	箸頭半球形	
7	鉄製品	不明	長さ［24.6］幅 2.6 厚さ 0.1 重さ 43.2	SK56	木柄付き コテ状の工具か	
8	鉄製品	不明	長さ 19.6 幅 1.7 厚さ 0.2 重さ 18.0	SK56	小孔３箇所あり 縁金か	
9	銅製品	鉛筆削り	長さ 13.8 幅最大 1.6 厚さ 0.3 重さ 14.3	SK57	「新案特許第五四三三九號」	
10	鉄製品	釘	長さ［6.0］幅 0.9 厚さ 0.7 重さ 22.2	SK58		
11	銅製品	煙管	長さ 7.7 小口径 1.0 口付径 0.6 重さ 7.4	SK59	吸口	
12	鉄製品	火打金	長さ［1.7］幅 5.8 厚さ 0.4 重さ 12.5	SK59		
13	銅製品	蓋	径 5.4 高さ 1.9 厚さ 0.05 重さ 10.4	SK59	つまみ部中空	
14	銅製品	匙	長さ 14.0 幅 1.9 厚さ 0.05 重さ 3.3	SK59		
15	銅製品	煙管	長さ 4.8 火皿径 1.0 小口径 0.6 重さ 9.2	SK71	雁首 内部に羅宇残存	
16	鉄製品	釜鍔	縦［15.0］横［5.7］厚さ 0.4 重さ 130.7	SK71		
17	鉄製品	鋏	長さ 14.8 刃幅 1.5 背幅 0.3 重さ 42.8	SK280	剪定鋏か	
18	鉄製品	錠前	縦 5.0 横 9.2 厚さ 2.3 重さ 76.6	SK280	開錠状態	
19	鉄製品	錠前	縦 7.9 横 11.8 厚さ 2.5 重さ 75.2	SK280	引出しの錠前 開錠状態	
20	鉄製品	鎹	長さ 11.8 幅 0.6 厚さ 0.6 重さ 41.0	SK280		
21	銅製品	蝶番	長さ 3.9 幅 4.1 厚さ 0.03 重さ 10.7	SK281		
22	鉄製品	釘	長さ［4.3］幅 0.3 厚さ 0.3 重さ 2.3	SK281		
23	鉄製品	釘	長さ［8.6］幅 1.0 厚さ 0.4 重さ 14.5	SK281		
24	銅製品	こはぜ	長さ 1.3 幅 1.7 厚さ 0.08 重さ 0.5	SK284	「23.5 九七」	
25	銅製品	こはぜ	長さ 1.3 幅 1.7 厚さ 0.08 重さ 0.5	SK284	「おこのみ」	
26	鉄製品	口金	径 2.1 幅 0.6 厚さ 0.1 重さ 3.6	SK284	27 の鎌に付属するか	
27	鉄製品	鎌	刃長［10.0］刃幅 4.6 背幅 0.3 重さ 51.6	SK284		
28	鉄製品	金鎚	長さ 18.0 頭長 4.5 頭幅 1.4 重さ 42.2	SK284	木柄付き	
29	鉄製品	自在鉤	長さ 18.7 幅 0.7 厚さ 0.9 重さ 72.2	SK284	木柄付き	
30	鉄製品	不明	縦 18.6 横［11.5］厚さ 0.4 重さ 142.4	SK284	４本の鉄棒を組み合わせ針金で固定	
31	鉄製品	不明	長さ 9.5 幅 1.0 厚さ 0.4 重さ 15.7	SK284		
32	鉄製品	鎹	長さ 15.5 幅 0.8 厚さ 0.8 重さ 73.0	SK284		
33	銅製品	煙草入れ金具	縦 2.0 横 3.3 厚さ 0.08 重さ 3.5	SK288	袋の前金具の裏金	
34	銅製品	簪	長さ 11.5 幅 0.5 厚さ 0.1 重さ 3.2	SK288	玉欠失	
35	鉄製品	火箸	長さ 29.6 厚さ 0.4 重さ 34.0	SK292	箸頭環状 持ち方コイル巻き	
36	鉄製品	鎌	刃長［13.9］刃幅 4.9 背幅 0.2 重さ 36.8	SK292		
37	鉄製品	蹄鉄	縦 12.3 横 11.5 厚さ 0.8 重さ 193.7	SK292	釘１本残存	
38	鉄製品	釘	長さ［8.3］幅 0.5 厚さ 0.4 重さ 7.9	SK292		
39	鉄製品	釘	長さ［10.1］幅 0.5 厚さ 0.5 重さ 11.8	SK293		
40	鉄製品	刀子	長さ［8.0］刃長［6.5］刃幅 1.4 背幅 0.3 重さ 8.7	SK328		

第 48 表　区画 AD 土壙出土遺物観察表（７）（第 177 図）

番号	種別	器種	法量	遺構名	備考	図版
1	銅製品	銭貨	径 24.4 厚さ 1.2 重さ 3.4	SK58	寛永通寶（古）	
2	銅製品	銭貨	径 21.9 厚さ 1.0 重さ 2.0	SK59	寛永通寶（新）	



第178図　区画AD土壙出土遺物（27）

第49表　区画AD土壙出土遺物観察表（８）（第178図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	遺構	備考	図版
1	石製品	砥石	[10.9]	6.3	5.0	658.2	ホルンフェルス	SK56	側面ノコギリ痕・刃ならし痕多数 表裏面ランダムな削痕 砥面２	
2	石製品	硯	[13.9]	7.5	―	354.5	凝灰岩（中粒）	SK58	器高2.1cm	
3	石製品	切石材	[5.0]	[6.5]	[3.4]	112.8	凝灰岩	SK59	表・側面ノコギリ痕ヵ（深い幅広）	
4	石製品	石筆	[2.1]	0.6	0.6	1.4	滑石（白）	SK71	下端部使用	
5	石製品	火打石	4.7	3.3	1.7	26.5	玉髄	SK280	稜の潰れ著しい	
6	石製品	砥石	[10.0]	[2.6]	2.0	86.7	ホルンフェルス	SK280	側面ノコギリ痕 砥面２ 線条痕・刃物痕あり	
7	石製品	火打石	3.0	1.6	1.2	5.2	玉髄	SK281	使用痕あり	
8	石製品	硯	[13.8]	6.6	―	246.4	凝灰岩	SK281	器高2.1cm　表面二次穿孔（未貫通）表・裏面削痕	
9	石製品	砥石	3.2	2.6	2.5	33.7	流紋岩	SK284	砥面６ 削痕あり	
10	石製品	石板	[8.3]	[7.3]	0.3	36.4	粘板岩	SK293	表裏面罫線	138-3
11	石製品	砥石	6.5	[1.8]	1.3	30.6	ホルンフェルス	SK324	裏面ノコギリ痕 砥面４遺存 刃物痕あり	

報　告　書　抄　録

ふりがな	くりはししゅくあと
書名	栗橋宿跡Ⅵ
副書名	首都圏氾濫区域堤防強化対策における埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書
シリーズ番号	第４７３集
編著者名	水村　雄功
編集機関	公益財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒369-0108　埼玉県熊谷市船木台４丁目４番地１　　TEL　0493-39-3955
発行年月日	西暦 2022（令和４）年３月 22 日

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
栗橋宿跡（くりはししゅくあと）（第８地点）	埼玉県久喜市栗橋中央２丁目 3517 － 3 他（さいたまけんくきしくりはしちゅうおう）	112321	011	36°08′26″	139°42′11″	20160401 ～ 20170331 20170401 ～ 20170930	5,226.00	堤防強化記録保存調査

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
栗橋宿跡（第８地点）	宿場跡	江戸時代	建物跡　６棟 基礎状遺構　６基 埋設桶　20 基 埋設甕　１基 井戸跡　８基 杭列　４条 木樋　１基 溝跡　28 条 畠跡　３箇所 小鍛冶遺構　２基 性格不明遺構　２基 焼土遺構　９基 土壙　484 基 ピット　77 基	陶磁器 土師質土器 瓦質土器 土製品 瓦 木製品 金属製品 羽口 鉄滓 石製品 硝子製品（笄） 骨製品 繊維製品	町屋跡を調査した。 18 世紀末前葉の火災処理土壙を検出した。 18 世紀初頭の土壙を検出した。 18 世紀前葉の火災層を検出した。 浅間Ａ降下軽石を検出した。

要約

栗橋宿跡は利根川右岸に立地する日光道中７番目の宿場街「栗橋宿」の町屋跡である。発掘調査で検出された遺構は 19 世紀後半以降を中心とする第一面、18 世後半～ 19 世紀前半の遺構を中心とする第二面、18 世紀前半以前を中心とする第三面に分けられる。

調査の結果、第一面では町屋の裏空間に立ち並ぶ土蔵跡と考えられる建物跡とそれらに平行する敷地境と考えられる杭列、溝跡、木樋が検出された。第３・７・８号埋設桶は自然科学分析の結果、便槽としての機能が示唆された。第二面では建物跡が少ない一方で、井戸跡や土壙が多く、第一面とは土地利用が異なっている。第三面では浅間Ａ降下軽石に被覆されている畠跡が検出された。また、多量の羽口や鉄滓が出土し、小鍛冶遺構が検出されたことから鍛冶屋の存在が示唆された。調査区南側では、18 世紀前葉に比定される火災層とその直下から 18 世紀初頭の土壙が検出された。また、18 世紀前葉に遡る火災処理土壙が検出され、栗橋宿跡最古級の火災痕跡が認められた。

遺物では、僅かなヨーロッパ産、中国産陶磁器類に加え、国産陶磁器が多く検出された。土器類では、江戸で生産されたものがみられたほか、江戸のものとは異なる在地の製品が多く認められた。加えて、18 世紀の遺構からは常陸地域の製品が一定量見られ、大甕や火鉢、が確認された。土壙を中心に出土した多種多様な一括遺物は、近世宿場町の実態を示す良好な資料であり、特に 18 世紀前葉以前の遺構群から出土した遺物は栗橋宿跡の空白期間を埋める貴重な資料となった。

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 473 集

栗橋宿跡Ⅵ

首都圏氾濫区域堤防強化対策における
埋蔵文化財発掘調査報告
（第 1 分冊）

令和 4 年 3 月15日　印刷
令和 4 年 3 月22日　発行

発行／公益財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒 369-0108　熊谷市船木台 4 丁目 4 番地 1
0493（39）3955
http://www.saimaibun.or.jp
印刷／山進社印刷株式会社